平成27年度 教育研究発表会

平成27～30年度 文部科学省研究開発学校指定　第１年次

未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅰ

未来創造型の資質・能力に基づく新領域構想

平成28年2月12日(金)・13日(土)

福岡教育大学附属福岡小学校

平成27年度 教育研究発表会

平成27～30年度 文部科学省研究開発学校指定　第１年次

未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅰ

未来創造型の資質・能力に基づく新領域構想

平成28年2月12日(金)・13日(土)

福岡教育大学附属福岡小学校

ご あ い さ つ

学 長　寺 尾 愼 一

福岡教育大学附属福岡小学校の平成27年度教育研究発表会の開催にあたり，ひとことごあいさつを申し上げます。

本学は，附属学校園の立場として，大学・学部のもつ人的資源を活用し，先導的・実験的な取り組みを行う「国の拠点校」として位置付けております。そこで，附属学校園と連携を強化して教育研究の開発を行い，その成果を地域の諸学校に還元し，地域教育界の発展に大きく貢献することをめざしています。

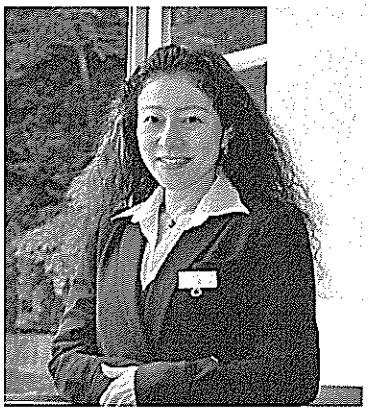
現在，学習指導要領の改訂へ向けて，本格的な議論がはじめられています。中でも，平成27年８月に出された『論点整理』では，2030年の社会と，その先の豊かな未来を築くために，教育課程を通じて初等中等教育が果たすべき役割について具体的に示されました。本校では，今年度より４年間の文部科学省研究開発学校指定を受け，20年後，30年後の子供たちに必要となる資質・能力の育成をめざし，新たな教育課程の編成の在り方を研究してまいりました。本年度の教育研究発表会は，主題を「未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅰ　～未来創造型の資質・能力に基づく新領域構想～」と設定し，研究開発学校指定研究１年次の成果について発表するものであります。

今回の教育研究発表会が地域の学校のみならず，我が国における初等教育実践の進展に少しでも寄与できれば，これに優る喜びはありません。ご参会された皆様のご指導・ご助言を切にお願いいたします。

最後になりましたが，ご多用の中，ご講演を快くお引き受けくださいました千葉大学教育学部　教授　天笠　茂先生に深く感謝申し上げます。また，領域別学習指導協議会におきまして指導助言者としてご協力くださいました諸先生方にも，心より御礼申し上げます。

今後とも，附属学校園の教育研究活動を介して，各地域の公立学校及び教育関係機関との連携を深めてまいりたいと考えています。関係する皆様方に一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げまして，ごあいさつといたします。

はじめに



校長　清水知恵

本校では，今年度より文部科学省研究開発学校として文部科学大臣より指定を受け，研究主題「未来社会を創造する主体としての子供の育成」を掲げ，研究を進めてまいりました。

文部科学省研究開発学校とは，文部科学大臣の指定により，学習指導要領等現行の教育課程の基準によらない教育課程の編成・実施を認め，新しい教育課程や指導方法等について研究開発を行う学校のことです。研究の成果については，学習指導要領の検討に活用されており，今後の教育課程の改善のためにも大変重要なものとされています。

研究の１年目となる本年度は，副主題を「未来創造型の資質・能力に基づく新領域構想」とし，未来創造型の資質・能力を育成するために必要となる教育課程を「言語文化」「自然探究」「社会共創」「表現」「健康」「生き方」と「マイタイム」の６領域・１時間から編成し，資質・能力の具体化や学習内容等の究明に取り組んでまいりました。また，帰国子女教育においては，子供一人一人が自身の海外生活経験を発揮し，主体的に自己の生き方を考える子供の育成をめざし研究を進めてまいりました。さらに，特別支援教育においては，文部科学省インクルーシブ教育システム構築モデル事業指定の第３年次にあたり，生活単元学習を中心に実践を積み重ねてまいりました。

本校の研究は，今後の学習指導要領で求められるであろう資質・能力に対応した新たな教育への転換であり，20年後，30年後の教育の在り方に対する提言であると考えています。

今回の教育研究発表会を開催するにあたり，多くの方々のご指導・ご支援をいただきましたことに深く感謝申し上げます。今後とも各方面からのご助言やご協力をよろしくお願いいたします。

目　　次

ごあいさつ …… 1
はじめに …… 2
目　　次 …… 3
本校研究のあゆみ …… 4

第１日公開授業・未来創造シンポジウム

日　　程 …… 6
授業案内図 …… 7
学習指導案 …… 8
未来創造シンポジウム …… 26

第２日公開授業・未来創造講演会

日　　程 …… 28
授業案内図 …… 29
学習指導案 …… 30
未来創造講演会 …… 62

研究紀要

研究紀要目次 …… 63
研究全体構想 …… 64
各領域部構想・指導事例 …… 74
特別支援教育部研究構想・指導事例 …… 142
資料 …… 148

おわりに …… 152
平成27年度研究同人 …… 153

本　校　研　究　の　あ　ゆ　み　（昭和23年度～63年度）

年度	研究主題等
昭和	
23	○学習効果判定の理論と実際
24	○カリキュラムの構成と実際
25	（発表会なし）
26	○学習深化の指導
27	○学習深化の指導
28	○学習深化をめざす指導
29	○学習指導における諸問題の再検討
30	○学習指導における新課題の再検討
31	○学習指導深化をめざす新課題の究明
32	○組織化をめざす学習指導法の究明
33	○組織化をめざす学習指導法の究明
34	○学習指導の系統化
35	○改訂指導要領による学習指導の諸問題
36	○考える子どもを育てる指導法の究明
37	○考える力をのばす学習指導法の考察
38	○考える力をのばす学習指導法の考察
39	○考える力をのばす学習指導法の考察
40	○考える力をのばす学習指導法の考察
41	○考える力をのばす学習指導法の考察 「授業における思考訓練」（明治図書から出版）
42	○教科の本質に立脚した学習指導法の考察 「思考をのばす学習過程の評価」（明治図書から出版）
43	（発表会なし）
44	○現代化をめざす指導法の究明 教材の現代的価値と児童の実態と反応に基づく指導内容の検討
45	○現代化をめざす指導法の究明 基本的内容にせまらせる学習の開発
46	○現代化をめざす指導法の究明 ひとりひとりを生かす合理的な学習指導のしくみ
47	○現代化をめざす指導法の究明 学習の連帯化をはかる指導のしくみ
48	○現代化をめざす指導法の究明 連帯性を育てる学習指導のしくみ
49	○現代化をめざす指導法の究明 連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる学習指導のしくみ 「学習を連帯化する指導法」（明治図書から出版）
50	○現代化をめざす指導法の究明 学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ
51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 操作を通した学習の構造化
52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 操作を通した学習指導法の展開 「できるまで育てる」（秀巧社から出版）
53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 交流でよりよい操作を身につける学習指導 「自由活動の時間」（秀巧社から出版）
54	○現代化をめざす指導内容と指導法の実証的究明 教材の価値にせまらせる操作学習の評価
55	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 見直し活動を生かした操作学習の深化
56	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 自己を見直し，考えを深める指導のしくみ
57	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 自ら見直し活動に取り組み，自己を深める指導のしくみ 「学ぶ喜びを生み出す授業」（北大路書房から出版）
58	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 個が生きる課題づくり
59	○自己実現の喜びを生みだす学習内容の検討 学習実態の多様性に即応する学習指導
60	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 子どもの個性が生きる指導
61	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 「学習の個性化をめざす指導法の開発」（明治図書から出版）
62	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 学習の個別化をめざす学習過程
63	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 「学習の個性化」をめざす授業の改造 「感動体験を中核とした生活科の授業づくり」（明治図書から出版）

本　校　研　究　の　あ　ゆ　み　（平成元年度～27年度）

年度	研究主題等
平成元年	○個が生きる授業の創造 自己理解の学習過程
2	○個が生きる授業の創造 考えを確かにする活動構成
3	○個が生きる授業の創造 考えを深める自己吟味活動を通して 「個が生きる授業づくり」（北大路書房から出版）
4	○生きる喜びを生み出す授業の創造 思い・願いをもって問いつづける活動づくり
5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 思いをあらわしていくよさを実感する活動の展開
6	○生きる喜びを生み出す学習の創造 自分のよさを実感する表現活動の展開
7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 新しい教育課程における教科領域の学習の具体化
8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 子供主体の活動からみる教育課程の編成 「新時代の授業を創る」（明治図書から出版）
9	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 子供主体の活動からみる教育課程の編成
10	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 活動や体験を基盤にした学習の総合化 「学習創造」（算数・人間・障害児教育）出版
11	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 子供と創る教科・総合的学習の展開 「学習創造」（理科・図画工作・音楽）出版
12	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開 「学習創造」（国語・体育）出版
13	○豊かな人間の育成をめざす教育過程の創造 調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化 「新世紀の学力づくり」（明治図書から出版）
14	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 －教科・総合の学びを連動する〈ふくおかプラン〉の展開－
15	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 －「自己追究」の学びを拓く〈ふくおかプラン〉の展開－ 「評価で変えるカリキュラムづくり」（明治図書から出版）
16	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 －「生活・文化・人間の学び」を位置付けた〈ふくおかプラン〉の構想－
17	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 －自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する〈ふくおかプラン〉の展開－
18	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 －協働を中核とした学習の展開－
19	○学びを強め確かにする学習の創造 －学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり－
20	○豊かな学びを育む学習の創造 －子どもの「問い」を深化・拡充させる授業づくり－
21	○豊かな学びを育む学習の創造 －知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくり－
22	○未来を豊かに生きる学力を育む学習指導の創造 －活用の質を高める学び方を活かした指導法の開発－
23	○未来を豊かに生きる学力を育む学習指導の創造 －学び方の連続・発展を重視した授業づくり－
24	○「開かれた個」を育てる学習指導の創造 －チームを活かした学習過程の工夫－
25	○「開かれた個」を育てる学習指導の創造 －チームの活動が活性化する学習の工夫－
26	○「開かれた個」を育てる学習指導の創造 －チームの活動を活かす重点単元の設定と評価の工夫－
27	文部科学省研究開発学校指定（平成27～30年度　1年次） ○未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅰ ―未来創造型の資質・能力に基づく新領域構想―

第1日

2月12日（金）

12:30～13:00　受付

13:00～13:45
公開授業1

13:45～14:00　移動

14:00～15:30
全体会
挨　拶
全体研究発表
領域研究発表①
児童発表①
領域研究発表②
児童発表②

15:30～15:45　休憩

15:45～16:50
未来創造シンポジウム

閉会行事

公開授業1

領　域	学年学級	題　材・単　元	授業者
自然探究	1年1組	あつめて　はっけん　かずや　かたちの　ひみつ	二串　英一
生き方	1年2組	ふくおかしょうがっこうは　たのしいね （特別支援学級　ふじ組との交流）	齋藤　淳
言語文化	3年1組	落語でみがく言葉の力	菊竹　一平
社会共創	3年2組	つくろう！ともに生きるまち	藤岡　太郎
言語文化	4年1組 帰国子女学級	世界の国々のみ力を発見しよう	杉本　克如
自然探究	4年2組	未来のものづくりへ、ロボットの仕組み	古賀　誠
自然探究	5年1組	未来へつなごう　エコロン池構想プロジェクト	永田　裕二
言語文化	5年2組	時と世界を超える、変身の物語	山田　深雪
健　康	6年1組	健康かざぐるまとともにつくろう　ベストパフォーマンス	平井　源樹

全体会

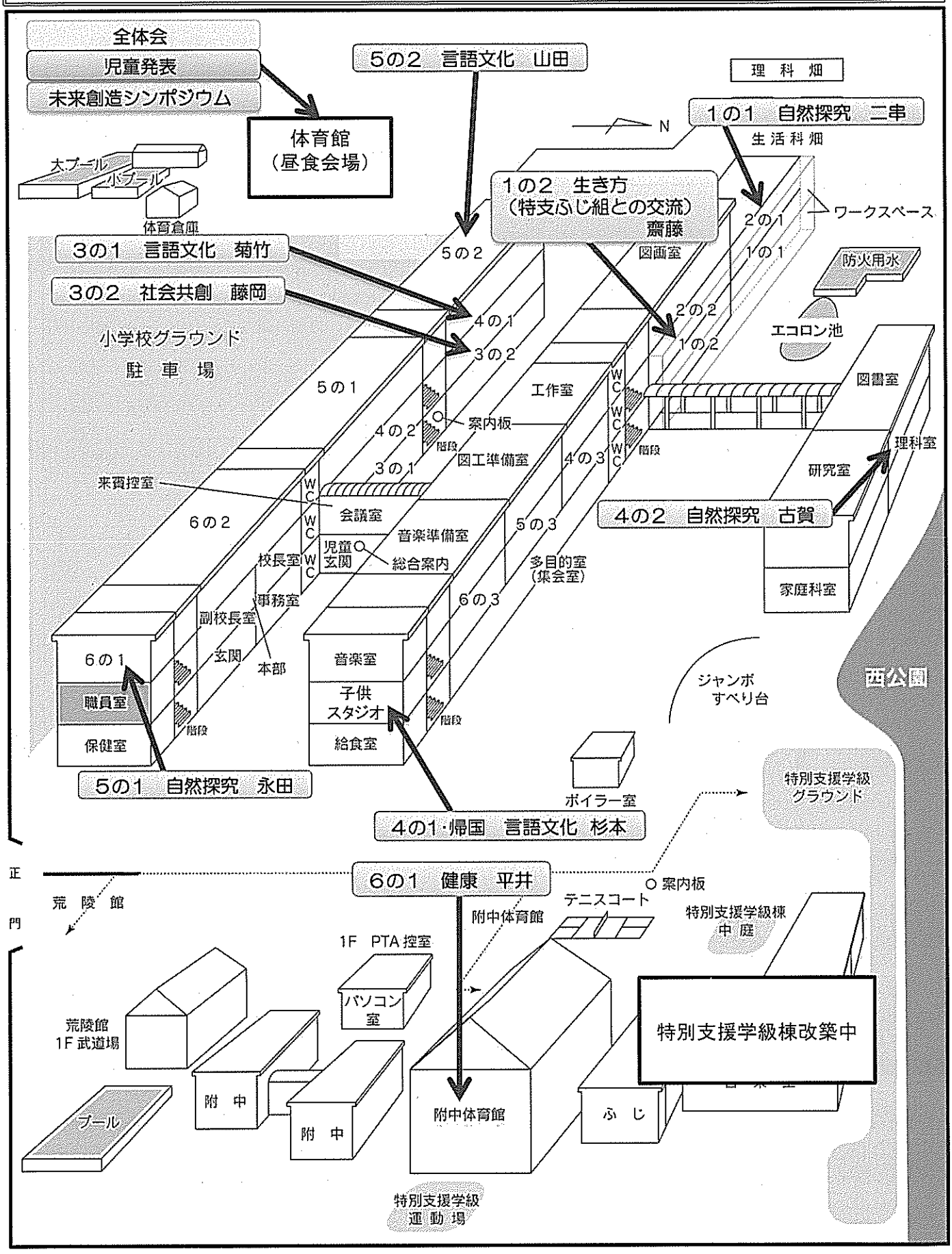
挨　拶	学　長	寺尾　愼一
全体研究発表	研究部長	三浦　研一
領域研究発表①	言語文化部	田中　菜穂子　・　山田　深雪
児童発表①	詩の朗読	1年生児童
領域研究発表②	自然探究部	永田　裕二
児童発表②	合唱「希望と誇り」	5・6年生児童

未来創造シンポジウム

「未来創造型の資質・能力の育成をめざして」
－アクティブ・ラーニングと新領域構想－

コーディネーター	本学	副学長	大坪　靖直
シンポジスト	本学	准教授	樋口　裕介
	千葉大学	教　授	天笠　茂　先生
全体進行	本校	教　頭	森　将和

2月12日（金）授業案内図



第１学年１組　自然探究学習指導案

指導者　　二　串　英　一

題材　あつめて　はっけん　かずや　かたちの　ひみつ（C数理科学）

指導観

○　本題材では，観察や事物収集を通して数や形の見方を柔軟にすることをねらいとしている。具体的には，①いろいろな場面における数の意味をとらえること，②いろいろな形をまる，さんかく，しかくを基準としてとらえること，③数，形，色を組み合わせて物事の意味をとらえることである。わたしたちの生活には数，形，色を活かしたものが数多くあるが，それが当たり前のようにとらえられている。このようなものを数，形，色といった観点を絞って追究することで，そのものがもつ意味の一面をとらえることができる。また，場面に応じて数や形をとらえるという，見方の活用になる。さらには，観察や事物収集は，科学的根拠のつくり方につながるものである。以上のことから，本題材は文化を創るすばらしさを味わう上で価値がある。

○　本学級の子供たちは，興味をもったことに対して注意深く観察したり，資料で調べたりして，納得いくまで追究することができる。特に，前題材「すごいね　かぜで　はこばれる　たねの　ひみつ」では，マツやカエデ，アルソミトラなど風によって遠くまで運ばれる種に驚き，滞空時間の長い種型飛行機を試行錯誤しながら作り，飛ぶ種の秘密を見つけることができた。これは，自然のすばらしさに感動し，それを自分にも取り入れようと積極的に課題を解決している姿だといえる。このような子供たちに，自分たちが興味をもったものに関する観察の仕方や事物の集め方，調べたものの整理のし方を実感を伴って経験させることは，今後出合う事象の解決において，納得のいく解や最適な解を見つける方法をとらえる上で意義深い。

○　本題材の指導にあたっては，観察や事物収集を十分に行うことを通して，数や形を柔軟に見たり，ものごとを数や形を観点としてとらえたりすることができるようにする。そのために，まず，いろいろな場面をもとに数の意味について話し合い，場面に応じて数の意味が変わることをとらえさせる。その際，集合数や順序数の他に，ものの大きさや範囲を表している数を提示する。次に，いろいろな場面をもとに形の見方について話し合い，場面に応じて形の見方が変わることをとらえさせる。その際，まる，さんかく，しかくを組み合わせてできている形を提示する。最後に，交通標識の意味について話し合い，数や形の見方，色の効果を活かしてつくられていることをとらえさせる。その際，３つの観点が特徴的に表れる交通標識を提示する。

題材で育成する資質・能力

◎　既知の数や形の見方を使って，ある場面における数の意味や形をとらえることができる。
（創造性：論理的思考）

○　数や形，色の見方について，納得してもらうために根拠を見つけようとしたり，友達に説明したりすることができる。　（協働性：他者理解）

○　一つの観点に沿ってものごとを分類・整理することができ，複数の観点でもものごとを分類・整理しようとする。
（基礎力：科学的・数学的な知識・技能）

○　数や形，色の見方において，自分と友達の違いや共通点に気付き，納得したことを自分の言動に表すことができる。　（内省力：自己調整）

題材の計画（全８時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　いろいろな事象で用いられる数の意味について話し合う。　②
○　数は，ものの個数や順序を表すだけでなく，ものの大きさや範囲なども表していること
かずは　いろいろなことに　つかわれている。 かずの　ほかにも　ないのかな。
※　数が用いられている事象を集合数→順序数→それ以外の順序で提示
2　生活事象から形を集め，形について話し合う。
(1) 生活事象から形を集める。　②
○　ものの概形に着目して，形を見出すこと
※　まる，さんかく，しかくをとらえやすいモデル事象の提示
(2) 集めた形を，まる，さんかく，しかくに仲間分けする。　②
○　まる，さんかく，しかくを組み合わせてとらえること
かたちも　いろいろな　ところに　あり， まる，さんかく，しかくに　わけることが できたよ。
※　現実の形→シルエットの順に形を提示
3　身近にある交通標識を数，形，色の観点で分類し，整理する。　② 本時1/2
○　交通標識の特徴として，数は範囲としての意味，形や色は見方の効果を用いていることをとらえること
※　数，形，色の観点が明確な交通標識の提示

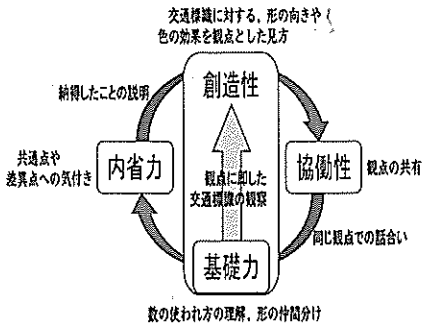
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性（論理的思考）

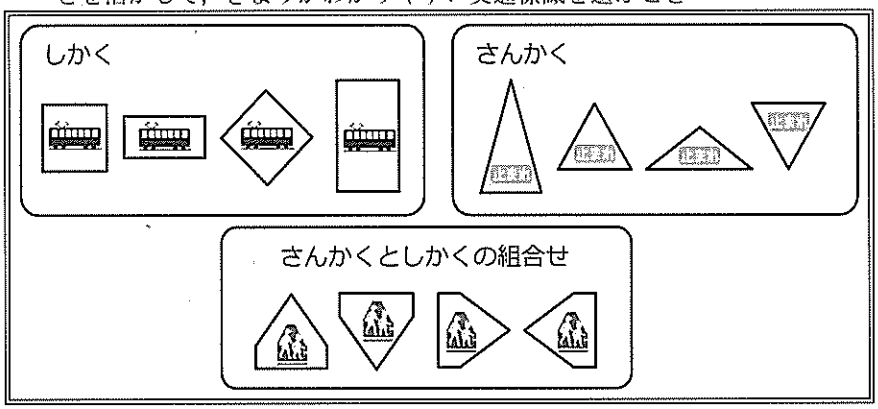
形を観点として交通標識を分類する活動において，形の向きに着目して，交通標識の効果をとらえようとすること

- もしかくの仲間だけど，角を上にしているので，「電車が通る」ということがわかるよ。
- も，さんかくの仲間だけど，角を下にしているので「止まりなさい」ということがよくわかるよ。
- は，さんかくとしかくが組み合わさった形で，どっしりとしているから，「渡ってもよい」ということがわかるよ。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（7／8時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1　形の効果について話し合う。 ○　向きの違いによって，形の効果が違うことをとらえること めあて マークと　かたちの　ただしい　くみあわせを　ペアの　ともだちと　はなしあおう。	※　形の向きの違いによって感じ方が変わることに気付かせるために，いろいろな向きのさんかくとしかくを提示する。
2　形の向きに着目して，きまりがわかりやすい交通標識について話し合う。 (1) ペアの友達ときまりがわかりやすい交通標識を選ぶ。 ○　向きが安定している形から感じることと向きが不安定な形から感じることを活かして，きまりがわかりやすい交通標識を選ぶこと  	※　交通標識の形の向きのみに着目させるために，形が特徴的な交通標識を，無色で数字がない状態で複数提示する。
(2) 選んだ交通標識の根拠について，全体で話し合う。 ○　向きが安定している形だと見やすいがさらりと見てしまうこと，向きが不安定な形だとしっかり見てしまうことから，きまりのわかりやすさを判断すること ・「でんしゃが　とおります」，「ふみきりが　あります」という　いみ。 ・とがった　かたちに　みえるので，おもわず　見てしまうから。 ・「ここで　とまりましょう」という　いみ。 ・うえに　むいている　かどを　見てしまうから。 ・「あるいて　いいですよ」，「おうだんほどう」という　いみ。 ・うえに　むいている　かどを　見てしまうから。	※　どのような観点できまりのわかりやすさについて判断しているのかとらえさせるために，板書にて子供の発言を表情カードで具体化する。
3　色を付けた交通標識を提示し，形と色の組み合わせによる効果について話し合う。 ○　色が加わることによって形が強調されて，きまりもわかりやすくなることに気付くこと	※　形の効果と色の効果が組み合わさるとよりきまりがわかりやすくなることに気付かせるために，形が特徴的な交通標識に色を付けたものを提示する。

第１学年２組　生き方学習指導案（特別支援学級ふじ組との交流）

指導者　齋藤　淳・中島卓哉

題材　ふくおかしょうがっこうは　たのしいね（Ｃ自分とくらし）

指導観

○　本題材では，２組とふじ組（特別支援学級：以下省略）の友達との楽しいくらしを主体的に実践することをねらいとしている。具体的には，①ふじ組と２組の友達で一緒に楽しい学校生活を見つけることに関心をもつこと，②もうすぐ北校舎が新しくなり，新入生も入ってくることから，学校生活をもっと一緒に楽しくしたいという目的をもつこと，③１年生のお迎えの会で学校生活の中で一緒にできる活動を表現することなどである。そこで，本題材では，ふじ組と２組の友達がともに学び合うことができるようにする。そうすることでごっこ遊びからつながる一緒にできる活動を通して相互理解が具現化し，ともに成長する生き方につながると考える。つまり，本題材において，演劇づくりを行うことは，自己の生き方を探求し続ける力を養う上で価値がある。

○　本学級の子供たちは，小学校生活での様々な対象に対して興味をもち，進んで活動したり，友達と積極的にかかわろうとしたりしている。特に，２学期の生き方学習「あらつパークで　たのしく　あそぼう」では，遊びを通して学びの主体となることができた。その中で創造的に遊びをつくったり仲間や他者とかかわったりする姿が見られた。しかし，その遊びを通して，２組やふじ組の子供たちのことを理解しようとする心を育成するには不十分であった。そこで，学年末のこの時期に，誰とでもともにかかわり合っていくために大切なことを考え，実践を通して自己を見つめていくことは，特に子供たちが「協働性」をもとに「創造性」を発揮する上で，意義深いものである。

○　本題材の指導にあたっては，通常学級も特別支援学級もともに遊びを通して，主体的に活動して遊ぶことできるようにする。そのために，まず導入段階では，新しい北校舎ができることを紹介し，２学級が離れる前に一緒に楽しいことを見つけたいという思いをもたせる。次に展開前半段階では，おもちゃ図書館の方との出会いをもとに，楽しいことを見つけたり，一人一人が楽しいと感じていることを理解したりする。展開後半段階では，福岡小学校の楽しさをつくりたいという願いをもたせ，栽培活動や遊びやおもちゃづくりなどを実現させ，表現させるようにする。終末段階では，今後も一緒に楽しい学校生活を送りたいという願いをもたせ，これからもともに過ごす学校生活への期待感をもたせるようにする。

題材で育成する資質・能力

◎　新しい北校舎ができても一緒に学びたいという思いをもち，楽しい活動や遊びをつくったり，進んでみんなのためにできることを実践したりしようとしている。（創造性：実践的態度）

◎　楽しい生活づくりを実践する中で，他者の意見や気持ちを聞くことの大切さを実感し，自分の思いを伝えようとしている。（協働性：相互理解）

○　友達のことを考え，様々な活動を通して，一緒にできることを増やしたいと思ったことについて考えることができる。（内省力：自己への見方・考え方）

○　ともに学校生活を送ることのよさを実感し，あたたかくやさしい気持ちをもつことができる。（基礎力：価値認識）

題材の計画（全19時間）

学習活動と内容
1　２組とふじ組で校舎が別になっても一緒に学習したいという思いを話し合う。　②
○　あらつパークで一緒に遊んだことを想起し，今後も楽しく一緒に学ぼうとする思いをもつこと
※　もうすぐ北校舎ができることとふじ組との学習への切実感がもてる季節と学びをつなぐ題材設定
いっしょに　できる　たのしいを　みつけよう。
2　学校にある「楽しい」を見つけ，体験する。⑦
○　一緒に行う学校生活の楽しさをとらえること
※　障害のある子もない子もおもちゃで一緒に遊ぶおもちゃ図書館の方々の生き方との出合い
3　これからできる「楽しい」をつくる。
(1) やってみたい活動を実践する。　⑥ 本時6/6
○　つくり出す楽しさをとらえること
※　試行，体験，表現，振り返りの４つのサイクルによる協働的な学び
(2) お互いの「楽しい」を伝え合う。　②
○　春になっても一緒にできる活動にすること
※　これからも継続的に続けられる活動を新入生のお迎えの会で表現するという行事と学びをつなぐ題材構成
4　友達との学習のやりがいを実感し，楽しかったことを話し合う。　②
○　自分の成長を振り返り，実感すること
※　マイタイムとの関連を図る実践の生活化

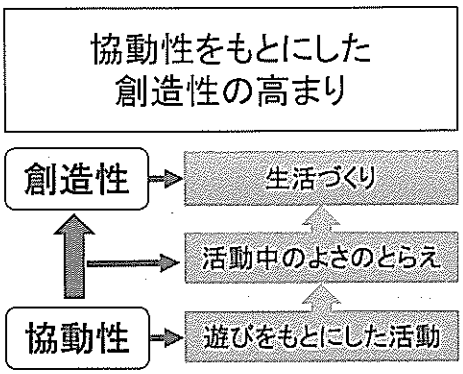
本時に最も重視する資質・能力

☆協働性（他者理解）

友達とやりとりしながら活動の中身を決めていく中で，友達の思いを理解し，自分がやりたいことをするために友達が助けてくれたり，励ましてくれたりすることや，友達のために自分が役に立っていることに対する喜びを実感し，自分や２組の友達，ふじ組の４人の友達と一緒に活動することの楽しさを表している姿

- ○○くんが教えてくれて嬉しいな。
- ○○さんがぼくのことをありがとうと言ってくれて嬉しいよ。
- ２組もふじ組も一緒にした方がもっともっと楽しいね。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（15／19時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1　前時までの福岡小学校の「楽しい」活動をつくろうとしている友達とお互いの活動の様子を見る。【試行】 ○　一緒に遊んできたことを手がかりにしながら，福岡小学校で２組もふじ組も一緒にできる「楽しい」活動をつくる中で，かかわりのよさが発揮され始めていることに気付くこと めあて ふじぐみも　２くみも　いっしょに　できる　みんなで　つくった たのしいを　あじわおう。	※　試しの場を設定することで，お互いの活動を体験してみたいという活動への意欲付けを図る。
2　一緒にできる「楽しい」活動づくりを行い，やってみて，どのようなところが楽しいのか話し合う。 (1) それぞれのグループでつくった福岡小学校の「楽しい」活動を工夫しながら，グループ全員で一緒にやってみる。【体験】 ○　子供たち同士で一緒にできる活動そのものの楽しさを味わい，活動のよさを実感して熱中すること 《想定される子供の活動例》　たのしいを　つくろう　本時における体験活動 つくって：みんなと いっしょに おもちゃづくりを したら たのしそうだね。 → たのしく しかけを くふう しよう あそんで：ゆめひろばで いっぱい だるまさんが ころんだを しよう。 → きたこうしゃに むかえに いこう そだてて：はたけで いっしょに やさいを うえることが できそうだね。 → はるに なったら しゅうかくしよう うたって：クローバーばたけは しきの ぶたいで いっしょに うたえそうだね。 → いっしょに たのしく うたおう	※　福岡小学校でこれから春に向けて，一緒にできそうなことをつくっていく活動を，試行錯誤させながら繰り返し行う活動構成を仕組むことで，目的を共有しながらともにつくりあげていく中で生まれたかかわりのよさを意識させる。
(2)「楽しい」活動づくりを行って，自分が気付いたことや思ったことについて話し合う。【表現】 ○　タブレットとディスプレイの映像を活用した学習でのハイライト画像をもとに，自分たちの活動の楽しさを価値付けること 《想定される子供の発言例》　たのしいを　つたえあおう　本時における表現活動 このままで：・いっしょに したら たのしいね。・たすけて くれて うれしかった。・ありがとうと いわれて よかった。 → もっと つづけたい 活動の写真：体験を経験に → 思いを伝える これからも：・まだまだ いっしょに したい。・もっと たのしいを つくれそう。・もっと なかよく あそびたい。 → あたらしく つくろう	※　完成してきた新しい北校舎の写真を提示することでさらに新しい「楽しい」をつくることができそうだという見通しをもたせる。
3　自分たちの高まりを実感し，できるようになったこととこれからがんばりたいことを明らかにして，学習ノートに記述する。【振り返り】 ○　振り返りシートに「楽しい」活動を行えた自分自身の成長とこれからの願いをもつこと	※　２組もふじ組もともに福岡小学校の「楽しい」をつくってよかったと思うことについての振り返りを絵や言葉で表現する活動を毎時間設けることで，自己効力感を得られるようにする。

第３学年１組　言語文化学習指導案

指導者　　菊　竹　一　平

題材　落語でみがく言葉の力（Ａ言語基礎）

指導観

○　本題材では，落語を通して，解釈した話の内容を相手や場に応じて工夫して話す「言葉の力」を育成することをねらいとしている。具体的には，①福岡教育大学落語研究会の学生の落語を聞いたり，落語の魅力を語ってもらったりしたことを基に自分たちも落語会を開きたいという思いをもつこと，②叙述を基に場面の様子をとらえて，適切な表現を工夫して落語会を開くこと，③落語を通して高まった自分たちの言葉の力に気付くことである。落語は，語り手が身振りと手振りのみで話を進め，一人何役も演じるため，語り手は叙述を基に想像して読み，その解釈に応じて適切に語ることが求められる。これらのことから，本題材において，落語の適切な表現を工夫することは叙述を基に解釈した内容を相手や場に応じて工夫して話す力を育成することができるという価値がある。

○　本学級の子供たちは，これまでの学習において，教材文について場面の移り変わりに注意しながら，登場人物の性格や気持ちの変化を叙述を基に想像して読むことができている。また，易しい文語調の短歌や俳句についてリズムを感じ取りながら音読などをして，伝統的な言語文化に親しむこともできている。しかし，解釈したことを発表し合い，一人一人の解釈に違いがあることに気付くまでにとどまりがちであるということもあった。これは，教材文の読解では，子供たちにとって切実な学習課題にならず，叙述を基に読み取る力や言語文化に対する知識は習得することはできたものの，自分が解釈したことを話し方や仕草を工夫して伝えたいといった実生活につながる資質・能力を養うことが十分ではなかったといえる。

○　本題材の指導にあたっては，落語の叙述を基に解釈した内容を相手や場に応じて工夫して話す力を向上できるようにする。そのために，まず，落語の楽しさを伝えたいという学習課題をとらえさせる。その際，落語研究会の学生に同じ内容の落語を演じてもらい，違いに気付かせることで，自分も表現を工夫して楽しさを伝えたいという意欲を高めるようにする。次に，自分の解釈がどうすれば伝わるのかを追究する。その際，適切な話し方や演じ方について話し合い，学生にも助言をもらうようにする。最後に，最初に演じた姿と最後の発表の姿を映像で比べて，解釈する力や声の調子などの話す力といった言葉の力の向上を実感できるようにする。その際，自己評価だけでなく学生から評価をもらうなどして，達成感を得られるようにする。

題材で育成する資質・能力

○　場面の様子や人物の気持ちの変化について解釈したことを伝えるために話し方や演じ方を工夫しようとしている。　（創造性：課題発見）

○　同じ話を選んだ友達と演じる様子を見合い，解釈の違いや話し方や演じ方の工夫について伝え合おうとしている。　（協働性：受容・伝達）

◎　解釈したことを伝えるために適した演じ方に気付いたり，解釈による話し方の変化に気付いたりすることができる。　（内省力：自己認知）

◎　人物の性格や心情の変化などを叙述を基に想像して読むことができる　（基礎力：言語感覚）

題材の計画（全15時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　２人の大学生が演じる同じ内容の落語を聞き，学習課題をつくる。　③ ○　同じ落語でも話し方によって楽しさが変化する落語の魅力をとらえること ※　落語を演じる意欲を高めるための福岡教育大学落語研究会の学生との出会い 話し方やえんじ方を工夫して，落語会でさい高の一席をとどけよう。
2　場面に応じた話し方や演じ方を話し合う。 (1) 同じ話を選んだ友達と場面に合う話し方や演じ方を話し合い，練習をする。　④ ○　叙述を基に想像して読み，場面に合う話し方や演じ方をとらえること ※　話し方や演じ方を客観的に評価するための観点設定及びタブレットの活用 (2) 落語会のリハーサルを行い，大学生から助言をもらって演じ方を改善する。　④ 本時 1/4 ○　声の調子や間などの適切な話し方，仕草，表情などの適切な演じ方をとらえること ※　適切な話し方や演じ方をとらえるための大学生からの具体的な助言の場の設定
3　落語会を開き，自分たちの言葉の力の成長について話し合う。　④ ○　叙述を解釈する力やそれを伝えるための話す力など，言葉の力の向上に気付くこと ※　保護者や大学生などからの他者評価の場の設定と練習による言葉の力の向上を可視化する映像での比較

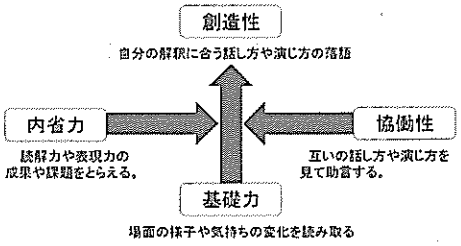
本時に最も重視する資質・能力

☆　基礎力　（言語感覚）

同じ話を選んだ友達と解釈を伝え合い，場面の様子や人物の気持ちが伝わる話し方や演じ方を工夫しようとしている。

・　前の映像では間をあまりとっていないから間を長くすると不安な気持ちが伝わると思うよ。
・　間を長くすると，ふるえる感じが伝わったか確かめてみよう。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（８／15時）

学　習　活　動　と　内　容	創造主体を生み出す手だて
1　同じ場面を演じている学生と友達の表現の仕方の違いを話し合う。 ○　同じ言葉でもそれぞれの解釈によって伝え方が異なることをとらえ，自分の解釈が伝わる演じ方を工夫しようという課題をもつこと めあて 話し方やえんじ方をみがいて，自分の思いがつたわる落語にしよう。	※　同じ言葉でも話し方や演じ方によって伝わり方が異なることをとらえさせるために，同じ場面を演じる学生と複数の児童の映像を提示する。
2　場面に応じた話し方や演じ方について話し合い，改善する。 (1) 場面に合った話し方や演じ方について話し合う。 ○　叙述や映像を基に場面に合った話し方や演じ方をとらえること 話し方の工夫 見たかっ，と２回くり返しているけど，２回とも同じように読んでいいのか。➡ 同じ言葉でも読み方を変えて気持ちを表現する。 「客が八文置いて…，わらじを引っぱって…，」と…のくり返しをどのように読むのか。➡ 間の取り方を工夫してみる。 演じ方の工夫 「天井裏から，新しいわらじがぞろぞろっ！」の部分を強調するためにどうするのか。➡ せんすを使って動きを表している。 「わらじを引っぱって…，」の動作を伝えるにはどうすればよいのか ➡ 手ぬぐいをつかって動きを出している。 ※　タブレットで同じ場面を演じる学生の映像と比べて，可視化しながら改善していく。	※　同じ話を演じている映像をタブレットで見たり，落語研究会の学生に助言を受けたりして，話し方や演じ方を具体的な姿で話し合いながら改善できるようにする。
(2) 同じ話を選んだグループで互いの演じ方を見合うことで意見を伝え合ったり，落語研究会の大学生から演じ方の助言をもらったりする。 ○　場面に応じた話し方や仕草についての改善点を意識しながら互いの演じ方を見合って，助言し合うこと △○びっくりしたように 「また，わらじですか…？ もう，本当にありませんでっ。」 ▲●がっかりしたように 「ねえのかい…。」（天井を見て） △○おこったように 何を言ってるんだ。あるじゃねえか。」 首をかしげて☆●ふるえながら 「は？ありますね…。気味が悪い…。」 （中略） おどろくのは当然で，てんじょううらから新しいわらじがぞろぞろっ！ 【速さ】・速く読む　○ ・ゆっくり読む● 【強さ】・強く読む△ ・弱く読む▲ 【間】・短い間☆ ・長い間★　など	※　叙述を基に自分が解釈したことをどのように表現すればより伝わるのかを記号で表現したり，タブレットで録画した様子を見ながら改善の成果を確かめたりするなど可視化して話し合うことができるようにする。
3　練習の成果や課題について話し合い，落語会に向けてさらにみがきたい「言葉の力」について書く。 ○　友達からの意見や落語研究会の人からの助言などを基に，前時と比べて本時で向上した「言葉の力」やさらに伸ばしたい「言葉の力」について具体的にとらえること	※　話し方と演じ方で改善した理由を書き，解釈の深まりと伝え方の高まりの２点が明らかになるような学習プリントを準備する。

第３学年２組　社会共創学習指導案

指導者　　藤　岡　太　郎

題材　つくろう！ともに生きるまち（Ａ自分と社会）

指導観

○　本題材は，地域にある福祉施設（ふくふくプラザ，ももち福祉プラザ）に通所する人々や働く人々の営みに関心をもち，具体的なかかわりづくりを通して，自分も市民の一員として，よりよい福祉型社会の実現に対する参画意識をもつことをねらいとしている。具体的には，①地域の福祉施設の分布や働き，設備に関心をもつこと，②福祉体験を通して，障害のある人々の暮らしやお世話する人々の仕事，思いや願いに共感すること，③障害のある人々との交流体験を通して，福祉型社会の実現に対する意識を高めることである。本題材は，地域の福祉施設に通所する人々とともに，交流や販売活動などの共働体験が可能であり，通所する人々がつくり出す製品の販路拡大の求めがあるため，連帯の意識や福祉社会の実現を創造する一員としての自覚を育む上で価値がある。

○　本学級の子供たちは，２学期題材「地域の人とともに！唐人町商店街」の学習において，唐人町商店街の活性化を図る取組に共働する体験を通して，地域にかかわる一員としての自覚を高めてきた。また，「みんなが住みよいまちに」の学習において，福岡在住の外国の人々の悩みに共感し，かかわりづくりを通して，住みよいまちづくりには双方向の主体的なかかわりが大切であることの理解を深めてきた。これらの学習を経験することにより，持続可能な社会の実現を目指す実践的な態度を身に付けつつある。そこで，人の心を推し量り，痛みや喜びを感じる共感能力が著しく成長するこの期に本題材を設定する。そして，ももち福祉プラザに通所する人々との共働体験を通して，ともに支え合う豊かな福祉社会を目指す態度を養いたい。

○　本題材の指導にあたっては，福祉型社会づくりの主体としての自覚と調和的な精神をもつことができるようにする。まず，「知る」段階では，かかわりづくり１を設定し，市の福祉施設の分布や働きを調べるとともに，福祉プラザに通所する人々の生活に迫る問いを設定させる。次に，「いどむ」段階では，かかわりづくり２を設定し，ももち福祉プラザの人々との交流を通して，働く意味をとらえさせる。さらに，通所する人々の製品の販路拡大の求めを聞く場を設定し，協力の可能性について話し合わせる。最後に，「かかわる」段階では，かかわりづくり３を設定し，唐人町商店街で食品を通所する人と一緒に販売する活動を通して，共に生きる社会への参画意識を高めさせる。

題材で育成する資質・能力

◎　通所する人々との共働体験や働く人々の思いをもとに，福祉社会の実現に向けた自分のかかわりを考えることができる。　（創造性：参画意識）

○　通所する人々の気持ちを推し量り，創造の喜びを味わうとともに，販路拡大に対する連帯の意識を高めることができる。（協働性：共生的態度）

◎　自分を高みにおいた意識ではなく，地域の一員として福祉社会の実現に向けた共生の意識をもつことができる。　（内省力：郷土愛）

○　福岡市の福祉施設の分布や働き，福祉施設に通所する人々の生活やお世話する人々の思いや願いをとらえることができる。（基礎力：社会認識）

題材の計画（全15時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　福岡市の福祉施設の分布や働きを調べ，ももち福祉プラザの見学の観点について話し合う。　⑤【かかわりづくり１】 ○　市の福祉施設の分布や働きをとらえ，ももち福祉プラザに通所する人々とのかかわりを深める方向をもつこと ももち福祉プラザに通う人々はどのような生活をしているのだろう。 ※　市の福祉施設の調査やももち福祉プラザに通所する人々がつくったクッキーの試食体験の設定
2　通所する人々の生活の調査や仕事の様子の見学を通して，働く意味について話し合う。 (1) 生活実態の調査と交流体験を行う。　⑤【かかわりづくり２】 ○　通所する人々の障がいや生活の理解とともにお世話する人々の思いや願いに迫ること ※　仕事の様子の見学や交流の場の設定 (2) 交流体験をもとに，働く意味や新たな課題について話し合う。　① 本時 ○　自立をキーワードに働く意味をとらえること 一生けん命作ったクッキーが売れるためにはどうすればよいだろう。 (3) 課題解決の方法について話し合う。　① ○　共働販売の方向性をとらえること ※　当事者から販路拡大の求めを聞く場の設定
3　通所する人々と作った食品を唐人町商店街で販売し，振り返りをする。③【かかわりづくり３】 ○　福祉型社会づくりへの参画意識をもつこと ※　ももち福祉プラザで製作したクッキーを唐人町商店街の一角を借りて販売する共働体験の設定

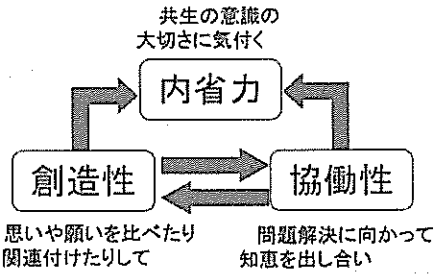
本時に最も重視する資質・能力

☆内省力（郷土愛）

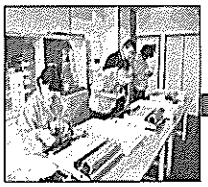
障がいのある人や施設で働く人の働く意味は，「自立」を目指して共に支え合うことであり，自分も地域の一員として共に支え合う意識をもつことであることに気付いた姿

・　ももち福祉プラザに通所する人々と安河内さんたちの働く意味を考えて，わたしも通所する人々と同じように，共に支え合い，自分のため，人のために役立ちたい。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（11／15時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1　ももち福祉プラザに通所する人々との交流体験について，代表児童の作文の発表を聞き，本時の追究課題について話し合う。 ○　ももち福祉プラザに通所する人々が，仕事に対して真摯に取り組む姿の想起をもとに，その根底にある思いや願いに迫るめあてをつかむこと めあて 体験をもとに，ももち福祉プラザに通所する人々やお世話する人々の働く意味について話し合おう。	※　体験を振り返った児童の作文発表を聞く場を設定することで，通所する人々や安河内たちの働く意味について問いをもつことができるようにする。
2　ももち福祉プラザに通所する人々とお世話する人々の働く意味について，体験グループと全体で話し合う。 (1) ももち福祉プラザに通所する人々やお世話する人々が働く意味について，体験グループで話し合う。 ○　「家族に対する思いや願い」と「働くことに対する思いや願い」，「生活に対する思いや願い」があることに気付くこと  家族のこと：○ 家族に心配をかけたくない　○ 家族をよろこばせたい 働くこと：○ 働くことが楽しい　○ もっと仕事を覚えたい 生活のこと：○ お金を稼いで生活したい　○ 一人の力で生活したい	※　通所する人々の思いや願いについて，体験グループで分類・整理する活動を設定することで，思いや願いが家族に対する「精神的な自立」，働くことに対する「経済的な自立」，生活することに対する「生活の自立」があることを意識化できるようにする。
(2) ももち福祉プラザでお世話する安河内さんの話を聞き，通所する人々とお世話する人々の思いや願いの共通点について話し合う。 ○　ももち福祉プラザに通所する人々や安河内さんたちの働く意味の根底にある「自立」をとらえ，共に支え合う意識の大切さに気付くこと ももち福祉プラザに通所する人々 家族のこと：○ 家族に心配をかけたくない　○ 家族をよろこばせたい 働くこと：○ 働くことが楽しい　○ もっと仕事を覚えたい 生活のこと：○ お金を稼いで生活したい　○ 一人の力で生活したい ↓ 自分の力で生活したい（自立） ↑ ももち福祉プラザ　安河内さん：○ 自分の力を最大限に生かしてほしい　○ 一人の人間として社会で活躍してほしい	※　ももち福祉プラザに通所する人々とお世話する安河内さんの思いや願いの共通点を話し合う活動を設定することで，社会の一員としての「自立」が目的であることに気付くことができるようにする。
3　ももち福祉プラザの方が一生懸命に作った商品の販売状況をもとに，新たな課題について話し合う。 ○　通所する人々の役に立ちたいというかかわりを深める意識をもつこと 一生けん命作ったクッキーが売れるためにはどうすればよいだろう。	※　ももち福祉プラザの安河内さんから，クッキーの販売状況の話や販路拡大について，協力依頼を聞かせることで，かかわりを深める課題意識をもつことができるようにする。

第４学年１組・帰国子女学級　言語文化学習指導案

指導者　　杉　本　克　如

題材　世界の国々のみ力を発見しよう（Ｂコミュニケーション）

指導観

○　本題材では，世界の国々の文化に触れ，異文化を理解しようとする態度を養ったり，日本の文化との共通点や相違点に気付いたりすることをねらいとしている。具体的には，①ＡＬＴや教師，帰国子女学級児童が外国で経験したことを聞くこと，②滞在国と日本の文化との共通点や相違点をさぐること，③興味がある国について調べ，行ってみたい国を紹介し合うことである。その際，コミュニケーション活動を多く位置付け，英語でやりとりすることの楽しさやよさを実感することができるようにする。つまり，本題材において，帰国子女学級児童とともに，コミュニケーションや異文化理解を扱うことは，第２言語として英語を使うモデル像を獲得し，英語を学ぶよさを見出したり，異文化理解を深めたりするという価値がある。

○　本学級の子供たちは，これまでに友達やＡＬＴと英語によるコミュニケーション活動に意欲的に取り組んできた。また，ある程度まとまった英語を聞いて内容の大体を理解したり，自分の思いを英語で伝えようとしたりすることもできるようになってきている。しかし，外国人と英語でコミュニケーションを図ることを通して，コミュニケーションの手段としての英語のよさや異文化の存在を実感した経験は少ない。これは，これまでの英語学習が単に基本表現を使って，友達と尋ね合うことがコミュニケーション活動の中心となり，英語をコミュニケーションの手段の一つと意識したり，英語でやりとりをし，体験的に異文化理解を深めたりする学習内容になっていなかったためであるといえる。

○　本題材の指導にあたっては，帰国子女学級児童とのやりとりを通して，異文化理解を深めることができるようにする。そのために，まず導入段階では，ＡＬＴや教師，帰国子女学級児童の外国での滞在経験談を聞き，学習課題について話し合う。次に，展開段階では，グループや全体で，帰国子女学級児童の滞在国と日本の文化を紹介し合い，共通点や相違点をさぐる活動を行う。終末段階では，自分の興味がある国について調べ，行ってみたい国とその理由を紹介し合う活動を位置付け，友達への気付きや異文化理解をさらに深めることができるようにする。その際，帰国子女学級の児童と英語でコミュニケーションを図ることを通して，帰国子女学級の児童が英語を話す姿から，第２言語として英語を話すモデル像を獲得したり，英語学習への意欲を高めたりすることができるようにする。

題材で育成する資質・能力

◎　英語表現や非言語など，使える手段を駆使しながら，英語でコミュニケーションを図ることを通して，異文化理解を深めようとしている。
（創造性：創造的思考【４年・帰国児童】）

○　チームで協力して，世界の国々について調べたり英語でやりとりをしたりしようとしている。
（協働性：伝え合い【４年・帰国児童】）

◎　世界の国々の文化に触れ，異文化を理解しようとする態度を養い，日本文化との共通点や相違点に気付くことを通して，異文化理解を深めることができる。（内省力：言語観形成【４年児童】）

◎　異文化を理解したり日本文化との共通点や相違点について考えたりすることを通して，日本文化や異文化理解をさらに深めることができる。
（内省力：言語観形成【帰国児童】）

○　基本的な英語表現や非言語を活用しながら，相手の話を聞いて理解したり，自分が言いたいことを相手に伝えたりすることができる。
（基礎力：言語感覚【４年・帰国児童】）

題材の計画（全９時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　ALTや教師，帰国子女学級児童の外国での滞在経験談を聞き，学習課題について話し合う。　②
○　世界の国々についてもっと知りたいという意欲を高めること
※　滞在国の食べ物，観光名所など視覚資料の提示
世界の国々のみ力を調べ，友達と伝え合おう。
2　帰国子女学級児童の滞在国と日本の文化を紹介し合い，それぞれの文化を比べる。
(1) グループごとに，帰国子女学級児童の滞在国と日本の文化を紹介し合う。　② 本時2/2
○　共通点や相違点についてとらえること
※　異文化理解を深めるための比較する視点の提示
(2) 全体で，帰国子女学級児童の滞在国の文化と日本の文化との共通点や相違点を紹介する。②
○　異文化をさらに知り，理解を深めること
※　異文化についての気付きを深める全体交流
3　自分が興味がある国について調べ，行ってみたい国を友達と紹介し合う。【Hi, friends!2Lesson5】③
○　異文化や友達への気付きを深めること
※　異文化理解を深めるコミュニケーション活動

本時に最も重視する資質・能力

☆内省力（言語観形成）【４年児童】

英語でのやりとりを通して，滞在国の文化を知り，異文化を理解しようとしたり日本文化との共通点や相違点に気付いたりしている姿。

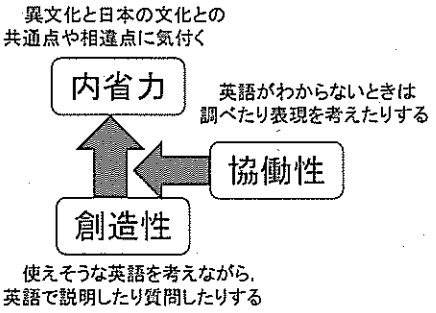
・　日本とアジアの国の食べ物は似ているものも違うものもある。

☆内省力（言語観形成）【帰国児童】

滞在国の文化を発信することを通して，滞在国と日本の文化との共通点や相違点について考えたり，理解を深めたりしている姿。

・　アメリカとは違う日本の文化もいいなと思ったよ。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（４／９時）

学　習　活　動　と　内　容	創造主体を生み出す手だて
1　前時の振り返りを行い，本時の紹介の仕方や内容について話し合う。 ○　帰国子女学級児童の滞在国と日本の文化を紹介し合うという活動の見通しをもつこと めあて たいざい国や日本の文化をしょう介し合い，気付いたことを話し合おう。	※　もっと帰国子女学級児童の滞在国や日本の文化について知りたいという意欲を高めるために，それぞれの国の食べ物の写真を提示し異文化への興味を喚起する。
2　滞在国や日本の文化を紹介し合い，共通点や相違点について話し合う。 (1) 食べ物や観光名所など，滞在国や日本の文化についてお互いに紹介したり，質問したりする。 ○　アメリカやメキシコ，ネパールなどの帰国子女学級児童の滞在国や日本の食べ物や観光名所などの文化について知ること ３組：　This is famous Nepal food , “Momo” . Ｃ１：　What’s “Momo” ? ３組：　It’s like a “Gyoza” in Japan.　OK? Ｃ１：　OK. ３組：　You can see　Mt. Everest.　Highest mountain in the world. This is school lunch in Nepal. Ｃ１：　It’s same! We eat rice too! Ｃ２：　This is famous Japanese food , “Mentaiko” . ３組：　What is it? Ｃ３：　It’s spicy cod roe. Ｃ１：　You can see shrines in Japan.　We pray there. Ｃ２：　This is Japanese “Manga” , “One piece” . ３組：　It’s also famous in Nepal!	※　活動で使う定型文や英語でやりとりをするモデル像を獲得させるために，帰国子女学級児童とＡＬＴとによるデモンストレーションを見せる。 ※　滞在国や日本の文化を紹介し合い，理解を深める力を発揮させるために，定型文を使って紹介したり，興味や疑問を基に質問したりさせながら，グループごとに自由に交流させる。
(2) ペアやグループで滞在国と日本の文化の共通点や相違点を話し合う。 ○　滞在国と日本の文化とを比較することを通して，共通点や相違点，それぞれの文化のよさをとらえること Ｃ１：　アメリカの食べ物は日本でもよく食べられているものが多い。 Ｃ２：　中国の食べ物は日本の食べ物と少し似ているものもある。 Ｃ３：　シンガポールと中国は，食べ物も建物も似ているものが多い。 Ｃ４：　日本と同じように，ご飯を食べている国が意外と多い。 Ｃ５：　日本と似ているところや違うところがあっておもしろい。	※　異文化と日本の文化との共通点や相違点に気付き，異文化のよさをとらえさせるために，帰国子女学級児童の滞在国での経験談を交えながら，食べ物，観光名所，学校生活といった視点から気付いたことを全体で共有する場を設定する。
3　本時の活動を通して，滞在国の文化について知ったことや日本の文化との共通点や相違点について気付いたことを振り返る。 ○　滞在国や日本の文化の共通点や相違点を基にして，異文化に対する理解を深めること	

第４学年２組　自然探究学習指導案

指導者　　古　賀　　誠

題　材　未来のものづくりへ，ロボットの仕組み（Ｃ数理科学）

指導観

○　本題材では，ロボットの動く仕組みについて調べ，ロボットの動く仕組みは人間，動物などの動きを基本として，様々な動力や材料が使われて動いていることを理解することをねらいとしている。具体的には，①ロボットを動かすための動力源はモーター，ゴムなどであり，そのモーターにつなぐ回路によってロボットの動きが変わること，②身近な材料を扱って組み立て方を工夫することで，様々な種類のロボットの部分を製作できること，③長さや面積，角度，動く速さなどを考え，ロボット設計図を作ることである。つまり，本題材において，ロボットの動く仕組みを扱うことは子供の知的好奇心を喚起し，科学的・数学的な知識を結集できるという価値がある。

○　本学級の子供たちは観察・実験において，変化の様子や温度変化などを，表や折れ線グラフなどで表したり，変化の特徴を読み取ったりすることができている。また，基礎力である変化とそれにかかわる要因とを関係付けてきた。しかし，科学的・数学的な知識の関係付けや意識的な活用ができていない。これは様々な知識を使う課題設定になっておらず，子供の思考の流れに沿っていないことが原因であるといえる。そこで，第４学年「電流のはたらき（Ｂ自然）」や第４学年「表やグラフ（Ａ数理）」などの学習を基に，学んだことをつないで活用していく必要がある。

○　本題材の指導にあたっては，ロボットの動く仕組みを調べ，ロボットの動く仕組みは人間の動きが基本となっていることに気付き，モーターや回路などの様々な動く仕組みが使われ，計算されて動いていることを理解できるようにする。そのために，まず，導入段階では，九州大学工学部機械工学科の研究室にあるロボットの働きや目的，ロボットの動く仕組みを見学し，山本元司教授から，その仕組みについて話を聞き，学習課題をもたせる。次に，展開段階では，共通の課題で研究グループをつくり，ロボットの動く仕組みについて，身近な材料を使って再現できるように追究計画を話し合う。そして，ロボットの設計図をつくり，ロボットの動く仕組みについて追究し，試行錯誤しながら，ロボットを製作していくようにする。最後に，終末段階では，研究グループで製作したロボットについて，九州大学の山本元司教授に，自分たちが考えたロボットの動く仕組みを説明して価値付けをしてもらい，最先端技術の基礎であることを実感させるようにする。

題材で育成する資質・能力

◎　ロボットの動きや仕組みについての設計図，ロボット製作において，論理的に表現し，思考しようとしている。　（創造性：論理的思考・表現）

◎　同じ課題の研究グループで改良したよさを話し合い，工夫点を取り入れたり，追究課題を解決したりしようとしている。　（協働性：他者理解）

○　実験内容や方法を考えたり，ロボットの動く仕組みについて使えるかの是非を判断したりすることができる。　（内省力：自己調整）

○　ロボット製作について表を作成してデータ分析をしたり，電流の働きを活かしたりすることができる。　（基礎力：科学的な知識・技能）

題材の計画（全15時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　九州大学工学部の研究施設にあるロボットの働きや，ロボットの動く仕組みについて話を聞いたり見学したりして，学習課題を話し合う。　④ ○　ロボットづくりの講話や，見学を通して，ロボットの働きや，ロボットの動く仕組みについての学習課題をとらえること ※　ロボットが動く仕組みに焦点化した見学や，ロボットの基礎となる仕組みについての講話の設定 未来につながるロボットの動く仕組みについて研究し，ロボットづくりをしよう。
2　ロボットの動く仕組みについて，仮説実験を行い，ロボット製作について話し合う。 (1) 設計図を基に追究計画を話し合う。　② ○　ロボットの追究計画を立案すること ※　ロボット製作における資料や映像の提示と活用 (2) ロボットの仕組みを追究する。　⑥ 本時6/6 ○　ロボットが動く仕組みは動きを予測しながら設計されていることを理解すること ※　これまでの研究ノートの振り返り活動の設定
3　九州大学工学部の山本教授に，ロボットの活用例や目的についての話を聞き，自分たちが作ったロボットの動く仕組みを伝える。　③ ○　ロボットの働きや動く仕組みにおいて，活用の目的や便利さをとらえること ※　これまで学習した内容を活かして作ったロボットの動く仕組みを伝える交流活動の設定

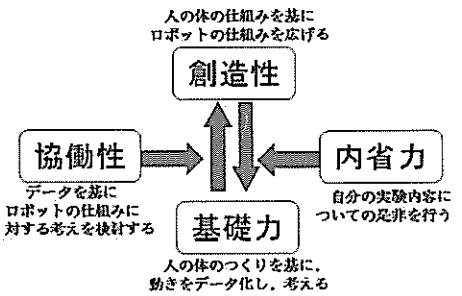
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性（論理的思考）

立案した設計図を基に性能を上げるため，工夫点を考え，追究課題に沿ってめざすロボットの動きを求め，方策を練るようにしている。

- この足の長さでは，ロボットの動きが安定しないから，足を長くして，まっすぐ動くようにしてみよう。
- 電池１個では，腕の動きが遅いから，２個の直列つなぎにして電流の大きさを変えて，動きを速くしてみよう。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（12／15時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1　ロボットの性能を上げるための見通しを話し合う。 ○　今まで実験してきた結果やアドバイスを把握し，ロボットの性能を上げる工夫や解決の見通しをとらえること めあて 自分のロボットの性能を上げるためには，どのように工夫すればいいのか考え，ロボットづくりをしよう。	※　これまで積み重ねてきた実験結果やアドバイスを交流することで，ロボットの性能を上げる視点や，解決の見通しを考えさせる。
2　ロボット設計図を基に，ロボットの性能を上げるために実験を繰り返し行い，データを蓄積していき，ロボットを製作する。 (1) ロボット設計図を基に，ロボットの性能を上げる実験内容を考え，ロボットを製作する。 ○　自らが考えたロボット設計図について，性能を上げる視点や改良点など実験内容を把握し，ロボット製作の内容をとらえること ロボット設計図1 1　ロボットを作る目的 腕の動きを使って，物をもつことができるロボット 2　どんな動きを目指す 人の腕の動きのように，関節から曲がり，物をもつ 3　材料 ・木の棒（板）2枚　・糸　・電池 ・モーター　・ネジ　・手にかわるカゴ ・消しゴムなどの物，ゴムなど 4　これまでの学習内容で使えそうなこと 電流の働き，磁石，てこ，ゴム，表やグラフ，長さ，角度 ロボット設計図2 5　ロボット製作図 6　結果の整理（データ分析） 糸で手を動かし，モーターで巻き付ける仕組みの場合 1回目 2回目 3回目 4回目 1個 18秒 21秒 25秒 19秒 2個 7秒 9秒 11秒 9秒 腕をのばす ⇒ 糸がゆるむ 電池1個 ゆっくり ⇔ 電池2個 はやい	※　自分が目指すロボットをつくり上げるために何度も考え直し，追加した設計図を基に話し合い，実験結果を積み上げ，自分の目的に合った動きをめざし，製作させるようにする。
(2) 試行した実験内容や設計図を見直し，蓄積したデータを基に，ロボットの性能がどこまで上がったか結論を話し合う。 ○　蓄積したデータから，ロボットの性能について分析すること 〈モーターを動力に使った場合〉 ・腕の動き方（曲げ伸ばし） ・物をもてるか ・関節 蓄積したデータ 1回目実験したデータ 2回目実験したデータ 3回目実験したデータ 4回目実験したデータ 表，グラフ⇒数値化 蓄積したデータから分析する ロボットの性能がどこまで上がったか ・電池を1個よりも2個の方が曲げ伸ばしがうまくいく。 2回目のデータから ・関節の曲がり方がうまくいくのは腕の長さが30cmの時だった。 3回目のデータから	※　蓄積したデータの分析やどのような過程を経て，結論を導き出したかを振り返る活動を設定し，具体的なロボットの動きや性能を提示しながら，説明できるようにする。
3　結論から，どのように性能を上げたのかを具体的なロボットの動きを提示しながら課題別研究グループで交流し，完成したロボットのよさやその使用目的を話し合う。 ○　これまで蓄積したデータの根拠から結論を導き出し，ロボットの動きの仕組みをとらえること	※　根拠を基に交流させるために，どのようなデータから，ロボットの動く仕組みがどのように改善できているかという視点をもたせるようにする。

第５学年１組　自然探究学習指導案

指導者　　永　田　裕　二

題材　未来へつなごう　エコロン池構想プロジェクト（Ｃ数理科学）

指導観

○　本題材では，黒メダカの理想の生育環境づくりを考え，実行，継続していこうとする態度を育てるために，科学的・数学的な知識・技能を組み合わせて，個人の仮説をもとに他者とともに理想の環境を追究していくことをねらいとしている。具体的には，①黒メダカと環境についての仮説をたて，検証を通して納得のいく考えをつくりあげること，②黒メダカと環境を考える上で，必要なデータをまとめること，③追究を通して自然環境の保全に寄与する態度を養うことなどである。つまり，本題材において，黒メダカの理想の生育環境づくりを多面的な視点で追究していくことは，第６学年の生物と地球環境や，中学校理科学習の生物の発生や食物連鎖の見方にもつながる点で価値がある。

○　本学級の子供たちは，Ｃ数理科学において，１学期「室見川ハザードマップをつくろう」，２学期「ビー玉コースターをつくろう」の学習を通して，条件を制御して実験を行う問題解決の能力や，複数の数量について割合の見方を用いながら，帰納的に考える能力を培ってきた。とくに「ビー玉コースターをつくろう」の学習においては，鉄球が飛ぶ距離を角度と高さを変えて，データを集め，統計処理を行いながら創造性を発揮することができるようになってきた。そこで，生物分野においても，創造性を発揮しながら黒メダカに適した環境についての見方や考え方を養うことができるようにしていく必要がある。そのために，第３学年「身近な自然の観察」（Ｂ自然）と，第４学年「調べ方と整理の仕方」（Ａ数理）の学びを関連させ，黒メダカに適した環境について仮説検証型の学習を仕組み，創造性を発揮する姿につなぐようにする。

○　本題材の指導にあたっては，創造性や協働性を中心とした資質・能力を育む手順として，①仮説検証，②データ分析，③再仮説，④再検証，⑤結果の考察を仕組み科学的な追究ができるようにする。そのために，まず10月に改修した校内の「エコロン池」とそこに棲む黒メダカについて，理想の棲みよい環境について考えさせる。次に，グループごとに理想のエコロン池構想をＧＴや資料分析，データ分析をもとに追究する。追究過程において環境保全として和白干潟の取組についても考えさせる。最後に，追究してきた構想を交流し，エコロン池構想をつくり上げ，実行，発信する。その後継続観察の必要性を交流し，命が未来へつながる環境づくりについて考えることができるようにする。

題材で育成する資質・能力

◎　黒メダカに適した環境に必要な条件についての仮説を立て，検証を繰り返し，エコロン池構想を実行しようとしている。（創造性：論理的思考）

○　黒メダカの理想の生育環境について，自分が調べてわかったことを他者に伝え，エコロン池構想をつくろうとしている。　（協働性：他者理解）

○　黒メダカの理想の生育環境について，自らの考えをもち，エコロン池構想を実現しようとすることができる。　（内省力：行動決定）

○　黒メダカの生育に適した環境に必要な条件を，継続的な統計データや，資料分析から見出すことができる。　（基礎力：科学的な知識・技能）

題材の計画（全16時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　黒メダカの理想の生育環境を話し合う。　④ ○　エコロン池の環境について考えをつくること ※　昔と今のエコロン池や貯水槽の様子の比較 黒メダカの命が未来につながるための，エコロン池の環境について考えよう。
2　黒メダカの理想の生育環境から，水質，微生物など，適した環境づくりを追究する。 (1) 理想の生育環境について仮説を立てる。　① ○　食物連鎖や，水の循環，産卵条件など，命をつなぐ視点で仮説を考えること ※　複数の考えを交流しながら幅広い追究を実現するための小グループ編成 (2) 黒メダカが何十年も生息する貯水槽とエコロン池の環境を比較し，課題を追究する。　⑧ ○　貯水槽の環境を調べることで，微生物の種類や微生物が発生する仕組みをとらえること ※　ミニエコロン池の活用や，子供の求めに応じたＧＴ，資料及び実験具，データグラフの活用
3　エコロン池構想を発表，実行する。 (1) 交流会をして構想をつくり上げる。　① 本時 ○　各グループの交流会を通して，適した環境には複数の条件が関連している考えをもつこと ※　ＧＴを交えたグループ交流と全体交流 (2) 構想を実行し，今後を話し合う。　② ○　今後の継続観察・調査について考えること ※　T1を実行，T2を調査のようにTTを効果的に活用した学習形態

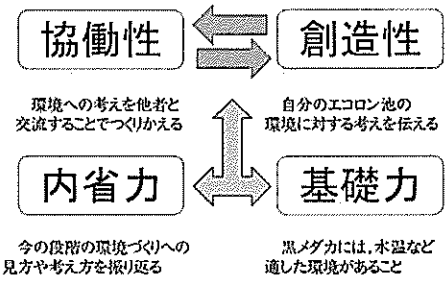
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性（論理的思考）

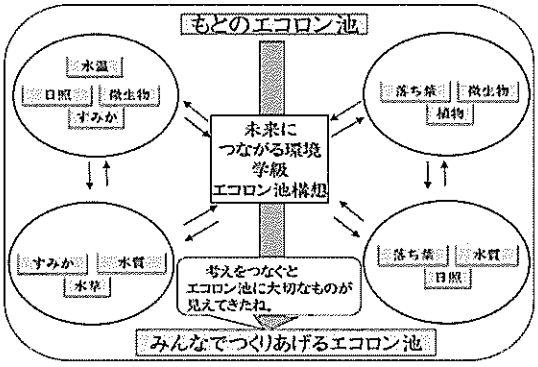
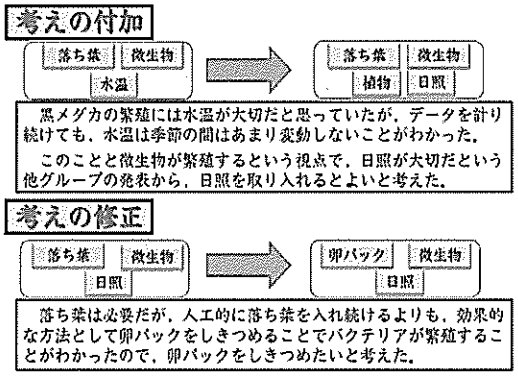
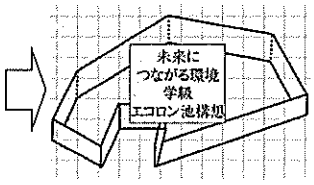
黒メダカの理想の生育環境について考えた仮説をもとに追究したエコロン池構想を交流し，実行に向けてエコロン池構想をつくる姿

・ 黒メダカの命がつながる仕組みにします。まず，貯水槽の藻と落ち葉を底に敷き詰め，日光を継続的に６～８時間当て続けることでミジンコを中心とした微生物が繁殖するようにします。そして，えさを与えなくてもミジンコを食べて生き続け，水草も表面積の25％程度入れることで，産卵もできるようにします。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（14／16時）

学　習　活　動　と　内　容	創造主体を生み出す手だて
1　前時までの取組を振り返り，構想のテーマをＧＴに紹介する。 ○　グループの構想の主張点や課題を振り返り，追究してきたことを明確にすること めあて　グループで追究してきたエコロン池構想を交流して，学級エコロン池構想をつくろう。	※　グループのエコロン池構想を交流することで，学級エコロン池構想をつくり上げるという意識を高めるために，交流の手順や視点を振り返らせる。
2　グループ交流を通して自分たちの追究を見直し，エコロン池の環境をどのようにしていけばよいのか全体で話し合う。 (1) エコロン池構想について，各グループの追究を伝える。 ○　エコロン池の環境について考え追究したことをデータ資料やミニエコロン池を使って伝え合い，他グループの考えのよさをとらえること  【交流の手順】 1　各グループの調べた内容を説明する。 2　他グループと意見交流を行う。 【交流の視点】 黒メダカが生息，繁殖できるエコロン池の環境づくりについて	※　追究内容の主張が伝わるような，効果的な資料提示として，調査結果のデータ資料やミニエコロン池を用いながら，「黒メダカが生息，繁殖できるエコロン池の生育環境」という視点で発表させる。
(2) 今後つくりあげる学級エコロン池構想について全体で話し合う。 ○　黒メダカの命を未来につなぐための環境には，一つの要素だけでなく，いろいろな要素が互いに関連し合っていることをとらえること   	※　各グループで検証してきた，黒メダカの命が未来につながる環境を伝え合うために，考えの違うグループ同士の交流を位置付ける。その後，学級エコロン池構想をつくるために，グループ交流で得た考えとＧＴの話をもとにした全体交流を位置付ける。
3　本時つくり上げた学級エコロン池構想の実行について話し合う。 ○　つくり上げた学級エコロン池構想を実行するために，役割分担や実験方法を明確にすること	※　次時のエコロン池構想の実行に向け，全体で役割分担などを行い，次時の見通しをもたせる。

第５学年２組　言語文化学習指導案

指導者　　山　田　深　雪

題材　時と世界を超える，変身の物語（Ｃ創生）

指導観

○　本題材では，外面的な変身の物語を読むことを通して，外面（姿）が変わっても変わらない内面（心）の重みについて話し合い，読書の面白さを実感し「目標をもって読書をする」主体的な読書人を育てることをねらいとしている。具体的には，①自分の読書傾向を調べ，学習課題と課題解決の道筋について話し合うこと，②３つの変身の物語から１つを選び，課題を追究すること，③変身の物語の魅力や読書に対する考え方の変容から，これからの読書の在り方について話し合うことである。つまり，本題材において，変身の物語を扱うことは，これまでの国語科学習指導の現場において「読み取り教材」「読書教材」と区別されて指導してきたことを融合し，子供の読書生活から人格の形成に働きかける上で価値がある。

○　本学級の子供たちは，２学期題材「言葉でえがく未来（Ｂ：コミュニケーション）」において，プレゼンの作成と発表を通して聞き手に理解と感動をもたらす伝え方について追究してきた。学習の終末に全員で話し合って合意した「伝える際に大切にしたいこと（自信をもって伝える，話しやすい雰囲気をつくる，思いやりを反応で示すことの自分ができるところから実践する）」についても，日々ふり返りを行っている。しかし，プレゼンを作成する際，自分の考えを支える根拠を本や新聞などの活字から引用した子供が少なかった。これは，活字よりも映像や画像，図表の方が子供にとってわかりやすく，思考しやすい有益情報になっているといえる。そこで本題材では，言葉の奥深さや人物の心情描写を味わうことができる変身の物語を読むことを通して，文字言語を媒体として思考する面白さを実感させ，読書の在り方について考えを深めたい。

○　本題材の指導にあたっては，変身の物語を読むことを通して，主体的に読書に向かう態度を育むことができるようにする。そのために，まず，自分が読んでいる物語の傾向と物語の歴史を関係付けることで学習課題を設定させる。次に，心の深層が巧みに描き出された３つの変身の物語から，自分がじっくりと読みたい物語を１つ選択させて作品別チームを編制することで，選択した物語の魅力を主体的に追究させる。さらに，３つの変身の物語に共通する魅力を話し合う場を設定することで，着眼点をもって読むよさを実感させる。最後に，自分の読書に対する考え方の変容を交流することで，これからの自分の読書の在り方を見出させる。

題材で育成する資質・能力

◎　３つの変身の物語に共通する特徴を根拠に挙げながら，自分が考える変身の物語の魅力について伝えようとしている。　（創造性：分析・生産）

○　読んで考えたことを交流したり，異なる物語を読んだ友達と自分の考えを関係付けたりしようとしている。　（協働性：伝え合い）

○　自分の読書に対する考え方の変容に気付き，これからの自分の読書の在り方を見出すことができる。　（内省力：自己認知）

○　内容（何が書いてあるか）と形式（どのように書いてあるか）に着目して物語を読むことができる。　（基礎力：言語情報処理）

題材の計画（全15時間）

学　習　活　動　と　内　容
１　自分の物語に関する読書傾向と物語の歴史を関係付けて，学習課題について話し合う。　③ ○　人や動物が変身する物語が多いことに気付き，変身の物語を読むことに意欲をもつこと ※　多様な時代や国々の変身の物語の提示 時と世界を超えて人々に親しまれている変身の物語の魅力を探ろう。
２　変身の物語を１つ選び，魅力を追究する。 (1) ３作品を読み比べ，読み深めたい「とっておきの物語」を選ぶ。　② ○　意志をもって「とっておき物語」を選ぶこと ※　心の深層を考えさせる３作品（「ビロードうさぎ」「山月記（現代語訳）」「かたあしだちょうのエルフ」）の教材化 (2) チームで内容と形式に着目して読み，変身の物語の魅力について話し合う。　⑦ 本時7/7 ○　人物の内面を根拠に，自分が選んだ変身の物語の魅力を言語化し，伝え合うこと ※　物語の構造を端的にまとめるワークシート
３　変身の物語の魅力や題材全体を通しての自分の変容について話し合う。　③ ○　時と世界を超えて人々に親しまれている変身の物語の様々な魅力に気付いたり，どのような読み手になりたいかを見出したりすること ※　３つの物語の構造を可視化できる板書及び学習を蓄積したポートフォリオ

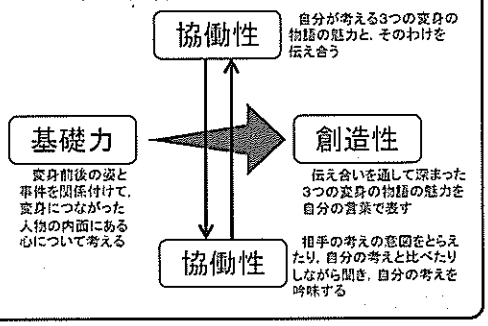
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性（分析・生産）

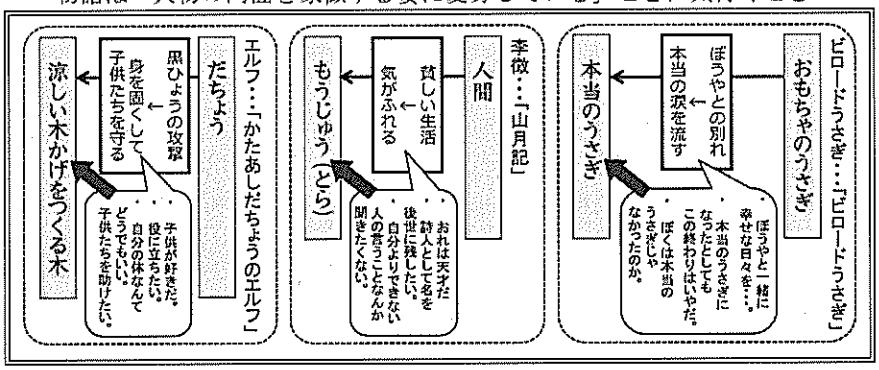
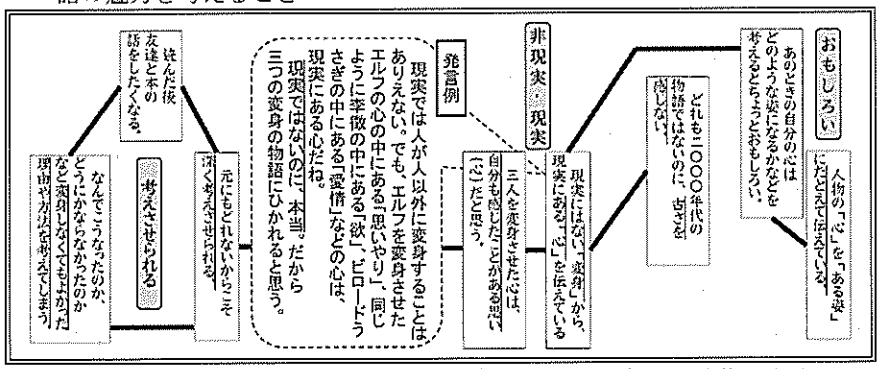
自分の意志ではなく変身した３人の中心人物の内面と外面に着目し，３つの物語の魅力について自分の考えを述べようとしている。

・　３つの物語は，自分の意志ではなく二度と元に戻ることができない姿に変身しており，現実にはないことだ。しかし，変身の原因となった「人物の心や行動」は，現実にある。非現実を通して現実で大切なことを伝えていることが魅力だと思う。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（12／15時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
１　テレビまんがや特撮における変身と３つの物語〔「ビロードうさぎ」（童話館出版），「山月記」（理論社），「かたあしだちょうのエルフ」（ポプラ社）〕の変身の違いをふり返り，本時のめあてについて話し合う。 ○　テレビまんがや特撮の中心人物は，ある目的を達成するために一時的に自分の意志によって変身しているのに対し，３つの物語は，自分の意志ではなく二度と元に戻ることができない姿に変身していることを確かめ，後者の魅力についていろいろな考えを聞いてみたいという思いをもつこと めあて 時と世界を超える，３つの変身の物語の魅力（みりょく）について話し合おう。	※　テレビまんがや特撮の変身の物語と３つの変身の物語の「変身の仕方」の比較させることで，めあてを設定することができるようにする。 ・元に戻れる変身か（可逆性） ・自分の意志による変身か（自律性）
２　変身の物語の魅力について，チームや全体で話し合う。 (1) ３つの変身の物語の魅力について，チームで話し合う。 ○　中心人物を変身に導いた事件と変身した姿を関係付けて，３つの変身の物語は「人物の内面を象徴する姿に変身している」ことに気付くこと  	※　自分の思いや考えの根拠がわかるように伝え合うことができるように，思考を可視化する話合いグッズをチームごとに準備する。 （ホワイトボード，操作できる「人物の元の姿」「心」「変身した姿」のアイコン，ホワイトボードマーカー）
(2) ３つの変身の物語の魅力について，全体で話し合う。 ○　人物の心をある姿にたとえて伝えるおもしろさや，非現実から現実を伝える変身の物語のしかけ，読後感などを根拠に挙げながら３つの変身の物語の魅力を考えること  	※　出された意見について，イメージマップ形式で板書することにより，多様な考えを整理し，変身の物語の魅力を意味付けることができるようにする。
３　３つの変身の物語がもつ魅力について考えたことを自分の言葉で書く。 ○　３つの変身の物語を最初に読んだときの感想をふり返り，現在，自分が考える３つの変身の物語に共通する魅力を自分の言葉で述べること	※　読み深める前の自分の感想をふり返らせることで，本時で深まった考えを書くことができるようにする。

第６学年１組　健康学習指導案

指導者　　平　井　源　樹

題材　健康かざぐるまとともにつくろう　ベストパフォーマンス（A心身の成長　B運動）

指導観

○　本題材は，自分の生活習慣（健康かざぐるま）を見直し改善しながら，いつでも思った通りの動き（ベストパフォーマンス）で跳び箱運動ができるようにすることをねらいとしている。具体的な内容としては，①自分の能力に合った跳び箱運動の基本的な技や発展技をできるようにすること，②自分の健康課題をもとに，解決への見通しをもったり，改善への意思決定を行ったりすること，③健康かざぐるまとベストパフォーマンスを関係付けて，健康を志向する態度を育むことである。本題材では，一人一人の実態に即して生活習慣と動きの高まりを関係付けながら見ていくことで，日常的な健康管理の必要性を実感することができるようにする。つまり，本題材において健康かざぐるまとベストパフォーマンスを関連させることは，一人一人に合った健康な生活習慣づくりを形成する上で価値がある。

○　本学級の子供たちは，健康かざぐるまの４つの羽根（食事，睡眠，心，運動）を大きくしていくことが，健康な生活を送る上で大切であることを理解している。そして，日々の生活において，意識して取り組む子供も増えてきている。しかし，中学進学に向けた勉強に重点を置く時期になると，健康かざぐるまづくりの意識が薄れ，今自分がおかれた状態の中でできる取組を考え実行することができない子供も増えてきている。さらに，そのことで，体調を崩したりけがをしたりする子供も増えてきている。このような中，健康かざぐるまとベストパフォーマンスをもとに，自分の生活を見直し改善していくことは，一人一人の状態に合った望ましい生活習慣をつくっていく上で価値がある。

○　本題材の指導にあたっては，自分に合った生活習慣と動きをつくることができるようにする。そのために，まず，導入段階では，跳び箱運動と出合って，ベストパフォーマンスができるようになるために大切なことを話し合う。その際，自分の健康かざぐるまと体力のチェックをもとに，自分の実態を多面的に見直すことができるようにする。次に展開段階では，自分に合った技を選んで，生活習慣改善の取組と支持跳び越しの練習を関係付けながら同時進行で行う。その際，日々の健康かざぐるまと練習した動きを可視化しながら，即時評価が活きるようにする。最後に終末段階では，ベストパフォーマンス発表会を行う。その際，これまでの健康かざぐるまと動きづくりの過程を紹介し合って，伸びを共有することができるようにする。

題材で育成する資質・能力

◎　健康かざぐるまとベストパフォーマンスを関係付けて，自分の望ましい生活習慣をつくることができる。　（創造性：健康を志向する態度）

○　課題に沿って，友達と互いの動きを見合ったり補助をし合ったりしながら，協力して練習することができる。　（協働性：双方向的働きかけ）

◎　自分の生活習慣や動きの課題をもとに，解決への見通しをもったり，改善への意思決定を行ったりすることができる。（内省力：改善への意思決定）

○　支持跳び越しの技に取り組み，自分の能力に適した基本的な技や発展技をできるようにすることができる。　（基礎力：健康に関する技能）

題材の計画（全11時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　跳び箱運動と出合って，ベストパフォーマンスづくりに向けて大切なことを話し合う。　②
○　動きづくりが健康かざぐるまの４つの羽根づくりと関係していることをとらえること
※　健康かざぐるまと体力チェックの振り返り
自分の健康かざぐるまとともに，跳び箱運動のベストパフォーマンスをつくろう。
2　生活習慣改善の取組と支持跳び越しの練習を関係付けながら，それぞれを同時進行で行う。
(1) 望ましい動きづくりについて話し合う。　①
○　技の魅力，自分の体力の実態，男女の身体の発達特徴をもとに，挑戦する技を決めること
※　養護教諭と連携した動きづくりに関わる指導
(2) 望ましい生活習慣づくりについて話し合う。①
○　生活習慣改善の内容と方法を決めること
※　養護教諭と連携した生活習慣づくりに関わる指導
(3) 生活習慣改善の取組と関係付けながら，選んだ支持跳び越し技の練習をする。　⑤ 本時3/5
○　自分の健康課題に合った支持跳び越し技の内容と方法で動きを高めること
※　動きを可視化する教具活用と友達との即時評価
3　６年１組健康かざぐるま＆跳び箱運動ベストパフォーマンス発表会を行う。　②
○　生活習慣と動きの高まりを共有すること
※　これまでの健康かざぐるまと動きづくりの過程を紹介し合う場の設定

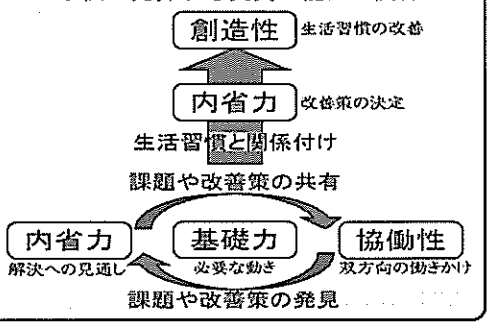
本時に最も重視する資質・能力

☆内省力（改善への意思決定）

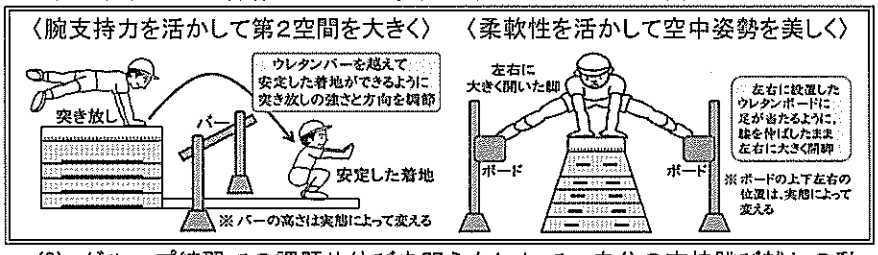
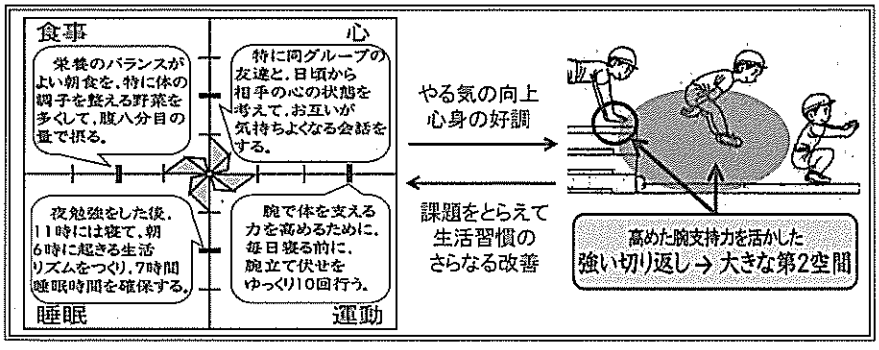
自分の健康かざぐるまとベストパフォーマンスをつくるための内容と方法を，取組の成果と課題をもとに決定する子供

・　健康かざぐるまの中で特に腕支持の力を高める運動をしてきたから，強い突き放しから大きな第二空間をつくる練習をしよう。
・　めざす動きをさらに一定してできるようにするために，朝食のバランス見直し，睡眠時間を１時間増やすことをしていこう。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（７／11時）

学　習　活　動　と　内　容	創造主体を生み出す手だて
1　今の自分の健康かざぐるまと前時までの動きの高まりを振り返り，ベストパフォーマンスをつくるために頑張りたいことを話し合い，ベストパフォーマンスづくりに必要な自分の準備運動を行う。 ○　今の自分の健康課題の現状分析からベストパフォーマンスづくりに必要な動きの内容と解決方法を見出すとともに，そのための筋力や柔軟性に焦点を当てた準備運動を行うこと めあて 今の自分の健康かざぐるまと動きに合った内容と方法で，ベストパフォーマンスをつくろう。	※　日常生活において健康かざぐるまの４つの羽根（食事，睡眠，心，運動）を大きくする生活習慣改善の取組を行いながら，ベストパフォーマンスをつくるために，リズムとバランスがよい生活習慣や心身の調子を整えることが大切であることを自覚させておく。
2　自分が選んだ技のベストパフォーマンスをつくる練習をする。 (1)　自分のベストパフォーマンスにつながる動きのポイントと解決方法を明らかにして，同課題グループの友達と動きを見合いながら練習をする。 ○　友達と動きを見合って即時評価を行いながら，課題や高まりに応じて用具を設置したり操作したりして，支持跳び越しの動きを高めること  	※　自分のベストパフォーマンスをつくるための最適な内容と方法をつくる力を発揮させるために，今の自分の健康かざぐるまと課題やポイントをまとめた図をもとに，前回の自分と比較しながら，同課題の友達と話し合う場を設定する。
(2)　グループ練習での課題や伸びを明らかにして，自分の支持跳び越しの動きを動画を見て振り返りながら繰り返し練習する。 ○　自分で課題となる動きの修正を行ったり，高まった動きを強化したりしながら，支持跳び越しの動きの再現性を高めること	※　友達と互いの動きを具体的に見合いながら高め合う力を発揮させるために，同課題の友達と動きを即時評価して用具を設置・操作できる場，遅延再生装置を見てイメージと実際の動きを確かめる場を設定する。
3　本時の自分の取組の効果と動きの高まりについて，健康かざぐるまづくりで自分が改善してきたことを関係付けながら，話し合う。 ○　健康かざぐるまの改善でリズムとバランスがよい生活習慣づくりや心身の調子を整えることが，ベストパフォーマンスづくりにつながっていることをとらえること  	※　本時の成果と課題を，健康かざぐるまとベストパフォーマンスの面から記述させて，目に見える形にすることで，それぞれを関係付けてとらえやすくする。

未来創造シンポジウム

未来創造型の資質・能力の育成をめざして
アクティブ・ラーニングと新領域構想

○ コーディネーター

本学　副学長　大坪靖直（おおつぼ やすなお）　先生

○ シンポジスト

千葉大学　教育学部　教授　天笠茂（あまがさ しげる）　先生

本学　学校教育講座　准教授　樋口裕介（ひぐち ゆうすけ）　先生

本校　研究部長　三浦研一（みうら けんいち）

MEMO

第2日

2月13日(土)

9:00~9:30　受付

9:30~10:15
公開授業2

10:15~10:30　移動

10:30~11:50
全体会
挨　拶
全体研究発表
領域研究発表①
児童発表
領域研究発表②

11:50~12:50　昼食
(児童自由研究発表　体育館)

13:00~13:45
公開授業3

13:45~14:00　移動

14:00~15:00
領域別学習指導協議会等

15:00~15:15　移動

15:15~15:25　児童発表

15:30~16:50
未来創造講演会

閉会行事

公開授業2

領　域	学年学級	題　材・単　元	授業者
言語文化	1年1組	みつけたいな　ぼく・わたしと　にている　おはなし	田中菜穂子
表　現	1年2組	たのしいな　しょくべにえのぐで　いろあそび	岡崎　教昭・笹原　浩仁(本学准教授)
生き方	2年1組	ずっとずっと　すてきでいたいな	鐘江　貴子・三浦　研一
健　康	3年1組	よい歯で元気　わたしはけんこうプランナー	鞭馬あゆみ
生き方	4年2組	大人になっても仲間でいるために (特別支援学級　さくら組との交流)	齋藤　淳
言語文化	5年1組	世界にほこる日本文化を伝えよう	杉本　克如

全体会

挨　拶　　校　長　清水知恵
全体研究発表　研究副部長　二串英一
領域研究発表①　言語文化部　竹本　学・菊竹一平
児童発表①　詩の朗読　3年生児童
領域研究発表②　表現部　山口由一郎・岡崎教昭

(児童発表②【昼食時】　自由研究　1・3・5年児童)

公開授業3

領　域	学年学級	題　材・単　元	授業者
自然探究	2年1組	くらべてあそぼう　じしゃくの力	伯川　康洋
健　康	2年2組	なわをとんで　元気いっぱい	中村　剛
社会共創	3年2組	つくろう！ともに生きるまち	藤岡　太郎
言語文化	4年1組	ピクトグラムが伝える言葉	竹本　学
自然探究	5年1組	未来へつなごう　エコロン池構想プロジェクト	永田　裕二・二串　英一
言語文化	5年2組	時と世界を超える、変身の物語	山田　深雪
表　現	6年2組	和太鼓から広がるわたしたちの表現	山口由一郎
生き方	帰国子女学級	わたしたちの未来予想図	菊竹　一平・岡崎　教昭 杉本　克如
特別支援教育 合同生単	ふじ・さくら 梅組	ふじ・さくら・梅組のおりかれえんそくを　せいこう　させよう (文部科学省　インクルーシブ教育システム構築モデル事業指定) ※生活年齢を重視したグループを3つ編制し、3会場で行います	中島　卓哉・小林　大介 大橋　玲子

領域別学習指導協議会等

領　域	共同研究者	研究協力者	司会者
言語文化 (国語分野)	国語教育講座 教　授　河野　智文	大野城市立大野小学校 校　長　伊藤　啓二	福岡教育事務所 指導主事　松本　剛
言語文化 (英語分野)	英語教育講座 教　授　中島　亨	福岡教育事務所 指導主事　元村　美保	大野城市立大野南小学校 教　諭　横溝　候香
自然探究	数学教育講座 教　授　清水　紀宏	福岡市立和白東小学校 校　長　野口　信介	那珂川町立片縄小学校 主幹教諭　福原　伸治
社会共創	社会科教育講座 教　授　小田　泰司	糸島市立南風小学校 校　長　髙野　誠一	須恵町立須恵第一小学校 主幹教諭　永江　英俊
表　現	美術教育講座 准教授　笹原　浩仁	久山町教育委員会 指導主事　髙武　龍彦	福岡市立舞松原小学校 主幹教諭　北田　尚雄
健　康	家政教育講座 教　授　貴志　倫子	須恵町立須恵第一小学校 校　長　稲津　一徳	福岡県教育センター 指導主事　緒方　勝彦
健　康 (養　護)	保健体育講座 准教授　樋口　善之	※保健指導ワークショップ (提案者) 本校養護教諭　佐藤　美和子	糸島市立志摩中学校 養護教諭　今村　由香
生き方	学校教育講座 准教授　小林万里子	久留米市立北野小学校 校　長　中原　浩	那珂川町立安徳北小学校 主幹教諭　谷岡　良寛
特別支援 教育	特別支援教育センター 教　授　中山　健	インクルーシブ教育　ワークショップ	

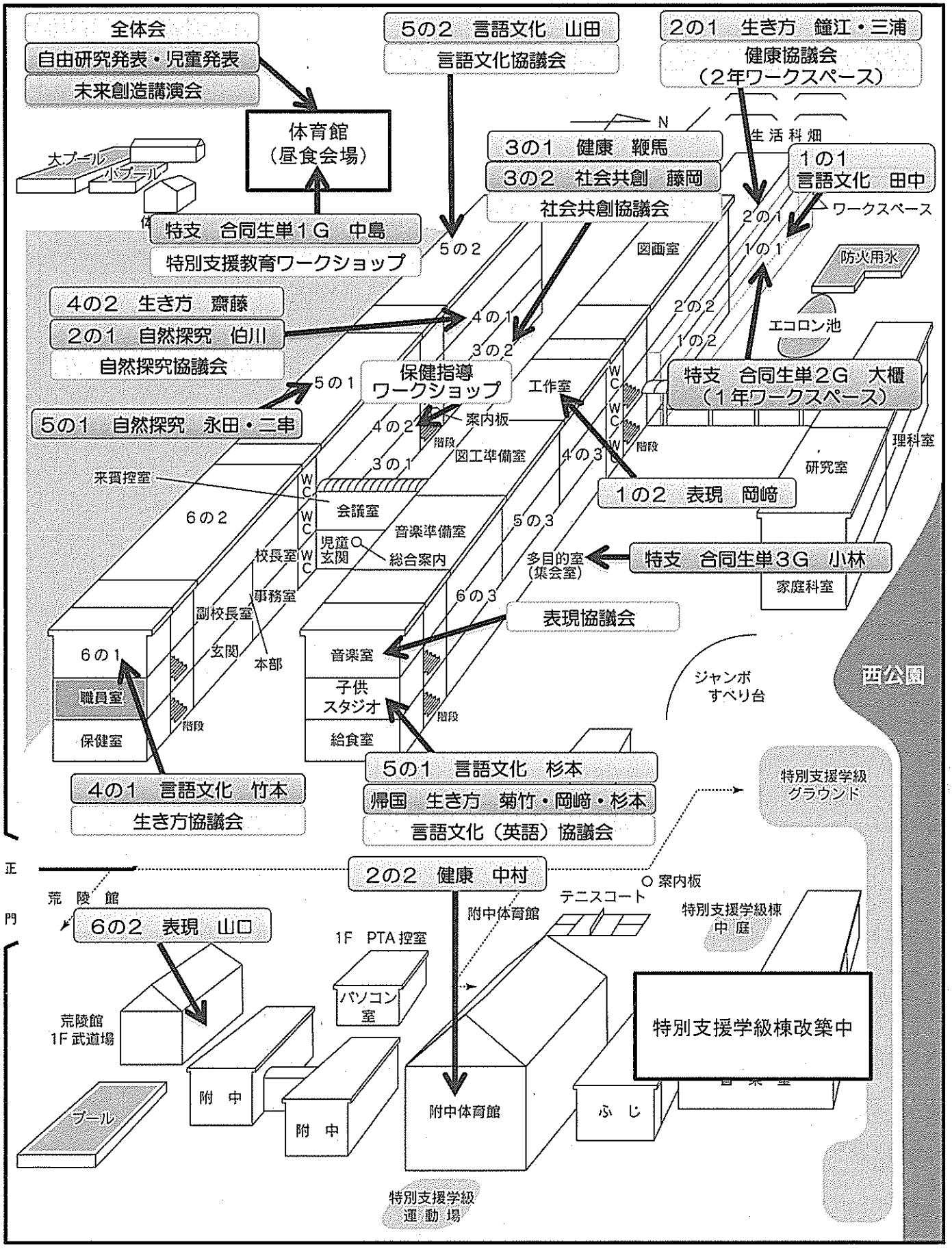
児童発表　Our Hope & Pride　*-Anniversary song with the movement-*　5・6年生児童

未来創造講演会

未来を創造するカリキュラム開発の意義と課題

講師　千葉大学　教授　天笠　茂　先生

2月13日（土）授業案内図



第１学年１組　言語文化学習指導案

指導者　　田　中　菜穂子

題材　みつけたいな　ぼく・わたしと　にている　おはなし（Ｃ創生）

指導観

○　本題材では，成長の絵本を読むことを通して，出来事の「前の自分」と「今の自分」を比べ，変わったところを読み取り，自分と似ているところを考え，成長に気付くことをねらいとしている。具体的には，①絵本の読み聞かせを受け，１年間を振り返ることに関心をもち，学習課題や活動の見通しを話し合うこと，②「成長」をテーマとした絵本から，自分と似ている作品を選び，課題を追究し，自分の考えをもつこと，③自己の成長について，書き方や伝え方を追究しながら，紹介文をつくることなどである。つまり，本題材において，自己の成長について言語生活からせまる題材を扱うことは，１年間の生活文化から資質・能力の育成と言語生活の充実を図る上でも価値がある。

○　本学級の子供たちは，１学期言語文化題材「むかしばなしがいっぱい」において，多くの昔話を読み，創作を通して，昔話の特徴や面白さについて追究することができた。日々のマイタイムノートや帰りの会を通して，その日の自分の頑張りやよいところをとらえている。また，行事を通して，自分の変化もとらえてきた。しかし，何をどのように書き綴っていいのか見い出せず，行動文のみで終わっている子も見られる。これは，自分の伝えたいことと言語を関係付け，書き綴る楽しさを味わうことができていないと考える。そこで本題材では，登場人物と重ねて読むことを通して，自分の１年間の成長を振り返り，言葉を媒介として成長を表現することで充実感や自信を実感させたい。このことは，基礎力を培うことはもちろん，内省力や創造性を育むことにもつながる。

○　本題材の指導にあたっては，成長の絵本を読むことを通して，自己の成長に気付き，未来への希望をもつことをねらいとしている。そのために，まず，教師による読み聞かせから，これまでの１年間を振り返ることで，学習課題と解決意欲をもたせる。次に，成長について書かれた複数の絵本において，自分と似た人物が登場する作品を選び，「前の人物」と「今の人物」と変わったところを読み取り，自分と比べた考えを追究させる。その際，自分の変化だけでなく友達の変化も取り上げることで，自己の成長に気付かせる。さらに，成長について，入学時の自分と比べながら紹介する文をつくり，友達と伝え合う。最後に，交流会を通して，自己の成長への自信や充実感を高めるとともに，これからの自分や言語生活への思いや期待をもたせる。

題材で育成する資質・能力

◎　自分の１年間を振り返り，成長に気付き，これからの生活への考えを言葉で綴ったり，伝えたりしようとしている。　（創造性：創造的思考）

○　中心人物を自分と比べた考えや創ったお話を伝えたり，友達の成長や考えを聞いたりしようとしている。　（協働性：伝え合い）

◎　中心人物と自分の変わったところを比べたり，紹介する文を書いたりすることで自己の成長に気付くことができる。　（内省力：自己認知）

○　内容の大体をとらえ中心人物と似ているところを読み取ったり，成長について順序立てて書いたりすることができる。（基礎力：言語情報処理）

題材の計画（全15時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　読み聞かせを受けて，この１年間を振り返り，課題と活動の見通しについて話し合う。③＋課外 ○　１年間を振り返ることに関心をもつこと ※　教室背面の生活暦，行事作文から自分の一番の思い出の選択と理由の記述 ぼく・わたしと　にている　人ぶつが 出てくる　おはなしを　さがして　よもう。
2　自分と似た中心人物の変わったことを自分と比べて読み取り，「成長」した自分に気付く。 (1) 自分と似ている一冊から，中心人物の言動を中心に自分と読み比べ，成長をとらえる。③ ○　中心人物の言動から気持ちや役割を読み，自分と比べた考えをもつこと ※　「前」と「今の自分」の違いを読む観点の提示 (2) 作品ごとに読み取った変わったところについて話し合い，自己の成長に気付く。② **本時2/2** ○　自分と似た中心人物の成長は，自分の成長にもつながることに気付くこと ※　同課題ペア，全体での段階的な交流の場の設定
3　自己の成長を紹介する文を書き，伝え合う。⑤ ○　読みの観点から書く観点を話し合うこと ※　表現活動の場や交流の視点（話し手・聞き手）の提示
4　自己の成長を紹介し合い，これからの自分や生活への期待や願いを高める。② ○　これからの自分への思いを綴ること ※　導入段階における成長への考えとの比較

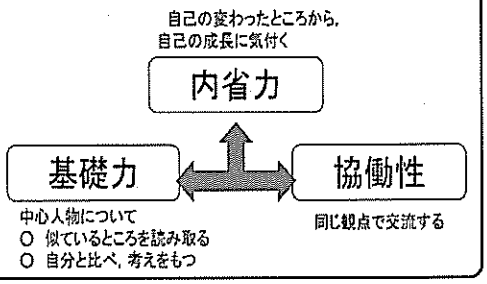
本時に最も重視する資質・能力

☆内省力（自己認知）

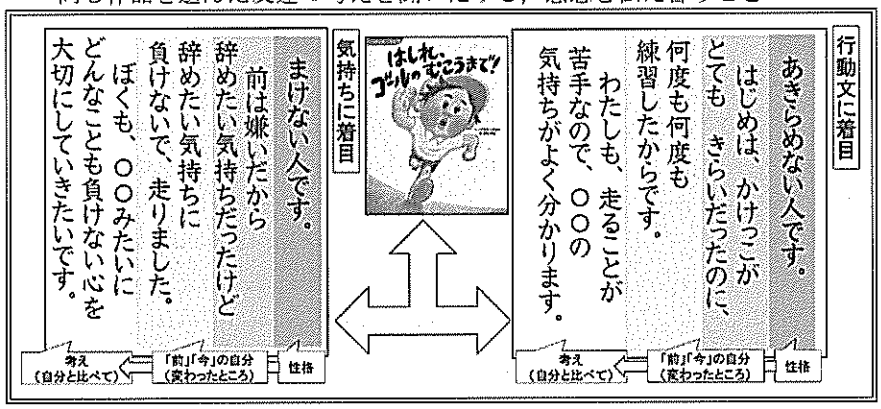
中心人物と自分の似ているところについて，自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたりしながら，自己の成長に気付くことができる。

・「あきらめないところ」が似ています。ぼくも，○○（中心人物）と同じように，水が怖かったけれど，何度も練習して泳ぐことができるようになったからです。自信がつきました。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（８／15時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1　自分と似ているお話から読み取った中心人物の変わったところや自分の考えを振り返り，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　自分が読んで考えたことを伝えたい，また，同じ作品や他の作品を読んだ友達の考えも聞いてみたい思うこと めあて おはなしに　出てくる　人ぶつと　にているところを　だしあい， ぼく・わたしの　かわったところを　はなしあおう。	※　自己の成長に気付かせるために，自分と似た中心人物の出てくる作品を一冊選び，「前の人物」と「今の人物」の変わったところを読み取らせ，自分と比べた考えを書かせておく。
2　読み取った自分と似た中心人物の成長や自分の考えを出し合い，自己の成長について話し合う。 (1) 同作品チームで，中心人物の変わったところや自分の考えを伝え合う。 ○　中心人物がどのように変わったのかについて，自分の考えを話したり，同じ作品を選んだ友達の考えを聞いたりし，感想を伝え合うこと  	※　中心人物の変わったところをとらえるために，同作品を選んだ子供同士で，①「前の人物」と「今の人物」の変わったところ②自分と比べた考えを交流する場や道具を準備する。 （各チームごとに交流するために，シンキングボード，シンキングカードの準備）
(2) 全体で似ている点を明らかにしながら，「成長」について話し合う。 ○　自分も中心人物と同じように成長していること，そして友達も成長しているところがあることに気付かせること 	※　自己の成長に気付かせるために，それぞれの作品における中心人物の変わったところ（成長）と個人の成長をつなぎながら価値付ける話し合いの場や板書を準備する。
3　自分の成長について書きまとめ，これからの学習について話し合う。 ○　自分にも中心人物と同じように成長したことへの気付きから，これから自分が取り組んでみたいことを明らかにすること	※　本時で気付いた自己の成長について書きまとめさせることで，新たな気付きから今後の具体的な活動（創作活動例：紹介文づくり）への課題意識や見通しについて，自分の考えをもつことができるようにする。

第１学年２組　表現学習指導案

指導者　岡　﨑　教　昭・笹　原　浩　仁（本学准教授）

題材　たのしいな　しょくべにえのぐで　いろあそび（Ａかんじること）

指導観

○　本題材では，食紅えのぐを使った色水遊びを行いながら自分で色をつくりだすことの楽しさを味わい，自分でつくった色を使った遊びを通してそのよさを感じ取ることをねらいとしている。具体的には，①色水を混ぜ合わせることでできる色の美しさを感じ取ること，②身の回りのものから発想を広げ，自分がつくった色でできる遊びをつくること，③つくった色遊びの楽しさや自分の色の美しさを感じ取ることなどである。つまり，本題材において，並べる，積むなどの色水遊びから子供自身が光を活かしたりつくった色水を材料として使ったりしながら色遊びを発展させ，活動自体の楽しさやつくった色の美しさを味わう活動を扱うことは，色という表現素材を通して，感性を働かせながら子供自身が内面で感じたことや考えたことを表すことのよさを実感することができるという価値がある。

○　本学級の子供たちは，表現の学習において，様々な材料を使って感じたことを伸び伸びと表現することができた。また「いろとかたちからみつけたおはなし」の学習では，様々な材料の特徴を活かしながら，奉書紙に色をつけ，偶然できた形と色から様々なものを見立て，線や点を描き加えたり，友達に話すことを楽しんだり，見つけたものから想像を膨らませておはなしをつくったりする活動をしてきた。しかし，形から見立てた際に，もとの色をつぶして変えるということもあった。さらに，最後まで線や点の描き加えをする子供や，見立てたものを切り取り，思い浮かんだことを絵に表すなど，様々な姿が見られた。これは，自分で色をつくることで想像が広がり，さらなる表現欲求が生まれていることの表れであるといえる。

○　本題材の指導にあたっては，子供が自分でつくった色を使って遊びたいという表現欲求をもち，色の美しさを楽しみながら感じ取ることができる活動を考え，友達とともに楽しむことができるようにする。そのために，まず導入段階では，食紅えのぐを混ぜ合わせて色水をつくる活動を設定し，自分で色をつくることの楽しさを味わわせる。次に，展開段階では，自分でつくった色を使う遊びを考えて実際に遊ぶ活動を設定し，活動の楽しさや色の美しさを感じ取ることができるようにする。最後に，終末段階では，互いの遊びについて紹介し，体験し合う活動を設定し，遊びの楽しさや色の美しさについて感じ取ったことを共有し，意味付けを行うことができるようにする。

題材で育成する資質・能力

◎　自分で色をつくり，そのよさを感じ取ることができる様々な遊びをつくりだそうとしている。
（創造性：自己開放）

○　友達が色に対して感じ取ったことを共感的に見たり聴いたりしようとしている。
（協働性：美的共感）

○　自分が考えた色遊びの楽しさやつくった色の美しさを自分自身で感じ取ることができる。
（内省力：自己内対話）

○　色をつくりだす楽しさを感じ取り，つくった色の美しさを味わうことができる。
（基礎力：美的感受）

題材の計画（全８時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　食紅えのぐを混ぜ合わせて色水をつくり，小型透明容器やたれびんに入れながら，感じたことを話し合う。　②
○　色水を混ぜ合わせてできる色の美しさや面白さに気付き，色づくりの楽しさを味わうこと
※　つくった色の意味付けを行うことができる「いろのたしざんメモ」の提示
つくった　いろで，いろあそびを　しよう。
2　自分たちでつくった色を使ってできそうなことを考え，楽しく遊ぶ。
(1)　つくった色を使ってできそうなことや必要な材料について話し合う。　①
○　色の美しさを感じ取る遊びについての発想を広げること
※　子供たちの発想に合わせた，色遊びで使う材料の提示および場の設定
(2)　考えた色遊びを楽しむ。　③ 本時3/3
○　つくった色の美しさを感じ取ること
※　表現メモやふり返りシートの活用
3　考えて実際に体験した色遊びやつくった色について感じたことを紹介し，体験し合う。　②
○　自分たちでつくった色や考えた色遊びについて感じたことをもとにして自分自身で活動の意味付けをすること
※　表現メモやふり返りシートなどを活かした交流活動の設定

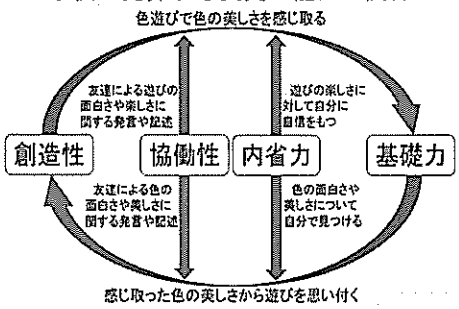
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性（自己開放）

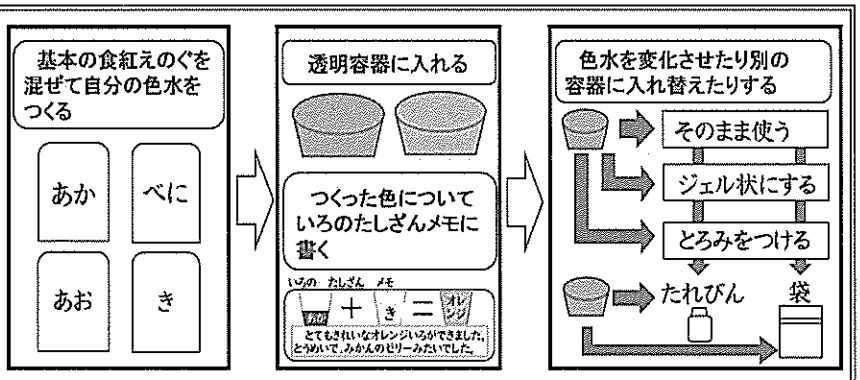
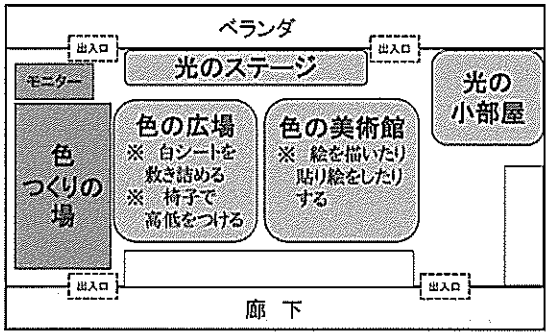
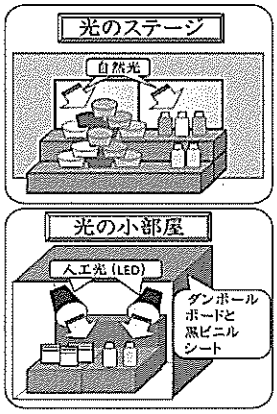
様々な材料や場の特徴を活かして，五感を働かせたり身体を動かしたりしながら色に働きかけ，自分がつくった色の美しさを感じ取り，色遊びを楽しんでいる。

- きれいな色がたくさんできたよ。
- 光に当てるとキラキラして，もっときれいになったよ。
- できた色を使って，キラキラしたカラフルなお城をつくろう。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（６／８時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1　してみたい色遊びについて話し合う。 ○　自分たちでつくりだした活動の面白さや色の美しさを確かめ，その追体験や新たな活動の創出につなげること 活動提案 いろあそびで　つくった　いろの　きれいな　ところを　たくさん　みつけよう。	※　色の美しさや活動の面白さに関して，子供たちに表現に対する自信をもたせるとともに，活動への意欲を高めさせるために，笹原准教授による食紅えのぐによる表現の有効性を高める助言や資料提示を行う。
2　基本の食紅えのぐを混ぜ合わせて色をつくったり，様々な材料や活動の場の特徴を活かして色遊びをしたりする。 (1) 基本の食紅えのぐを混ぜ合わせて色をつくる。 ○　混ぜ合わせる色の種類や量を変えることで，様々な色をつくりだすことができるということに気付くこと  (2) つくった色を使って，色遊びを楽しむ。 ○　つくりだした色の美しさを感じ取ったり，様々な色からイメージを広げて色による見立て遊びを創出したりすること   ※　色遊びの場の広さは　前時までの子供の活動の様相に基づいて，検討する。	※　混ぜ合わせる色の種類や量によってできる色の違いに気付かせるために，「いろのたしざんメモ」を使って，混ぜた色の量を具体化させる。 ※　自分の活動の楽しさや見つけた色の美しさについて感じ取ったことに対して，自分で意味付けをすることができるようにするために，表現メモを提示したり，振り返りカードに色に関する視点を提示したりする。 ※　自分がつくった色の美しさを感じ取り，想像したことをもとにして色遊びを楽しむことができるように，光などの環境を活かすことができる場や，つくった色を使って絵を描いたりものをつくったりすることができる場を設定する。
3　考えた遊びやつくった色を紹介し合う。 ○　自分たちの活動の広がりや深まりを確かめ，そのよさや感じた色の美しさについて共有すること	

第２学年１組　生き方学習指導案

指導者　鐘　江　貴　子　・三　浦　研　一

題材　ずっとずっと　すてきでいたいな（Ｃ自分とくらし）

指導観

○　本題材では，自他の特徴に気付き，それを支える他者への感謝の気持ちを表すとともに，自分のよさを伸ばそうとする態度を養うことをねらいとしている。具体的には，①家庭生活における自分の特徴に気付くこと，②身近な他者に支えられたり励ましてもらったりしていることに気付くこと，③身近な他者へ感謝の気持ちをもつこと，④これからどのような自分でありたいか考え，自分の可能性やよさを伸ばしたいという思いや願いをもつことなどである。２年生頃までの子供の行う比較は，他者との「類似性」が重要になる。また，過去と現在の自分とを比べてそこに成長を実感する時期でもある。つまり，本題材において個性伸長を扱うことは，自分の今を見つめるとともに，これからどのような自分になりたいか，自分のよさや可能性を伸ばそうとする生き方を求め続ける上で価値がある。

○　本学級の子供たちは，１学期に夏野菜の栽培を通して，自分がお世話をすることで植物が元気に育つことを実感している。その際，友達のお世話の仕方を真似したり毎日欠かさず観察をする友達を称賛したりするなど自他の有り様を見つめることができている。また，２学期末には，学級のみんなが楽しめる会を開きたいという願いをもち実践をした。これは学級集団のために自分ができることを行動しようとする態度が養われつつあると言える。一方で，物事が自分の思い通りに進まないと「○○さんが…だから」と他者の責任にする姿も見られた。自分と同じように友達も努力したり協力したりしていることに気付くことができていないと考える。そこで，本題材では，自他の特徴に気付き，自分のよさを伸ばそうとする態度を養うことをめざす。

○　本題材の指導にあたっては，自他の特徴に気付き，それを支える他者への感謝の気持ちを表すとともに，自分のよさを伸ばそうとする態度を養うことができるようにする。そのために，まず，学級編制を控えて互いのことをどの程度知ることができたか１年生の頃との比較から話し合わせ，思いや願いをもたせる。次に，友達が知らない自分のことを伝え合わせ，感じたことや考えたことを話し合わせて友達の新たなよさに気付かせる。さらに，お世話になっている身近な他者の存在に気付かせ，自分の気持ちを伝える方法を話し合わせて選択させる。そして，自分の気持ちを相手に伝えさせる。最後に，どのような３年生になりたいか，自分への期待や友達への親愛を伝え合わせる。

題材で育成する資質・能力

○　自分にも友達にも，その人だけの特徴があることから，自分を大切にしてよさを増やす将来像を思い描こうとしている。（創造性：問題発見力）

◎　友達の気持ちや考えを尊重しながら，友達のよさを伝えようとしている。
（協働性：他者を尊重する態度）

◎　自分や友達のよさ，これからなりたい自分を伝え合い，自分だけの特徴に気付くことができる。
（内省力：意志決定）

○　１年生の頃と比較して，できるようになったことや変わったところ，これから変えたいところを見つけることができる。　（基礎力：価値認識）

題材の計画（全13時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　共に学校生活をしてきた学級の友達について変容などを話し合う。　②
○　自分や友達の特徴に関心をもつこと
※　１年生の時の学級写真や行事写真の提示
友だちが知らない自分をつたえよう。
2　友達が知らない自分のことを伝えたり，自分が知らない友達のことを知ったりして，互いに新たなよさを伝え合う。
(1) 友達が知らない自分のことについて，何をどのように伝えるか考え，準備をする。　④
○　伝えたいという思いをもつこと
※　条件の設定（継続，努力，学校外）
(2) 友達が知らない自分のことを伝えたり友達のことを知ったりして，感じたことや考えたことを話し合う。　② 本時2/2
○　自他の特徴に関心をもつこと
※　表現方法の選択（絵，写真，実物，実技など）
おせわになった人に気もちをつたえよう。
3　自分を支えてくれている身近な人に自分の思いを伝える方法を話し合い，選んだ方法で伝える。
(1) 誰にどのような気持ちをどのようにして伝えるか考えて準備をして伝える。　③（＋課外）
○　身近な他者に感謝の気持ちをもつこと
※　気持ちを伝える方法の選択
(2) 学習を基に，どのような３年生になりたいか考え発表する。　②
○　近い将来の自分像に期待を抱くこと
※　友達へのメッセージを伝え合う場の設定

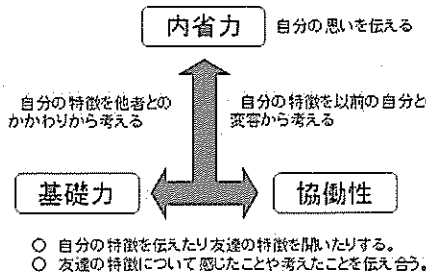
本時に最も重視する資質・能力

☆内省力（意志決定）

友達が気付いていない自分の特技や好きなこと，自分がこれまで頑張ってきていること，家族に教えてもらった自分のよさなどの中から，友達に伝えたい今の自分の姿を伝えること

・「小学生になって，おじいちゃんに教えてもらった将棋が大好きになりました。こういうふうにします。」と今の自分を伝える。
・「知らなかった。〇〇さんは，どうやってそのように上手になったのですか」と，友達の努力や特技について質問をする。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（８／13時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1　前時に新しく知った友達のことや前時までに自分が準備してきたことを想起して，本時，友達に伝えたいことや知りたいことを出し合う。 〇　自分のことを伝えたい，友達のことを知ることが楽しみという思いや願いをもつこと めあて 友だちが知らない自分をつたえよう。	※　友達に伝えたい今の自分について，どのような姿か出し合わせ，伝えたいという思いや願いをもたせる。
2　友達が知らないであろう今の自分のことを伝えたり，これまで知らなかった友達のことを知ったりして，互いの発表に対して感じたことを話し合う。 (1) これまでに学校ではあまり見せていない姿や好きなことなど，友達が知らない今の自分を伝えたり，友達の発表を聞いて質問をしたりする。 〇　自分や友達の特徴に関心をもち，友達のよさを見つけようとすること 生活班 習い事を発表する人：〇 野球やバレエなどのスポーツを頑張っているよ。〇 そろばんや習字，ピアノなどを頑張っているよ。 家庭でのことを発表する人：〇 家では，ものまねをして，家族を笑わせるのが好き。〇 将棋を教えてもらってとても好きになったよ。 休み時間のことを発表する人：〇 虫を探すのが好きだよ。見つけた虫を写真で撮影したよ。クイズをするよ。 ↓ 質問，感想 〇 きっかけ，目的　〇 継続期間，工夫点，努力点　〇 今後の目標 〇 新たに見つけたよさ　〇 興味・関心，好奇心，意欲　〇 励まし	※　自他の特徴に関心をもち，友達のよさを見つけようとするために，日頃学校では見せない自分の姿を見せたり，日頃学校では見られない友達の様子を見たりできるグループ発表の場を設定する。
(2) 友達の発表を聞いて，新たに見つけた友達のよさを伝えたり，どのようにして「今の自分」になることができたのかを考えたりして発表する。 〇　友達のよさに気付き，気付いたよさを伝えること 自分：お父さんお母さん，兄弟姉妹，おじいさんおばあさん，ペット，近所の人，学校の友達，学校の先生，習い事の友達，習い事の先生 今の自分になれたのは・・・ 〇 いやだなって思うこともあったけれど，家族がいつも応援してくれたから続けてこれたよ。 〇 好きな〇〇だから，◇◇先生のようになりたいと思ってがんばっているよ。 〇「ありがとう」って言われるのがうれしくて，ずっと続けているよ。だから上手になったよ。	※　自他のよさに気付かせるために，友達の発表を聞いて感じたことや思ったこと，新たに発見した友達のよさを全体の場で出し合わせ，発表ができた自分の姿について話し合わせる。
3　今の自分の姿を友達に発表したり，知らなかった友達の一面を聞いたりして，発表した自分の姿に成長した理由を考え，誰にどのような思いをこれから伝えていきたいか記述し，話し合う。 〇　家族や身近な他者へ感謝や親愛の気持ちを伝えたいという思いや願いをもつこと	※　家族や身近な他者へ感謝や親愛の気持ちを伝えたいという思いや願いをもたせるために，今の自分の姿になれた理由を話し合わせる。

第３学年１組　健康学習指導案

指導者　　鞭　馬　あゆみ

題材　よい歯で元気　わたしはけんこうプランナー（Ａ心身の成長　Ｃ食生活）

指導観

○　本題材では，歯のもつ役割やよく噛むことの大切さを理解し，家族とともに健康な生活を送ろうとする態度を育成することをねらいとしている。具体的には，①健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる健康寿命と歯の健康には深い関係があること，②食べ物を体内に取り込む入り口である口でよく噛むことは，胃腸での消化の働きや脳の発達にも影響すること，③丈夫な歯にするには，自分に合った正しい歯磨きの仕方を身に付けることだけではなく，食べ物も関係していることなどである。つまり，本題材において，噛むことの健康への効果を扱うことは，自分の食生活を見直すことができるとともに，食事をともにする家族にも働きかけることができ，家庭実践へとつながるという価値がある。

○　本学級の子供たちは，２学期題材「毎日元気なわたしのために」の学習で，体内の消化の仕組みとともに緑の食品の体内での働きについて学習してきた。そして，緑の食品に含まれる食物繊維の特徴から，排便との関係を見出すことができた。これは体験的な活動を通して，実感を伴った理解ができた姿といえる。しかし，それぞれの消化器官の働きについては理解できたものの，食べ物の入口である口での咀嚼については食べ物を小さく噛み砕くという働きを理解しただけで，咀嚼による健康への効果についてはまだ学習をしていない。現在，乳歯から永久歯へと生え替わりが進んでいるこの時期の子供たちに，咀嚼の大切さを理解させるとともに，歯を大切にしようという意識も育んでいくことは価値がある。

○　本題材の指導にあたっては，歯の健康を保つことが健康寿命にもつながっていることに気付かせ，歯を大切にするための手入れの方法がわかるとともに，咀嚼による健康への影響を理解し，毎日の生活の中で家族とともに実践できるようにする。そのために，歯の健康が身体の健康にも影響していることに気付かせる。その際，平均寿命と健康寿命，そして歯数と疾病とのグラフを提示する。次に，自分の歯の様子を観察したり，咀嚼力判定ガムで噛む力を判定したりして現在の自分の歯の状態を可視化させる。さらに，噛むことによる健康への影響や，正しい手入れの仕方などを専門家に尋ね，これから歯を大切にしていくための「歯ッピープラン」を作成する。最後に，作成したプランを家族に発表し，家庭実践につなげていく。

題材で育成する資質・能力

◎　専門家からの話をもとに，噛むことの効果について理解し，自分に合った方法による「歯ッピープラン」を作成しようとしている。
（創造性：健康を志向する態度）

○　グループの友達の課題を解決するために，調べてわかったことを伝え合うことができる。
（協働性：双方向的働きかけ）

◎　自分の現在の歯や咀嚼力の状況を理解し，これからより健康に生活できるための方法を考えることができる。　（内省力：改善への意志決定）

○　咀嚼による健康への様々な影響を理解するとともに，丈夫な歯を保つ方法を実践することができる。　（基礎力：健康に関する知識・技能）

題材の計画（全５時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　平均寿命と健康寿命，歯数と疾病との関係のグラフから，学習課題について話し合う。　①
○　健康な生活には歯の健康も関係していることに気付き，歯の役割やよい歯を保つ方法を知りたいという意欲をもつこと
※　平均寿命，健康寿命，歯数のグラフの提示
歯とけんこうの関係を調べて，元気に生活できるための「歯ッピープラン」をつくろう。
2　歯の役割や噛むことの大切さなどを調べ，自分に合った「歯ッピープラン」を作成する。
(1)　歯科医から，歯の役割について話を聞く。①
○　今の自分は，乳歯から永久歯に生え替わっている大切な時期であることがわかるとともに，噛むことの様々な効果に気付くこと
※　歯科医の話を聞く場の設定
(2)　歯の健康について知りたいことを専門家に聞いたり，自分で調べたりして「歯ッピープラン」を作成する。　② 本時2/2
○　噛むことの身体健康への影響を理解するとともに，自分に合った方法を選択すること
※　歯の健康に関する様々な分野の専門家の話を聞く場の設定
3　作成した「歯ッピープラン」を発表する。　①
○　家族に向けて発信し，家庭実践につなぐこと
※　家族への発表の場の設定

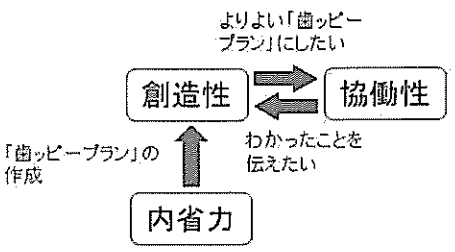
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性（健康を志向する態度）

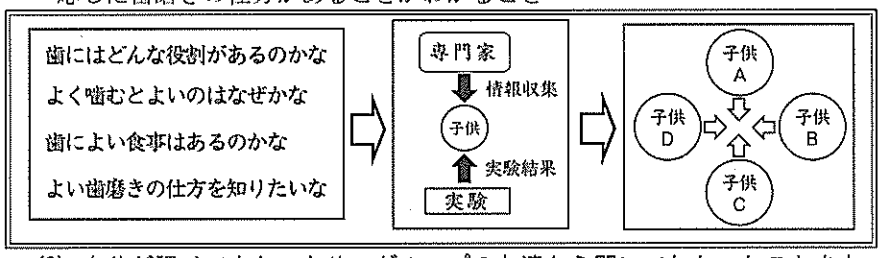
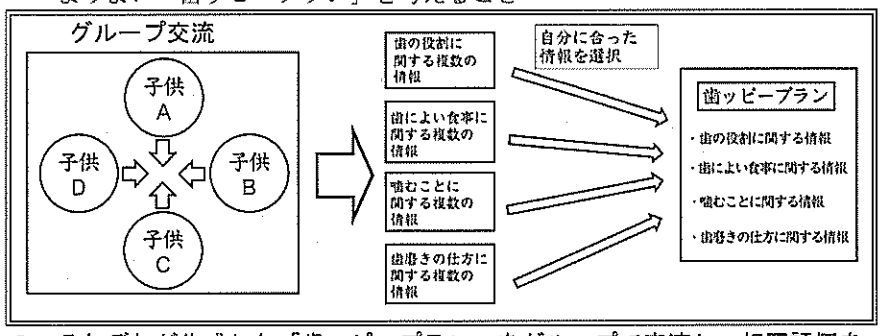
噛み方や食事，歯磨きの仕方など，いろいろな情報の中から自分に合った解決方法を選ぼうとする姿

- よく噛むと，脳に酸素や栄養が送られて，よく働くから，食べる時には30回以上噛むようにしよう。
- 新しい歯が生えてきているから，柔らかいものばかりではなく，硬いものも食べられるようにお母さんにお願いしよう。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（４／５時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1　前時までの学習で専門家に聞いたり，自分で調べたりしたことの中から，とっておきの情報をグループで交流する。 ○　各自が得た情報の中からとっておきの情報を伝え合うことで，それぞれが調べてきたことに関心をもつとともに，互いの情報を伝え合うことでよりよい「歯ッピープラン」ができそうだという見通しをもつこと めあて 自分が調べたことをグループで交流し，これから歯を大切にしていくための「歯ッピープラン」をつくろう。	※　いろいろな情報の中から自分に合ったものを選択することで「歯ッピープラン」をつくることができそうだという見通しをもたせるために，それぞれがもっているとっておきの情報をグループの友達に交流する場を設ける。
2　「歯の役割」「噛むことと体の関係」「歯によい食事」「よい歯磨きの仕方」について，わかったことをグループで伝え合い，自分の「歯ッピープラン」を作成する。 (1) 役割分担をして調べてきた「歯の役割」「噛むことと体の関係」「歯によい食事」「よい歯磨きの仕方」についてグループで伝え合う。 ○　友達の話を聞くことによって，歯を大切にすることやよく噛むことは身体や運動機能と深い関係があることや，歯によい食事があること，年齢に応じた歯磨きの仕方があることがわかること  	※　それぞれが調べたことをもとに，自分の「歯ッピープラン」をつくりたいという意欲をもって交流ができるようにするために，前時までの学習でグループ内で分担したことについて調べ，情報をグループに持ち帰って，伝え合うジグソー学習を行う。
(2) 自分が調べてきたことや，グループの友達から聞いてわかったことをもとに，情報を選択して「歯ッピープラン」を作成する。 ○　グループでの交流によって得た情報の中から自分に合ったものを選び，よりよい「歯ッピープラン」を考えること  	※　複数の情報の中から，自分に合った情報を選択することができるようにするために，それぞれが調べた情報をまとめられるボードを準備する。
3　それぞれが作成した「歯ッピープラン」をグループで交流し，相互評価をする。 ○　それぞれのプランのよいところや改善した方がよいところをアドバイスし合い，「歯ッピープラン」をもう一度見直そうとすること	※　よりよい「歯ッピープラン」にしたいという思いをもたせるために，グループで相互評価をする場を設定する。

第４学年２組　生き方学習指導案（特別支援学級さくら組との交流）

指導者　齋藤　淳・小林大介

題材　大人になっても仲間でいるために（Ｄ自分となかま）

指導観

○　本題材では，２組とさくら組（特別支援学級：以下省略）の40人の仲間との人間関係を見つめたり，「創る活動（自分たちにとって意味のある心を一つにした創造的な文化的活動）」を主体的に実践したりすることをねらいとしている（Ｄ自分となかま）。具体的には，①交流学級として40人が学校生活の中で，仲間になれているかどうか見つめ直すこと，②劇団きらきらの田中航太さん（以下：田中さん）たちの生き方と出合い，演劇を通した人間関係への気付きから，尊重し合うことを考えること，③主体的に「創る活動」を行う中で，他領域の学びを生かしながら課題解決をすることなどである。そこで，本題材では，演劇を通して，ともに成長する生き方をしている劇団きらきらの方々の生き方を取り上げる。そのような生き方を実現している人々との出会いを通して，協働的に「創る活動」を行うことは，多様な他者とともに生きる自己の生き方を探求し続ける力を養う上で価値がある。

○　本学級の子供たちは，これまでの学習や生活において，ともに運動会の表現を行ったり，遊んだりすることができた。しかし，他者理解や自己主張という点では，相手の内面を理解しようとしたり，自分の考えを積極的に表現したりすることに課題もあった。これは自分に自信をもつことが不十分な結果，相手を受け入れることが十分にできていないことの現れであると考えた。そこで，多様な他者との生き方や他者理解と自己主張を大切にする学習を行うことで，内省力や協働性の高まりを特にねらっていけるものであると考えた。

○　本題材の指導にあたっては，２組とさくら組との今までのかかわりを見つめ直すことを通して，仲間とはどのようなものか考えられるようにする。そのために，まず，導入段階では，20年近くにわたって障害のある方もない方も仲間であり続ける劇団きらきらの方々と出会わせ，個別的な問いを見出させるようにする。次に，展開段階では，どのような「創る活動」を行うのか決め，活動を通した人間関係づくりを実践的に学ぶことができるようにする。そこで，全体の思いがつながる関連的な問いについて話し合い，集団としての課題を明らかにさせる。最後に，終末段階では，劇団きらきらの方々に自分たちの姿の変容を見ていただくことを通して，自分や友達を大切にすることができた自分自身の成長を振り返ることができるようにし，本質的な問い「40人が仲間であり続けるには」を見出すことができるようにする。

題材で育成する資質・能力

○　２組とさくら組の40人の仲間でいたいという思いをもち，自分の特徴を生かして，みんなのためにできることを進んで実践しようとしている。
（創造性：実践的態度）

◎　仲間の気持ちを理解する心をもって聴くことの大切さや自分の思いを表現することを大切にしようとしている。（協働性：他者を尊重する態度）

◎　「創る活動」を通して，かかわりを深めていきたいと思い，そのために自分の感じた価値観に従って行い方を選択する。（内省力：意志決定）

○　劇団きらきらの方々の互いに理解し合い，分け隔てせず，思いやり，信頼し合う生き方への追求意欲をもつことができる。（基礎力：生き方への関心）

題材の計画（全17時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　さくら組とかかわり，１年間の交流を振り返って，仲間になれているのかどうか話し合う。　③
○　自分たち40人のかかわりと劇団きらきらの方々の関係の違いに気付くこと
※　仲間とのかかわりにおける自己を見つめ直せる「Ｄ自分となかま」を軸にする題材設定
40人がもっと仲良くなるには何をしたらよいか？
2　仲間になるための「創る活動」を実践する。
(1) 劇団きらきらの田中さんがどのようにしてみんなと仲間になったのか話を聴く。　②
○　最初は劇団を辞めたいと思った葛藤を乗り越え，仲間の大切さに気付いた姿をとらえること
※　葛藤を克服する生き方との出合いを位置付けた40人の課題意識の共有化
(2) 仲間になるために，自分たちがしてみたいと思った「創る活動」を行う。　⑥ 本時4/6
○　「創る活動」を行う中で気付いた仲間と信頼や助け合いとは何か考えること
※　個別的，関係的，本質的に「問い」が連続・発展する交流活動
心を一つにした思いはどうすれば伝わるのか？
3　全体で「創る活動」の成果を話し合う。　③
○　自分たちのよさを共有し，これからも仲間であり続けるために大切なことを考えること
※　北校舎落成式で「創る活動」を表現させることで，学習への達成感や充実感を味わわせる。
40人がこれからも仲間であり続けるには？

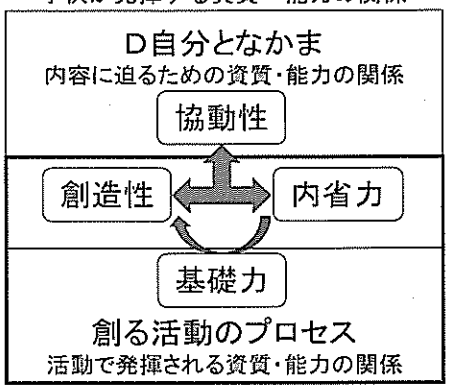
本時に最も重視する資質・能力

☆協働性（他者を尊重する態度）

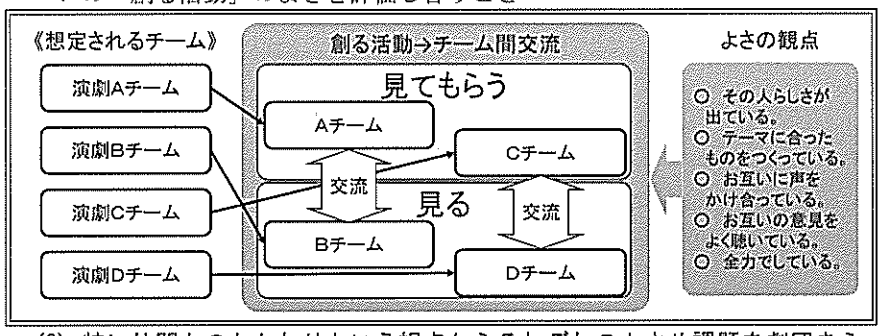
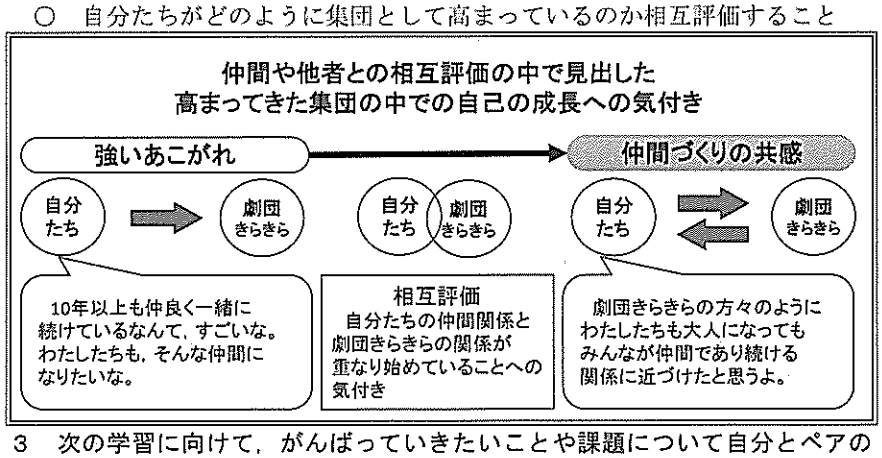
さくら組の５人と２組の35人の中で自分は集団の中でどのような力を発揮しているのか発見したり，自分が友達に対してどのようにかかわっているのかというかかわりのよさや課題を見出したりすることで，友達の考えや田中さんたちの考えを共感し，自分の思いや考えを伝えることができる姿

- ○○くんは友達に声をかけ笑顔で活動できているね。
- やっと田中さんたちの気持ちが少しわかった気がするな。
- 一緒に仲間といることって，嬉しいことだよね。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（９／16時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1　さくら組や２組の40人とともに，それぞれのチームで行っている「創る活動」でどのような仲間づくりのよさがあるのか話し合う。 ○　「創る活動」におけるチームの中でのかかわりの課題をとらえること めあて お互いのチームの「創る活動」のよさを見つけ，40人が仲間になってきたかどうか考えよう。	※　劇団きらきらの田中さんを紹介し，田中さんから子供たちの変化について話をしていただき，活動への意欲付けを図る。
2　それぞれの課題を解決するために，工夫している様子を伝え合う。 (1)　２チームが「創る活動」を行い，お互いのよさを見つける。 ○　見てもらうチームと見るチームに分かれて，チーム間交流を行い，お互いの「創る活動」のよさを評価し合うこと  	※　前時までに全体でつくった「よさの観点」を提示し，それをもとに具体的にどのような場面でどのように関わっている姿がよかったのか見つけさせる。
(2)　特に仲間とのかかわりという視点からそれぞれのよさや課題を劇団きらきらの田中さんと全体で話し合う。 ○　自分たちがどのように集団として高まっているのか相互評価すること  	※　劇団きらきらの方々のように大人になっても仲間でいるために，自分が大切だと思っていることを劇団きらきらの田中さんと語り合う交流の場をもつことで，相互評価し合いながら，集団の中での自分のよさを見出させる。
3　次の学習に向けて，がんばっていきたいことや課題について自分とペアの友達へのメッセージシートに記述する。 ○　心は一つになってきても，それを伝えるのは難しいことや，誰に対しても同じようにかかわることが難しいことに気付くとともに，40人のかかわりの様子が高まっていることを振り返ること	※　自分とペアの友達のよさをメッセージカードに書きお互いのよさや高まりを認め合うようにする。

第５学年１組　言語文化学習指導案

指導者　　杉　本　克　如

題材　世界にほこる日本文化を伝えよう（Ｂコミュニケーション）

指導観

○　本題材では，前題材や国語分野において身に付けた構成や表現の効果を生かし，言語によるコミュニケーションを通して，留学生に日本文化について伝えることをねらいとしている。具体的には，①ＡＬＴに正月の過ごし方を紹介し，日本の年中行事のよさを実感すること，②日本の年中行事について，わかりやすい説明を考えること，③留学生に日本の年中行事を紹介したり，質問に答えたりする交流会を開くことである。その際，既習のプレゼン学習における学びを英語での説明に生かしながら，留学生にわかりやすく伝えさせるようにする。つまり，本題材において，英語で日本文化の紹介を扱うことは，既習の日本語や英語によるプレゼン力を使い，留学生と意思疎通を図る喜びを感じさせることができるという価値がある。

○　本学級の子供たちは，これまでに慣れ親しんだ英語を使って，コミュニケーション活動に意欲的に取り組むことができている。また，キーワードとなる英語表現を基に，まとまった英語を聞いて内容の大体を理解することもできるようになってきている。しかし，自分の思いや考えを細部まで，英語でわかりやすく相手に伝えられるまでには至っておらず，言葉で伝えようとする前に，非言語コミュニケーションに頼りすぎる場面が見られた。これは，子供たちにとって「英語を使って話したい」と思う題材構成になり得ていなかったため，また，子供たちがこれまでに触れてきた英語表現が限定的であり，子供たちの表現の幅を広げられるものになり得ていなかったためであるといえる。

○　本題材の指導にあたっては，英語を使い，留学生と行事について紹介し合うことを通して，異文化を知り，日本文化のよさに気付くことができるようにする。そのために，まず，導入段階では，ＡＬＴに正月の過ごし方を紹介し，日本の年中行事のよさを実感することを通して，学習課題について話し合う。次に，展開段階では，日本の年中行事について調べ，留学生にわかりやすく伝えられるように英語表現や説明を考えたり，自分たちの紹介を付加修正したりする。終末段階では，日本の年中行事を紹介したり，留学生の出身国の行事を聞いたりする交流活動を行う。これまでに身に付けてきている英語表現に加え，英語表現を蓄積してきた言語ブックや辞書等を活用させながら，子供たちが伝えたいことを英語で表現し，言語によるコミュニケーションを図ることができるようにする。

題材で育成する資質・能力

◎　既知の英語表現と新たな言語情報を関連付けながら，留学生が話す英語を聞いてその意図を理解したり，日本文化や自分の思い，考えを伝えたりして，言語によるコミュニケーションを遂行しようとしている。　（創造性：創造的思考）

○　グループで協力しながら，相手意識をもって日本文化の紹介を構成，再考したり，活用できるものを駆使しながら留学生と英語で円滑にやりとりをしたりしている。　（協働性：受容・伝達）

◎　留学生に日本文化を説明することを通して，自国の文化のよさに気付き，誇りをもったり，留学生の出身国の文化を受容し，尊重したりすることができる。　（内省力：言語観形成）

○　これまでに身に付けている基本的な英語表現や非言語コミュニケーションを使って，留学生に日本文化について説明したり，質問に答えたりしながら，英語で意思疎通を図ることができる。

（基礎力：言語情報処理）

題材の計画（全10時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　日本の正月を紹介し，学習課題を話し合う。② ○　ＡＬＴの反応から，日本の年中行事のよさを実感し，学習課題をとらえること ※　日本の年中行事である正月の紹介とＡＬＴの反応からそのよさを味わう振り返りの設定 四季を感じる日本の年中行事のすばらしさを留学生に伝えよう。
2　グループごとに，年中行事について調べ，説明の内容や英語表現について話し合う。 (1) 身の回りにある行事について調べる。　③ ○　日本の年中行事や文化と附属小学校の行事や家庭での生活を関連付けて考えること ※　自分たちの身近にある年中行事や文化の想起 (2) 説明の内容や英語表現を考える。　③ ○　相手によりわかりやすく伝えられる内容や英語表現になっているか意識すること ※　前単元や国語分野のプレゼンの学習内容の想起
3　留学生と交流し，振り返りを行う。② 本時1/2 ○　体験的に異文化理解を深めたり，異文化を通して日本文化のよさに気付いたりすること ※　留学生と日本文化のよさを共有する場の設定

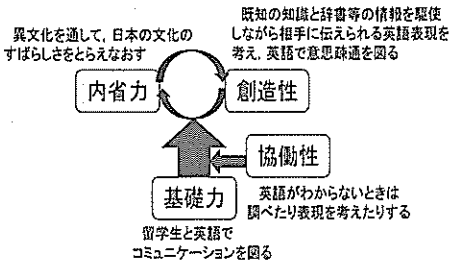
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性（創造的思考）

留学生が話す英語を聞いて意図を理解したり，日本の年中行事や自分の考えを伝えたりするために，既知の英語表現と新たな言語情報を関連付けながら，言語によるコミュニケーションを遂行しようとしている姿。

・ 以前に言語ブックに書いたこの英語表現と辞書に載っているこの単語を組み合わせると，わかりやすく伝えられそうだよ。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（９／10時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1　本時活動に参加する留学生を紹介し，活動内容について話し合う。 ○　留学生に四季に関連する日本の年中行事を紹介する意欲を高めること めあて 留学生に日本の年中行事のすばらしさが伝わるように紹介しよう。	※　相手意識と目的意識をもってコミュニケーション活動に取り組ませるために，留学生とお互いのことを紹介し合う活動を設定する。
2　グループごとに日本の年中行事や留学生の出身国の行事について紹介し合い，質問をしたり，感想を伝えたりする。 (1) 留学生に四季に関連する日本の年中行事を紹介する。 ○　相手によりわかりやすく伝えられる英語表現を意識すること <コミュニケーション活動(1)>　児童による年中行事の紹介 C１：Do you know this festival?　This is Doll's Festival in March. We call it "Hinamatsuri". C２：You can see beautiful dolls. C３：Look at these pictures. We eat "Chirashizushi", "Hamaguri-soup" and "Hinaarare". They are special food for Doll's festival. C２：We pray for girl's happiness.　What do you think?	※　留学生に英語でわかりやすく伝える力を発揮させるために，基本の英語表現を提示し，それらを基に日本の年中行事について説明したり感想を尋ねたりさせる。
(2) 留学生からの質問に答えたり，出身国の行事についての説明を聞いたりする。 ○　言語によるコミュニケーションを意識し，異文化を知ることを通して，日本の文化のすばらしさをとらえること <コミュニケーション活動(2)>　児童と留学生（以下，留）による自由対話 C１：Do you have any questions? 留：When is Doll's festival? C２：It's March 3rd. 留：How many dolls ? C２：Fifteen dolls. C３：This is "Odairi-sama", Emperor, This is "Ohina-sama", Empress. 留：Where do you display it? C１：In a Japanese-style room. C３：Do you have same event in America? 留：No. We don't have events like this. This is beautiful and special! C１：Thank you very much! 【本時のねらいに迫る姿】 ・ 外国にもその国の特徴をいかした行事があるね。 ・ 特別な美しい祭りと言われてうれしいな。やっぱり日本の文化はすごいな。 ・ 日本の行事には，すべて意味があるんだね。すばらしさをもっと伝えたい。 ・ 前の単元で使った表現をいかして伝えられた。 ・ 英語を使うと意思疎通を図り，わかり合える。	※　言語によるコミュニケーション力を発揮させるために，基本の英語表現（下線）とHi, friends!における既習表現（波線）を基にして，わからないときには，言語ブックや辞書等を活用させながら，留学生と自由にやりとりをさせる。
3　留学生に日本の年中行事のすばらしさを伝えられたのか話し合う。 ○　英語を手段として活用することで，日本語を母語としない人と意思疎通を図り，異文化を知ることを通して，日本の文化のすばらしさを改めて感じること	※　英語によるコミュニケーションを通して，異文化を知り，日本の文化のすばらしさに気付かせるために，文化に関する気付きや英語を用いるよさについて振り返らせる。

第２学年１組　自然探究学習指導案

指導者　　伯　川　康　洋

題材　くらべてあそぼう　じしゃくの力（Ｃ数理科学）

指導観

○　本題材では，磁石を使った魚釣り遊びを通して，物を引き付ける力を数値で表して比べることをねらいとしている。具体的には，①磁石には物を引き付ける力があることを理解すること，②引き付けられる物と引き付けられない物があることに気付くこと，③引き付ける力を引き付けられた物をそろえて数値化して比べることなどである。つまり，本題材において，子供にとって身近な物である磁石を扱うことは，自然の事物の面白さと不思議さを探究したいという追究意欲を生み出し，引き付けられる物をそろえて任意単位として数値化し調べるという科学的・数学的な知を活かそうとする態度を育てる上で価値がある。

○　本学級の子供たちは，第１学期「長さ」（Ｂ数理）の学習において，cmやmを用いて物の長さを測定することを経験している。その際，直接比較，間接比較，任意単位のいくつ分による測定，cmやmなどの普遍単位による測定を学習してきた。また，磁石については，身近にある物であり，いろいろな物を引き付ける力をもっていることに気付いている。しかし，引き付けられる物と引き付けられない物があることや，引き付ける力には違いがあることなどには気付いていない。これは，磁石にかかわる経験が不十分であり，それらを考察する視点を身に付けることができていなかったからであると考える。そこで，本題材では磁石を使った魚釣り遊びを通して，磁石に物を引き付ける力があることやそれらの力を引き付けられる物を任意単位とした個数で表し比べることができるようにさせたい。

○　本題材の指導にあたっては，磁石を使った魚釣り遊びを通して，磁石の引き付ける力を引き付けられる物を任意単位としてその個数で表すことができるようにする。そのために，まず，磁石の引き付ける力の違いに気付かせる魚釣り遊びを行わせる。その際，えさとして，物を引き付ける強さが異なる磁石を準備して用いるようにする。次に，２つの磁石の引き付ける力を調べる活動を行わせる。その際，任意単位となる引き付けられる物を準備する。そして，複数の磁石の引き付ける力を比べる活動を行わせる。その際，引き付けられる物を数種類準備することで，いろいろな任意単位を用いることができるようにする。最後に，引き付ける力が異なる磁石を使った魚釣り遊びを行わせる。その際，引き付ける力が強い磁石を試して選ぶことができるようにする。

題材で育成する資質・能力

◎　目に見えない磁石の引き付ける力を引き付けられる物の個数によって可視化し，数値化して比べようとしている。　（創造性：論理的表現）

◎　友達が調べた磁石の引き付ける力について，どのような方法で数値化したのかを確かめ合い，その数値の妥当性を話し合おうとしている。　（協働性：他者理解）

○　どの磁石が引き付ける力が強いかを予想するとともに，それを調べる方法について考え，実践することができる。　（内省力：行動決定）

○　物を引き付ける磁石の力を使った魚釣り遊びを通して，大きさや重さがそろっている引き付けられる物を選び，調べることができる。　（基礎力：数学的な知識・技能）

題材の計画（全４時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　えさに磁石を使った魚釣り遊びを行う。　①
○　磁石の引き付ける力には強いものと弱いものがあることに気付くこと
※　引き付ける力が異なる複数の磁石を使った魚釣り遊びの場の設定
じしゃくのひきつける力の強さをしらべよう。
2　磁石の引き付ける力を比べるために，引き付けられる物をそろえて，個数を数値化して調べる。
(1)　２つの磁石の引き付ける力の違いを引き付けられる物の個数を数値化して調べる。　①
○　引き付けられる物をそろえて数値化すること
※　磁石に引き付けられる物を用いてその個数から数値化する活動の設定
(2)　複数の磁石の引き付ける力を比べるために，引き付けられる物の個数を数値化して順番付けを行う。　① 本時
○　磁石に引き付けられた物の個数を比べてその差から順番を考察すること
※　磁石に引き付けられる力を比べるために必要な引き付けられる物を選択する場の設定
3　調べたことを活かした魚釣り遊びを行う。　①
○　引き付ける力が違う磁石を比べること
※　複数の磁石から引き付ける力が強い磁石を確かめる場の設定

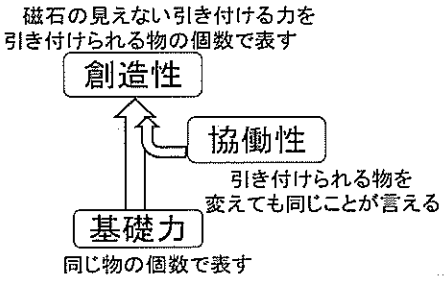
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性（論理的表現）

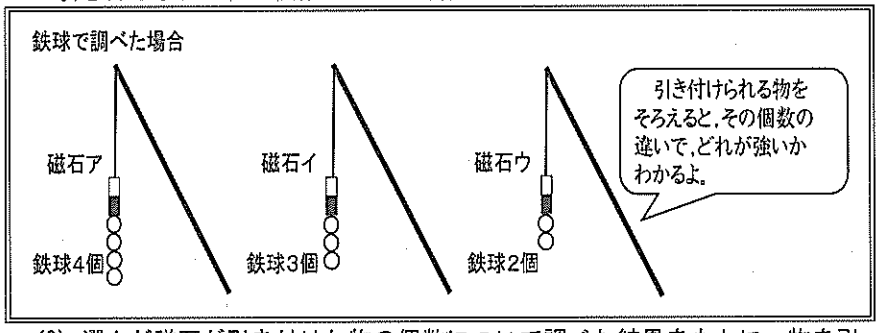
磁石の見えない引き付ける力を比べるために，引き付けられる物を選んで，引き付けられるかを試すとともに，引き付けられた物の個数で表して調べようとすること

・　どの引き付けられる物を使えば磁石の力が調べられるかな。
・　磁石の引き付ける力は見えないけれど，引き付けられる物の数を調べれば，強さを比べることができるよ。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（３／４時）

学　習　活　動　と　内　容	創造主体を生み出す手だて
1　グループで魚釣り遊びに使うことができる複数の磁石を見て，引き付ける力に違いがあることを予想し，これまでの学習を活かして引き付ける力を調べる方法を話し合う。 ○　磁石の引き付ける力の違いを表すために，引き付けない物と引き付ける物を弁別し，引き付けられる物の数で比べようとする見通しをもつこと めあて じしゃくの　力が　つよい　じゅん番を　しらべよう。	※　２つの磁石の引き付ける力を比べるために，クリップを任意単位として引き付けられた個数を数値化して調べる。本時では，複数の磁石の引き付ける力を比べるために，クリップ以外の物も任意単位として用いることができるようにする。
2　複数の磁石から引き付ける力が強い磁石を見つけるために，引き付けられる物を選んで，引き付けられる個数を実際に調べ，順番を考察する。 (1) 磁石に引き付けられる物を選んで，引き付けられるかを実際に確かめながら，引き付けられた個数によって強さの順番を調べる。 ○　磁石に引き付けられる物はどれか，いくつ引き付けられるのかを調べ，引き付けられた物の個数によって順番を決めることができること  	※　磁石の引き付ける力を，引き付けられた物をそろえて，その個数で表して調べ，明らかにするために，大きさや重さの違う数種類の引き付けられる物を準備しておく。
(2) 選んだ磁石が引き付けた物の個数について調べた結果をもとに，物を引き付ける磁石の力の順番について説明し合う。 ○　磁石に引き付けられた物の大きさやその個数を比べたり表や言葉に表したりして，物の引き付ける力の強さを説明することができること 磁石 ア イ ウ エ 鉄球 4 3 2 1 クリップ 4 4 3 2 ねじ 5 4 3 2 「鉄球で調べると，引き付けられる力が強いのは，数が多い順にア，イ，ウ，エの順です。」	※　友達が調べた磁石の引き付ける力について，どのような方法で数値化したのかを確かめ合わせるために，調べたことを整理しながらまとめて比べることができる表を配付する。
3　本時の学習においてわかってきたことを振り返ったり，次の学習においてやってみたいことを話し合ったりする。 ○　磁石の引き付ける力を調べるには，引き付けられる物をそろえてそのいくつ分で比べるとよいことに気付いたり，わかったことをもとに新たな疑問ややってみたいことを考えたりすること	※　本時の学習でわかった磁石の引き付ける力の調べ方をもとに，どのようなことをやってみたいかを考える場を設定する。

第２学年２組　健康学習指導案

指導者　中　村　　剛

題材　なわをとんで　元気いっぱい（A心身の成長　B運動）

指導観

○　本題材では，子供が縄を使った運動遊びを通して，運動を行うと食事や睡眠をしっかりとることができ，毎日を元気に過ごすことができるということに気付くことをねらいとしている。具体的には，①運動をすることで心や体に変化が起こること，②戸外での運動遊びを取り入れることで食事や睡眠の状態がよくなることに気付くこと，③縄を使った運動遊びができるようになることなどである。屋内での遊びが増えてしまいがちなこの時期に縄を使った運動遊びを取り入れていく。縄跳びは，運動の種類が豊富で跳び方に挑戦したり回数に挑戦したりして，自分の動きの高まりが確実に実感できる運動である。つまり，本題材において，夢中になって運動に取り組む過程で心や体への変化に気付いていくことは，内省力を高め健康な生活習慣づくりの基礎を築いていく上で価値がある。

○　本学級の子供たちは，夏休みや冬休みなどに生活を振り返る活動を行い，生活習慣を整えることが大切であることは理解している。しかし，子供たちは運動をすることによって自分の心や体にどのような変化があるのか，運動による睡眠や食事への影響やそれらを整えることで元気に過ごすことができるということに気付いていない。これは，運動や食事，睡眠をばらばらにとらえ，それぞれを関連させてとらえることができていないためであると言える。運動と生活習慣との関連に気付くことは，健康な生活習慣をつくるための基礎を培うことになる。

○　本題材の指導にあたっては，子供が運動することで心や体に変化を与えること，運動が食事や睡眠に影響していることに気付くことができるようにする。そのために，まず，アンケート結果を基に自分の生活を振り返り，運動への意欲付けを行う。そのために，保護者アンケート結果や理想の戸外での運動時間などを提示し，限られた時間や場所でも行うことができる運動遊びに取り組んでいきたいという学習課題をもつことができるようにする。次に，縄を使った運動遊びに取り組むとともに，運動の心や体への効果や変化に気付いていくことができるようにする。そのために，動きや気付きの宝箱を活用し，動きや気付きの高まりをとらえられるようにしたい。最後に，運動による食事や睡眠への効果についてとらえさせたい。そのために，戸外での運動に取り組んでいる期間の家庭での様子を保護者に話してもらい，健康かざぐるまを作成する。

題材で育成する資質・能力

○　運動することで健康な生活を送ることができるよう，運動する時間や行い方を考えて実践しようとしている。　（創造性：適応への判断）

◎　縄を使った運動遊びがよりよくできる体の動かし方などについて自分の考えを伝え合うことができる。　（協働性：双方向的働きかけ）

◎　運動と心や体の関係について，体を動かすことを通して考えることができる。　（内省力：変容の発見）

○　運動することによる心や体の変化に気付くとともに，前跳びや後ろ跳びで遊ぶことができる。　（基礎力：健康に関する知識・技能）

題材の計画（全11時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　アンケートをもとに生活習慣を振り返り，学習課題を話し合う。　①
○　運動や食事，睡眠などについて振り返り，運動する時間を学校や家庭でも増やしていきたいという願いをもつこと
※　アンケート結果と理想的な運動時間の提示
学校や家で　楽しくできる　うんどうをして みんなで　元気いっぱいに　なろう。
2　縄を使った運動遊びを行い，心や体，生活についての変化に気付く。
(1)　とび縄で友達と様々な跳び方をしたり回数に挑んだりして遊ぶ。　⑦ 本時5/7
○　友達の跳び方のよさを見つけたり，できる跳び方を増やして遊んだりすること
※　ジャンピングボードや，全体とグループでの活動の組み合わせなど教具や活動構成の工夫
(2)　運動することのよさについて話し合う。　①
○　できるとうれしいなどの心への効果や汗が出る，よく眠れるなどの体への影響に気付くこと
3　健康かざぐるまをつくり，これからの生活で生かしたいことを交流する。　②
○　運動をすることで食事や睡眠へ効果があったことに気付くこと
※　運動や睡眠などの量に応じた羽根の大きさの健康かざぐるまをつくり，取組のよさを交流する場の設定

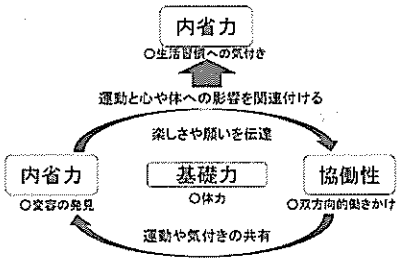
本時に最も重視する資質・能力

☆内省力（変容の発見）

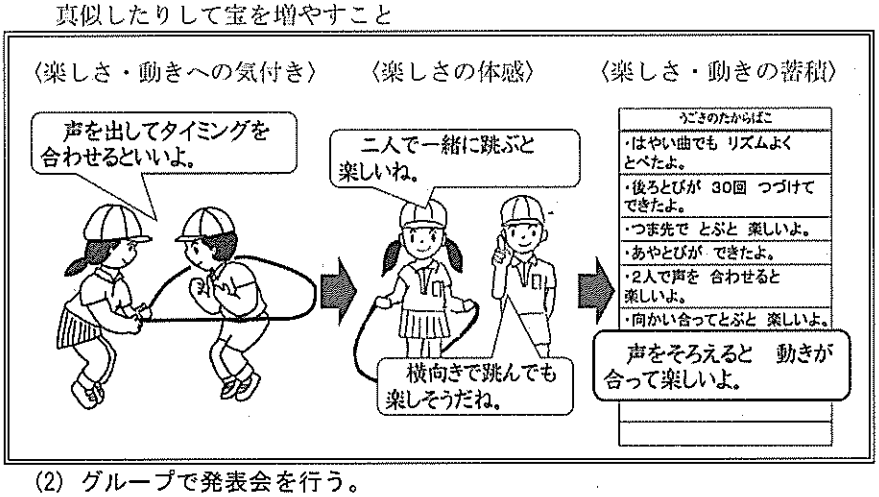
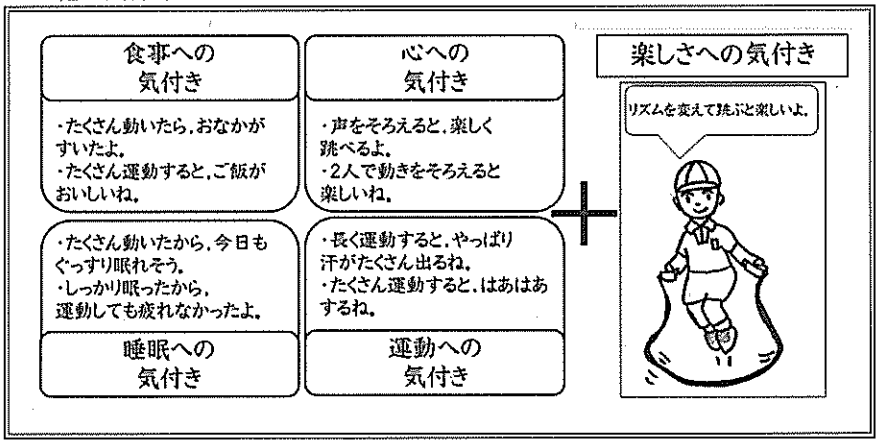
本時の活動を振り返り，運動することで心や体にどのような変化が起きたのか，運動の効果について自分なりの言葉で表現している姿。

- 縄跳びをすると，体がポカポカしてくるね。
- みんなで縄跳びをすると，気持ちがとても明るくなるね。
- 体をたくさん動かしたら，気持ちがすっきりするね。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（6／11時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1　縄跳びを行うことで起こった体への変化やできるようになったことを振り返り，本時学習でできるようになりたいことや頑張りたいことを話し合う。 ○　ペアや個人で現在できるようになった跳び方や見つけた楽しさから本時に取り組みたいことを見出し，宝を増やしたいという意欲をもつこと めあて 友だちと　なわを　たくさん　とんで　たからを　ふやそう。	※　本時に至るまでの流れ図や心や体への気付きがわかる学習プリントなどを基に，本時までの動きや気付きの積み上げがとらえられるようにする。
2　縄跳びを行い，動きの宝や気付きの宝を集める。 (1) 友達の跳び方のよいところを見つけ，真似をして遊ぶ。 ○　友達の跳び方を紹介し，よいところを見つけたり，楽しそうな跳び方を真似したりして宝を増やすこと  	※　多様な動きに取り組めるようにするために，モデルとなる児童を取り出し，よいところや真似したいところを全体で交流する。１人で行う遊びとペアで行う遊びに分けて取り出すことで，できる動きが増えるようにする。 ※　楽しさを共有できるようにするために，小グループ内でペアを交代しながら活動を行う。リズムなどを変えて楽しめる場を設定し，動きが高まるようにする。
(2) グループで発表会を行う。 ○　本時学習でできるようになったことや見つけた楽しさを交流し，自分や友達ができるようになったことをとらえること	
3　本時学習を振り返り，運動することによる心や体への変化を話し合う。 ○　縄跳びをして楽しかったことやできるようになったこと，心や体への変化に気付くこと  	※　本時学習でできるようになったことや楽しむために考えた動きを学習プリントや掲示物に気付きとして貯めていき，量の増大をとらえられるようにすることで，次時では「もっと宝を増やしたい。」などの意欲の高まりにつなげられるようにする。

第３学年２組　社会共創学習指導案

指導者　　藤　岡　太　郎

題材　つくろう！ともに生きるまち（Ａ自分と社会）

指導観

○　本題材は，地域にある福祉施設（ふくふくプラザ，ももち福祉プラザ）に通所する人々や働く人々の営みに関心をもち，具体的なかかわりづくりを通して，自分も市民の一員として，よりよい福祉型社会の実現に対する参画意識をもつことをねらいとしている。具体的には，①地域の福祉施設の分布や働き，設備に関心をもつこと，②福祉体験を通して，障害のある人々の暮らしやお世話する人々の仕事，思いや願いに共感すること，③障害のある人々との交流体験を通して，福祉型社会の実現に対する意識を高めることである。本題材は，地域の福祉施設に通所する人々とともに，交流や販売活動などの共働体験が可能であり，通所する人々がつくり出す製品の販路拡大の求めがあるため，連帯の意識や福祉社会の実現を創造する一員としての自覚を育む上で価値がある。

○　本学級の子供たちは，２学期題材「地域の人とともに！唐人町商店街」の学習において，唐人町商店街の活性化を図る取組に共働する体験を通して，地域にかかわる一員としての自覚を高めてきた。また，「みんなが住みよいまちに」の学習において，福岡在住の外国の人々の悩みに共感し，かかわりづくりを通して，住みよいまちづくりには双方向の主体的なかかわりが大切であることの理解を深めてきた。これらの学習を経験することにより，持続可能な社会の実現を目指す実践的な態度を身に付けつつある。そこで，人の心を推し量り，痛みや喜びを感じる共感能力が著しく成長するこの期に本題材を設定する。そして，ももち福祉プラザに通所する人々との共働体験を通して，ともに支え合う豊かな福祉社会を目指す態度を養いたい。

○　本題材の指導にあたっては，福祉型社会づくりの主体としての自覚と調和的な精神をもつことができるようにする。まず，「知る」段階では，かかわりづくり１を設定し，市の福祉施設の分布や働きを調べるとともに，福祉プラザに通所する人々の生活に迫る問いを設定させる。次に，「いどむ」段階では，かかわりづくり２を設定し，ももち福祉プラザの人々との交流を通して，働く意味をとらえさせる。さらに，通所する人々の製品の販路拡大の求めを聞く場を設定し，協力の可能性について話し合わせる。最後に，「かかわる」段階では，かかわりづくり３を設定し，唐人町商店街で食品を通所する人と一緒に販売する活動を通して，共に生きる社会への参画意識を高めさせる。

題材で育成する資質・能力

◎　通所する人々との共働体験や働く人々の思いをもとに，福祉社会の実現に向けた自分のかかわりを考えることができる。　（創造性：参画意識）

○　通所する人々の気持ちを推し量り，創造の喜びを味わうとともに，販路拡大に対する連帯の意識を高めることができる。（協働性：共生的態度）

◎　自分を高みにおいた意識ではなく，地域の一員として福祉社会の実現に向けた共生の意識をもつことができる。　（内省力：郷土愛）

○　福岡市の福祉施設の分布や働き，福祉施設に通所する人々の生活やお世話する人々の思いや願いをとらえることができる。（基礎力：社会認識）

題材の計画（全15時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　福岡市の福祉施設の分布や働きを調べ，ももち福祉プラザの見学の観点について話し合う。　⑤【かかわりづくり１】 ○　市の福祉施設の分布や働きをとらえ，ももち福祉プラザに通所する人々とのかかわりを深める方向をもつこと ももち福祉プラザに通う人々はどのような生活をしているのだろう。 ※　市の福祉施設の調査やももち福祉プラザに通所する人々がつくったクッキーの試食体験の設定
2　通所する人々の生活の調査や仕事の様子の見学を通して，働く意味について話し合う。 (1) 生活実態の調査と交流体験を行う。　⑤【かかわりづくり２】 ○　通所する人々の障がいや生活の理解とともにお世話する人々の思いや願いに迫ること ※　仕事の様子の見学や交流の場の設定 (2) 交流体験をもとに，働く意味や新たな課題について話し合う。　① ○　自立をキーワードに働く意味をとらえること 一生けん命作ったクッキーが売れるためにはどうすればよいだろう。 (3) 課題解決の方法について話し合う。　① 本時 ○　共働販売の方向性をとらえること ※　当事者から販路拡大の求めを聞く場の設定
3　通所する人々と作った食品を唐人町商店街で販売し，振り返りをする。③【かかわりづくり３】 ○　福祉型社会づくりへの参画意識をもつこと ※　ももち福祉プラザで製作したクッキーを唐人町商店街の一角を借りて販売する共働体験の設定

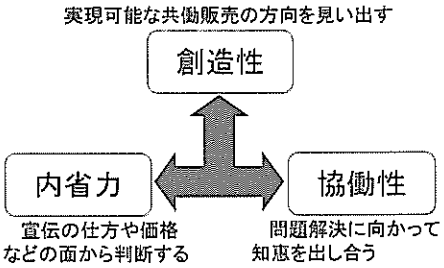
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性（参画意識）

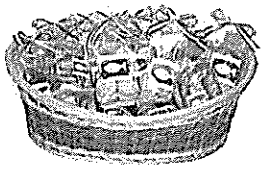
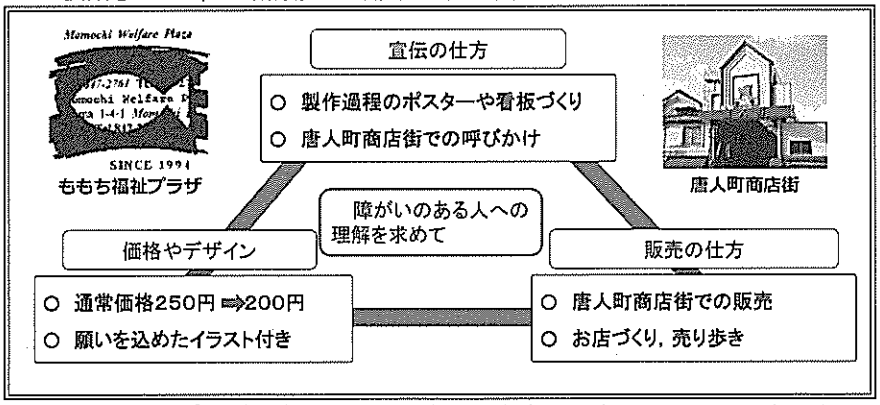
通所する人々が作ったクッキーを売るための方策を「宣伝の仕方」「価格」「販売方法」などの視点から検討し，「地域の方への障がい者理解」を主旨にした唐人町商店街での共働販売の方向を見い出す姿

・ 地域の人々に，ももち福祉プラザの方が一生懸命にクッキーを作る姿や自立を目指して働いていることを伝え，唐人町商店街の方に協力していただいて，共働販売を成功させたいな。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（12／15時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1 校内に設置したクッキー売り場の販売状況を知り，さらに売り上げを高めるための本時の追究課題について話し合う。 ○ 売り上げを高める方向について追究する見通しをもつこと めあて 通所の方々が作ったクッキーがもっと売れるようにするための方ほうについて話し合おう。	※ 研究発表会当日に校内の食品売り場に設置したクッキー売り場の販売状況を知らせることで，さらに売り上げを高めるための課題意識を高める。
2 販売しているクッキーの課題を調べ，「宣伝の仕方」「価格・デザイン」「販売の仕方」などの面から，売り上げを高める方策について話し合う。 (1) 販売していたクッキーを観察して予想し，売上げを高めるための方向性について話し合う。 ○ 「宣伝の仕方」「価格・デザイン」「販売の仕方」などの面から，クッキーの売り上げを高めるための方向をとらえること  「宣伝の仕方」・・どこで，販売しているのかがあまり知られていない。 「価格・デザイン」・・値段が高い。パッケージに工夫を加える。 「販売の仕方」・・目立つように売られていない。	※ 校内の食品売り場に設置したクッキーの実物を観察させ，課題を把握できるようにする。
(2) 売上げを高める方向性について，唐人町商店街の方の話をもとに，「地域の方への障がい者理解」の視点を盛り込んだ共働販売の方向性について話し合う。 ○ 唐人町阿商店街における共働販売の条件として，ももち福祉プラザの方の自立をキーワードに，「地域の方への障がい者理解」が主旨であることを前提にした，共働販売の可能性を見い出すこと  	※ 「宣伝の仕方」「価格やデザイン」の変更，唐人町商店街での「販売」の可能性について，ももち福祉プラザの安河内さんや唐人町商店街の方に直接交渉する場を設定することで，共働販売の具体的方策を検討できるようにする。
3 ももち福祉プラザの安河内さんや唐人町商店街の方から，共働販売に向けた期待や課題を聞き，次時の学習の方向について話し合う。 ○ 地域社会の一員としての自覚や共働販売に向けた参画意欲を高めるとともに，共働販売に向けた準備や役割分担が必要であることに気付き，次時の課題に対する見通しをもつこと	※ ももち福祉プラザの安河内さんや唐人町商店街の方から，共働販売に向けた期待を聞く場を設定することで，地域の一員としての自覚や連帯の意識を高めることができるようにする。

第４学年１組　言語文化学習指導案

指導者　竹本　学

題材　ピクトグラムが伝える言葉（Ｂコミュニケーション）

指導観

○　本題材では，説明文「くらしと絵文字」を読み，あらつの町（学校の地域）にある道路標識や公共の施設にあるピクトグラムの目的や意味を調べ，ピクトグラムがだれにでもすぐにわかる工夫があることをとらえることをねらいとしている。具体的には，①「くらしと絵文字」の内容や文章構成を読み取り，「あらつの町にあるピクトグラムはだれもがわかるものか調べよう。」という題材の課題をもつこと，②「便利」「楽しく」「安全に」「世界中の人々とのつながり」という観点で，あらつの町のピクトグラムを調べること，③ピクトグラムについて詳しい大学の先生などのＧＴの方に聞き，あらつの町のピクトグラムが何を伝えたいのかをとらえることなどである。つまり，本題材において，あらつの町にあるピクトグラムを扱うことは，自分の生活や，外国の文化と関連付けることができる上で価値がある。

○　本学級の子供たちは，既習題材「ことわざからの学びを伝え合おう」において，英語のことわざと比較しながら，日本語のことわざの価値をとらえ，好きな日本語のことわざについて友達と伝え合うことができた。また，「Let's read and sing "SUKIYAKI". ～みんなでつくる" SUKIYAKI" ソング～」では，「上を向いて歩こう」の歌詞を解釈し，解釈したことを基にして日本語の意味合いにより近い語彙や英語表現を考え，英語で歌詞をつくることができた。これらの学習で，日本語と英語の共通点や相違点についてとらえ，互いの考えを伝え合うことができた。しかし，非連続型テキストにおける日本と外国の共通点をとらえ，友達とその考えを伝え合った経験はほとんどない。

○　本題材の指導にあたっては，あらつの町のピクトグラムの目的や意味を調べ，ピクトグラムからどのようなことが伝わるのかについて考えることができるようにする。そのために，まず，「くらしと絵文字」の内容や文章構成を読み取る活動を位置付ける。その際，筆者の主張に着眼させる。次に，「便利」「楽しく」「安全に」「世界中の人々とのつながり」という観点であらつの町のピクトグラムを調べさせる。その際，チームで調べたピクトグラムの分類・整理を行えるように，付箋やシンキングボードなどの準備を行う。最後に，ピクトグラムについての考えの妥当性について評価していただける大学の先生などの話を聞く活動を位置付ける。

題材で育成する資質・能力

○　ピクトグラムの価値に気付き，あらつの町のピクトグラムの妥当性について考えをもち，発信しようとしている。　（創造性：課題発見）

◎　調べたピクトグラムの工夫について，本当にそれでよいのか何度も話し合い，友達と考えを高め合おうとしている。　（協働性：受容・伝達）

◎　ピクトグラムが様々な人々にも理解ができるという共通点があることをとらえることができる。　（内省力：言語観形成）

○　説明文「くらしと絵文字」の内容の中心や段落相互の関係を正確に読み取ることができる。　（基礎力：言語情報処理）

題材の計画（全15時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　題材の課題について話し合う。　⑤ ○　ピクトグラムにはどのような特徴があるのかとらえ，題材の課題をもつこと ※　「くらしと絵文字」の内容や文章構成を読み取る活動の位置付け あらつの町にあるピクトグラムはだれもがわかるものか調べ，自分たちの考えを伝えよう。
2　チームに分かれ，あらつの町のピクトグラムを調べ，その妥当性について話し合う。 (1) あらつの町のピクトグラムを調べる。　② ○　あらつの町にあるピクトグラムの特徴をとらえること ※　「便利」「楽しく」「安全に」「世界中の人々とのつながり」の４つの観点の提示 (2) 調べたピクトグラムを分類・整理する。　④ ○　ピクトグラムを分類し色や形，置かれている場所などの特徴をとらえること ※　シンキングボードの準備と資料「色さいとくらし」の提示
3　４つの観点で調べたピクトグラムの妥当性について話し合う。　④ 本時2/4 ○　様々な立場の人からあらつにあるピクトグラムの妥当性をとらえること ※　地域在住の方や大学の先生などのＧＴの話を聞く活動の位置付け

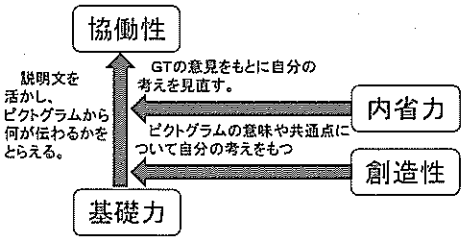
本時に最も重視する資質・能力

☆協働性（受容・伝達）

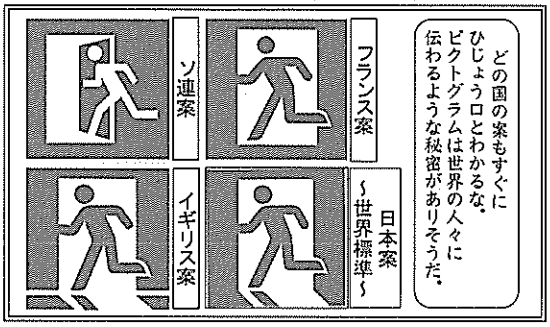
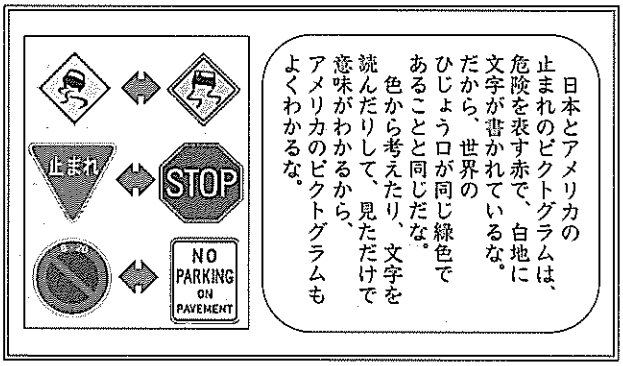
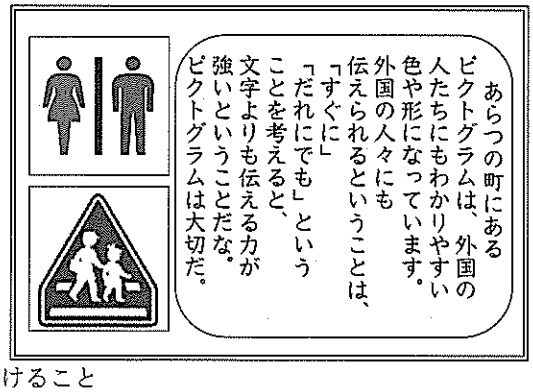
あらつの町にあるピクトグラムは，世界の人々がわかるように色や形などが工夫されていることをとらえることができる。

・ あらつの町にあるピクトグラムは，言葉がわからなくても色や形から，どのような意味なのかがよくわかるようになっている。だから，ピクトグラムは本当によくつくられており大切だ。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（13／15時）

学習活動と内容	創造主体を生み出す手だて
1 調べたピクトグラムの特徴や，本時のめあてについて話し合う。 ○ 世界の非常口のピクトグラム案の特徴の共通点（色，形，デザイン，大きさ，構成）に気付き，調べたピクトグラムが世界中の人々に伝わるようになっているのか考えたいという学習の見通しをもつこと  めあて 調べたピクトグラムが世界の人々にも伝わるのかについて話し合おう。	※ 前時までに，「くらしと絵文字」を読み取る活動，あらつの町のピクトグラムを調べ，分類・整理する活動を位置付けて，本時では，本時の見通しをとらえさせるために，1980年代の世界の非常口のピクトグラム案を提示し，子供たちやＧＴにその意味がわかるか問う。
2 アメリカの道路標識の特徴を読み取り，あらつの町にあるピクトグラムの妥当性について話し合う。 (1) 日本の道路標識と比較しながら，アメリカの道路標識の特徴を読み取り話し合う。 ○ 既習の説明文の内容と関連付けながら，色や文字から類推し，アメリカの道路標識の意味をとらえること  	※ 既習の知識を活用して，アメリカの道路標識の意味を色や文字から類推してとらえる力を発揮させるために，アメリカの道路標識を提示し，ＧＴから話を聞く活動を位置付ける。
(2) あらつの町にある様々なピクトグラムが世界の人々に伝わるようになっているのかについて話し合う。 ○ 外国人の立場で，あらつの町にあるピクトグラムの色や形などの特徴と，置かれている場所や数の妥当性をとらえ，「くらしと絵文字」の筆者の主張と関連付けること  	※ あらつの町にあるピクトグラムの色や形などの特徴と，置かれている場所や数が世界の人々とのつながりができるようになっているかについての妥当性をとらえるさせるために，「もしも文字の理解ができなかったら」というように外国人の立場に立たせ，ＧＴから話を聞く活動を位置付ける。
3 あらつの町にあるピクトグラムが，世界の人々に伝わるようになっているのかについて書きまとめる。 ○ あらつの町にあるピクトグラムは，言葉がわからなくても色や形からどのような意味なのかがよくわかるようになっているので，「くらしと絵文字」の筆者の主張と合っているととらえること	※ あらつの町にあるピクトグラムが世界の人々に伝わるように工夫されていることをとらえさせるために，ＡＬＴの話を聞く活動を位置付ける。

第５学年１組　自然探究学習指導案

指導者　永田裕二・二串英一

題材　未来へつなごう　エコロン池構想プロジェクト（Ｃ数理科学）

指導観

○　本題材では，黒メダカの理想の生育環境づくりを考え，実行，継続していこうとする態度を育てるために，科学的・数学的な知識・技能を組み合わせて，個人の仮説をもとに他者とともに理想の環境を追究していくことをねらいとしている。具体的には，①黒メダカと環境についての仮説をたて，検証を通して納得のいく考えをつくりあげること，②黒メダカと環境を考える上で，必要なデータをまとめること，③追究を通して自然環境の保全に寄与する態度を養うことなどである。つまり，本題材において，黒メダカの理想の生育環境づくりを多面的な視点で追究していくことは，第６学年の生物と地球環境や，中学校理科学習の生物の発生や食物連鎖の見方にもつながる点で価値がある。

○　本学級の子供たちは，Ｃ数理科学において，１学期「室見川ハザードマップをつくろう」，２学期「ビー玉コースターをつくろう」の学習を通して，条件を制御して実験を行う問題解決の能力や，複数の数量について割合の見方を用いながら，帰納的に考える能力を培ってきた。とくに「ビー玉コースターをつくろう」の学習においては，鉄球が飛ぶ距離を角度と高さを変えて，データを集め，統計処理を行いながら創造性を発揮することができるようになってきた。そこで，生物分野においても，創造性を発揮しながら黒メダカに適した環境についての見方や考え方を養うことができるようにしていく必要がある。そのために，第３学年「身近な自然の観察」（Ｂ自然）と，第４学年「調べ方と整理の仕方」（Ａ数理）の学びを関連させ，黒メダカに適した環境について仮説検証型の学習を仕組み，創造性を発揮する姿につなぐようにする。

○　本題材の指導にあたっては，創造性や協働性を中心とした資質・能力を育む手順として，①仮説検証，②データ分析，③再仮説，④再検証，⑤結果の考察を仕組み科学的な追究ができるようにする。そのために，まず10月に改修した校内の「エコロン池」とそこに棲む黒メダカについて，理想の棲みよい環境について考えさせる。次に，グループごとに理想のエコロン池構想をＧＴや資料分析，データ分析をもとに追究する。追究過程において環境保全として和白干潟の取組についても考えさせる。最後に，追究してきた構想を交流し，エコロン池構想をつくり上げ，実行，発信する。その後継続観察の必要性を交流し，命が未来へつながる環境づくりについて考えることができるようにする。

題材で育成する資質・能力

◎　黒メダカに適した環境に必要な条件についての仮説を立て，検証を繰り返し，エコロン池構想を実行しようとしている。（創造性：論理的思考）

○　黒メダカの理想の生育環境について，自分が調べてわかったことを他者に伝え，エコロン池構想をつくろうとしている。　（協働性：他者理解）

○　黒メダカの理想の生育環境について，自らの考えをもち，エコロン池構想を実現しようとすることができる。　（内省力：行動決定）

○　黒メダカの生育に適した環境に必要な条件を，継続的な統計データや，資料分析から見出すことができる。　（基礎力：科学的な知識・技能）

題材の計画（全16時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　黒メダカの理想の生育環境を話し合う。　④ ○　エコロン池の環境について考えをつくること ※　昔と今のエコロン池や貯水槽の様子の比較 黒メダカの命が未来につながるための，エコロン池の環境について考えよう。
2　黒メダカの理想の生育環境から，水質，微生物など，適した環境づくりを追究する。 (1) 理想の生育環境について仮説を立てる。　① ○　食物連鎖や，水の循環，産卵条件など，命をつなぐ視点で仮説を考えること ※　複数の考えを交流しながら幅広い追究を実現するための小グループ編成 (2) 黒メダカが何十年も生息する貯水槽とエコロン池の環境を比較し，課題を追究する。　⑧ ○　貯水槽の環境を調べることで，微生物の種類や微生物が発生する仕組みをとらえること ※　ミニエコロン池の活用や，子供の求めに応じたＧＴ，資料及び実験具，データグラフの活用
3　エコロン池構想を発表，実行する。 (1) 交流会をして構想をつくり上げる。　① ○　各グループの交流会を通して，適した環境には複数の条件が関連している考えをもつこと ※　ＧＴを交えたグループ交流と全体交流 (2) 構想を実行し，今後を話し合う。② 本時1/2 ○　今後の継続観察・調査について考えること ※　T1を実行，T2を調査のようにTTを効果的に活用した学習形態

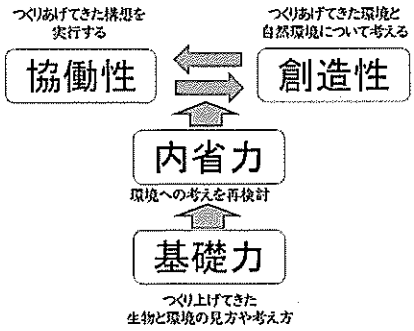
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性（論理的思考）

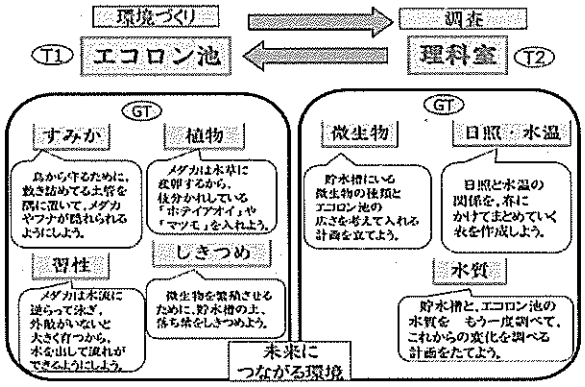
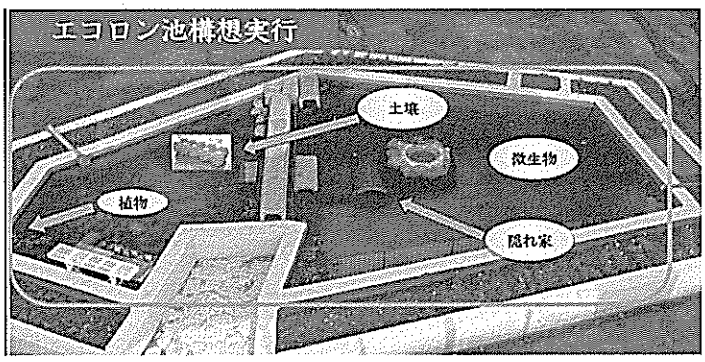
自分たちが実行している環境づくりと自然環境を比較し，今後も継続観察・調査していくことで，エコロン池構想が達成するということを考え，発言する姿

・　自然にある環境は長い年月をかけてできあがっているね。自分たちがしてきた自然環境に近づける環境づくりを，今後も継続的に観察や調査していくことで生物が棲める環境とエコロン池構想が意味があるものになると思う。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（15／16時）

学　習　活　動　と　内　容	創造主体を生み出す手だて
1　前時つくりあげた「学級エコロン池構想」を振り返る。 ○　エコロン池構想の目的，役割分担を明確にすること めあて　学級エコロン池構想を具体化し，成果と課題を出し合い，これからしていく環境づくりについて考えよう。	※　個人の役割，活動目的，活動場所を明確にするために，活動一覧表をもとに，全体で確認させ，エコロン池全体図を見ながら，水草や植物，底を敷き詰める場所を確認する。
2　学級エコロン池構想を実行し，成果と今後の調査内容について話し合う。 (1)「棲み家，植物，土壌，習性」はエコロン池で実行し，「微生物，日照時間，水質」は，理科室で調査する。 ○　黒メダカが生息，繁殖していくための水草の量，隠れ家の場所，微生物が繁殖する仕組みづくりなどをとらえ，実行すること  【活動の手順】 1　役割を明確にして，活動ごとに集まって行う。 2　T1，T2は子供の活動に合わせて支援する。 3　活動の必要に応じてＧＴに相談をして活動にのぞませるようにする。	※　水草の量や，植物の種類，微生物を繁殖させる仕組みなどを把握し主体的な活動になるために，各グループが調査してきたデータ及び資料を掲示しておく。
(2) 実行しての成果と今後の調査内容について話し合う。 ○　今後に必要な取組と継続データについて考えること  【実行】 ・植物 ・隠れ家 ・土壌 ・習性 【調査】 ・水質 ・水温 ・微生物	※　エコロン池構想を継続するために必要な継続データや，環境作りを共有するために，各取り組みの報告会を位置付ける。
3　実行した「学級エコロン池構想」を振り返り，つくりあげてきた環境と自然環境について話し合う。 ○　「学級エコロン池構想」を実行することで見えてきた課題と，環境保全に努める山本さんの話を想起し，今後も継続観察・調査していくことでエコロン池構想が達成するという考えをもつこと	※　黒メダカが生息，繁殖していく環境になっていることを評価し，　エコロン池の今後の環境について考えをもつために，和白干潟を守る会代表の山本さんの話を想起させる。

第５学年２組　言語文化学習指導案

指導者　　山　田　深　雪

題材　時と世界を超える，変身の物語（Ｃ創生）

指導観

○　本題材では，外面的な変身の物語を読むことを通して，外面（姿）が変わっても変わらない内面（心）の重みについて話し合い，読書の面白さを実感し「目標をもって読書をする」主体的な読書人を育てることをねらいとしている。具体的には，①自分の読書傾向を調べ，学習課題と課題解決の道筋について話し合うこと，②３つの変身の物語から１つを選び，課題を追究すること，③変身の物語の魅力や読書に対する考え方の変容から，これからの読書の在り方について話し合うことである。つまり，本題材において，変身の物語を扱うことは，これまでの国語科学習指導の現場において「読み取り教材」「読書教材」と区別されて指導してきたことを融合し，子供の読書生活から人格の形成に働きかける上で価値がある。

○　本学級の子供たちは，２学期題材「言葉でえがく未来（Ｂ：コミュニケーション）」において，プレゼンの作成と発表を通して聞き手に理解と感動をもたらす伝え方について追究してきた。学習の終末に全員で話し合って合意した「伝える際に大切にしたいこと（自信をもって伝える，話しやすい雰囲気をつくる，思いやりを反応で示すことの自分ができるところから実践する）」についても，日々ふり返りを行っている。しかし，プレゼンを作成する際，自分の考えを支える根拠を本や新聞などの活字から引用した子供が少なかった。これは，活字よりも映像や画像，図表の方が子供にとってわかりやすく，思考しやすい有益情報になっているといえる。そこで本題材では，言葉の奥深さや人物の心情描写を味わうことができる変身の物語を読むことを通して，文字言語を媒体として思考する面白さを実感させ，読書の在り方について考えを深めたい。

○　本題材の指導にあたっては，変身の物語を読むことを通して，主体的に読書に向かう態度を育むことができるようにする。そのために，まず，自分が読んでいる物語の傾向と物語の歴史を関係付けることで学習課題を設定させる。次に，心の深層が巧みに描き出された３つの変身の物語から，自分がじっくりと読みたい物語を１つ選択させて作品別チームを編制することで，選択した物語の魅力を主体的に追究させる。さらに，３つの変身の物語に共通する魅力を話し合う場を設定することで，着眼点をもって読むよさを実感させる。最後に，自分の読書に対する考え方の変容を交流することで，これからの自分の読書の在り方を見出させる。

題材で育成する資質・能力

◎　３つの変身の物語に共通する特徴を根拠に挙げながら，自分が考える変身の物語の魅力について伝えようとしている。　（創造性：分析・生産）

○　読んで考えたことを交流したり，異なる物語を読んだ友達と自分の考えを関係付けたりしようとしている。　（協働性：伝え合い）

◎　自分の読書に対する考え方の変容に気付き，これからの自分の読書の在り方を見出すことができる。　（内省力：自己認知）

○　内容（何が書いてあるか）と形式（どのように書いてあるか）に着目して物語を読むことができる。　（基礎力：言語情報処理）

題材の計画（全15時間）

学　習　活　動　と　内　容
１　自分の物語に関する読書傾向と物語の歴史を関係付けて，学習課題について話し合う。　③ ○　人や動物が変身する物語が多いことに気付き，変身の物語を読むことに意欲をもつこと ※　多様な時代や国々の変身の物語の提示 時と世界を超えて人々に親しまれている変身の物語の魅力を探ろう。
２　変身の物語を１つ選び，魅力を追究する。 (1) ３作品を読み比べ，読み深めたい「とっておきの物語」を選ぶ。　② ○　意志をもって「とっておき物語」を選ぶこと ※　心の深層を考えさせる３作品（「ビロードうさぎ」「山月記（現代語訳）」「かたあしだちょうのエルフ」）の教材化 (2) 作品別チームで内容と形式に着目して読み，変身の物語の魅力について話し合う。　⑦ ○　人物の内面を根拠に，自分が選んだ変身の物語の魅力を言語化し，伝え合うこと ※　物語の構造を端的にまとめるワークシート
３　変身の物語の魅力や題材全体を通しての自分の変容について話し合う。　③ 本時1/3 ○　時と世界を超えて人々に親しまれている変身の物語の様々な魅力に気付いたり，どのような読み手になりたいかを見出したりすること ※　３つの物語の構造を可視化できる板書及び学習を蓄積したポートフォリオ

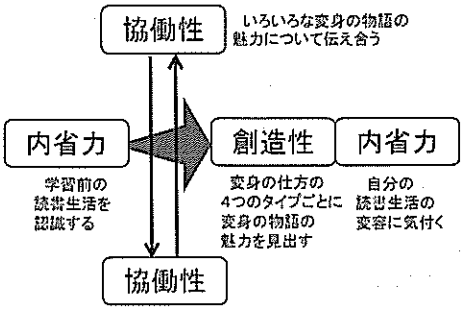
本時に最も重視する資質・能力

☆内省力（自己認知）

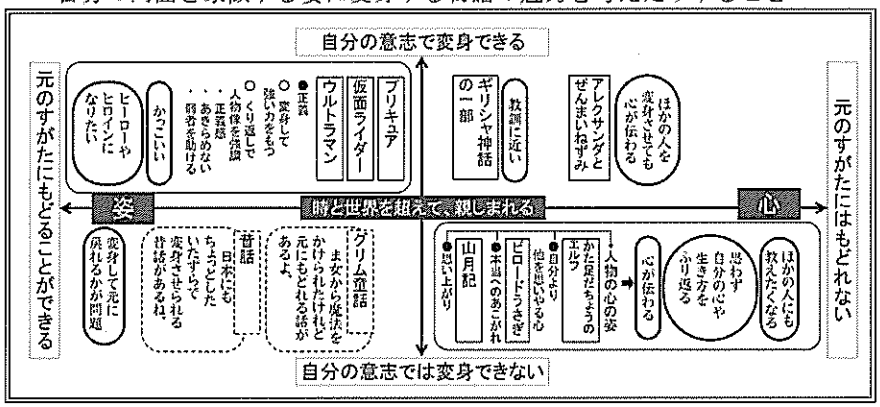
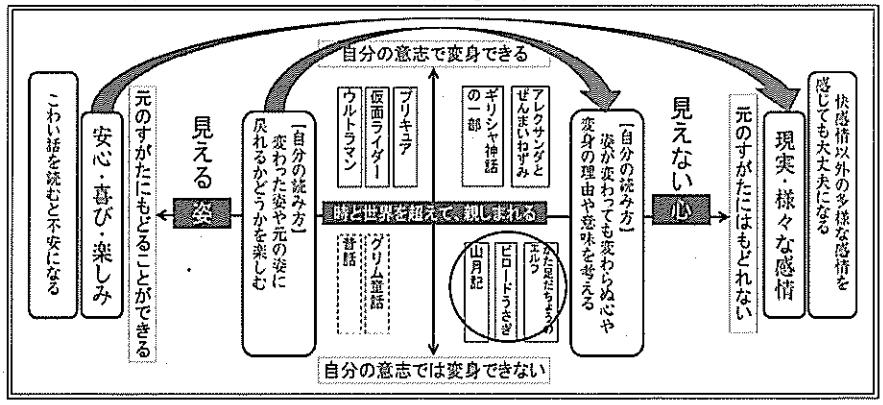
いろいろな変身の物語の魅力を見出し，自分の読書生活がよりよく変容していることに気付くことができる。

・　小さいころに夢中になったテレビの変身の物語では，変身した人物の活躍する姿が楽しみだった。しかし，３つの変身の物語では人物の心が変身の原因だったので，読んだ後に自分の心を見つめ，いろいろと考えた。変身後の姿から変身させた心へと，自分の物語の楽しみ方が変わってきていることに気付いた。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（13／15時）

学　習　活　動　と　内　容	創造主体を生み出す手だて
1　３つの変身の物語の魅力をふり返り，本時のめあてについて話し合う。 ○　３つの変身の物語が「変身の仕方」の１つの枠組みであることに気付き，他の変身の仕方の物語の魅力も話し合いたいという思いをもつこと めあて 時と世界を超えて親しまれている，変身の物語の魅力を探ろう。	※　他の変身の仕方の物語の魅力についても話し合いたいという願いをもつことができるように，４つの変身の仕方の分類のうち，３つの変身の物語は１部分にしか位置付いていないことをマトリクスで示す。
2　時と世界を超えて親しまれている変身の物語がもついろいろな魅力について話し合う。 (1) 変身の物語がもついろいろな魅力について，内容の視点から話し合う。 ○　自分の意志で毎回変身する物語の魅力を考えたり，自分の意志ではなく自分の内面を象徴する姿に変身する物語の魅力を考えたりすること  	※　多様な考えを整理し意味付けることができるように，変身の仕方の４つのタイプごとに，出された意見を整理しながら板書を行う。
(2) 変身の物語がもついろいろな魅力について，読者の視点から話し合う。 ○　変身自体の虚構を楽しんでいた低学年の頃と比べて，見えない心を見出したり，大切なことを自分で考えたりしながら物語を読めるようになってきた自分たちの「読み手としての成長」を見出すこと  	※　読書を通して自分たちが着目していることが，「見える出来事や姿」から「見えにくい人間の内面」に変化していることに気付くことができるように，可逆性（元の姿に戻れるか）に目を付けて，読み手の心情を対比的に考えさせる。
3　変身の物語を読むことを通して学んだことを100字程度にまとめる。 ○　変身の物語を読んで考えたことを伝え合う学習を通して，自分自身の読書生活が豊かに変容していることに気付くこと	※　自分の読みの変容に気付くことができるように，ポートフォリオで第１時に書いた「変身のイメージ」をふり返らせる。

第６学年２組　表現学習指導案

指導者　　山　口　由一郎

題材　和太鼓から広がるわたしたちの表現（Ｃともにつくること）

指導観

○　本題材では，和太鼓がもつ音の力を感じ取り，身体全体を使って表現するよさを味わい，友達とともに協力しながらストーリー性のある総合的な表現を目指すことがねらいである。具体的には，①和太鼓のリズムパターンを反復・繰り返しすることによって音楽をつくること②ストーリーがある和太鼓表現を創り上げること③掛け声や打音，打ち方の組合せを工夫すること④表現活動を通して自己の感覚を磨くことなどである。つまり，本題材において，創作和太鼓表現を扱うことは，様々な表現素材を駆使して１つの大テーマを表現する中で汎用的な能力を効果的に育むことができるという価値がある。

○　本学級の子供たちは，表現要素を工夫して創作和太鼓の音楽を構成し表現することで，自分の思いを表すことができてきた。また，思い切り打ち込むことによって表現する楽しさを味わってきた。しかし，自己の内面から思いを表出させイメージを満足いく形に表すことができなかったり，技能的に自分の意図通りに表現できなかったりすることもあった。これは，テーマにかかわる共通のイメージがもてなかったことや個の思いを表出される手だてが不十分であったことが原因として挙げられる。そこで，本題材において，互いの個の特質を活かしながら共通の目的に向かって，思いを出し合い，イメージを広げ，形にしていくことは協働性や創造性の視点からも意義深い。

○　本題材の指導にあたっては，多様な表現素材を組み合わせてチームの心象風景を表現するよさを味わい，ともに協力しながら，子供にとって意義深い価値の創造をすることができるようにする。そのために，まず，小学校生活の中で感じてきた喜怒哀楽の感情を和太鼓で表現できる可能性について交流させる。その際，自分が未来に残したい「今の思い」を言語化し，２学期の打ち方や体の動きの要素をもとに表し方のイメージを探る。次に，伝えたい「今の思い」を個の表現として表し，友達と組み合わせてチームの「心象風景」をストーリー化した創作和太鼓を創る。その際，起承転結の構成でイメージの共有化を図る交流活動や個の表現を組み合わせる活動を設定する。そして，チームの心象風景のストーリーを創作和太鼓の表現を通して創り出した喜びを味わわせる。その際，ビデオに撮影して振り返ったり，他チームによる評価を行ったりして，チームの価値ある表現になったことを実感させる。

題材で育成する資質・能力

◎　様々な表現素材の組み合わせの効果について論理的・批判的に考え，自分達にとって意義ある達成を得ようとしている。（創造性：創出的思考）

○　互いの考えを活かし，チームの心象風景が表れるように表現をつくり上げようとしている。（協働性：美的共感）

◎　創作和太鼓をつくる過程で，テーマと表現をつないで，自己の表現を追求することができる。（内省力：自己決定）

○　表現の方法を効果的に選び，イメージと要素をかかわらせ，自己の思いを伝えることができる。（基礎力：創造的技能）

題材の計画（全12時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　心が動かされた経験や思いを創作和太鼓でどのように表現できるか話し合い，計画を立てる。② ○　喜怒哀楽を心象風景として表し，新たな創作への意欲を高めること ※　残したい思いについての話合いの設定 小学校生活で心が動かされた経験や思いを創作和太鼓で表現しよう。
2　小学校生活の中で感じた喜怒哀楽の感情を心象風景として表した創作和太鼓を創る。 (1)　個の表現を合わせてチームの表現を創る。⑥ ○　個の感情を組み合わせてチームの心象風景のイメージを共有すること ※　個の表現を組み合わせるためのロート図の活用 (2)　チームの心象風景を，表現素材を組み合わせてつくる。　② 本時2/2 ○　「打音」「声」「身体の動き」「打ち方」の４つの視点と心象風景のイメージをつなぐこと ※　イメージと表現の関連を図るツールの活用
3　表現を記録に残し，自分たちの表現を創っていく過程で，よかったと感じたことを交流する。 (1)　ビデオで撮影する。　① ○　チームの表現を味わって演奏すること ※　チーム間と全体による交流活動の設定 (2)　表現の過程で感じたよさを交流する。　① ○　自分たちの表現のよさを再認識すること ※　表現ノートによる評価

本時に最も重視する資質・能力

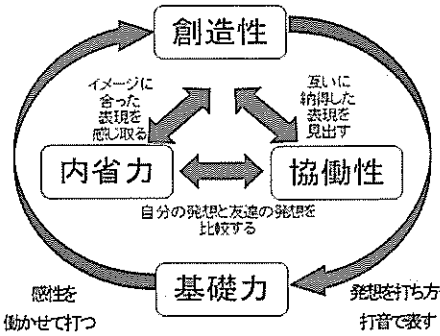
☆創造性（創出的思考）

打音（音色）や声，打法，身体の動きを組み合わせた効果について論理的に考え，チームにとって意義ある達成（新たな価値）を得る姿

・　修学旅行で見た琵琶湖の広大さをクロス打ちを大きく広げて打つことで表現していたところがよいなと思った。

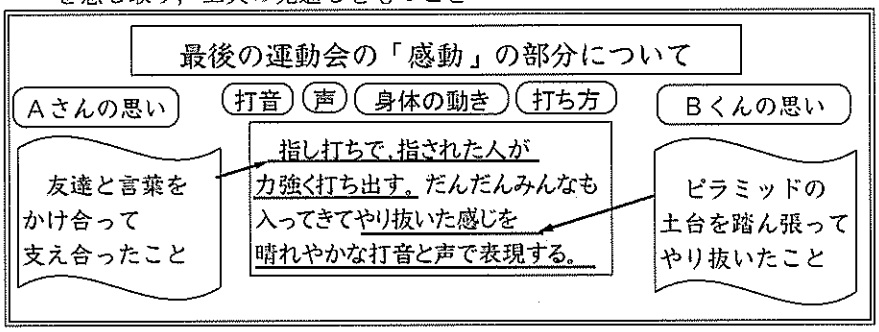
・　全チームの表現がそれぞれ工夫があって，「打音」を踏ん張ったような感情を表す深い音で打ち，「身体の動き」にも思いが加わったので，自分の表現がもっと好きになった。

子供が発揮する資質・能力の関係



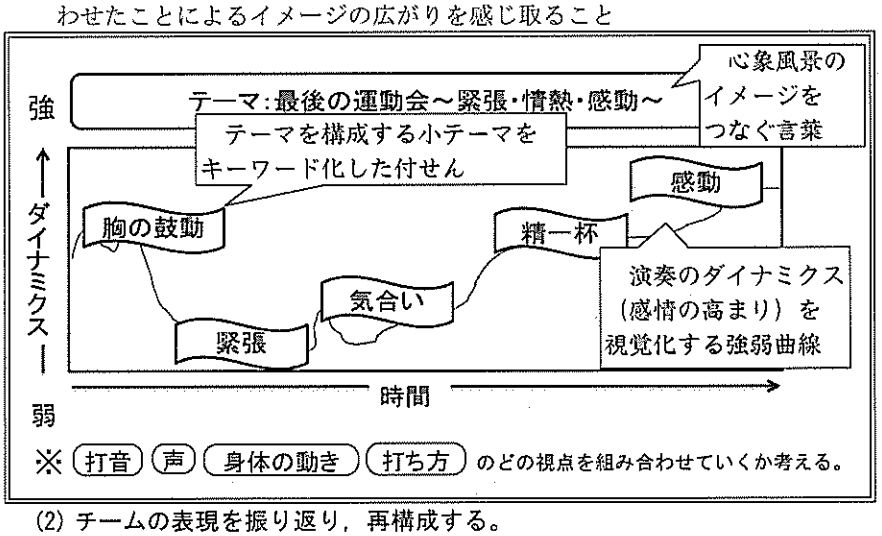
本時の展開（10／12時）

学　習　活　動　と　内　容	創造主体を生み出す手だて
1　前時の学習を振り返り，本時の課題を決める。 ○　チームの心象風景をイメージできる工夫の観点を複数組み合わせるよさを感じ取り，工夫の見通しをもつこと	※　本時課題の見通しをもたせるために，チームの表現のこだわりの部分を他チームに評価をもらう。



めあて
工夫の観点を組み合わせてよりよい表現につくり上げよう。

2　工夫の観点を組み合わせて，それぞれのチームの表現を再検討する。 (1)　つなぎの表現やチームの表現を練り上げる。 ○　「打音」「声」「身体の動き」「打ち方」の４つの視点の工夫を組み合わせたことによるイメージの広がりを感じ取ること	※　チームの表現を練り上げさせるために４つの視点を効果的に組み合わせて，ストーリーと表現の関連を図るツールを活用する。



(2) チームの表現を振り返り，再構成する。 ○　互いの特質や考えを活かし，和太鼓で伝えるテーマが表れるようによりよい表現を統合・再構成すること	※　相手の表し方の意図に納得し，自分自身の表し方に対する思いや考えと統合・再構成する力を発揮させるために，タブレットによるチーム内での客観的な振り返りを設定し，再構成の観点をもたせる。
3　つくり上げた表現を全員で交流し，表現の効果について感じ取ったことを話し合う。 ○　他チームの表現のよさと自分のチームの表現を比べ，共通する表現の効果のよさを感じ取ること	※　自分のチームの表現や他チームの表現から，表現の効果のよさを感じ取らせるために，４つの視点をマトリクスに表して交流させたり，実際に打って伝えさせたりする。

帰国子女学級　生き方学習指導案

指導者　菊竹一平・岡﨑教昭・杉本克如

題材　わたしたちの未来予想図（B自分とみらい）

指導観

○　本題材では，海外生活経験が価値高いものであり，自分自身を構成しているよさの一つであるということに気付き，自分に自信をもって生きていこうという態度を育むことをねらいとしている。具体的には，①自分の過去と現在について見つめ，未来について考えることで，メタ認知を行うこと，②海外生活経験がある人について調べたり，実際に出会って話を聴いたりすることを通して，海外生活経験の価値を認識すること，③互いの将来像について交流することで海外生活経験や考え方のよさについて認め合うことなどである。つまり，本題材において，自分自身に対する認識をもち，海外生活経験がある人の生き方に出会う活動を扱うことは，これまでの自分の人生や将来像を肯定的にとらえることができるという価値がある。

○　本学級の子供たちは，これまでの生き方の学習において，互いの海外生活経験について知り合い，そのよさを認め合うことができている。「エンジョイ！トラディショナルアート」では，日本の能の魅力に触れることを通して，自分の滞在国の伝統芸能にはどのようなものがあるか調べ，その魅力について自分の考えをつくった。そして，あらつフェスタにおいて，来場者にプレゼン発表やダンスなどを通してよさを伝えることができた。しかし，自分自身の海外生活経験が自分の人生にどのように影響しているのか，またこれからどのように影響していくのかを考えることはできていない。これは，自分の海外生活経験が自分にとってプラスとなっているということに対する認識をもつことが十分にできていないということの表れである。

○　本題材の指導にあたっては，自分の海外生活経験が自分の人生にとってプラスとなっていることに気付き，自分自身に自信をもって生きていこうという自己肯定感を高めることができるようにする。そのために，まず，過去と現在の自分について自己認識をもとにしてまとめ，将来像を具体的に表す活動を行わせる。次に，帰国子女学級の先輩など，海外生活経験を生かして活躍している人について調べる活動を設定する。さらに，自分の将来像をより具体化できるようにするために，互いが調べたことや感じたことを交流する場を設定する。最後に，互いが描く将来像について交流し，そのよさを共有し合うことで，互いの自己肯定感を高め，自分の海外生活経験に対する自信をもって生きていこうという考えをもつことができるようにする。

題材で育成する資質・能力

○　海外生活経験があるということのよさを自分自身で認識し，これからの自己の生き方とのつながりを見出そうとする。　（創造性：自己形成）

○　友達の海外生活経験や将来の夢に関する思いに対して自分が感じたことを相手に伝えようとしている。　（協働性：他者を尊重する態度）

◎　海外生活経験の生かし方や考え方について，自分に合うと思うものを選ぶことができる。　（内省力：意志決定）

○　海外生活経験を生かしている人についての情報の中から，自分の考えに関連のあるものを選ぶことができる。　（基礎力：探究力）

題材の計画（全18時間）

学　習　活　動　と　内　容
1　自分を見つめ，将来の夢について話し合う。⑥ ○　海外生活経験があるという現在の自分について，肯定的にとらえ，自分の将来像をもつこと ※　「自分史」と「わたしの解説書」，「未来予想図」づくり活動の設定 海外での生活経験は，これからの自分の生き方にどのようにつながるのか考えよう。
2　海外生活経験を生かしている人について調べたり話を聴いたりして，感じたことを話し合う。 (1) 海外生活経験を生かしている人について調べたり，実際に会って話を聴いたりする。　⑥ ○　海外生活経験がどのように生きていくのか，具体的にとらえること ※　海外生活経験を生かしている人の活用 (2) 調べて感じたことや，将来像について考え直したことについて話し合う。　② 本時2/2 ○　海外生活経験がある様々な人の生き方をもとにして，自分の生き方について見つめ直すこと ※　調べたことや感じたことを交流する場の設定
3　未来予想図発表会を開き，思いを伝え合う。 (1) 自分の未来予想図に付加や修正をする。　② ○　自分の現時点での将来像を具体化すること ※　最初の未来予想図への描き加え (2) 互いの未来予想図を発表し合う。　② ○　肯定的にとらえ，よさを共有すること ※　発表者に対する「励ましカード」の活用

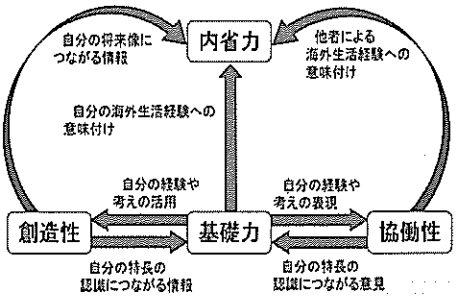
本時に最も重視する資質・能力

☆内省力（意志決定）

自分の将来像を見つめ直す際に，海外生活経験がどのように生かされていくのか考えることにより，今の自分から描きもっている将来像に向かうまでの生き方について具体的に考えることができる。

・　今までは，自分の滞在国での経験は楽しい思い出でしかなかったけれど，将来の自分の生き方につながる大切な経験になるかもしれないということがわかりました。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（14／18時）

学　習　活　動　と　内　容	創造主体を生み出す手だて
1　海外生活経験を生かしている人について調べたり，話を聴いたりする前の自分の海外生活経験に対する考え方について話し合う。 ○　海外生活経験があることに対する学習前の考え方が，どのように変わったか判断するための基準を設定すること めあて 滞在国での経験と自分の生き方が，どのようにつながっているのか話し合おう。	※　海外生活経験があることのよさを具体的に感じ取っていないことを感じ取らせるために，「わたしの解説書」に見られる記述の中から，数点選んで提示する。
2　海外生活経験がある人について調べたことや話を聴いて感じたことについて話し合い，自分自身の海外生活経験のよさを見つける。 (1) 海外生活経験がある人について調べたことや話を聴いて感じたことについて話し合う。 ○　海外生活経験が人の生き方に与える影響について，実際の人の生き方や考え方をもとにして，具体的にとらえること **海外生活経験とそれを活かしている人の生き方の例** Aさんの生き方：海外で生活したときに，その国の人々の温かな心にふれ，その国のよさを日本のみんなに伝える仕事がしたいと思った。 → 今は，海外旅行を扱う会社に就職し，世界中を飛び回って，様々な国のよさを見付けることができている。旅行プランづくりを通して，日本の人々に世界の国々のよさを伝えている。 Bさんの生き方：英語が母国語である国に長い間いたので，自然に英語を話す力が身に付いていた。英語を話すことは好きだった。 → 今は，アナウンサーをしている。身に付けた英語力を生かして，海外のニュースを見たり，海外の取材をしたりすることができている。海外での生活で英語の力が身に付いてよかった。 Cさんの生き方：日本人学校に行っていたので，現地の友達との触れ合いはほとんどなかった。でも，文化が日本と違い，驚いた。 → 今は，外国語が堪能なわけでもないし，特に外国で働きたいとは思わない。でも，世界には様々な文化があり，考え方も違うということは，体験できてよかったと思う。	※　自分の海外生活経験のよさを具体的に実感し，自信をもつことができるように，海外生活経験が語学力等の目に見える力の高まりに活かされている事例や，考え方に影響を与えている事例など，子供たちの発表について，様々な視点から調べたことを整理し，提示する。
(2) 自分自身の海外生活経験のよさについて考えたことを話し合う。 ○　自分自身の海外生活経験のよさを具体的にとらえ，価値高いものであるということに気付くこと **調べた人の生き方をもとにして自分の体験について考えている例** Aさんの生き方：人との触れ合いの経験が，今の生き方につながっている。 → ぼくの滞在国で，その国の友達と遊んだ経験は，自分にしかできない体験だし，楽しかった思い出を伝えられるのは，ぼくだけだ。 Bさんの生き方：海外で身に付けた力が，今の自分に役立っている。 → わたしも，3組のみんなと一緒に英語で話していると楽しいし，4年生との学習でも英語を通して仲よくなることができている。 Cさんの生き方：海外生活経験で，世界に対するものの見方が広がった。 → 3組給食のメニューを考えるのは楽しい。本場の味と日本人に合う味付けとの違いや国ごとの違いがあることがわかって，楽しい。	※　自分の海外生活経験が現在の学校生活でも価値高いものとして存在しているということに気付くことができるように，具体的な学校生活の場面を想起できる資料や，他の学級の子供たちからの３組の子供たちに対する言葉を映像で提示する。
3　自分の海外生活経験に対する考え方がどのように変わったか振り返り，感じたことを伝え合う。 ○　海外生活経験に対する自分自身の考え方の変容に，今の自分の生活から具体的に気付くこと	※　海外生活経験が貴重であり，これからの生き方に影響を与えるものであるということに気付かせるために，未来予想図を見直すことを提案する。

ふじ・さくら・梅組　合同生活単元学習指導案

指導者　中島卓哉，小林大介，大櫃玲子

単元　ふじ・さくら・梅組の　おわかれえんそくを　せいこう　させよう

指　導　観

○　本学級の子供たちは，これまでに七夕会やクリスマス会などの季節を扱った季節単元，あらつフェスタなどの行事を扱った行事単元，校舎の改築に伴い旧校舎とのお別れを扱ったトピック単元，校外学習での公共交通機関の利用，買い物の仕方や，出店することに向けての商品の作成や金銭の扱いなどを扱った課題単元において，合同で生活単元学習を行ってきている。その中で子供たちは，将来の生活につながる課題を設定し，学習に取り組み，それぞれの課題を解決しながらできることを増やし，自信をもって実生活に活かそうとすることができるようになってきている。しかし，各学級ごとに身に付けた力を活かそうとしたとき，それが役割分担の上で発揮されることはあっても，子供たちがかかわり合いながら課題を解決していく姿はあまり見られていない。これは，共生社会に生きる力を身に付ける上で，人とのかかわりによって生活を広げるという意識が薄いためと考える。

○　本題材では，将来の生活につながる課題を解決することで，生活を広げることができるようにすることをねらいとしている。具体的には，①おわかれ遠足に見通しをもって意欲的に計画を立てること，②課題の解決により自分にできることを増やすこと，③活動を振り返って達成感・満足感を味わうことなどである。おわかれ遠足に行くことは，共通のゴール像として目標意識をもつことができ，その達成に向けて公共交通機関の利用の仕方や施設の利用の仕方などについて段階をもって課題を設定することができる。つまり，本題材において，人とのかかわり合いの中でそれぞれが将来の生活につながる課題を解決し，自分でできることを増やしていく上で，共通のゴール像をもった異年齢で編制されるグループで課題を解決することは価値がある。

○　本題材の指導にあたっては，公共交通機関の利用や施設の利用などにおいてできることを増やし，実生活で活かすことができるようにする。そのために，まず動機段階では，ＶＴＲを見ることでおわかれ遠足の目的地について知り，自分たちも行きたいという目標をもたせる。次に，熱中段階では，おわかれ遠足に行くために必要な力を細分化して課題を設定し，その解決に向かわせる。その際，異年齢でグループを編制し，発達段階に応じた活動を仕組みながら，各生活年齢に応じた体験ができるようにする。最後に，発展段階では，実際におわかれ遠足に出かけることで，これまでの学習を活かすことができるようにするとともに，目標を達成できたことに満足感や喜びを味わうことができるようにする。

単元目標

○　おわかれ遠足に行くことに向かって，意欲的に公共交通機関や施設の利用について計画できる。　（むかう力）

○　これまでの学習を活かしたり，手順を守って丁寧に活動したりしながら，公共交通機関や施設の利用について自分にできることを増やすことができる。　（かかわる力）

○　達成感，満足感を味わい，自分の成長に気付くとともに，おわかれ遠足に活かそうとしている。　（かんじる力）

単元の計画（全13時間）

段階	動機段階	熱中段階	発展段階
学習活動と内容	1　おわかれ遠足に行くことについて話し合う。 ○　学習に対する意欲を高め，今後の学習に見通しをもつこと	2　おわかれ遠足に行くための計画を立てる。 乗り物に乗る練習をする。　② 本時2/2 ○　乗り物の中での過ごし方や乗り降りの仕方についてつかむこと 道路を歩く練習をする。　② 本時2/2 ○　信号の意味を理解したり道路の安全な歩き方について理解すること 公園での過ごし方を計画する。　② 本時2/2 ○　施設の利用について計画を立てること 3つの学習課題に3グループがローテーションで取り組む。	3　おわかれ遠足に行く。 ○　公共交通機関や施設などをこれまでの学習を活かして利用すること
手だて	※　おわかれ遠足に行きたいという意欲を高めるためのＶＴＲの準備	※　それぞれの生活年齢における課題に向かうことができるようにするためのグループ編制 ※　発達段階に応じた手順表の準備や場の構造 ※　個の実態に応じて意図的に対象（もの・ひと・こと）との出合いを位置付ける活動構成	※　目標達成に満足感や喜びを味わうことができるようにするための評価

本時の課題に対する1グループの実態（熱中段階2の(1)）

【生活上の課題についての実態】

第1層	第2層	第3層	第4層	①	②	③	④	⑤
くらす	公共施設	交通機関の利用	交通機関の名称を知ること	様々な交通機関を知る	電車やバスを知る			
			利用方法を知ること	料金を支払うことを知る	料金を支払う	交通機関を待つ	順番を守って乗る a児	マナーを考えて乗る d児
			目的地に行くための交通機関を知ること	最寄りの駅がわかる c児	必要な交通機関を知る	目的地まで利用する b児	遅延した際の対応方法を知る e児	

【人とのかかわりについての実態】

a児：上学年と行動することで，バス停やホームなどで乗り物を待って乗ることができる。

b児：上学年をモデルにすると，活動に自信をもって友達に声をかけることができる。

c児：友達と行動をともにすることで，目的の駅に到着したことに気付いて降りることができる。

d児：友達と確認し合うことで，自信をもって行動することができる。

e児：下学年に声をかけることで，乗り物に乗る流れやマナーを確認しながら行動することができる。

本時の目標

○ おわかれ遠足に行くことに向かって，意欲的に乗り物の乗り方の計画を立てることができる。（むかう力）

○ 手順を守って乗り物に乗ったり，目的の駅で降りたりすることができる。（かかわる力）

○ 乗り物に乗る練習ができたことに満足感や喜びを感じながら，おわかれ遠足に行くときに活かそうとすることができる。（かんじる力）

本時の展開（5／13時）　会場：体育館

学習活動と内容					手だて
1 おわかれ遠足に行くための計画を立てるというめあてについて話し合う。 ○ それぞれのグループごとに行う計画について知り，本時の学習に対する意欲を高め，見通しをもつこと めあて おわかれえんそくに いく ことが できる ように なろう。 のりものの のりかた ／ みちの あるきかた ／ こうえんでの すごしかた					1 本時のめあてを確認し，見通しをもつための配慮 ※ おわかれ遠足までの学習の流れを確認する場の設定
2 乗り物に乗っておわかれ遠足に行く。 (1) 乗り物に乗って座って過ごし，目的の駅で降りる。					2 乗り物の乗り方について理解し，乗ることができるようにするための配慮 ※ 乗車マナーや乗降する駅を確認するための掲示 ※ 乗り物の乗降や乗り物の中を想定できる模擬電車，ホーム等の準備 ※ 乗る順番や声をかける役割など生活年齢に応じた役割設定 ※ 重点課題を解決するための手順表
a児	b児	c児	d児	e児	
待って乗ること，空いている席に静かに座ること	目的地に向かう乗り物かどうか確認してから乗ること	待って乗ること，目的の駅で降りること	空いている席に静かに座り，目的の駅で降りること	時刻，行き先を確認して乗り，目的の駅で降りること	
(2) 他の乗客がいたり，通過する駅があったりなどがあっても，同じように乗り物に乗り，目的の駅で降りる。					
a児	b児	c児	d児	e児	
他の乗客がいても友達と協力してそのときの状況を把握し，手順を守って乗り物に乗ること	いくつかの乗り物が来ても行き先を確認して目的地に向かう乗り物を選んで乗ること	通過する駅があっても友達と協力してそのときの状況を把握し，目的の駅で降りること	他の乗客がいてもまわりの状況をよく見て空いている席を探して静かに座ること	通過する駅があってもまわりの様子やアナウンスをもとに判断して乗り物に乗ること	
3 乗り物の乗り方について振り返り，頑張ったことや気付いたことについて発表したり，他のグループの活動を聞いて次時のめあてについて知る。 ○ 乗り物の乗り方について練習したことを振り返り，達成感や満足感を味わうとともに，友達の発表を聞いて互いのがんばりやできたことを認め合いながら，次時の活動に対して意欲を高め，見通しをもつこと					3 実生活に活かそうとするための配慮 ※ グループ学習の成果を全体で共有する場の設定

本時の課題に対する２グループの実態（熟中段階２の(2)）

【生活上の課題についての実態】

第１層	第２層	第３層	第４層	①	②	③	④	⑤
くらす	健康・安全	交通安全	通行すること	道路の中央を歩かない	接近する自動車などに気を付ける c児	接近する自動車などを避ける a児		
			道路を横断すること	信号を確認する e児	左右を見て安全確認する	片手を上げて渡る	信号に従って渡る b児	
			信号や標識の守ること	歩行者用の信号を理解する	標識を理解する d児	様々な信号機を知る		

【人とのかかわりについての実態】

a児：上学年の声かけを聞くことで，接近してくる自動車や自分が歩く位置に気付くことができる。

b児：友達とともに行動することで，信号機を確認することや歩く経路に気付くことができる。

c児：友達の声かけを聞くことで，接近してくる自動車を把握しようという意識をもつことができる。

d児：下学年と行動することで上学年としての意識を高め，自信をもって行動することができる。

e児：友達とともに行動することで，安心して行動することができる。

本時の目標

○　おわかれ遠足に行くことに向かって，意欲的に道路の歩き方の計画を立てることができる。（むかう力）

○　安全に気を付けたり，信号や標識を守ったりして歩くことができる。（かかわる力）

○　計画通り道路を歩く練習ができたことに満足感や喜びを感じながら，おわかれ遠足に行くときに活かそうとすることができる。（かんじる力）

本時の展開（５／13時）　会場：１年ワークスペース

学習活動と内容					手だて
1　おわかれ遠足に行くための計画を立てるというめあてについて話し合う。 ○　それぞれのグループごとに行う計画について知り，本時の学習に対する意欲を高め，見通しをもつこと めあて おわかれえんそくに　いく　ことが　できる　ように　なろう。 のりものの　のりかた　／　みちの　あるきかた　／　こうえんでの　すごしかた					1　本時のめあてを確認し，見通しをもつための配慮 ※　おわかれ遠足までの学習の流れを確認する場の設定
2　最寄りの駅や目的の公園に向かって安全に歩く。 (1) 周りの状況や信号が青であることを確認して歩く。					2　道路の歩き方について理解し，安全に歩くことができるようにするための配慮 ※　道路上の目印や進行方向を確認するための地図の提示 ※　道路の歩行を想定できる道路や標識，信号等の設置
a児	b児	c児	d児	e児	
自分が歩く位置を確認して安全に気を付けながら歩くこと	信号が青であることを確認して指定された経路を歩くこと	接近する自転車や自動車に気を付けながら歩くこと	目印を頼りに安全に指定された経路を歩くこと	信号が青であることを確認して安全に横断歩道を渡ること	
(2) 自転車が接近してきたり，信号が赤に変わったりしても，安全に気を付けてまわりの状況や信号を確認しながら目的地まで歩く。					
a児	b児	c児	d児	e児	
自転車が接近してきても安全に気を付けながら自分が歩く位置を確認して歩くこと	信号が赤に変わっても青になるまで待ち，青になったことを確認して横断歩道を渡ること	自転車が接近してきても友達の声かけをもとにまわりの状況を確認して歩くこと	自転車が接近したり信号が赤に変わったりしても友達に声をかけながら目的地まで歩くこと	信号が赤に変わっても友達の声かけをもとに信号が青に変わるのを確認して歩くこと	※　道路側を歩く，道案内をするなど生活年齢に応じた役割設定 ※　重点課題を解決するための手順表
3　道路の歩き方について振り返り，頑張ったことや気付いたことについて発表したり他のグループの活動を聞いて次時のめあてについて知る。 ○　道路の歩き方について練習したことを振り返り，達成感や満足感を味わうとともに，友達の発表を聞いて互いのがんばりやできたことを認め合いながら，次時の活動に対して意欲を高め，見通しをもつこと					3　実生活に活かそうとするための配慮 ※　グループ学習の成果を全体で共有する場の設定

本時の課題に対する３グループの実態（熱中段階２の(3)）

【生活上の課題についての実態】

第１層	第２層	第３層	第４層	①	②	③	④	⑤
くらす	公共施設	公園や遊園地などの利用	公園や遊園地で遊ぶこと	遊ぶ場所を知る	順番を待つ a児	安全な遊び方を知る d児	公園を大切にする	目的に応じて利用する
			気に入った遊具で遊ぶこと	自分から進んで遊ぶ	順番を待つ	安全な遊び方を知る	遊具を大切にする	目的に応じて利用する b児 c児
			目的の切符を買って遊ぶこと	遊具利用券を買う	遊具利用券を利用する	順番を待つ	安全な遊び方を知る	
			自然や小動物に親しむこと	好きな動物に触る	自然を大切にすること			

【人とのかかわりについての実態】

a児：友達をモデルにしながら行動することで，マナーを守りながら遊具を正しく使用することができる。

b児：下学年と行動することで自信をもって行動でき，上学年と行動することでマナーに気付くことができる。

c児：下学年と行動することで高学年としての意識を高めて行動することができる。

d児：友達をモデルにしながら行動することで，自信をもって遊具を正しく使用することができる。

本時の目標

○ おわかれ遠足に行くことに向かって，意欲的に遊具の使い方の計画を立てることができる。（むかう力）

○ ルールやマナーを守って，遊具を使用することができる。（かかわる力）

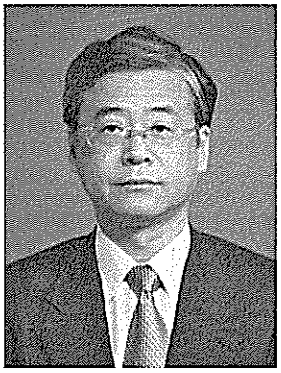
○ 遊具での遊び方について計画を立てられたことに満足感や喜びを感じながら，おわかれ遠足に行くときに活かそうとすることができる。（かんじる力）

本時の展開（５／13時）　会場：多目的室（ふじ・さくら・梅組教室）

学習活動と内容				手だて
1 おわかれ遠足に行くための計画を立てるというめあてについて話し合う。 ○ それぞれのグループごとに行う計画について知り，本時の学習に対する意欲を高め，見通しをもつこと めあて おわかれえんそくに いく ことが できる ように なろう。 のりものの のりかた ／ みちの あるきかた ／ こうえんでの すごしかた				1 本時のめあてを確認し，見通しをもつための配慮 ※ おわかれ遠足までの学習の流れを確認する場の設定
2 おわかれ遠足に向けて，自分たちで遊び方を決める。 (1) ルールやマナーを考えながら遊具で遊ぶ。				2 公園での過ごし方を考え，遊具を使用することができるようにするための配慮 ※ ルールやマナーを視覚的に確認できる看板等の設置 ※ 子供の自発的な遊びを促す遊具や場の設定 ※ 遊び方を教える，遊びに誘うなど，生活年齢に応じた役割や活動の設定 ※ 重点課題を解決するための手順表
a児	b児	c児	d児	
順番を守ることを確認しながら友達の働きかけを受け入れて遊ぶこと	ルールやマナーについて考えたことを守りながら友達と一緒に遊ぶこと	ルールやマナーを守りながらどのように遊ぶか考え友達に働きかけて遊ぶこと	ルールについて確認しながら友達の働きかけを受け入れて遊ぶこと	
(2) 他の利用者がいたり，使用不可の遊具があったりしても，ルールやマナーを守って遊ぶ。				
a児	b児	c児	d児	
他の利用者がいても友達と協力してそのときの状況を把握し，順番を守ることを確認しながら友達と遊ぶこと	他の利用者がいたり，使用不可の遊具があったりしても，ルールやマナーを守って友達に働きかけて遊ぶこと	他の利用者がいたり，使用不可の遊具があったりしても，まわりの状況を判断して友達に働きかけて遊ぶこと	使用不可の遊具があっても友達の声かけをもとに状況を把握し，ルールについて確認しながら友達と遊ぶこと	
3 公園での過ごし方について振り返り，頑張ったことや気付いたことについて発表したり，他のグループの活動を聞いたりして次時のめあてについて知る。 ○ 遊具の使い方について計画を立てたことを振り返り，達成感や満足感を味わうとともに，友達の発表を聞いて互いのがんばりやできたことを認め合いながら，次時の活動に対して意欲を高め，見通しをもつこと				3 実生活に活かそうとするための配慮 ※ グループ学習の成果を全体で共有する場の設定

未来創造講演会

未来を創造するカリキュラム開発の意義と課題



○　講師紹介

千葉大学　教育学部

教授　天笠（あまがさ）　茂（しげる）　先生

○　職歴等

1950年東京都生まれ。筑波大学大学院教育学研究科博士課程単位取得。専門は学校経営学，カリキュラムマネジメント。文部科学省教育研究開発企画評価協力者会議委員，中央教育審議会　初等中等教育分科会　教育課程企画特別部会主査代理などを務められ，特に最近では，次期学習指導要領改訂の方向性についてまとめられた『論点整理（平成27年８月）』のとりまとめにも携わる。

主な編著書

『学校経営の戦略と手法』ぎょうせい

『小中一貫教育のマネジメント』監修　ぎょうせい

『新たな学校課題とこれからのリーダーシップ』監修　ぎょうせい

『次期学習指導要領を見据えた学習と評価』監修　ぎょうせい

『子どもの心と体の健康を育む学校づくり』監修　ぎょうせい

『教師としての成長を図る学校づくり』監修　ぎょうせい

『地域との新たな協働を図る学校づくり』監修　ぎょうせい

『カリキュラムを基盤とする学校経営』ぎょうせい

研究紀要　目次

全体研究構想 …… 63

文部科学省研究開発学校指定（平成２７～３０年度　１年次）

未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅰ

－　未来創造型の資質・能力に基づく新領域構想　－

領域「言語文化」の構想・指導事例 …… 74

領域「自然探究」の構想・指導事例 …… 88

領域「社会共創」の構想・指導事例 …… 100

領域「表　　現」の構想・指導事例 …… 106

領域「健　　康」の構想・指導事例 …… 114

領域「生 き 方」の構想・指導事例 …… 128

「マイタイム」の構想・指導事例 …… 138

特別支援教育部構想 …… 142

文部科学省「インクルーシブ教育システム構築モデル事業」指定

共生社会に生きる力を身につけた子供の育成

－　課題単元に重点を置いた生活単元学習の指導を通して　－

平成27年度　全体研究構想

文部科学省研究開発学校指定（平成27～30年度　1年次）

未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅰ

－未来創造型の資質・能力に基づく新領域構想－

1　研究開発学校指定について

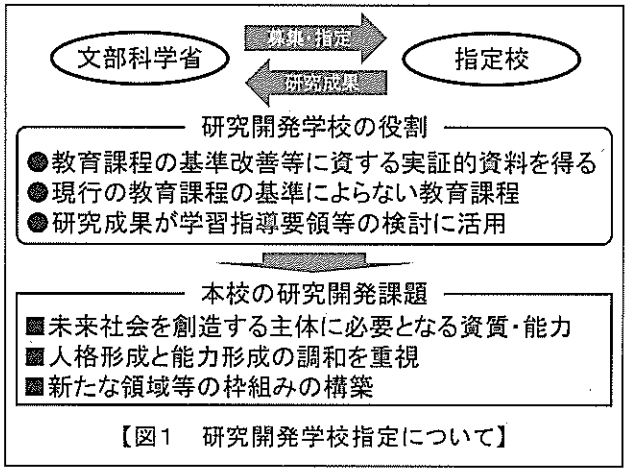
(1) 文部科学省研究開発学校とは

文部科学大臣の指定により，学習指導要領等現行の教育課程の基準によらない教育課程の編成・実施を認め，新しい教育課程や指導方法等について研究開発を行う学校である。研究開発学校における研究開発の成果は，これまでも学習指導要領の検討に活用されており，今後の教育課程の改善のためにも大変重要なものとなる。

本校では，文部科学省が募集する以下の課題に対して研究を進めている。

育成すべき資質・能力を重視した教育課程の編成等による新たな教科等の枠組の構築，教育目標・内容，指導方法及び評価の在り方に関する研究開発

この課題は，教育課程全体について，育成すべき資質・能力を柱とした各教科等の構成，教育目標・内容，指導方法及び評価の在り方（ルーブリック，パフォーマンス評価等）について各学校の創意工夫により様々な取組を求めている（図１）。



【図１　研究開発学校指定について】

(2) 本校の研究開発学校指定の系譜

本校では，これまでに文部科学省研究開発学校として研究をした実績があり，過去２度の研究開発では，「生活科」や「総合的な学習の時間」につながる研究成果をまとめてきた。これらの実績には，本校140年の研究の歴史が脈々と受け継がれてきており，本年度から取り組んでいる研究についても，これまでの財産を十分に生かしていくことは言うまでもない。

① 第１期：昭和58～61年度

低学年における社会科・理科の時間を廃止して，総合的学習を進める新しい教科の構想 → 感動体験を中核とした体験科の設定

昭和58年度からの第Ⅰ期には，研究主題を「自己実現の喜びを生み出す学習指導」とし，子供たちの直接的な体験を重視し，湧き出してくる感動を中核とする追究力の素地を培うことこそ大切であるという教育観を見出した。感覚を通して自然や社会の諸事象と触れ合う体験活動とその表現活動を内容とする，現行「生活科」へとつながる教科として，低学年「体験科」についての研究が進められた。研究の詳細については，本校著書『感動体験を中核とした「生活科」の授業づくり』（明治図書，1988）にまとめられている。

② 第２期：平成６～８年度

人間存在の原理に基づいた教科・領域の再編，統合及び内容の改訂 → 各教科及び表現科，生活環境科，領域「人間」

平成６年度からの第Ⅱ期には，研究主題を「生きる喜びを生み出す教育課程の創造」とし，21世紀をめざした教科・領域の再編，統合及び内容の改訂が行われた。ここでは，各教科等の研究成果の他，「表現科」「生活環境科」，領域「人間」が発表され，一人一人の子供の現実の姿にしっかりと目を向け，子供の姿から教育を出発させていくことを基本としている。そして，人間とは何か，これからの人間の在り方はいかにあるべきかという人間存在原理に基づいた研究が進められた。特に，領域「人間」については，現行「総合的な学習の時間」につながる研究がなされた。研究の詳細については，本校著書『21世紀の教科・領域への挑戦 新時代の授業を創る』（明治図書，1997）にまとめられている。

③ 第３期：平成27～30年度

未来社会を創造する主体に必要となる資質・能力を育成するため，人格形成と能力形成の調和を重視した教育活動を中核に据えた場合の新たな領域等の枠組みを構築する研究開発

↓

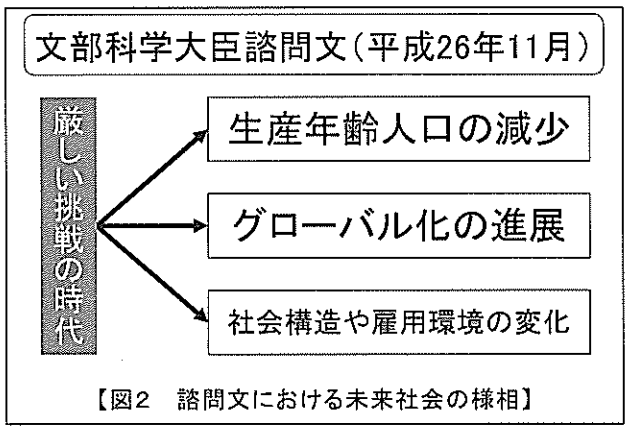
未来社会に必要となる資質・能力を「未来創造型の資質・能力」として独自に設定し，資質・能力から教科等の枠組みを見直し，新たな枠組みの構築

第３期となる本年度からは，研究主題を「未来社会を創造する主体としての子供の育成」とし，これからの時代に必要となる資質・能力の具体化と，その育成を可能にする教育課程の在り方について４年間の研究を進めていく。

2　本校が育成をめざす資質・能力像

(1) 教育界の動向

平成26年11月の文部科学大臣諮問文（中央教育審議会，2014）では，①教育目標・学習指導方法，学習評価の在り方を一体で捉える，②既存の教科・科目等の目標・内容の見直し，③評価方法の改善方策などが盛り込まれ，次期学習指導要領への見直しなどが中教審に諮られた。そこでは，子供たちが成人して社会で活躍する頃を「厳しい挑戦の時代」と表現し，そのために必要となる力についても明言されている（図２）。



【図2　諮問文における未来社会の様相】

ここから，目の前の子供たちの未来を楽観視することができないのは明らかである。また，学校教育において，時代の変化をとらえた教育について考えなければならないことについても読み取ることができる。

さらに，平成27年８月にとりまとめられた『教育課程企画特別部会　論点整理』（中央教育審議会，2015：以下『論点整理』）には，次のような一節がある。

> 学校教育に「外の風」，すなわち，変化する社会の動きを取り込み，世の中と結び付いた授業等を通じて子供たちにこれからの人生を前向きに考えさせることが，主体的な学びの鍵となる。

このことは，変化する社会の動きを学校教育へ積極的に取り込むことの必要性について示唆している。

(2) 近年の教育改革に対する本校の立場

厳しい挑戦の時代の到来を前に，子供たちに国際社会を生き抜く力を身に付けさせる研究を進めていくことは必要不可欠である。コンピテンシー重視の傾向に対する以下のような安彦（2014）の指摘は，本校研究にとって重要な意味をもっていると考えている。

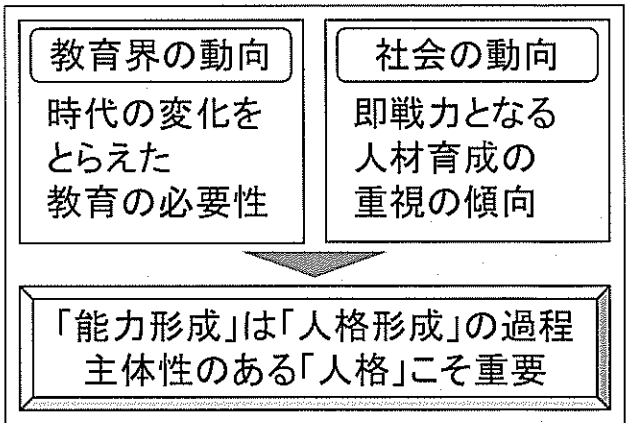
> 「自立した人格」を育てる上では協力・協働すべきであり，「未来の日本の主権者としての主体形成」の責任を共有しなければなりません。この点で，「コンピテンシー」に「主体的人格の形成」の視点が弱く，「能力」ばかりで「資質」の面への言及がその一部に部分的に含まれるだけで終わっている憾みがあります。あらためて「人格」の重要性を訴えます。

この指摘は，昨今注目されているコンピテンシー重視の学力論に対する警鐘であるととらえられる。このコンピテンシー重視の学力論においては，能力の中に人格的なものを入れようとする傾向が強く，その結果，能力にとって都合のよい人格性や道徳性のみが扱われるという状況をつくりだしてしまいかねない。

よって「能力形成」は，あくまでも「人格形成」の過程であり，教育の目的が人格の完成であることからも，学校教育においては人格形成こそ最重要視されなければならない。つまり，能力が人格に包み込まれるような構造でとらえることが大切になってくると言えよう。

一方で，諮問とほぼ同時期に経済同友会が教育への提言を出している（経済同友会，2014）。そこでは，これから必要になる教育として「自らの考えや意思を日本語で明確に伝える教育」「グローバル化に対応した教育」「社会の一員としての自覚や職業観の醸成を促す教育」を挙げ，グローバル化への対応に加えて，コミュニケーション能力の育成やキャリア教育の充実などについても教育界に対し求めていることがわかる。併せて，「コミュニケーション能力」「論理的思考力」「課題発見・解決力」などのほか，新たに「ストレス耐性」や「ストレスコントロール能力」等も求められるようになってきている。これらのことから，経済界では，企業即戦力となり得る質の高い能力をもつ人材を重視する傾向にあるとともに，そのような人材を育成する視点からの教育改革に期待をふくらませているものの，そこには子供を主体としてみるのではなく，客体として手段視する見方が見え隠れするのも否定できない。

そこで本校は，時代の変化に流されず，よりよい社会を創り出していく主体性のある「人格」を求める必要性を強く訴えていく（図３）。



【図3　人格形成を重視する本校研究の立場】

以上のことから，研究主題を「未来社会を創造する主体としての子供の育成」とし，「未来社会を創造する主体」に必要となる資質・能力の具体像やそれを効果的に育成するための新たな教育課程の在り方等について研究を進めていく。

3　未来社会を創造する主体としての子供を育成することの重要性

(1) 未来社会を創造するとは

厳しい挑戦の時代を生き抜いたり，そのような社会に適応したりするにとどまらず，自らの手で理想とする社会を切り拓き，多様な他者と豊かに関わりながらよりよい社会を創り出していこうとすること

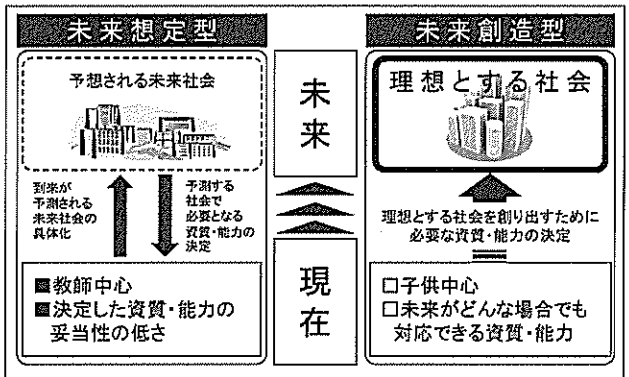
(2) 未来社会を創造する主体としての子供とは

未来は自分たちで創り出すものであると強く求め，能動的かつ主体的に生き抜き，自立した一人の人間として，多様な他者と協働することを通して，今日的な価値を再吟味したり，新たな価値を創造したりする資質・能力をもち合わせた子供

(3) 未来社会を創造する主体としての子供育成を重視する根拠

①　未来社会を予測することの困難さ

現代社会はめまぐるしく変化し続けている状態である。デジタル化が進む中で，新しい働き方，生活の仕方，学習の仕方などに対応して，情報を処理したり，コミュニケーションをとったりして，新しい知識を創造していくことに日々迫られているといえる。また，「2011年度アメリカの小学校に入学した子供たちの65％は，大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」というアメリカの研究者が発表した未来予測の研究結果も注目されている。これらのことから言えることは，これからの社会の変化は，今まで以上に劇的で激しいということである。したがって，未来社会を予測することは非常に難しく，予想通りの未来が到来することなど，ほとんどないと考えてよい。そこで，「未来はこうなりそうで，その社会で必要とされると思われる資質・能力はきっとこうなるだろうから，それを子供に獲得させよう」という未来想定型の資質・能力を育成するのではなく，自らの手で理想とする社会を切り拓き，創り出していくような未来創造型の資質・能力を育成していくことの方がより重要であるとの立場に立っている（図４）。

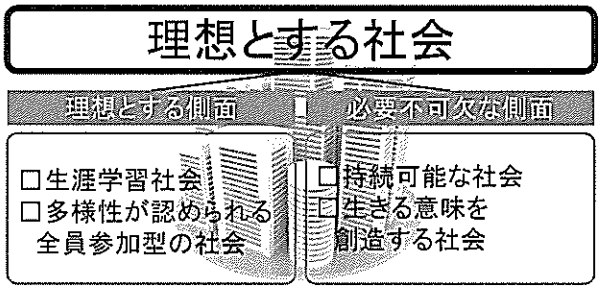


【図4　未来想定型と未来創造型の違いについて】

したがって，私たち教師が到来するであろう未来社会を想定し，そのために必要となる資質・能力を決め，それらを子供たちに獲得させようとする教師主体の発想では「未来社会を創造する主体」を育てていくことはできない。「未来社会を創造する主体」はあくまでも子供であることから，子供一人一人が自分の未来への可能性を信じ，社会参画を果たそうとする原動力を育成することが大切になってくるのである。

②　「理想とする社会」とは

変化を予測することが困難な時代を前にして，図４にある「理想とする社会」が具体的にどのような社会であると考えればよいのであろうか。「理想とする社会」について，どのような形で存在するのかを，私たちは予め知ることはできないものの，子供たちに育成をめざす資質・能力が，自らの手で「理想とする社会」を切り拓くことを可能にする性質のものであるからには，私たち教師が，子供たちにどのような社会を創り出すことを願っているのか立場を明確にする必要がある。そこで，本校では，「理想とする社会」を理想とする側面と必要不可欠な側面の２つで整理した（図５）。



【図5　本校が考える「理想とする社会」について】

「理想とする側面」にある，「生涯学習社会」は「生涯学習の考え方を基礎にして，豊かで活力ある社会や人間関係を築いていくためのモデルとなる社会像」のことであり，そのような社会の構築がめざされ，様々な場や機会等の基盤整備が行われているところである。この実現に当たっては，「多様性が認められる全員参加型の社会」が基盤になくてはならない。

一方，「必要不可欠な側面」にある，「持続可能な社会」については，「環境」「経済」「人間・社会」のバランスがとれた社会のことである。有限な地球環境の中で，環境負荷を最小にとどめ，資源の循環を図りながら，地球生態系を維持していくことが急務とされている。また，「生きる意味を創造する社会」については，一人一人が自分自身の生きる意味を創造する社会のことであり，時代の変化に伴って，今後より一層「何のために生きるのか」と考えることは，必要不可欠になってくる。

以上のような，「理想とする社会」を創り出していくことを可能にする資質・能力を身に付けた子供の育成をめざすのが本校研究の目標である。

3　未来創造型の資質・能力とは

(1) 資質・能力についての動向について

松下（2010）は，1990年代以降，様々な形で提唱されるようになった能力を「新しい能力」と呼び，それらについて表１を示している。

【表１　〈新しい能力〉日本の場合】

名称	機関・プログラム	年
【初等・中等教育】		
生きる力	文部科学省	1996
リテラシー	OECD－PISA	2005－15(3年おき)
人間力	内閣府(経済財政諮問会議)	2003
キー・コンピテンシー	OECD－DeSeCo	2003
【高等教育・職業教育】		
就職基礎能力	厚生労働省	2004
社会人基礎力	経済産業省	2006
学士力	文部科学省	2008
汎用的技能／分野別	OECD－AHELO	2010－12試行試験
【労働政策】		
エンプロイヤビリティ	日本経営者団体連盟(日経連)	1999
【成人一般】		
成人力	OECD－PIAAC	実施中

（松下，2013aをもとに作成）

我が国では，1990年代になり，「知・徳・体」のバランスを重視した「生きる力」という概念が登場し，その後「人間力」や「社会人基礎力」などの能力が教育目標として掲げられるようになってきた。この表を見てわかるように，今，我が国の教育は多様な能力観で溢れている現状がある。教育の現状をみてみると，教科等の知識を習得する「何を知っているか」への関心が未だに主流であり，知識を活用して「何ができるのか」に対応した教育への移行は，進んでいるとはいえない。その点について，諸外国に目を向けて見ると，コンピテンシーの概念が，それぞれの国の教育改革に大きな影響を与えるようになっている。諸外国における資質・能力をまとめたものが表２である。

【表２　諸外国の教育改革における資質・能力目標】

OECD(DeSeCo)		EU	イギリス	オーストラリア	ニュージーランド	アメリカ合衆国
キーコンピテンシー		キーコンピテンシー	キースキルと思考スキル	汎用的能力	キーコンピテンシー	21世紀型スキル
相互作用的道具活用力	言語，記号の活用	第1言語 外国語	コミュニケーション	リテラシー	言語・記号・テキストを使用する能力	
	知識や情報の活用	数学と科学技術のコンピテンス	数字の応用	ニューメラシー		
	技術の活用	デジタル・コンピテンス	情報テクノロジー	ICT技術		情報リテラシー ICTリテラシー
反省性(考える力) (協働する力) (問題解決力)		学び方の学習	思考スキル (問題解決) (協働する)	批判的・創造的思考力	思考力	創造とイノベーション 批判的思考と問題解決 学び方の学習 コミュニケーション コラボレーション
自律的活動力	大きな展望	進取の精神と起業精神	問題解決 協働する	倫理的理解	自己管理力	キャリアと生活
	人生設計と個人的プロジェクト					
	権利・利害・限界や要求の表明	社会的・市民的コンピテンシー 文化的気づきと表現		個人的・社会的能力 異文化間理解	他者との関わり参加と貢献	個人的・社会的責任
異質な集団での交流力	人間関係力					
	協働する力					シティズンシップ
	問題解決力					

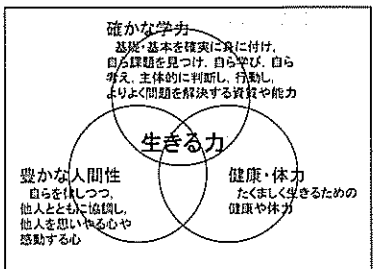
（国立教育政策研究所，2013をもとに作成）

諸外国では既に，21世紀型スキルやコンピテンシーをめざした教育改革を進める方向へと大きく舵を切っているところも多い。OECDのキー・コンピテンシーや21世紀型スキルなどの動きを背景としながら，国レベルで今日的な資質・能力を定義して，それらの育成を目標に教育のシステムをデザインしようという動きが世界的な潮流となっている。これらのことからも，資質・能力の育成をめざす教育課程の在り方に関する研究を進めることは，今後ますます重要になってくる。

(2) 未来創造型の資質・能力の背景

①　現行学習指導要領の理念:「生きる力」

現在の学習指導要領は，子供たちの現状をふまえ，「生きる力」を育むという理念のもと，知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視している。この「生きる力」は，1996年の中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」が初出であり，1998年改訂及び2003年改訂の学習指導要領にも登場している（図６）。



【図6　「生きる力」の要素】

中でも，1998年改訂では，「総合的な学習の時間」が設定された点に大きな特徴が見られ，従来の教科の知識体系による縦割り型の学力に対して，それを横断的に総合科して課題対応型の学力を身に付けさせることがめざされた。言わば「知の総合化」と「知の主体化」とを志向し，教育課程全体の構造について視野に入れた改革であったと考えられる。つまり，「生きる力」の理念実現のためには，教育課程の編成を抜きにして考えることはできないのである。

②　『論点整理』の「3つの柱」

『論点整理』は，これまでの学習指導要領改訂の際には，なかったものであり，次期学習指導要領の骨組みや設計図的なものであると考えてよい。

育成すべき資質・能力について『論点整理』では，学習する子供の視点に立ち，以下のような３つの柱で整理している。

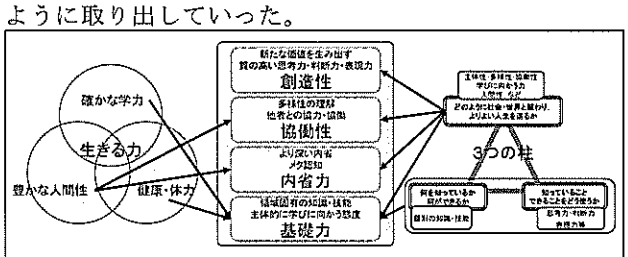
ⅰ）「何を知っているか，何ができるか（個別の知識・技能）」
ⅱ）「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」
ⅲ）「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（人間性や学びに向かう力など）」

ⅰ）は，各教科等に関する個別の知識や技能などの，一般的に基礎的・基本的な知識・技能と呼ばれるものであり，身体的技能や芸術表現のための技能等も含むとされている。ⅱ）は，問題を発見し，その問題を定義し解決の方向性を決定し，解決方法を探して計画を立て，結果を予測しながら実行し，プロセスを振り返って次の問題発見・解決につなげていくこと（問題発見・解決）や，情報を他者と共有しながら，議論することを通じて互いの考え方の共通点や相違点を理解し，相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして，協力しながら問題を解決していくこと（協働的問題解決）のために必要な思考力・判断力・表現力等とされている。ⅲ）は，ⅰ）及びⅱ）の資質・能力を，どのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素で

あり，情意や態度等に関わるものが含まれる。主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や，自己の感情や行動を統制する能力などの，いわゆる「メタ認知」に関するものでもある。この中には，多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力，持続可能な社会づくりに向けた態度，リーダーシップやチームワーク，感性，優しさや思いやりなど，人間性に関するものも含まれている。このことからも，この論点整理の３つの柱は，「個別の知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」が基盤となり，それらの上に「主体性・多様性・協働性・人間性など」が位置付けられている構造としてとらえられる。

③ 「生きる力」と『論点整理』から導き出された未来創造型の資質・能力

本校では，「生きる力」と『論点整理』の「３つの柱」をもとに，子供たちの20年後，30年後の未来社会を視野に入れ，そこで必要となる資質・能力を図７のように取り出していった。



【図7 「生きる力」と「3つの柱」から導き出した資質・能力】

そして本校では，この４つの資質・能力を「未来創造型の資質・能力」と呼び，それぞれの資質・能力について以下のように概念規定した。

自らの手で理想とする社会を切り拓き，創り出していくことを可能にすると同時に，どのような未来社会が到来したとしても通用するであろう資質・能力のことである。

基礎力とは，進んで学ぼうとする意志や欲求，それぞれの領域の中で身に付けていく必要のある知識・技能，思考力，判断力，表現力等のことである。実生活の中で生じる事象を把握したり，自分の思いや考えを効果的に表現したりできるようになるためには，この基礎力が発揮されることが大切になってくる。４つの資質・能力の中でもっとも基礎的な能力概念である。

内省力とは，自分の行い方や在り方を深く省察し，あるべき自分の姿を確かに思い描き，実現しようとする能力のことである。この内省力には，自分自身をモニターしコントロールする「メタ認知」も含まれている。あらゆる生活場面で，自分自身を省察することは大切なことである。この内省力は，人格形成に強く棹さす能力であるととらえている。

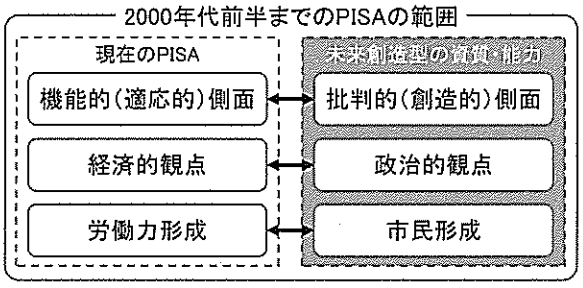
協働性とは，多様性を認め，自分の責任や役割を果たしながら，他者と協働することについて積極的に関わっていこうとする態度や特性のことである。今後は，様々な言語や文化，価値観をもつ人々との交流や協働の機会が一層増えることが予想され，考えの異なる他者と対話できることや，対話を通じて自分の考えや社会をよくしていくことが必要となってくる。協働性は，主体的社会参画の基盤となる資質であると考えている。

創造性とは，異質の情報やものを今までにはない方法で結び付けたり，新たな価値を創り出そうとしたりする態度や特性のことである。質の高い思考力等もこの中に含まれている。知識を基盤に新しい答えや価値を生み出していくことが今後求められる社会において，創造性を育成することは必要不可欠となってくる。誰かが答えを出してくれるのを待つのではなく，主体的に応えをつくり出す上で重要になる資質であると考えている。

本校では，この４つの資質・能力が相互作用しながら高まっていくことを想定している。そのように考えるのは，資質・能力が，単独で教えることができないものであると同時に，内容を伴う文脈で使って育てていくものであるとされているからである。

④ 未来創造型の資質・能力の可能性

ここで，本校の未来創造型の資質・能力の可能性を明確にするために，昨今関心の高まっているPISAリテラシーとの比較を試みる。松下（2013b）は，PISAがこの10年の間に，教育的視野を狭めてきていることを危惧している。具体的には，現在のPISAが「〈機能的（適応的）側面－批判的（創造的）側面」「経済的観点－政治的観点〉，〈労働力形成－市民形成〉」といった対立軸のうち，前者のみが肥大化しているということである。PISAの教育的視野を広げていくためには，後者の側面・観点・目的を取り戻していくことが必要であり，このPISAへの批判に対して，本校の未来創造型の資質・能力は十分応えることができると考えている。それは，先に述べた対立軸の矮小化している部分に対して，本校が，未来創造型の資質・能力で規定している４つの資質・能力が密接なつながりがあると考えている点である（図８）。



【図8 PISAと未来創造型の資質・能力の関係】

4　未来創造型の資質・能力に基づく新領域構想とは

(1) 新領域構想の基本的な考え方

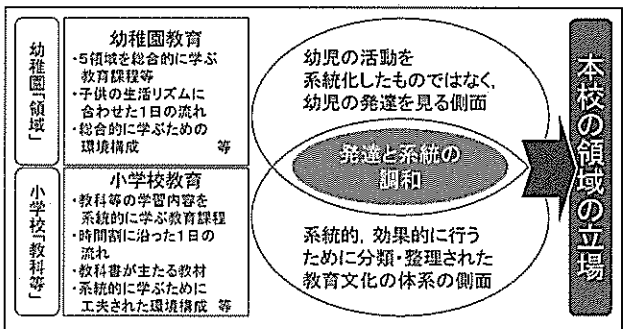
①　教科分化論の限界

教育課程は，教育者が社会に存在する文化の中から次世代に伝えたい内容を選びとることによって編成される。予測できない未来社会の到来を前にして，果たして子供たちに必要な文化とは何か，またそれはどのように組織されるべきであろうか。そこで，本校では，教科分化論の限界から新領域が求められる背景を次の３点で整理した。

- 教科分立のカリキュラムでは，統一した人格形成は難しい面もある。その結果，各教科内容を教えておけば，それらは子供たちの中で統合されるだろうと考えてしまうことにつながっている。
- 子供たちの学習を活性化するためには，教科枠に閉じ込められた系統学習では限界がある。
- 「現代的課題」は，教科の枠組みを超えて，総合的な取組を要求している。

②　幼稚園教育における「領域」との関連

先に述べた教科分化論の限界から，新たな教育課程を考えていった場合，幼稚園教育の「領域」の考え方を参考にする。幼稚園教育では，５つの領域をもとに，発達にとって必要な経験が得られるような状況づくりを大切にし，幼児期にふさわしい生活が展開されるように意図されている。



【図９　「領域」の考え方についての本校の立場】

本校の新たな教育課程でも「領域論」の立場をとるが，幼稚園教育とは性質が異なっている。本校の仮設設定しようとしている「領域」は，図９のように，発達と系統の調和をめざしている。

(2) 新領域を仮説設定するための手続き

本校では，「言語文化」「自然探究」「社会共創」「表現」「健康」「生き方」と「マイタイム」を仮説設定している。新領域を仮説設定する手順は次の通りである。

【新領域を仮説設定するまでの手順】

① どのような社会的背景，文化的背景，歴史的背景に基づきその現行教科等が成立したのか明らかにする。

↓

② 現行教科等の学習内容を「創造性」「協働性」「内省力」「基礎力」と照合し，そこから明らかになった重点的な資質・能力を決定する。

↓

③ 必要となる内容について，「現行教科等の課題」「現行教科等の学習内容の充実・発展」「今後解決が必要とされる教育課題」などをもとに内容設定の視点とする。

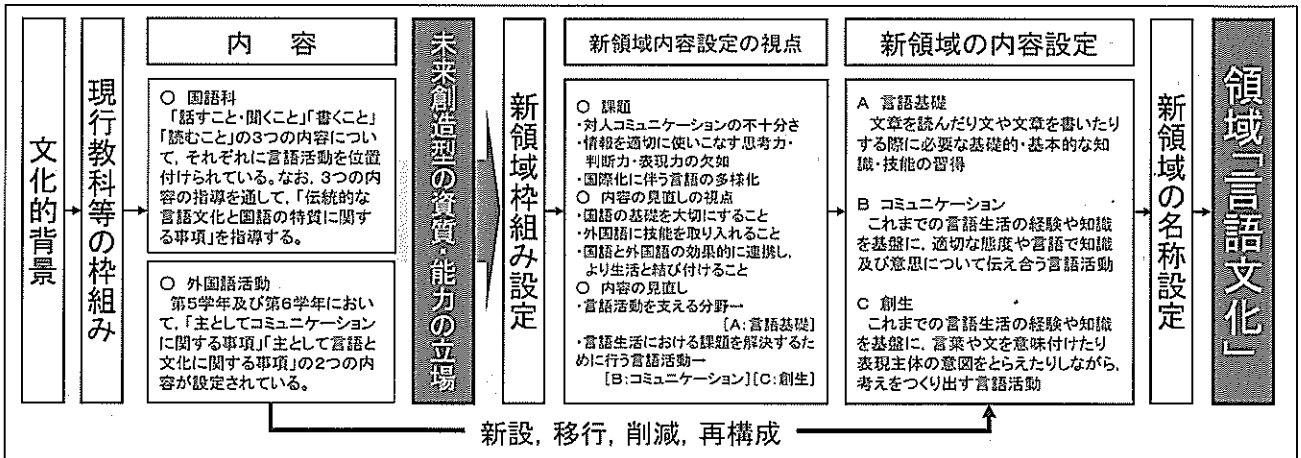
↓

④ 新領域に必要とされる学習内容について，③の視点をもとに取り出し，類型化していく。その際，現行教科等の学習内容が，移行，削減，再構成されたり，必要となる学習内容が新設されたりしていく。

↓

⑤ 設定された学習内容を束ねる名称を仮説設定する。
「言語文化」「自然探究」「社会共創」「表現」「健康」「生き方」と「マイタイム」

なお，図10はこの手順に基づいて領域「言語文化」設定の手続きを図化したものである。各領域においては，このような手続きを経て，新領域に必要となる内容等について検討を進めていった。



【図10　新領域を仮説設定するための手続きについて〈領域「言語文化」のイメージ〉】

(3) 各領域における資質・能力の明確化

本校が育成をめざす未来創造型の資質・能力と各領域の関係については，全ての領域が同じように資質・能力を育成するのではなく，それぞれの領域の特質に応じて重点化をしていくことが大切になる。全体研究構想で規定している未来創造型の資質・能力の４つをもとに，各領域が設定した下位概念を取りまとめたものが表３である。なお，各領域における下位概念の詳細については，各領域の構想において具体的な説明をしている。

【表3　各領域の下位概念】

上位概念	言語文化	自然探究	社会共創	表現	健康	生き方
創造性	課題発見	追究意欲	問題把握	追求意欲	適応への判断	実践的態度
	分析・生産	論理的思考	比較・関連の思考	創出的思考	健康を志向する態度	自己形成
		論理的表現	時間的・空間的思考	自己開放		
			参画意識			
協働性	受容・伝達	他者理解	価値受容	相互受容	双方向的働きかけ	他者を尊重する態度
	伝え合い		生産的追究	内面伝達	合意形成	相互理解
			共生的態度	美的共感		
内省力	言語観形成	自己調整	郷土愛，愛国心	自己内対話	変容の発見	自己への見方・考え方
	自己認知	行動決定	公徳心	自己認識	改善への意志決定	意志決定
			価値判断	自己決定	健康課題解決の見通し	
基礎力	言語感覚	科学的な知識・技能	当事者意識	表現欲求	健康に関する知識・技能	生き方への関心・意欲
	言語情報処理	数学的な知識・技能	社会認識	美的感受		探究力
				創造的技能		価値認識

さらに，それぞれの領域においては構想の中に，下位概念を学年段階ごとに細分化し，子供の姿で具体化していく。このような手続きは，未来創造型の資質・能力の育成に対して，全体研究構想→各領域構想→題材と段階的に具体化・細分化することになり，学習場面における子供の姿をイメージすることにつながっていく。具体的には，各領域学習指導案において，題材目標を未来創造型の資質・能力の４つで設定するようにしている。その際，該当する下位概念を明記することで，題材における資質・能力を意識して学習指導を展開することが可能になる。その結果，子供の評価にも活かしていくことができるようになると考えている。

また，本校が育成をめざす未来創造型の資質・能力と各領域下位概念との関係性を明らかにすることは，教育課程全体で資質・能力を育成していこうとするカリキュラム・マネジメントへとつながっていく点で価値がある。このカリキュラム・マネジメントについては，『論点整理』の中においても，学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策として重視されている。このことからも，資質・能力の育成にかかわる本校の取組が，次期学習指導要領改訂の方向性とも一致していると考えられる。

5　研究の進め方について

(1) ４年間の年度計画

研究開発学校指定の４年間の研究計画を次の通りに設定し，研究を進めていく。

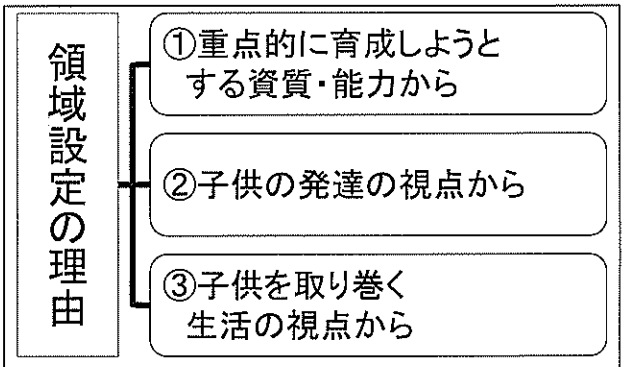
【表4　研究推進計画（●は重点的に取り組む内容）】

	平成27年度 1年次	平成28年度 2年次	平成29年度 3年次	平成30年度 4年次
①資質・能力の具体化	案・修正●	完成		
②領域構成の考え方	案・修正●	完成		
③領域目標と内容設定	案・実施●	修正・実施●	完成	
④単元・題材の開発	案・実施●	修正・実施●	修正・実施	完成
⑤年間指導計画	試案●	完成●	実施	
⑥教育課程編成		試案作成	作成・実施●	完成●
⑥評価内容と方法	評価指標作成	試案作成	実施・修正●	完成●

(2) 本年度の研究の方向性

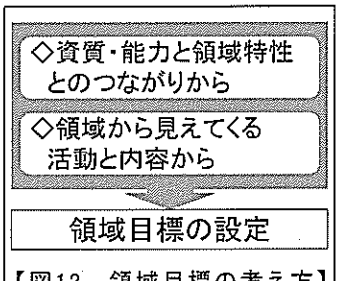
①　領域設定の理由と領域目標の考え方

領域設定の理由については，まず，その領域で重点的に育成しようとしている資質・能力との関係性で述べることを大切にする。そうすることで，領域が担うべき資質・能力が何であるのかがはっきりとしてくると考えられる。また，現行教科等の指導上の課題のみで領域設定を述べるのではなく，子供の発達の視点や子供を取り巻く生活の視点など多面的・多角的に領域設定の理由を述べるようにすることで，その領域設定の理由がより強化される（図11）。



【図11　領域設定の理由を多面的・多角的にとらえる】

次に，領域目標については，育成すべき資質・能力の視点から設定していくことを大切にする。具体的には図12で示すように，領域目標については，①資質・能力と領域特性とのつながりを端的に示していること，②領域から見えてくる活動と内容が反映されていることの２点から領域目標を設定していくようにする。そして，設定した領域目標から，より具体的な資質・能力表を作成し，下位概念まで分解して構造的に示すようにする。



【図12　領域目標の考え方】

② 領域の内容の考え方

領域の内容については，未来創造型の資質・能力の育成に資するものでなくてはならない。領域の内容については，その領域の特質や目標等に応じ，次の４つの基準によって選択し，内容構成を行うことを基本とする（表５）。

【表５　内容選択の基準】

文化的な要請	認識の枠組みや道具としての言語や数，図形，それによって構成される哲学，自然，社会，芸術，技術，道徳などの文化的領域
社会的な要請	公民的，職業的能力に関わる政治的，経済的及び人間的関係領域
学習者の要求	発達，興味，関心などに応ずる性格，個性，特性，あるいは遊び，経験などの心理的，生活的領域
人間的な要請	人間性の尊重と，人間的，人類的責任能力に対応する平和，資源，環境などの総合的領域

また，内容を決定する際には，次の２通りの方法があると考えており，領域の特質に応じて選択していくようにする。

《資質・能力に一対一対応する方法》

◇　領域内で重点的に育成しようとする資質・能力と内容とが対応した形で示していく方法（目標に応じて厳選し，分類して示していくことが必要になる）

（例）「創造性」には「Ａ（内容）」が，「協働性」には「Ｂ（内容）」が，それぞれ欠かせないものとして対応した形で示す。

《評価指標から内容を導き出す方法》

◇　その領域で目標となる資質・能力を設定し，それを評価する上で必要な「根拠となる指標」を明確にし，そのために必要となる「内容」について明らかにする方法

（例）資質・能力を発揮した子供の姿（ゴール像）を先に決め，それらを導き出すためには，どのような内容がふさわしいのかについて考える。

③ 年間指導計画作成の考え方

領域目標と一単位時間との間には，年間指導計画，及び題材などが存在し，それらが媒介となって，全体として構造化が図られ，つながりが保たれるようになる。領域目標→年間指導計画→題材→授業と，この一連のラインについて資質・能力という視点から整合を図っていくことが重要になってくる。この年間指導計画作成に当たっては，まず，題材を構成することから始まる。つまり，年間指導計画は題材開発が基本と考えてよい。したがって，各領域においてどのような題材をなぜ設定するのかといった点が重要となってくる。具体的な題材を新たに作成していく大まかな手順については，子安（2006）をもとにして，以下のように考えている。

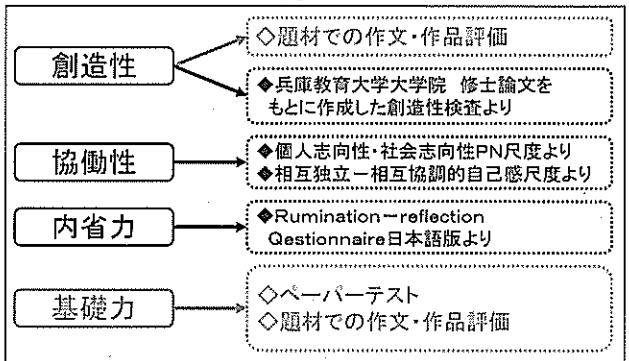
【題材を構成していくための手順】
①題材のテーマ設定
②題材で育成する資質・能力の具体化
　題材ごとに違いが生まれ，年間指導計画を作成する必要性
③題材に関わりのある素材の調査
　題材を学習するにふさわしい素材の発見
④素材に対する疑問づくり（子供の目線で）
　素材に対する子供の反応を多様に構想
⑤素材の構造化を通した教材化
　素材の構造を明確にし，教材化へ
⑥題材計画の立案，学習活動の組織
　題材計画に沿った学習活動の位置付け
⑦準備物や人的配置の検討
⑧次題材への発展の検討
　年間指導計画を意識した題材開発へ

このような手順によりつくり出された題材を，学年段階や時期，育成される資質・能力の関連等を考慮しながら配列していくことにより，各領域の年間指導計画は成立している。

《年間指導計画作成の手順》
①　新領域の学習内容に基づく題材を開発する。
②　子供の資質・能力の発達に応じて，内容配列と時間配分について検討する。
③　題材の開発とその配列，配当時数について検討し，年間指導計画を完成させる。

④ 未来創造型の資質・能力について測定する尺度作成と結果の分析

今年度は，子供の資質・能力の変容について分析するための尺度作成を行う。本年度は，未来創造型の資質・能力を様々な点から測定・分析し，研究の成果を明らかにしていく（図13）。



【図13　資質・能力をどのように測定するか】

「基礎力」については，その特質から，尺度による子供の意識調査が適していないため，ペーパーテストや題材での作文・作品評価が中心となる。「創造性」「協働性」「内省力」については，題材における子供の姿の分析を中心としながらも，開発尺度をもとにした意識調査の変容からの分析を行っていくようにする。児童質問紙については，紀要148ページに掲載している。

6　本年度研究の成果と今後の方向性

(1) 研究から見えてきたもの

①　質問紙調査から

児童質問紙（５段階評価）による意識調査の中で，７月から11月にかけてポイントに上昇が見られた項目について取り出したものが，表６～８である。

【表6　低学年の変容】

	項目	7月	11月	差
協働性	①自分以外のほかの人の気もちをよく考えたいと思う。	4.34	4.43	0.09
内省力	⑧自分が言ったことやしたことについて，頭の中でいつも思い返していると思う。	4.08	4.27	0.19
	⑨自分のいいところや直したいところやこれからこうなりたいなと思うことなど，自分のことについてよく考える。	4.39	4.41	0.02
創造性	⑬わからないことはわかるまでやるほうだ。	4.21	4.27	0.06

【表7　中学年の変容】

	項目	7月	11月	差
協働性	①自分以外のほかの人の気もちをよく考えたいと思う。	4.46	4.49	0.03
	④まわりの人のために，やく立つ人になりたいと思う。	4.68	4.70	0.02
	⑤いつも自分の意見をもつようにしている。	4.11	4.22	0.11
	⑦友だちと考えが対立することをさけるほうだ。	3.16	3.33	0.17
	⑧人と意見が対立したとき，相手の意見を受け入れたいと思う。	3.99	4.16	0.17
内省力	⑨自分が言ったことやしたことについて，頭の中でいつも思い返していると思う。	3.92	3.96	0.04
	⑪自分がなぜそのように行動するのかをよく考える。	3.81	3.85	0.04
創造性	⑬「なぜ?」「どうして?」と思ったことをよく調べる。	3.95	4.01	0.06
	⑭むずかしいことでも，人にたよらず，自分の力でやろうとする。	4.03	4.08	0.05
	⑮失敗してもあきらめないで，なぜ，失敗したのか，そのりゆうを考える。	3.96	4.13	0.16
	⑰わからないことはわかるまでやるほうだ。	4.05	4.07	0.02

【表8　高学年の変容】

	項目	7月	11月	差
協働性	③自分が正しいと思うことは，まわりの人と反対の考えでも言いたいと思う。	3.76	3.82	0.05
	⑤いつも自分の意見をもつようにしている。	4.30	4.32	0.02
創造性	⑬「なぜ?」「どうして?」と思ったことをよく調べる。	3.85	3.95	0.10

特に，中学年のデータから，新たな価値をつくりだす「創造性」の育成のためには，協働性の中でも，自分志向と他者志向の両者が存在する必要があることが明らかになってきた。具体的には，中学年「協働性」の中の，①④⑦⑧は，他者志向の項目であるのに対し，⑤は自分志向の項目である。つまり，他者志向が高まるとともに，自分志向の高まりも見られるということである。したがって，他者と合意形成を図る力が創造性の伸長には必要になることが明らかになった。

②　研究開発に取り組んだ結果，見られた子供の姿の変容

○　領域学習のよさを述べる子供の姿が，行事作文やふじだな（校内で毎年作成する文集），日記に多く表れるようになった。

（例）言語文化で学んだコミュニケーションがフェスタで活かせた。／国語は知識を身に付ける学習で，言語文化は使える力を身に付ける学習だと思う。／言語文化は，自分たちで学習することを決められるので，本当に学びたいことを学べる。／前は，学校のきまりだったから相手の方を見ていたけれど，言語文化でとことん話し合うことが楽しくなった。

○　自己内省とともに他者理解，他者受容の視点を取り入れているため，子供一人一人が「マイタイム」の時間をとても楽しみにしている。

○　よい意味で教科書にとらわれない子供の姿が見られた。

（例）「～しなければならない」という意識が「～したい」というものに変わっている。生活科や道徳の教科書などに子供たちがとらわれていない様子から

○　教科にとらわれずに，他の学習で学んだこととつないで学習する子供の姿が見られた。

（例）月見学芸会で劇をして，言語文化の学習で昔話をしたから，みんなで劇をしてみたいというような行事や領域をまたいで，課題意識をもっている様子から

(2) 今後の研究の方向性

本年度の各領域構想や構想に基づく授業実践の精度を高めていくことはもとより，より実効的な年間指導計画へと見直しをさらに行っていく必要がある。そのようにすることで，領域間の関連等も視野に入れたカリキュラム編成へ発展させることが可能になる。

また，本年度は，開発した児童質問紙による意識調査を行っていくことで，子供の変容を見取ろうとした。今後は，各領域における評価内容と方法について研究を進めていくことで，本研究の効果がより一層明確なものになると考えられる。

（研究部長　　三　浦　研　一）

参考・引用文献

中央教育審議会（2014）.「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」. 文部科学省.
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm)

安彦忠彦（2014ａ）.「グローバル人材は『自立した人格』を要す」.『教育展望』. 2014年４月号. 教育調査研究書.

安彦忠彦（2014ｂ）.『「コンピテンシー・ベース」を超える授業づくり（教育の羅針盤）』. 図書文化社.

経済同友会（2014）.「学習指導要領改訂へむけた意見」. 経済同友会.
(http://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2014/pdf/141126c.pdf)

三宅なほみ（監訳）. グリフィン，Ｐ.・マクゴー，Ｂ.・ケア，Ｅ.（編集）. 益川弘如・望月俊男（訳）（2014）.『21世紀スキル：学びと評価の新たなかたち』北大路書房.

内閣府（2014）.『子ども・若者白書　平成26年度版』. 内閣府.
(http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/pdf_index.html)

松下佳代（2010）.「〈新しい能力〉概念と教育ーその背景と系譜」. 松下佳代（編）.『〈新しい能力〉は教育を変えるかー学力・リテラシー・コンピテンシー』. ミネルヴァ書房. 1-42.

松下佳代（2013a）.「〈新しい能力〉と学習評価の枠組み」. 文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」第２回配付資料. 文部科学省.
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/1330122.htm)

国立教育政策研究所（2013）.『教育課程の編成に関する基礎的研究尾報告書５　社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理』. 国立教育政策研究所.
(http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/Houkokusho-5.pdf)

松下佳代（2013b）.「PISAの影響の下で，対抗的な教育実践をどう構想するのか：グローバル化とテクノロジーの高度化の中で」. 日本教育方法学会（編）.『教師の専門的力量と教育実践の課題（教育方法42）』. 図書文化社. 10-24.

国立教育政策研究書（2015）.『資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書１ー使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力ー』. 国立教育政策研究書.
(http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h27/2-1_all.pdf)

中央教育審議会（2015）.『教育課程企画特別部会　論点整理』. 文部科学省.
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1361110_1.pdf)

石井英真（2015）.『今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影ー（日本標準ブックレットNo.14）』. 日本標準.

諸富祥彦（編）（2015）.『これからの学校教育を語ろうじゃないか：学校における人格形成と育てたい資質・能力』. 図書文化社.

髙橋英児（2012）.「これからの学校とカリキュラムづくり」. 山下政俊・湯浅恭正（編）.『新しい時代の教育の方法（シリーズ現代の教職４）』. ミネルヴァ書房. 35-49

文部科学省（2008）.『幼稚園教育要領解説』. 文部科学省

無藤隆（1999）.「発達とカリキュラムの間」. 安彦忠彦（編）.『新版　カリキュラム研究入門』. 勁草書房. 209-238.

子安潤（2010）.「子どもの生活から授業をつくる」. 岩垣攝・子安潤・久田俊彦.『教室で教えるということ』. 八千代出版. 47-65.

子安潤（2006）.『反・教育入門ー教育課程のアンラーン』. 白澤社.

上田紀行（2005）.『生きる意味』. 岩波新書

教育調査研究所（2015）.『教育展望』. 2015年11月号.

天笠茂（2015）.「アクティブ・ラーニングを実現する学習像」.『教育展望』. 2015年９月号. 教育調査研究所

教育調査研究書（2015）.『教育展望　臨時増刊（47）』. 2015年７月. 教育調査研究所

水原克俊（2010）.『学習指導要領は国民形成の設計書：その能力観と人間像の歴史的変遷』. 東北大学出版会. 199-254

田村学（2015）.『授業を磨く』. 東洋館出版社.

西康隆（2001）.「小学生の創造的態度についての研究ー体験・学力・創造的思考との関連を通して」. 兵庫教育大学大学院学校教育研究科.
(http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/bitstream/10132/2314/1/ZF30302-002.pdf)

堀洋道（監修）. 吉田富二雄（編）（2001）.『心理測定尺度集Ⅱー人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉ー』. サイエンス社.

堀洋道（監修）. 松井豊（編）（2001）.『心理測定尺度集Ⅲー心の健康をはかる〈適応・臨床〉ー』. サイエンス社.

言語文化部
生活から言語を見つめ，言語から生活をつくりだす領域「言語文化」

1　「言語文化」の必要性

これまでの国語科教育では，実生活で生きてはたらく国語の能力を身に付けることが大切にされてきた。しかし，例えば文章の読解をするにしても書かれていることを理解する，いわば「受け取る」営みに多くの時間を費やし，受け取ったことを実生活に生かすことに課題があった。同様に，言語活動や活用力が重視されるようになり，国語科では紹介文づくり，解説文づくりなどが行われるようになったものの，実生活に役立つ国語の能力を身に付けることや，指導内容を確実にとらえることができたとは言い難い。

このことは，「教材の読み取りが中心になりがちで，国語による主体的な表現等が重視されておらず，話し合いや論述など『話す・聞く』『書く』ための学習が低調」という高等学校国語科の課題に繋がる（平成27年８月，教育課程企画特別部会「論点整理」）。

また，外国語活動においては，コミュニケーションスキルを重視するあまり，子供が話したり聞いたりしたい内容が伴わなかったり，機械的に言語を発するため思考が伴わなかったりするという課題があった。新たな英語教育では従来の「聞く」「話す」に加え，「読む」「書く」も含めた複数の技能でより実生活に即したコミュニケーションの充実が求められている（同「論点整理」）。

これらの課題を解決するために，同部会（平成27年８月）では，「言語に関する能力を向上させる観点から，外国語教育と効果的に連携させ，音声，文字，単語・語句，文構造，表記の仕方等の特徴や違いに気付かせ，言語の仕組みを理解できるようにすることや，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成していくことも重要である」と述べている。

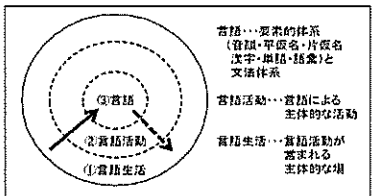
つまり，日本語や外国語の指導内容を充実させ，２つを連携させながら学習主体間での双方向の意思伝達や，言語を媒介として自分の考えを表現する必要感をもつことが大切になる。

そこで，言語に関する知識・技能のみに留まらず，それを「どのように使って，よりよい自分や社会を創り出す」ことまでをめざす領域「言語文化」を構想し，言語と生活をつなぐことに関する学習課題を通して，「言語生活の向上を担う主体としての意識」を高める。このことは，普段使っている言語の価値に気付き，言語を正確に理解したり，言語で表現したりして，言語を尊重し，言語をよりよく使い，生活に活かしていこうとする能力や態度を育てるためにも価値がある。

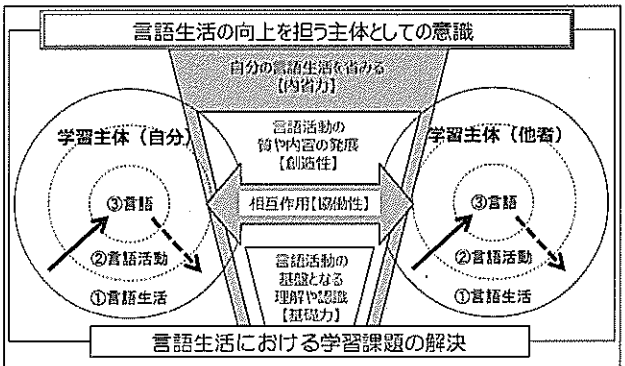
2　「言語文化」で担うもの

(1) 資質・能力から見える内容の背景

領域「言語文化」が担うものは，言語生活の向上を担う主体としての意識を高めることである。そこで，私たちが着目したのが，西尾実の「言語生活主義」や，アメリカの「ホール・ランゲージ」の言語教育の実践と理論を礎に「言語生活者を育てる」ことを提唱する桑原隆（1996）の考えである。桑原は，「言語生活主義」が「言語能力主義」から後退を余儀なくされた理由を分析し，学習者主体の授業の成立のために，「『言語生活』・『言語活動』・『言語』の学習論的構造」を図１のように示した。①の言語生活における場や状況，人間関係が拡大するにつれ，②の言語活動の質や内容が多様化し活発化していく。そのうえで③の言語に関わる理解や認識，さらには言語運用能力が深まり，高まっていく。①から③の順で深まっていくと同時に，③から①のように充実化していき，１番外側の主体の言語生活が豊かになっていくという考え方である。私たちはこの桑原の言語生活論を理論的背景に，領域「言語文化」が担うものと資質・能力との関係を図２のように考えた。学習主体である子供は，「①言語生活」「②言語活動」「③言語」のプロセスで学習を営んでいく。学習の基盤となる言語に関する理解や認識として「基礎力」，言語生活における課題解決に没頭する中で言語活動の質や内容の発展において活性化するのが「創造性」であり，自分の言語生活を省みながら言語観の変容を見出す「内省力」が学習を通してはたらいている。これらの「基礎力」「内省力」「創造性」を統合し，言語運用能力を高めるためには，学習主体同士の相互作用を営む資質・能力が「協働性」である。



【図１　桑原の学習論的構造】



【図２　「言語文化」における資質・能力と目標構造図】

(2) 資質・能力について

領域「言語文化」では未来創造型の４つの資質・能力について，よりよい言語生活をつくりだす際にはたらく８つの下位概念を設定し，学年の発達特性に応じて以下のような系統にまとめた。

【表1　領域「言語文化」の資質・能力表】

上位概念	下位概念	低学年	中学年	高学年
創造性	課題発見	言語生活にかかわる具体的な活動や体験から，気になることやしたいことを見つけ，言語生活に関心をもとうとする。	言語生活に関する考えのずれや対象へのあこがれから，言語生活について追究したいことを見出し，言語生活を改善しようとする。	今までの言語生活の振り返りから，言語生活を改善したり，言語の可能性を広げたりするための明確な課題意識をもち，進んで言語を使っていこうとする。
	分析・生産	出された考えについて，柔軟な態度で耳を傾け，自分の考えを創り出そうとする。	出された考えを図や表などを使って丁寧に，分析・評価し，自分の考えを創り出そうとする。	図や表をなどを使って，複数の考えを関係付けたり，意味付けたりしながら，新たな考えを創り出そうとする。
協働性	受容・伝達	他者が伝える内容に興味をもって情報を受け取り，感想や意見を述べようとする。	他者が伝える内容の中心について質問，感想，意見などを述べようとする。	自分の意見と比べながら他者が伝える内容の価値に気付き，自分の考えをまとめて意図がわかるように述べようとする。
	伝え合い	自分の思いや考えについて，話題に沿って大事なことを落とさないように伝え合おうとする。	自分の思いや考えについて，話の進め方に沿ってわかりやすく伝え合い，互いの考えを認め合おうとする。	伝え合う場・目的・相手に応じて，自分の思いや考えの意図や根拠がわかるように伝え合おうとする。
内省力	言語観形成	日本語や外国語にかかわる言語文化に親しみをもち，進んでかかわることができる。	日本語と外国語における言語文化の共通点や相違点に気付き，多様なものの見方・考え方を知ることができる。	日本語と外国語における言語文化の共通点や相違点に対する理解を深め，言語文化を共に尊重することができる。
	自己認知	言語生活にかかわる問題について，解決の方法を考えて学び，自己の変容に気付くことができる。	問題解決の過程を振り返り，自他の変容や高まりを実感し，次の方法を考えて学ぶことができる。	問題解決の過程を振り返り，自他の変容や高まりを認め合い，よりよい言語生活にするための方法を考えたり，実行への意欲をもったりすることができる。
基礎力	言語感覚	言葉の響きやリズムに慣れ親しみ，楽しんで表現するとともに，言語の特徴や基本的なきまりを理解することができる。	言葉の響きやリズムの違いを感じ取り，進んで表現できるとともに，言語の特徴やきまりを理解することができる。	言葉の響きやリズムの違いを知り，適切に表現できるとともに，言語が果たす多様な働きや特徴を理解し，進んで言語を使おうとすることができる。
	言語情報処理	話や文章の大体をとらえたり，人物の言動，言葉の使い方や事柄の取り上げ方に考えをもったりすることができる。	言葉や文などを関係付けて情報の中心をとらえたり，人物の言動，論の展開に考えをもったりすることができる。	複数の情報を関連付けて意図や要旨をとらえたり，場面の描写や人物同士の関係，表現の工夫についての考えをもったりすることができる。

3　目標と内容

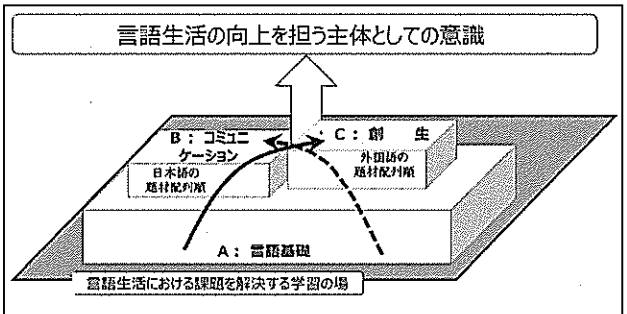
(1) 目標について

言語生活の向上を担う主体としての意識を育むために，言語生活における課題解決を図る言語活動を通して，言語に関する適切な理解のもと進んで伝え合う能力と創造的に思考する能力を培う。

(2) 内容について

①　内容設定について

わたしたちの生活において，かなりの部分に言葉が介在している。その言葉の介在している生活が言語生活である。言語生活は日常的で様々な価値が混在している一方，現代の高度情報化社会においては，対人コミュニケーションに関する課題や情報を適切に使いこなす思考力・判断力・表現力等の欠如からくる課題が多く見られる。そこで私たちは，子供の言語生活における課題解決を通して，子供自身が言語生活の質の向上を志向することが「言語生活の向上を担う主体としての意識」を育み，よりよい言語文化を築くことにつながるという考えに立ち，領域「言語文化」の内容を次のように構成することとした。



【図3　言語文化における内容の構造】

言語文化の内容は「言語生活における課題を解決するために行う言語活動」となるために行う言語活動と「言語活動を支える２分野」で構成する。具体的には，「言語生活における課題を解決するために行う言語活動」の内容は，〔Ｂ：コミュニケーション〕，〔Ｃ：創生〕である。また，「言語活動を支える２分野」の内容は，〔Ａ：言語基礎〕である（図３）。この〔Ａ：言語基礎〕でとらえた内容を活かして，〔Ｂ：コミュニケーション〕，〔Ｃ：創生〕の内容をとらえられるようにしていく。また，内容Ａ～Ｃの学習において育まれる下位概念を各内容の下段に示した（表１）。

【表1　言語文化における3つの内容の具体】

A 言語 基礎	文章を読んだり文や文章を書いたりする際に必要な基礎的・基本的な知識・技能の習得や，基礎的な文法や多様な表現方法についての理解，言葉の美しさやリズムの面白さへの接近 ※　協働性（受容・伝達），内省力（言語観形成），基礎力（言語感覚・言語情報処理）
B コミュニケーション	これまでの言語生活の経験や知識を基盤に，適切な態度や言語で知識及び意思について伝え合う言語活動 ※　創造性（課題発見，分析・生産），協働性（受容・伝達，伝え合い），内省力（言語観形成，自己認知）
C 創生	これまでの言語生活の経験や知識を基盤に，言葉や文を意味付けたり表現主体の意図を捉えたりしながら，考えをつくり出す言語活動 ※　創造性（課題発見，分析・生産），協働性（伝え合い），内省力（言語観形成，自己認知）

②　内容構成について

このような領域「言語文化」の内容は，国際バカロレア（以下ＩＢ）の言語教育の枠組みを参考に構成している。ＩＢの言語教育では，日本語の「言語Ａ」において質の高い文学作品の学習を通じて，理解力，運用能力，鑑賞力を高めることを目標としている。外国語の「言語Ｂ」では，外国語の学習を通して，批判的で優れたコミュニケーション能力の育成を目標としている。本校でも日本語と英語という２つの言語を扱うことから，日本語中心の学習では内容〔Ｃ：創生〕に向かって他の内容で学習したことを活かすことを目指し，外国語（英語）中心の学習では内容〔Ｂ：コミュニケーション〕に向かって他の内容で学習したことを活かすこととした（図３の矢印）。

③ 教材化に値する言語生活の条件

子供の学習が，目的意識に支えられた「場＝言語生活」において考えられるようにするために，領域「言語文化」の内容Ｂや内容Ｃでは，子供たちが言語と生活をつなぐことに関する現実感のある課題を見出させる。このことを可能にするために，教材化に値する言語生活の条件を以下に示す。

○　日々の生活の中で見たり聞いたりする頻度が高いもので，子供が強い興味・関心を抱いている言語生活である。（親和性）

○　日常生活の中で見たり聞いたりする頻度は高いが，多くの子供が見過ごしている価値のある言語生活である。（価値性）

○　日常生活を通してその言語文化を知っているが，深く追究すると現在の認識から広がったり新たな認識へと辿り着いたりする言語生活である。（深化性）

4　年間指導計画作成の考え方

(1) 教材化の工夫

領域「言語文化」で用いる教材は，A～Cの内容によって異なる。内容〔A：言語基礎〕では，教科書教材を中心に用いる。内容〔B：コミュニケーション〕，〔C：創生〕では，子供の言語生活の実態を見据えて教材を探すところから始まる。子供が日常の言語生活において聞いたり読んだり，目に触れるあらゆる言語媒体のうち，言語生活の向上に資するものを指導者が教材化するが，教科書教材「こんぎつね」を内容Bで指導したらどのようにするかという，教科書教材を新たな視点で教材化することも可能である。

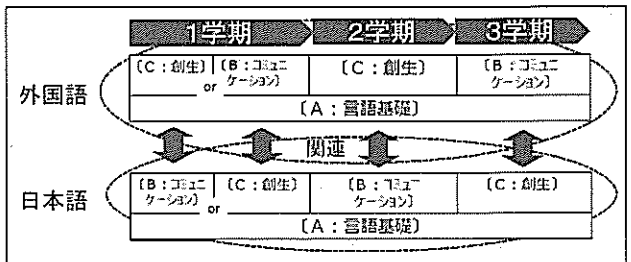
桑原（1996）は，３つの教材類型と言語教材を上記のように示している。

> ①　**言語文化財としての教材**･･･すでに言語文化財としての価値をもっている文学的文章や説明的文章。話し言葉による朗読や語り，講演・講義なども含まれる。教科書教材の多くがAである。
>
> ②　**機能的・実態的教材**･･･教育のある具体的目標のもとに，はじめて教材としての価値を発揮してくれるもので不安定で流動的である。新聞やパンフレット，辞典，図書などの案内書などこの領域の範囲は大変広い。
>
> ③　**言語環境としての教材**･･･授業内容に直接かかわらないが，児童・生徒の言葉の学習に影響を与えるもの。校内放送，教室の掲示物，校長先生の話，挨拶など，子供が無意識的に言葉の学習をするものである。
>
> （桑原は，①をA，②をB，③をCと表したが，内容項目のA～Dとの混同を避けるため，筆者が数字に置き換えている。）

桑原の教材類型に当てはめると内容〔A：言語基礎〕の学習では教科書教材を用いるため，①の言語文化財としての教材となる。内容〔B：コミュニケーション〕については，日常会話や生活とのかかわりが大きいことから③及び②の教材を用いることが多いと考える。内容〔C：創生〕については，①及び②の教材を用いると考える。

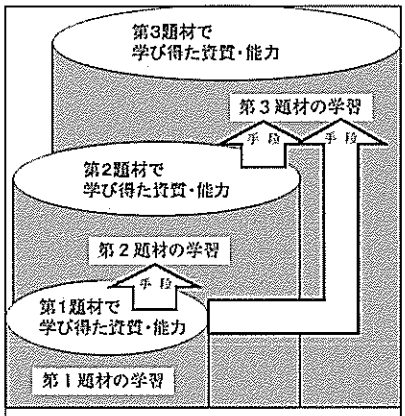
(2) 題材配列

領域「言語文化」の年間指導計画は，〔A：言語基礎〕で１つ，〔B：コミュニケーション〕と〔C：創生〕で１つという２つの帯で構成される。これらの２つの帯は，さらに日本語分野と外国語分野に分かれるため，厳密に言えば４つの帯で構成されることとなる（図４）。領域「言語文化」では，２学期までは重点とする内容をA～Cの中から１つ選定している。３学期は，ＩＢを参考にした内容構成の特質上，重点とする内容を外国語は〔B：コミュニケーション〕，日本語は〔C：創生〕とする。



【図4　言語文化の題材配列】

領域「言語文化」では各学期において，言語を通して自分たちの生活や文化について考える題材を，外国語中心と日本語中心の各１本（計２本）配列している。両者どちらの題材においても，前の題材で学び得た資質・能力を次の題材で汎用的能力として用いることができるように学習活動を構成している。つまり，学び得た資質・能力は「次の題材で子供たちが見出した学習課題を自力で解決するための道具や手段となる」ものである（図５）。このようにすることで，自分にある資質・能力をどこでどのように使うか吟味する子供が育つと考える。



【図5　題材の関係】

(3) 日本語と英語との連携

「グローバル化に対応した英語教育実施計画」（平成25年12月13日，文部科学省）では，平成32年の東京オリンピックを見据え，新たな英語教育の本格展開のための計画が示された。英語教育では「英語を用いて何ができるようになるか」という観点での目標設定（CAN-DO リスト），国語教育では「日本人としてのアイデンティティを育成すること」の重視が示された。つまり，言語によって重視するものが異なるのである。このことから，単に日本語と外国語を織り交ぜた題材ではなく，日本語を用いる題材，外国語を用いる題材，それぞれを行いながら両者の接点をのぞかせる内容を含む教材を通して「日本語と外国語のゆるやかな関連」を図る立場をとる。日本語と外国語の接点は，①一般文化（衣食住の比較など），②言語環境（日本と外国の学校における校内放送を比較など），③言語自体（日本語と英語で同じ意味のことわざを比較することなど），④言語文化財（日本語と英語で同じ物語を読むことなど）の観点から模索することができると考える。

【参考文献等】

桑原隆『言語生活者を育てる＝言語生活論＆ホール・ランゲージの地平＝』，東洋館出版社，1996年）

指導事例1　第1学年　題材　むかしばなしが　いっぱい

指導者　田中　菜穂子

1　資質・能力

◎　日本や世界の昔話のよさに気付き，登場人物の性格や役割を追究したり，新たな続き話を創り出したりすることができる。　（創造性：分析・生産）

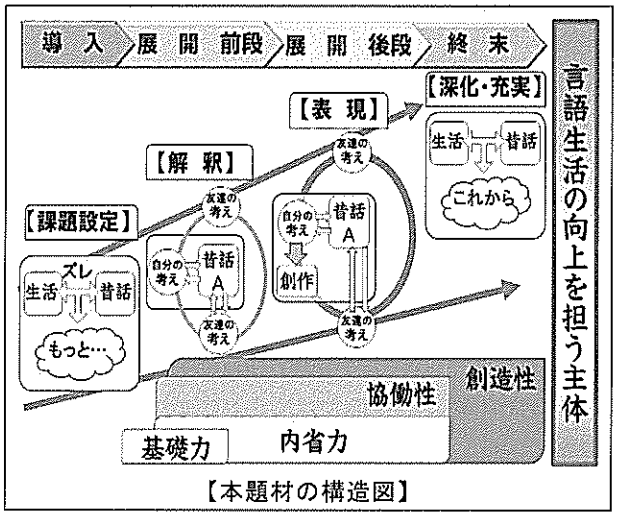
○　うさぎの性格や役割について，日本や世界の昔話を読み比べたり，創作した続き話を伝え合ったりすることができる。　（協働性：伝え合い）

○　言語や文化を受け継ぐ昔話には，どんなうさぎが出てくるのかという課題を解決するため，中心人物の性格や役割に対する自分の考えをもつことができる。　（内省力：自己認知）

○　登場人物の言動から性格や役割を読み取り，人物同士を比べ，似ている点や違う点を明らかにすることができる。　（基礎力：言語情報処理）

2　題材の考え方

本題材では，日本や世界の昔話における人物「うさぎ」に着目し，性格や役割を読み取ったり，つづき話を創ったりすることで，昔話の特徴や表現の面白さに気付くことをねらいとしている。そのために，生活における課題解決を通して，子供自身が言語生活の質の向上を志向することが大切だと考え，題材を構成した。主張点としては，①言語や文化を受け継ぐ昔話を学習材としたこと，②言語文化の授業の成立のために，言語にせまる読む活動と生活につなぐ創作活動を仕組んだことである。そこで，本題材では，言語や文化を受け継ぐ日本や世界の昔話を通して，昔話の特徴や表現の面白さを取り上げる。そして，創作活動を設定することで，昔話を読んで学んだ力を活かし，さらに自らの読書生活につなぐ主体的な姿が生み出されると考える。



【本題材の構造図】

3　学習の流れと考察

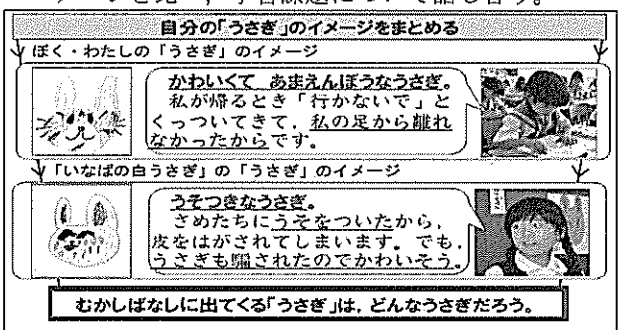
導入段階のねらい：1～7/18時

知識や読書経験と昔話の読み聞かせにおいて，うさぎのイメージのズレから課題を話し合う。

(1) 知識や読書経験からうさぎのイメージをもつ。

【資料１　「うさぎ」って，どんなイメージ？】

(2) 昔話「いなばの白うさぎ」と自分のうさぎのイメージと比べ，学習課題について話し合う。



【資料２　C児のうさぎに対するイメージのズレ】

導入段階では，月に住むと考えるうさぎについて話したり，身近からうさぎを見つけたりした。その上で，自分のうさぎのイメージをまとめた（資料１）。さらに，昔話「いなばの白うさぎ」と比べ，学習課題について話し合った。そのときにC児は，経験知から「かわいい」という自分のイメージが，読み聞かせによってズレが生じた。そこで，「昔話のうさぎは，かわいいだけではないのだろうか」という疑問を抱いた。交流を通して，「昔話のうさぎは，どんなうさぎだろう」という学習課題を共有することができた（資料２）。

考察1

知識や読書経験と昔話のうさぎのイメージを比べることは有効であった。その根拠は，身近であるうさぎに着目し，自分のイメージを明らかにした上で，昔話と出合わせたことで，ズレによる疑問をもつことができたこと，課題追究意欲につながったからである。

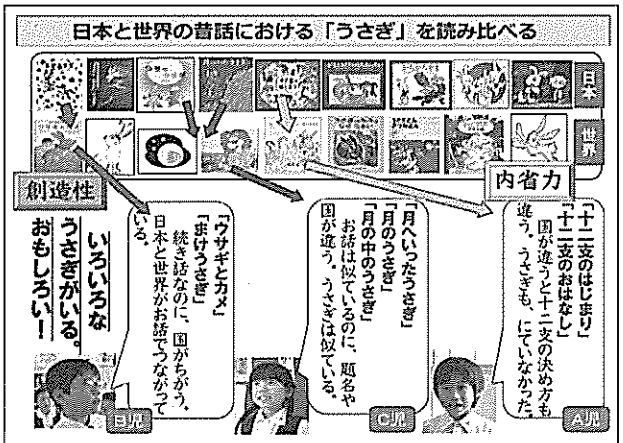
展開段階のねらい：8～15/18時

お気に入りの昔話において，うさぎの性格や役割を読みとり，昔話のよさに気付き，続き話をつくる。

(1) 登場人物うさぎの性格や役割を読み取る。

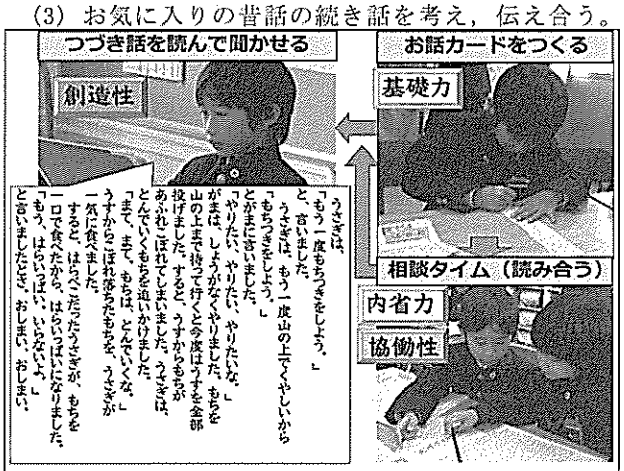
【資料３　お気に入りのうさぎは，どんなうさぎ？】

(2) 日本と世界のうさぎを比べ，よさを話し合う。



【資料４　日本と世界のうさぎを読み比べよう（B児）】

(3) お気に入りの昔話の続き話を考え，伝え合う。



【資料５　お気に入りの昔話のつづき話を創ろう（A児）】

展開段階では，姪浜に伝わる「白うさぎのおんがえし」から人物の性格や役割の読み取りを学んだ。身近に語り継がれる昔話があることに驚きを感じた。

そして，お気に入りの日本の昔話を読み進めた（資料３）。そのとき，B児は，既習のうさぎのイメージと比べる姿が見られた。さらに世界の昔話も読み，日本と世界のうさぎを読み比べた（資料４）。優しいだけでなく様々なうさぎがいること，日本と世界に違いがあること，だから面白いことをとらえることができた。子供たちは「もっと他の昔話も読みたい」「自分もお話を創りたい」と新たな願いから課題をもった。

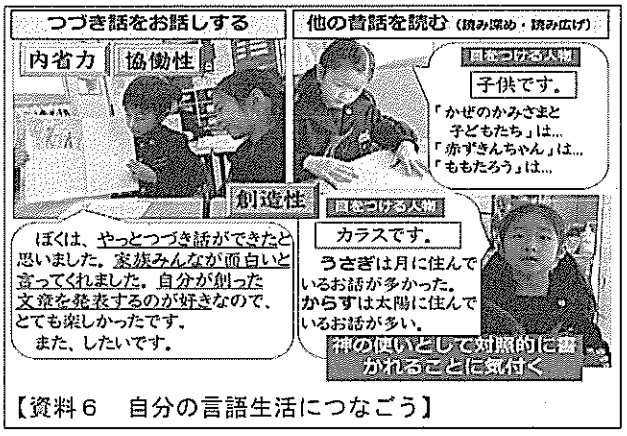
そこで，お気に入りの昔話のつづき話をつくる活動を行った。子供たちは「昔話の特別な表現」を見出し，うさぎ像を決め，つづき話をつくることができた。

考察２

日本から世界へと昔話を段階的に提示したことは，昔話の特徴に気付く上で有効であった。その根拠は，昔話から人物の役割を読み取り，自分の考えをもつことができたこと，昔話の特徴に気付いたり，うさぎを中心人物として特有の表現技法を活用したつづき話をつくり出したりすることができたからである（資料５）。

終末段階のねらい：16～18/18時＋課外

つづき話を発表したり，他の昔話を読んだりする。

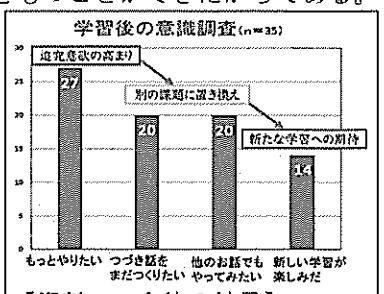


【資料６　自分の言語生活につなごう】

終末段階では，つづき話を紹介したり，「もっと読みたい（読み深め）」「他の人物で読みたい（読み広げ）」と自ら読書をしたりすることができた（資料６）。

考察３

創作の紹介は，学びを活かした実感を得る上で有効であった。その根拠は，聞き手の感想によって内容や表現の工夫を価値付けられたからである。また，読み広げの活動は，学びを生活につなぐ上で有効であった。自ら読む目的や観点をもつことができたからである。



【資料７　全体の結果】

全体考察

考察１，２から視点をもって多くの昔話に読み浸ること，そして学んだ力を言語生活につなぐ活動を取り入れた題材構成は，言語生活の質の向上を図る上で有効であったと判断できる。さらに，考察３や資料７からは，子供たちに強い課題意識や関心があると，自ら主体的な活動を展開し，創造性の高まりにつながることもわかった。

指導事例2　第4学年　題材　ことわざからの学びを伝え合おう

指導者　　竹本　　学

1　資質・能力

◎　自分の生活に必要なことわざについて，日本の文化と関連付けながらその由来や意味について考えることができる。　（創造性：分析・生産）

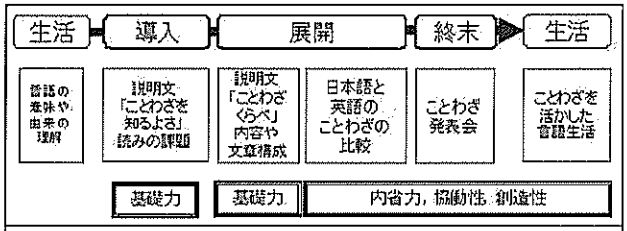
◎　「ことわざくらべ」についてチームで読み取った内容や表現した内容の違いを認め，互いの考えを高め，伝え合うことができる。　（協働性：伝え合い）

○　「ことわざくらべ」の段落の関係や内容から，どの文章や言葉に着眼すればよいのかを判断することができる。　（内省力：言語観形成）

○　自作説明文「ことわざくらべ」の事例の順序や，段落の関係を読み取り，日本語と英語のことわざの共通点や相違点とそれぞれの国の文化を関連付けて，ことわざのおもしろさをとらえることができる。　（基礎力：言語情報処理）

2　題材の考え方

本題材では，自作説明文「ことわざくらべ」の内容や文章構成を読み取り，ことわざの共通点や相違点を考えながら分類し，自分の生活に必要なことわざについての考えをもち，伝え合うことをねらいとしている。そのために，まず，導入段階では，単元の読みの課題について話し合うために，自作説明文「ことわざを知るよさ」と「ことわざくらべ」を読み，ことわざ調べを行い基礎力を高める。次に，展開段階では，まず，「ことわざくらべ」の内容や段落の関係について読み取るために，「ことわざくらべ」の段落の関係を付箋紙を使ってとらえることで，基礎力を高める。次に，日本語と英語のことわざの共通点と相違点をとらえるために，ことわざカード（日本語，英語，意味が書かれたカード）を提示し，チームでシンキングボードを使いながら，「ことわざくらべ」の表（日本語と英語のことわざと意味が書かれていない）に，ことわざを挿入し，基礎力，協働性，内省力を高める。また，自作説明文「日本人って何？」を提示し，ことわざと日本の文化を関連付けた自分の考えをもつことができるようにして創造性を高める。最後に，終末段階では，「ことわざ発表会」を行うことで創造性を高める。



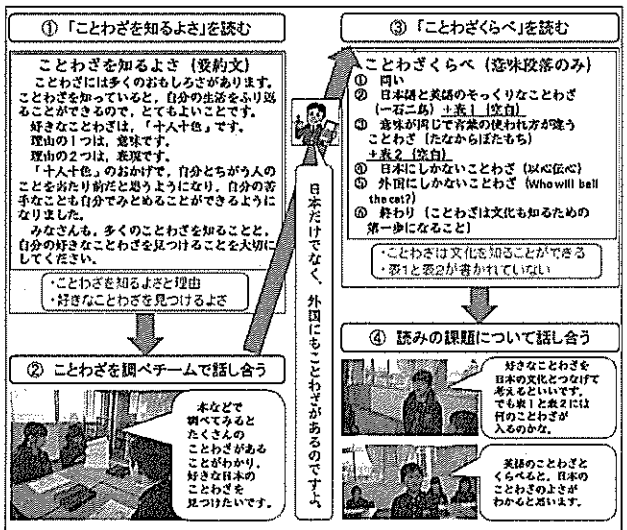
【本題材の構造図】

3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～5/17時

「ことわざを知るよさ」と「ことわざくらべ」を読み，ことわざの意味や使い方について本や，インターネットを使って調べ，題材の読みの課題について話し合う。

導入段階では，「『ことわざを知るよさ』と『ことわざくらべ』を読み，世界のことわざの共通点や相違点を読み取り，ことわざ発表会をしよう。」という読みの課題をもった。その際，「ことわざを知るよさ」と「ことわざくらべ」を読む活動，チームでことわざを調べる活動，読みの課題について話し合う活動を位置付けた（資料1）。



【資料1　読みの課題】

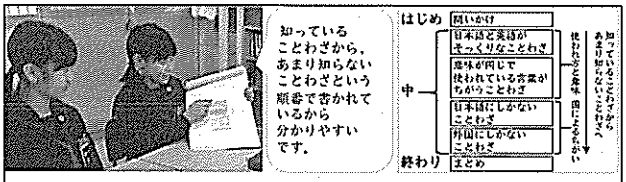
考察1

「ことわざのよさと，自分の生活を振り返ることのよさ」が冒頭で書き出され，「ことわざを知り，自分の生活を見つけることが大切である」という主張の「ことわざを知るよさ」と，「ことわざを知ることは，国の文化を知るための第一歩になる」という主張の「ことわざくらべ」を提示したことは，多くのことわざの意味や使い方について理解し，「世界のことわざと比べて好きなことわざについての考えをもちたい。」という読みの課題をもつために有効であった。その根拠は，調べたことわざや本の中から選んだ好きなことわざや好きな理由が，子供たちによって違っていたり，2つの説明文の筆者の考えを受け止めたりすることができたからである。

展開段階のねらい：6～11/17時

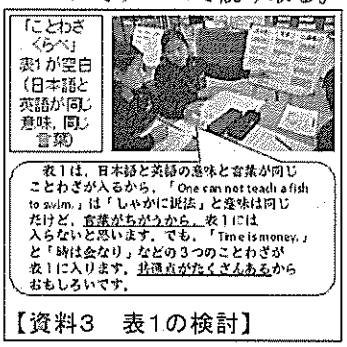
「ことわざくらべ」の内容や段落の関係について読み取り，日本語と英語のことわざの共通点や相違点をとらえながら，自分の好きなことわざについての考えを再構成する。

(1) 「ことわざくらべ」の全体の文章構成についてチームで読み取る。

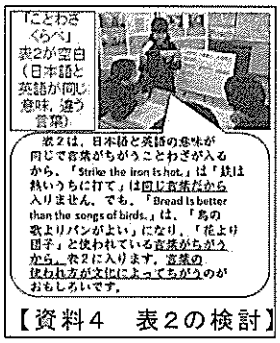


【資料2　文章構成図】

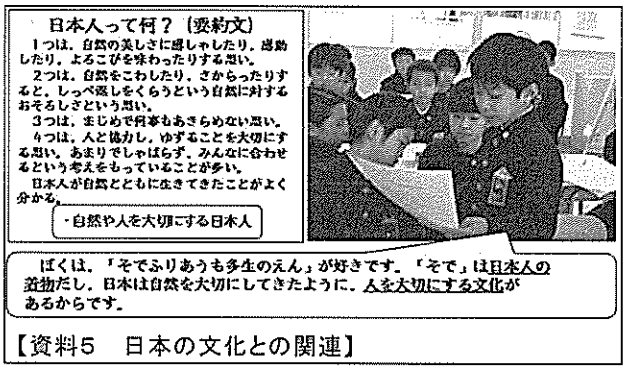
(2) 「ことわざくらべ」の意味段落２，３，４についてチームで読み取る。



【資料3　表1の検討】



【資料4　表2の検討】



【資料5　日本の文化との関連】

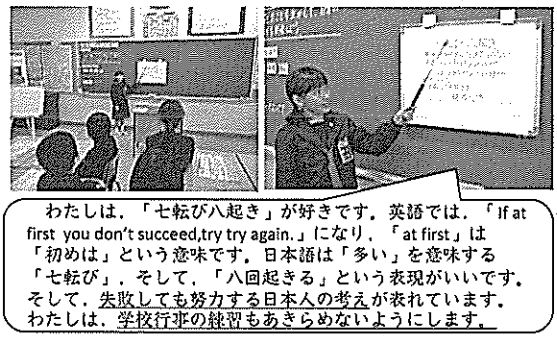
展開段階では，付箋紙を使い，「ことわざくらべ」文章構成図をつくった（資料２）。次に，ことわざの意味や言葉の使い方が書かれたカード（不要なカードも含む）を提示し，「ことわざくらべ」の表１（資料３）と，表２（資料４）に日本語と英語のことわざとその意味を挿入した。さらに，資料「日本人って何？」（日本人の考え方がわかる資料）を提示して，自分の好きなことわざの意味を深めた（資料５）。

考察2

ことわざカードやシンキングツールを使って話し合う活動を位置付け，資料「日本人って何？」を提示したことは有効であった。その根拠は，日本語と英語のことわざの共通点や相違点をとらえ，日本人の考え方と関連付けて，好きなことわざの意味を再構成することができたからである。

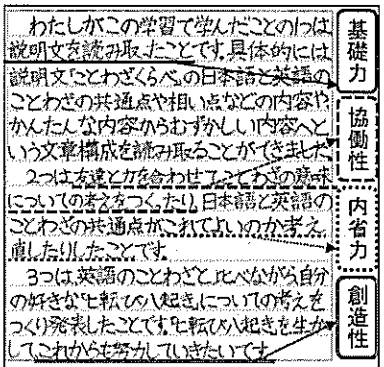
終末段階のねらい：12～17/17時

好きな日本語のことわざの意味や由来について，英語のことわざや日本人の考え方と比較してとらえ，「ことわざ発表会」を行い，自分の生活に活かす。



【資料6　ことわざ発表会】

終末段階では，既習を活かし，自分の好きなことわざについて互いに伝え合う「ことわざ発表会」を行った。その際，チームの中での発表会から，チームの代表者に全体での発表会を行った。具体的には，日本人の考え方，英語のことわざと関連付けながら，自分の生活にどのように活かすかについて発表した（資料６）。最後に，本題材でどのようなことを学習したのかについて書きまとめた（資料７）。



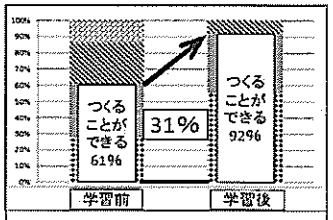
【資料7　感想】

考察3

日本人の考え方，英語のことわざと関連付けながら，自分の生活にどのように活かすのかについての「ことわざ発表会」を行ったことは有効であった。その根拠は，ことわざについての自分の考えをつくり，自分の生活に活かそうとすることができたからである。

全体考察

ことわざの意味を深め，自分の生活に活かそうとする姿から，創造性や考えの中心が伝わるように伝え合う協働性の高まりを見取ることができる（考察２，３）。また，題材の前後の意識調査の結果から，創造性の高まりを実感していると判断できる（資料８）。今後は，創作ことわざをつくってことわざを互いに評価することから協働性を高める題材を開発することが考えられる。



【資料8　全体の結果】

指導事例3　第5学年　題材　言葉でえがく未来

指導者　山田　深雪

1　資質・能力

○　聞き手に理解と感動をもたらす伝え方をしたいという課題意識をもち，自分が伝えたいことを効果的に伝えることができる。　（創造性：分析・生産）

○　プレゼンの内容や構成，資料の生かし方，声の大きさや抑揚，体の動きなどの表現の効果について友達と助言し合ったり改善策を吟味したりすることができる。　（協働性：伝え合い）

○　自分の学びのプロセスをふり返り，コミュニケーションに対する見方・考え方の変容や実生活に生かすことを見出すことができる。（内省力：自己認知）

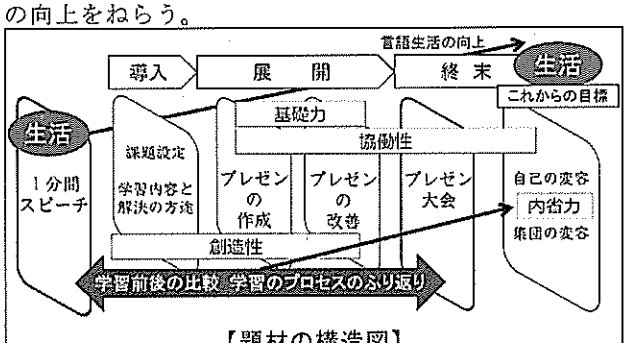
○　「未来をよりよいものにするために，今，できること」を友達と伝え合いたいという目的をもち，事実，意見，感想を関係付けながら全体の構成を考えてプレゼンテーション（以下：「プレゼン」）の原稿を書くことができる。　（基礎力：言語情報処理）

2　題材の考え方

本題材では，友達と未来のためにできることについて伝え合うという目的のもと，プレゼンの作成と発表を通して，コミュニケーションに対する見方・考え方の変容を見出すことをねらいとしている。そのためには，話すことは楽しいことという認識をもたせることが大切であると考え，世界で広く視聴されているTED Talksを題材の導入で教材として取り上げる。

具体的には，①自分たちの１分間スピーチと様々な国籍の人々が話すプレゼンを比較し，学習課題と話題，解決の道筋を決めること，②プレゼン作りを通して，聞き手に理解と感動をもたらす伝え方を追究すること，③改善を繰り返して完成したプレゼンを視聴し合い，コミュニケーションに対する見方・考え方の変容について話し合うことである。

特に③において学習したことを生活につなぐ際には，プレゼンスキルを使って話すだけではなく，自分たちの学びの過程をふり返らせることで見出した「他者と考えを伝え合う際に大切にしたいこと」への実践意欲の向上をねらう。



【題材の構造図】

3　学習の流れと考察

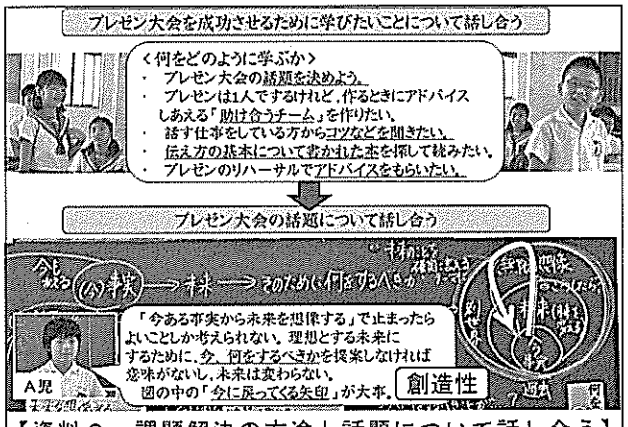
導入段階のねらい：1～5/21時

複数の映像（TEDTalks）を視聴し，学習課題と話題，解決の道筋を決める。

(1) いろいろな国の人が伝える様子を見て，学習課題について話し合う。

【資料１　学習課題について話し合う】

(2) 課題解決のために何をどのように学ぶのか，プレゼンで伝える話題について話し合う。



【資料２　課題解決の方途と話題について話し合う】

導入段階では，TEDTalksの視聴を通して，「自分もこんな風に自信をもって話したい」という憧れをもった（資料１）。その上で学習課題や学習の内容と方途について話し合った。そのときA児は，自分の生活と学習内容が関係付くように「未来のために，今何をするべきかを提案することが大事」と考えた（資料２）。

考察１

１分間スピーチを経験後，TEDTalksを視聴させたことは，自分たちの未来や伝え方をよりよくしたいとい

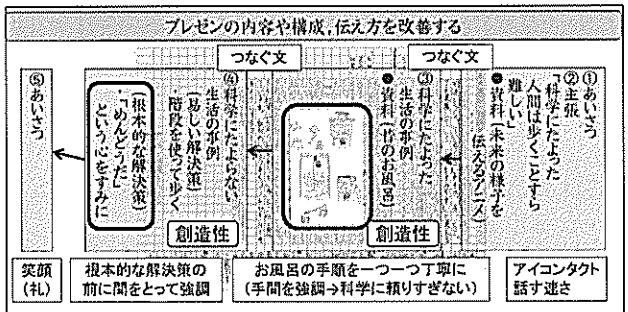
う課題意識をもち，課題解決の方途を決めるうえで有効であった（創造性：課題発見）。その根拠は，TEDTalksの「楽しいうえによくわかる」プレゼンによって，子供が自分の伝え方の向上に意識を向けたからである。

展開段階のねらい：6～17/21時
プレゼン作りを通して，聞き手に理解と感動をもたらす伝え方を追究する。

(1) 主張点を決めてプレゼンを作ったり理解と感動をもたらす伝え方を追究したりする。

【資料３　自分のプレゼンをつくりだす】

(2) リハーサルでプレゼンを視聴し合い改善する。



【資料４　A児のプレゼンの改善】

展開段階では，自分の主張を明確に伝えるプレゼンを作成した。A児はテキストを読み，根拠となる事例を対比的に並べて台本を作成した。また，伝える仕事に携わる方から，視線や表情の効果を聞き，聞き手の感情を考えながら話すようにした（基礎力：言語情報処理）。リハーサルでA児は，「資料の効果」と「聞き手を動かす説得力」を他チームの友達から評価してもらった。その結果，自分の台本の構成の③と④に資料がないため（資料３），説得力に欠けると考えた。

考察2

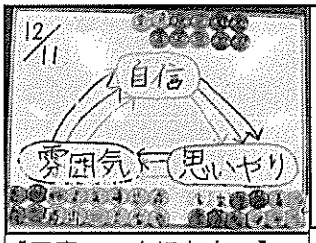
評価の視点を聞き手に伝え，プレゼンの改善点を伝え合ったことは有効であった（創造性：分析・生産，協働性：伝え合い）。その根拠は，伝え方の熟達よりも聞き手の納得が重視され，資料の追加や事例を挿入する姿が見られたからである（資料４）。

終末段階のねらい：18～21/21時
改善したプレゼンを視聴し合い，自らのコミュニケーションに対する見方・考え方の変容に気付く。

(1) プレゼンを視聴して，感想や意見を述べ合う。

【資料５　プレゼン大会の様子】

(2) コミュニケーションに対する見方・考え方の変容から，これからの目標を見出す。



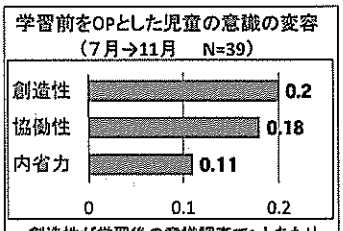
【写真１　大切なもの】

ぼくはこの学習で学んだことは「自信」だと言いました。しかし，自信があるだけではいけません。行動する気にはなれないのです。
そこで相手のことを考えるのです。相手のことを考えなければ，自信があっても，「自分だけよければいいや」という気持ちが芽生え，行動には移せません。なので，相手のことを考えることは大切なのです。
【資料６　振り返り】

終末段階では，プレゼン大会を開き，未来のために自分たちが今後できることについて話し合った（資料５）。そして，コミュニケーションで大切にしたいことを話し合った結果，「自信・思いやり・雰囲気」（写真１）を意識して伝え合うことになった（資料６）。

考察3

自分の変容から今後の目標を話し合う場を設けたことは有効であった（内省力：自己認知）。その根拠は，個人の伝え方に対する見方・考え方を向上させることが，集団の目標形成に役立ったからである（写真１）。



【資料７　意識調査結果】

全体考察

本題材は，特に創造性の伸長に有効であったと判断できる（資料７）。考察１，２から，「聞き手の理解と納得」を友達と吟味する姿，考察３から，互いに変容を認め合い目標を共有する姿から協働性の伸長が創造性の発揮に大きく影響すると考えられる。今後は，自分と相手，両者の意志を生かした考えの合意形成に働く創造性（分析・生産）が伸長する具体的なプロセスを明らかにしたい。

指導事例4　第6学年　題材　つくろう　おいしい広告

指導者　菊竹　一平

1　資質・能力

◎　複数の資料を根拠に，適切な言葉を選んで食品の広告をつくったり，相手や場に応じたオノマトペの使い方について根拠を明確にして自分の考えを述べたりすることができる。　（創造性：分析・生産）

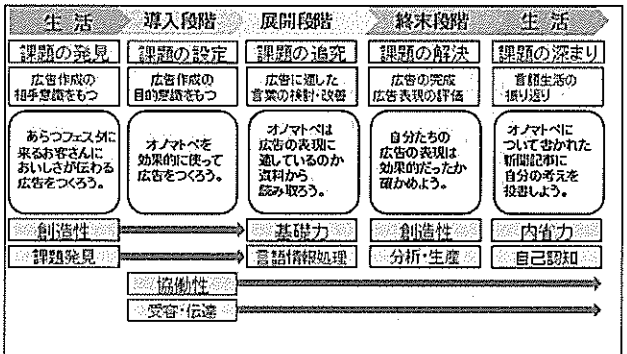
○　広告の言葉や相手や場に応じたオノマトペの使い方について自分の考えを伝え合い，広告に最適な表現を選んだり，互いの言語感覚の共通点や差異点に気付くことができる。　（協働性：受容・伝達）

◎　食品の広告づくりを通して，オノマトペが生活の様々な場で多用されていることに気付き，オノマトペの効果的な使い方について自分の考えを広げたり深めたりすることができる。　（内省力：自己認知）

○　食品の広告をつくるためにオノマトペに関する説明文を読み，筆者が事例として挙げ，根拠とする事実をとらえ，筆者の考えに対する自分の考えを明確にすることができる。　（基礎力：言語情報処理）

2　題材の考え方

本題材では，食品の広告をつくる活動を通して，現代社会で多用されつつあるオノマトペ表現をどのように使用していくのか自分なりの言語観をもつことをねらいとしている。そのために，まず依頼ビデオで食品の広告をつくる目的をもち，２つの異なる広告文を比べることで，食感が伝わりやすいオノマトペを使った広告をつくる学習課題をとらえる。次に，複数の資料を根拠に，広告文に最適だと考える言葉を伝え合い，最適な言葉を選んで，広告をつくる。さらに，完成した広告を見た人にオノマトペの効果について尋ね，効果的な言葉の使い方について考えを深める。最後に，オノマトペ表現の利点や欠点を述べた新聞記事を読み，オノマトペ表現の使用についての考えを伝え合う。そして，それぞれの考えを複数の資料を根拠に，新聞に投書する。



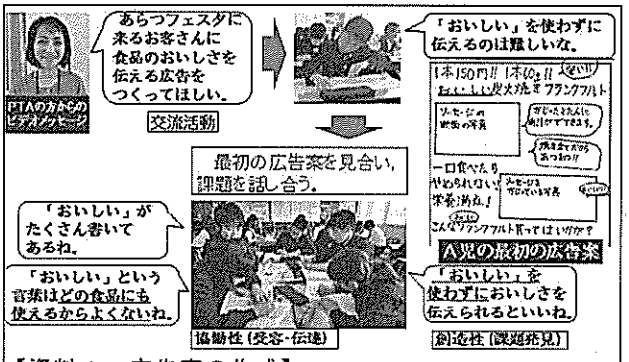
【題材の構造図】

3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：１～３/15時

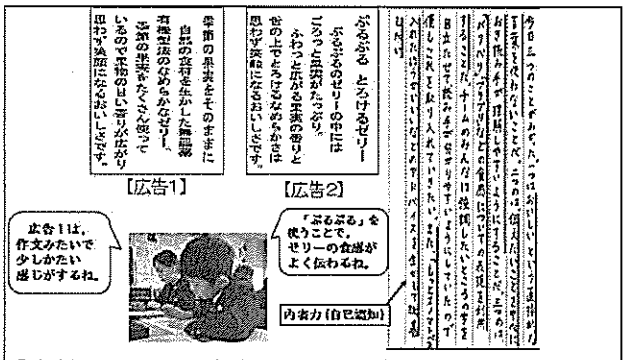
ＰＴＡの依頼ビデオを見て，広告をつくる目的を知り，２つの広告表現を比べて学習課題をとらえる。

(1)　依頼ビデオを視聴し，広告案をつくる。



【資料１　広告案の作成】

(2)　２つの広告文を比べて，学習課題をつくる。



【資料２　２つの広告文とＡ児の振り返り】

導入段階では，広告の依頼をビデオで視聴し，最初の広告案をつくった（資料１）。しかし，適切な言葉を思い付かない児童が多くいた。そして，２つの広告文を提示し，おいしさが伝わる表現について話し合った。その結果，食品の広告では食感など微妙な感覚が伝わるオノマトペが効果的であることをとらえ，オノマトペを使った広告をつくろうという学習課題をもった（資料２）。

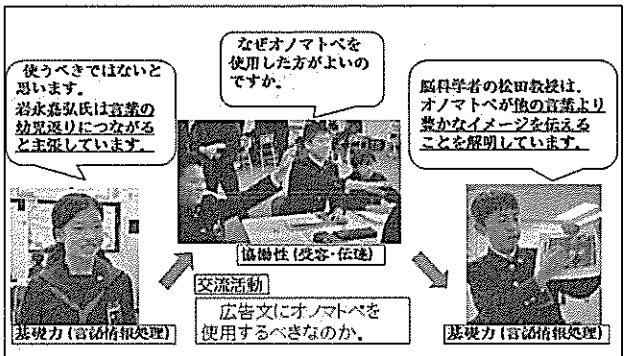
考察１

依頼ビデオから広告をつくる目的をもち，広告表現を比べることで学習課題をとらえさせたことは，身近な言語生活とつないだ課題にする上で有効であった。その根拠は，Ａ児の振り返りにあるように，広告では直接的な表現ではなく，食感などを伝えるオノマトペが効果的であることをとらえ，広告の言葉を改善しようとする姿が読み取れるからである。

展開段階のねらい：４～10/15時

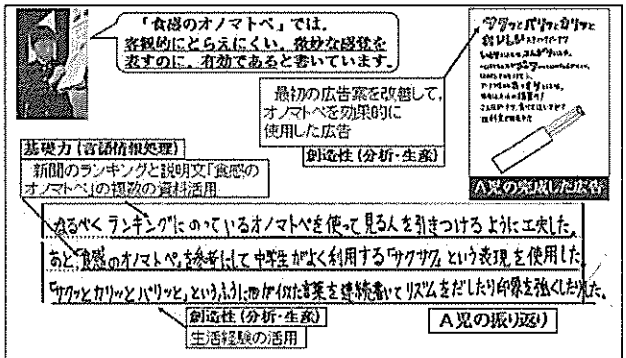
複数の資料を根拠に広告の見出しや本文にオノマトペを使うべきなのか話し合い，広告を完成させる。

(1) 広告にオノマトペを使用するべきなのか複数の資料を根拠に話し合う。



【資料３　課題の追究】

(2) 自分が選んだ広告の言葉を複数の資料を根拠に伝え合い，広告を完成する。



【資料４　課題の解決】

展開段階では，オノマトペが広告に適しているのか複数の資料を根拠に話し合った。その際，複数の資料を提示し，必要な情報を取り出しながら話し合いを進めるようにした（資料３）。そして，広告に適した言葉を使った広告をつくりあげた（資料４）。

考察２

広告にオノマトペを使用するべきか話し合う際に，複数の資料を提示したことは有効であった。その根拠は，Ａ児の完成した広告から読み取れる。まず，最初の広告案に比べて，食感や味などにオノマトペを使い，情報が増えている。さらにそれが思いつきではなく資料などを根拠として，意図的に選ばれた言葉であることがＡ児の振り返りからも読み取れる。こうしたことからも，複数の資料を提示して，広告に適した言葉を判断して選ぶ活動は有効であったと考える。

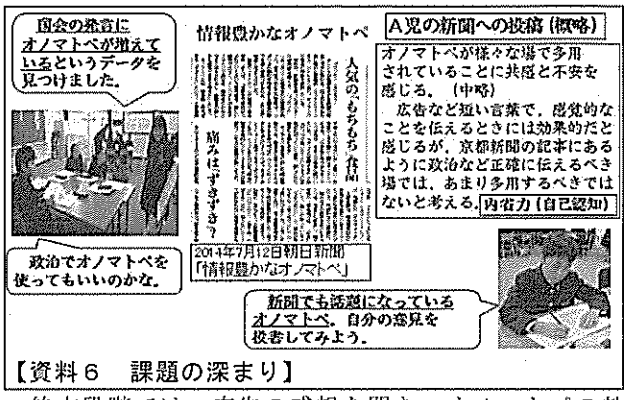
終末段階のねらい：11～15/15時

完成した広告の感想を聞き，生活の中にあふれるオノマトペについての考えを新聞の投書に書く。

(1) 完成した広告の感想を聞き，効果を実感する。

【資料５　広告の言葉を確かめる】

(2) オノマトペの使用について新聞の投書に書く。



【資料６　課題の深まり】

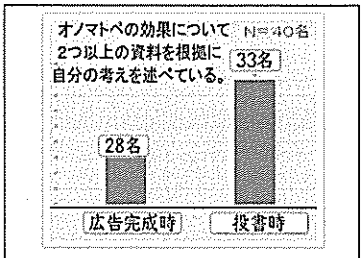
終末段階では，広告の感想を聞き，オノマトペの効果を確かめた（資料５）。また，広告以外にもオノマトペがあふれていることを新聞記事から知り，様々な場での使用の仕方について資料をもとに話し合い，最終的な自分の考えを投書にまとめていった（資料６）。

考察３

完成した広告の感想を聞いてオノマトペの豊かな情報性を実感した経験を基に，投書を行わせたことは有効であった。その根拠は，子供たちが書いた投書には言語生活での体験を基に新聞記事を読み，自分なりの新たな言語観を表現することができていたからである。

全体考察

本題材は，特に創造性，内省力の伸長に有効であったと判断できる。それは考察２からわかるように，複数の資料から適切な言葉を判断し，オノマトペを効果的に用いた広告を作成していることから判断できる。また，考察３のように，経験を基に自分の言語観を投書で表現する姿からも明らかである。さらに，投書時には，２つ以上の資料を根拠に考えを述べている児童が８割を超えている（資料７）。今後は他国との比較による内省力（言語観形成）の発揮要因を明らかにしたいと考える。



【資料７　資料の活用の変容】

指導事例5　第5学年　題材　プロに学ぶ，プレゼン英語

指導者　　杉本　克如

1　資質・能力

◎　日本の便利アイテムのよさや使い方が外国人によりわかりやすく伝わるように，獲得した英語表現を基に，表現を選定したり説明を組み立てたりすることができる。　（創造性：分析・生産）

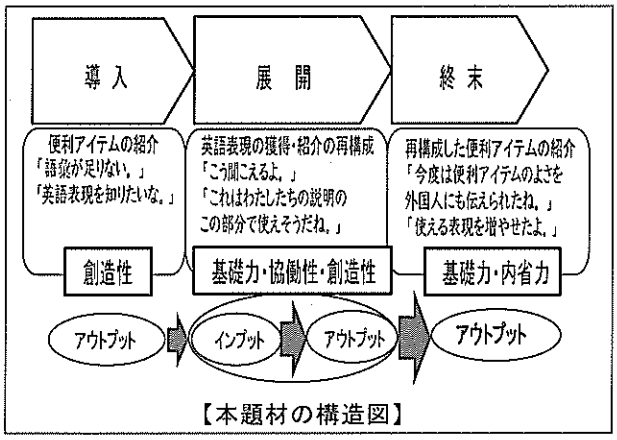
○　グループごとにプロのプレゼンターが話す英語を聞き取り，自分たちの説明に役立つ英語表現を『言語ブック』にまとめ，便利アイテムの説明に取り入れることができる。　（協働性：伝え合い）

○　日本の便利アイテムについて，外国人によりわかりやすく伝えられる説明か，英語表現や紹介方法を考えることができる。　（内省力：自己認知）

○　英語特有のリズムや音のつながりに気を付け，プロのプレゼンターが話す英語を聞き，キーワードとなる語彙や表現を手がかりにしながら内容の大体を理解することができる。　（基礎力：言語感覚）

2　題材の考え方

本題材では，プレゼンターが話す英語からキーワードとなる語彙や表現を聞き取り，意味や内容の解釈を深め，それらを自分たちの便利アイテムの説明に取り入れることを通して，外国人にとってよりわかりやすい説明を作り上げることをねらいとしている。まず，外国人に日本の便利アイテムを紹介する体験をし，自分たちが使っている語彙や表現の不十分さに気付き，学習課題について話し合う【創造性（課題発見）】。次に，プレゼンターが話す英語を聞き取り，獲得した英語表現を自分たちの紹介に取り入れ，説明を再構成する。【基礎力（言語情報処理），協働性（伝え合い），創造性（分析・生産）】。最後に，導入で紹介した外国人に，練り上がった説明を再度聞いてもらい，便利アイテムのよさやプレゼンの質について意見交流する。【基礎力（言語感覚），内省力（自己認知）】。



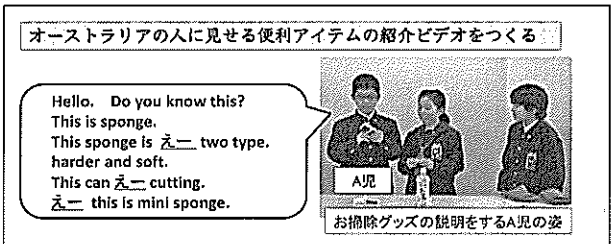
【本題材の構造図】

3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：１～５/18時

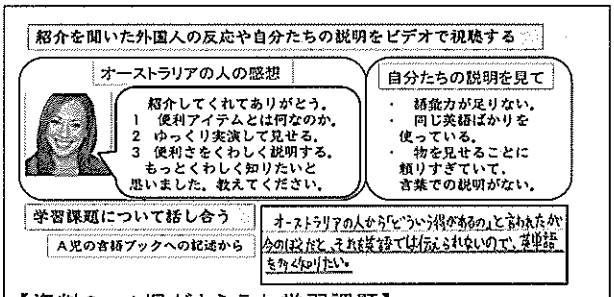
外国人に日本の便利アイテムを紹介し，自分たちの説明や使っている英語表現について話し合い，学習課題をつかむ。

(1) 紹介したい日本の便利アイテムについて話し合い，オーストラリアの人に紹介する。



【資料１　A児が紹介ビデオの中で使った英語表現】

(2) 便利アイテムの紹介を見たオーストラリアの人の反応や自分たちの紹介の様子をビデオで見ることを通して，学習課題について話し合う。



【資料２　A児がとらえた学習課題】

導入段階では，自分たちの語彙や表現の不十分さに気付かせ，言いたいことをより詳しく伝えるために，英語表現を獲得したいという強い課題意識をもった。そのときにA児は，「紹介するとき，途中で止まってしまったので，もっとたくさんの種類の単語を知りたい。」という課題意識をもった（資料２）。

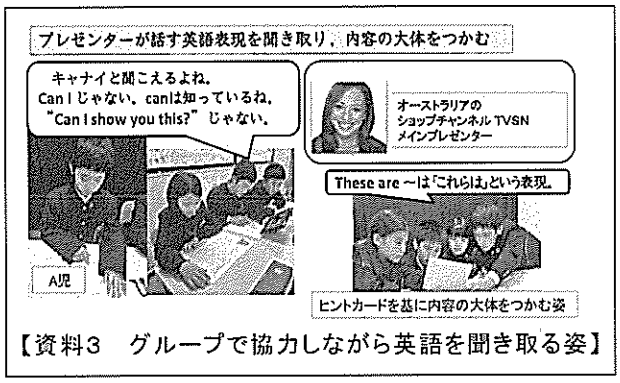
考察１

便利アイテムを紹介する自分たちの様子やそれを見た外国人の反応を見せたことは，自分たちの語彙や表現などが不十分であることを実感し，英語表現を獲得したいという課題意識をもたせる上で有効であった。その根拠は，同じ英語表現しか使えておらず，物を見せたりジェスチャーで伝えたりするなど，非言語に頼りすぎている自分たちの実態をとらえ，英語表現の獲得を課題に挙げた子供たちが多く見られたからである。

展開段階のねらい：６～14/18時

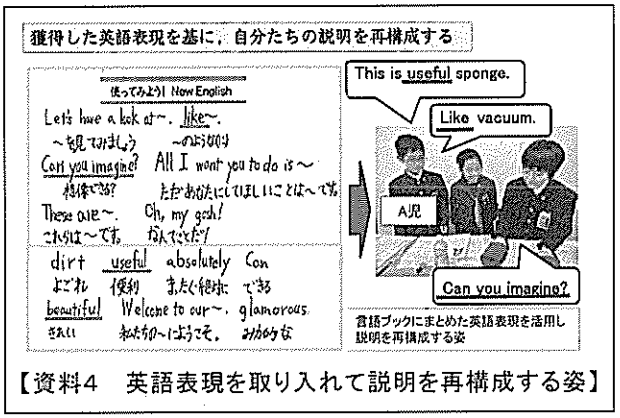
プレゼンターが話す英語表現を聞き取り，自分たちの便利アイテムの説明に取り入れ，再構成する。

(1) プレゼンターが話す英語表現を聞き取り，キーワードを基に，内容の大体を理解する。



【資料3　グループで協力しながら英語を聞き取る姿】

(2) 獲得した英語表現を基に，説明を再構成する。



【資料4　英語表現を取り入れて説明を再構成する姿】

展開段階では，グループごとに，プレゼンターが話す英語を聞き取り，自分たちの説明に使えそうな英語表現を言語ブックにまとめ，説明を再構成した。そのときA児は，お掃除グッズを紹介することを想定して，beautifulや「～のような」という意味で使うlikeなどの単語を言語ブックに書きとめた（資料４）。

考察2

プレゼンターが話す英語表現から，自分たちの説明に使える表現を獲得させたことは，便利アイテムの説明をよりわかりやすいものに再構成させる上で有効であった。その根拠は，言語情報の中から必要な英語表現を取り出し，説明を日本語で思考したり，英語表現を組み合わせたりすることを通して，言語により説明を再構成する姿が見られたからである。

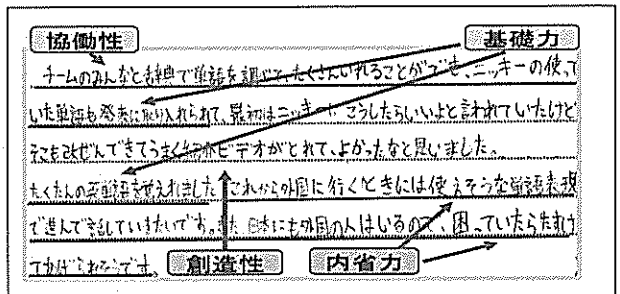
終末段階のねらい：15～18/18時

再構成した自分たちの紹介ビデオを撮影，視聴し，自分たちが話す英語や表現の効果の変容に気付く。

(1) 自分たちの便利アイテムの紹介をする。

【資料５　A児の紹介とプレゼンターの反応】

(2) 自分の語彙や英語表現の高まりを振り返り，これからの言語生活の向上について考える。



【資料６　A児の振り返り】

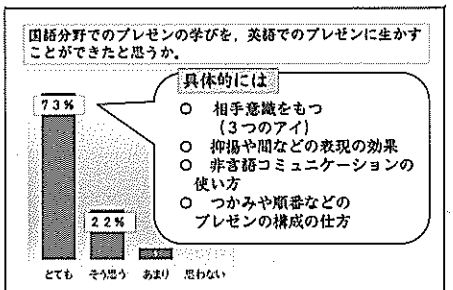
終末段階では，紹介ビデオを撮影し，導入で紹介したオーストラリアの人に再度見てもらい，その反応を通して，自分たちが使った英語表現を振り返った。A児は本題材における英語面の高まりを資料６のように振り返り，実生活に生かそうとしている。

考察3

導入と同じ外国人に再構成した紹介ビデオを見せ，使った英語表現について振り返りをさせたことは，言語表現力の向上を実感させる上で有効であった。その根拠は，意識調査において41人中39人の子供が「語彙や表現が広がった」ことに対して「とてもそう思う・そう思う」と答えているからである。

全体考察

本題材は，子供たちが使える英語表現を増やし，伝えたいことを言語により表現する上で有効であったと判断できる。考察２から，言語表現を豊かにするために必要な言語情報を取り出し，活用する姿が，考察３からは，獲得した表現を自分の言葉として活用し，思いや考えを表現する姿が見られた。資料７の意識調査の結果から，同領域の他題材と関連付けて本題材を位置付けたことの有効性を見取ることができる。



【資料７　全体の結果】

自然探究部

科学的・数学的な知を活かす領域「自然探究」

1　「自然探究」の必要性

これからの社会においては，グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により，社会構造や雇用環境が大きく変化していくことが予想されている。複雑な情報を処理したり，ビッグデータを分析考察したりすることが求められるようになる。PISA 調査や全国学力・学習状況調査の結果を見ても，複雑に諸要素が絡み合う実際の生活場面の問題においてはその既有の知識を役立てることができず，解決できていない。個が知っていること（知）をもとに，活用できる共有化・体系化された知識としてつくりだす学習が必要である。

算数科の課題としては活用力の向上が挙げられ，特に情報が複雑な日常生活での活用が不十分であるとされている。知識を習得すれば活用できるようになるわけではない。そこには，知を活かして知識に高める論理的思考力が必要である。これまで，情報が整理された問題場面については経験を積み上げることができた。しかし，情報を選択したり整理したりして，自分の知とつないで考えることが不十分であったと考える。情報が整理されていない問題を自分の数学的な知をもとに考え，解決する方法を知識としてつくりだすことが大切である。そのためには，情報を関係付け，自分の知とつないでいく統計的な見方を育てる必要がある。

理科の課題としては，科学的な疑問を見つけることや現象を科学的に説明することが指摘されている。子供の理科の学習観は「暗記・再生」を重視する傾向にある。基礎的基本的な知識は必要ではあるが，個別の知識ではなく，問題を実際に解決する過程のよさを感じさせ，体系化させる学習が大切である。既に獲得している知識や経験に偏った考え方で強固に考えている傾向も見られ，実験したことから得られた結果を根拠として説明することが不十分である。実験結果や用語を覚えるのではなく，問題を解決した過程で発揮した知を実感させることが大切である。そのためには客観的なデータと考察のための統計的な処理が大切になる。

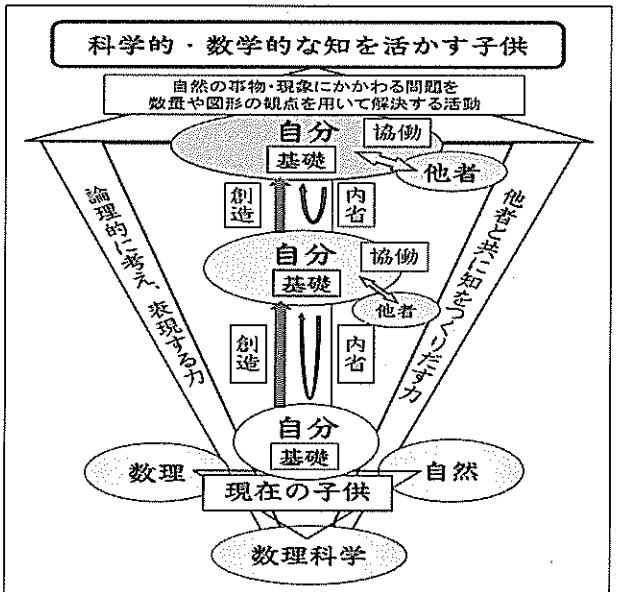
そこで，これらの課題を解決するために，領域「自然探究」を設定する。算数科においては，自分の切実な問題を解決する過程を，理科においては，客観的なデータのよりよい処理が必要となり，どちらも自分自身の知をつくりだすことになる。ここでは，統計的な見方を育てていく必要がある。このことによって，情報を取り出し，自分の科学的・数学的な知と組合せながら新たな知識をつくりだし身に付けることができ，創造性を発揮することができると考える。

2　「自然探究」で担うもの

(1) 資質・能力から見える内容の背景

領域「自然探究」の基盤になっている算数科と理科の教科目標には，他教科とは違い，「見通しをもって考える」ことが掲げられている。これは，論理的思考力のことである。予測できない未来において人間が生きていくためには状況をとらえ，その情報や個人の経験を手がかりに判断していかなければならない。情報を集め，分析して，解決するための知識をつくり出すことが，未来を変えていくことにつながるのである。

そのためには，子供がどのようにして事象にかかわる知を形成し，また物事をとらえる枠組みを形成してきているかという発達的視点をもって学習内容を構成することが重要になる。領域「自然探究」では，内容を「自然」「数理」「数理科学」から構成し，４つの資質・能力（創造性・協働性・内省力・基礎力）との関係を図１のような関係でとらえている。自然探究の学習では，理科や算数の教科固有の科学的・数学的な見方や考え方である基礎力（知・知識）を対象にして，創造性を働かせながら変容させていく。そのためには，他者とかかわる協働性が必要である。問題を共有し，自分の知を整理し直し，つくりかえて知識に到達する姿が明らかになってくる。その過程においては，自分が考えたことをフィードバックし，より高めようとする内省力が必要となる。このように，基礎力を基盤に創造性を発揮し，自他のかかわりの中で内省力や協働性を高めながら，科学的・数学的な知を活かす子供の育成をめざす。



【図1　「自然探究」における資質・能力と目標構造図】

(2) 資質・能力について

【表1　領域「自然探究」の資質・能力表】

上位概念	下位概念	低学年	中学年	高学年
創造性	追究意欲	事物や事象にかかわろうとする興味や関心をもとうとする。	事物や事象にかかわって，既習との違いを意識し，調べたいことをもとうとする。	事物や事象に進んでかかわろうとし，既習とのずれや矛盾をもとに調べたいことをもち続けようとする。
	論理的思考	・　いくつかの事柄を比較し，帰納的に考えることで，差異点や共通点を見つけようとする。 ・　既習の場面や状況との変化をとらえ，類推的に考えることで，解決方法やその着眼点を見つけようとする。 ・　場面や状況を分析して，要素や条件を整理し，演繹的に考えることで，結果を予想したり仮説を立てたりしようとする。		
	論理的表現	場面の具体物をもとに操作をしたり絵図表現を用いたりして，考えを表そうとする。	場面の具体物を抽象化して，絵図表現や記号的表現を用いて，考えを表そうとする。	場面や目的に応じて操作や絵図表現，記号的表現などの表現を選択し，考えをわかりやすく表そうとする。
協働性	他者理解	他者の考えを聞き取り，自分の考えと比べて，違いに気付き，認めようとする。	他者の考えを聞き取り，自分の考えと比べて，共通点や差異点に気付き，考えのよさを認めようとする。	他者の考えを聞き取り，自分の考えと比べて，共通点や差異点に気付き，考えの根拠や意図を認めようとする。
内省力	自己調整	自分の活動の結果を見直して，自分の考えや結果を修正・強化することができる。	自分の活動の結果や方法を見直して，よさや誤りに気付き，根拠をもって考えを修正・強化することができる。	自分の活動の結果や方法を他者の考えと比べながら見直して，客観的な価値をとらえて，考えを修正・強化することができる。
	行動決定	自分の生活上の経験や学習内容をあてはめて，解決方法を考え，実際に活動することができる。	解決したい場面と既習の内容や気付きを関連付けて考え，実行可能な解決方法を考え，活動することができる。	問題場面を解決するために，既習内容や気付きを組み合わせて，誰もが納得できるような解決方法を考え，活動することができる。
基礎力	科学的な知識・技能	【物質・エネルギー】 ・エネルギーの見方・エネルギーの変換と保存・エネルギー資源の有効活用 ・粒子の結合・粒子の保存性・粒子のエネルギー　などを用いることができる。		
		【生命・地球】 ・生物の構造と機能・生物の多様性と共通性・生命の連続性・生物と環境のかかわり ・地球の内部・地球の表面・地球の周辺　などを用いることができる。		
	数学的な知識・技能	・　単位の考え　・操作の考え　・概括的把握の考え ・　集合の考え　・アルゴリズムの考え　・基本的性質の考え ・　表現の考え　・式についての考え　などを用いることができる。		

3　目標と内容

(1) 目標について

科学的・数学的な知を活かそうとする態度を育てるために，自然の事物・現象にかかわる問題を数量や図形の観点を用いて解決する活動を通して，論理的に考え，表現する力と他者と共に知をつくりだす力を育てる。

(2) 内容について

①　内容設定について

領域「自然探究」では，科学的・数学的な知を活かそうとする態度を育てることをねらいとする。わたしたちの身の回りの事物・現象を明らかにして科学的・数学的な知識をつくりだすことは，わたしたちの生活を豊かにすることにつながっている。学問としての科学や数学は新しい知識を更新していくことによって，人間の進歩を支えてきた。新しい知識をつくりだし，それらを効果的に子孫や他者に伝承していくために知識にまとめ上げ，学問を体系化し確立してきた。

科学は，古代において，食料を確保するために，狩猟する動物の生態を調べたり植物の育ち方を考えたりした。このような観察・実験を通して科学的な知識はつくりだされ，物理学や生物学といった科学が発展していった。一方，数学は，土地の大きさを測量したり，記録したことを子孫に正確に伝えたりしながら発達してきた。現代社会においては，それぞれの学問の発達によって研究開発が進み，科学的・数学的な知識は常につくりだされ更新されるものになっている。常に新しい知識がつくりだされる状況にある今日では，つくりだされた知識を得ることは大切であるが，それだけが大切ではない。それらを自分の知からいかにつくりだし用いていくかといった力を身に付ける子供を育てることが大切である

領域「自然探究」の学習内容は，身の回りにある科学的な知識や数学的な知識である。これらの知識は，今の自分の問題を解決するだけでなく，これからの生活や学習においても必要となる知識である。それらを獲得させ活用できるようにするためには，それらの考察を体験することが必要となる。科学的な知識は，自然の事物・現象を観察したり実験したりすることによってつくりだされる。しかし，それが知識を単に覚えることにならないようにするためには，自ら疑問や問題を発見し解決することが大切になる。そのことによって，自分の既習の知に気付くとともに，身に付けた知識の有用感を感じることができる。また，数学的な知識も同様に学問上の真理探究だけでは，そのよさを感じることができない。それらを活かすことで，有用感を感じることができると考える。

そこで，科学的な知識と数学的な知識を含んだ内容を同時に扱うことができる内容を位置付ける。現行教科である理科と算数科において学習するべき内容を含み，さらにこれからの生活において必要となるであろう科学・数学分野の内容を系統性を考慮しながら取り入れていく。

②　内容構成について

科学的な内容と数学的な内容を同時に取り扱うことで問題解決の実感をより一層高めることができる。科学的な知識や数学的な知識をつくりだす活動は，身の回りの問題を発見し考察することによって促される。それは，自然に対する不思議さや疑問，生活の不便さである。さらに，高次な学問の基礎という点から考えると，理科や数学に関わる基礎的な内容が必要となる。そこで，領域「自然探究」の内容は，「Ａ自然」，「Ｂ数理」，「Ｃ数理科学」の３つで構成する。

「Ａ自然」…自然を探究する学び方や基礎的な知識・技能を身に付ける。

「Ｂ数理」…数理を探究する学び方や基礎的な知識・技能を身に付ける。

「Ｃ数理科学」…自然の事象を，科学的・数学的な見方から関係を予想し，情報を集め，実証性，再現性，客観性から考察する。

「Ａ自然」では，自然を探究するために必要な観察や実験の仕方などの学び方や事象に関する基礎的な知識・技能を身に付けることができるようにする。また，「Ｂ数理」では数理を探究するために必要な考え方や表現方法などの学び方や数理にかかわる基礎的な知識・技能を身に付けることができるようにする。しかし，「Ａ自然」と「Ｂ数理」の内容にかかわる問題を追究していく過程において，２つの内容を関連付けて，数学的な知や科学的な知を用いることができる場合については「Ｃ数理科学」として位置付ける。

「数理科学」とは，一般的に，数学そのもの及び優れて数学的ではあるが数学のサブカテゴリーとは見なされていない学問分野を指す。mathmatical sciences という用語があり，それを日本語に訳すために「数理科学」という訳語がつくられた。具体的には，統計学がある。また計算科学，暗号理論，集団遺伝学，計量経済学，理論物理学，保健数理学なども挙げられる。数量，形といったものを対象とするだけではなく，広く数学の考えを用いる対象を考察している。

「Ｃ数理科学」においては，自然の事象を科学的・数学的な見方から見直して，それらをよりよくしようとする過程で，数学的・科学的な知を用いたりつくりだしたりすることができるものを内容とする。自然の事象の要素を数量化してとらえ，観察や実験など実際に触れることによって情報を集め，関係性に着目し，何らかの真理を自分でつくりだすようにする。

4　年間指導計画作成の考え方

(1) 教材化の工夫

領域「自然探究」では，科学的な知と数学的な知を生活に活かすことをねらいとする。そのために，特に「C数理科学」では，以下のような視点から教材化を図るようにする。

○　身の回りの生活や自然の事象にかかわる体験から，不思議さや疑問点，曖昧さなどの問題意識をもつことができること
○　実験や観察などの活動によって，数量や図形にかかわる数学的な情報を集めることができ，考察することができること
○　他者との情報の交流によって，真理の一般化を図ることができること

数学的な知や科学的な知を活かすことができるようにするためには，「A自然」や「B数理」との内容の関連と系統性を重視する。「C数理科学」は，科学的な知や数学的な知の素地になっていたり，応用発展的に用いられたりする内容を考えていく必要がある。どの内容とかかわり，どの内容につながっていくのかを明らかにしておかなければならない。

その内容は２つのパターンで考えることができる。

Ⅰ…　数学的な内容を高めるために科学の知を方法として用いる場合
Ⅱ…　科学的な知を高めるために数学的な知を方法として用いる場合

例えば，Ⅰ型としては，第２学年「かげあそびをたのしもう」の学習がある。自分の影に興味をもち，その長さを調べる過程を通して，理科の内容である影と太陽の光の関係などを考察することによって，数学的な内容である１ｍを超える長さについての見方や，時刻を変えた影の長さを繰り返し測定させていくのである。Ⅱ型としては，第４学年「給湯器のしくみを調べよう」や第５学年「科学ビー玉コースターをつくろう」が挙げられる。第４学年「給湯器のしくみを調べよう」では，身の回りにある様々な物のあたたまり方を調べ，説明書づくりをすることを目的として，表やグラフなどの数学的な表現を用いて考察できるようにしている。温度計を用いて測定した結果を折れ線グラフや表に表して説明するのである。第５学年「科学ビー玉コースターをつくろう」では，ビー玉コースターづくりを通して，「振り子」や「てこ」，「衝突」などの科学的な知を高めるために，数学的な内容である平均や角度，速度などを用いて考察していく。つまり，様々な数学的な要素を組み合わせて試行錯誤する活動によって，物理学的な知を高めることができるのである。そのことによって，目的に応じて必要な情報を選択し処理したり，説明し合ったりすることができる汎用的な能力を身に付けることができると考える。

(2) 題材配列

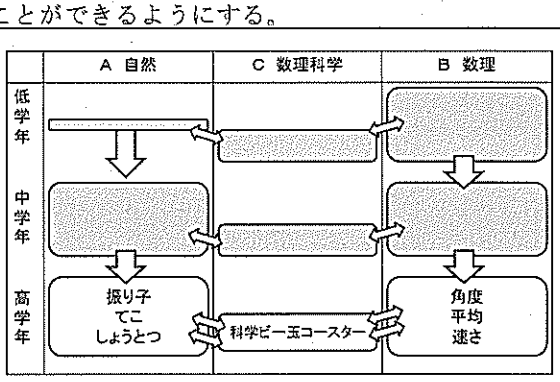
各学年において，「A自然」，「B数理」，「C数理科学」のそれぞれの内容を配列するが，子供の発達段階やそれらの系統性を考慮する必要がある。これらの配列を考える際，現行学習指導要領を見直し，内容を移行，削除，新設する。系統性については，ある学習内容を活用させたり発展させたりするものや素地や基礎になるものをつないで位置付けるようにする（図２）。

低学年においては，「B数理」の内容を中心に，「C数理科学」，「A自然」へと内容が広がっていくようにする。事象を数量や図形の観点からとらえ，適切な数理的な処理をしっかりと身に付けることにより，中学年以降の「B数理」の基礎として用いることができるようになる。また，自然の事象にかかわる遊びを通して，考察の対象を広げる経験を積むことができるようにする。

中学年においては，「B数理」の内容に加えて「A自然」の内容も重視していく。「A自然」においては，低学年の学習内容や生活経験上のつながりを考慮する。また，「A自然」と「B数理」にかかわる活用的・発展的な場面として「C数理科学」を位置付けるようにする。

高学年においては，「A自然」，「B数理」の内容については一層系統性が重視されて，高度になっていく。学習内容を確実に習得させるためには，内容区分内の学習のつながりを意識させて指導することが大切である。また，学習の有用性を感じることができるように，それらを統合的に活用していく場面として「C数理科学」を位置付けるようにする。

「A自然」と「B数理」は，指導内容の系統性と子供の生活経験を大切にして位置付ける必要がある。「C数理科学」は，それらを結び付けながら学習を活用することができるようにする。



【図２　各学年部で取り扱う内容の関連と重点例】

【参考文献等】

1) 藤村宣之『数学的・科学的リテラシーの心理学　子どもの学力はどう高まるか』有斐閣，2012年
2) 榊原知美『算数・理科を学ぶ子どもの発達心理学』ミネルヴァ書房，2014年

指導事例1　第1学年　題材　すごいね　かぜで　はこばれる　たねのひみつ

指導者　　二串　英一

1　資質・能力

○　滞空時間を長くするために，自然界の植物の種の形や動物の翼の形を参考に，左右の翼の形，翼の材料，おもりの重さを観点として種型飛行機を改良することができる。　　（創造性：論理的表現）

○　滞空時間を長くするアイデアを一緒に考えたり，自分が得たこつを友だちに教えたり，教えてもらったこつを理解したりして，種型飛行機作りに取り組むことができる。　　（協働性：他者理解）

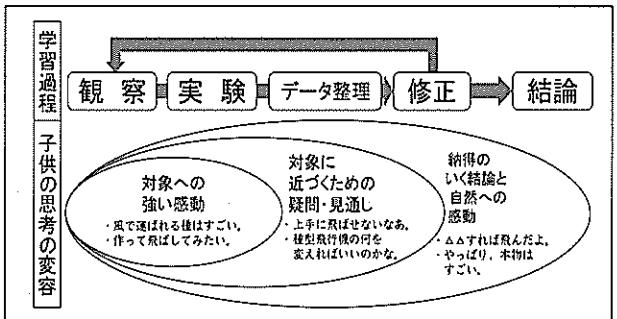
○　滞空時間の長い種型飛行機を作るときの条件を見つけ，自信をもって種型飛行機作りに取り組むことができる。　　（内省力：自己調整）

○　種型飛行機において，滞空時間を長くするためには，左右の翼の形，翼の材質，おもりの重さが関係していることに気付くことができる。

（基礎力：科学的・数学的な知識・技能）

2　題材の考え方

本題材は，植物の種の子孫繁栄のための工夫を自然のすばらしさとして感じ，そのことを種型飛行機作りを通して味わうことをねらいとしている。そのためには，植物の種の子孫繁栄のための工夫を図鑑や Web などの資料から獲得する静的な知識としてではなく，動的な知識つまり体験を通して実感することが大切であると考え，内容と活動を下図のように構成している。主張点は，①低学年のアニミズムの傾向を鑑みて，自然のすばらしさを学習対象にしていること，②「C数理科学」の基本的学習過程における活動として「観察→実験→データ整理→修正」というように段階的に仕組み，科学的な見方・考え方と数学的な考えの両方の育成を重視していることである。特に，②については，未来社会における科学的な根拠（要因そのものや要因どうしの関係を数値化して，数値や数値の変化などを根拠にすること）をもとに目の前の事象を解決することの重要性を踏まえて，統計学的な見方・考え方の育成を軸としている。



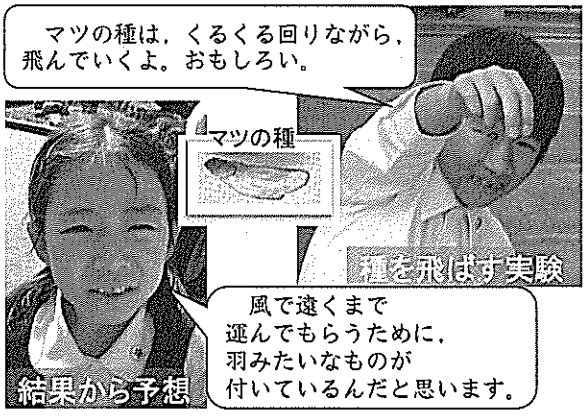
【図　題材の構造図】

3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～2/10時

松の種に付いている羽に着目し，遠くまで運ばれる工夫について興味を示すことができる。

導入段階では，まずこれまでに見たり育てたりした経験がある植物の種を提示し，形の共通点について話し合った。その後，マツの種を松笠から取り出して観察した。子供たちは，アサガオやヒマワリの種，団栗とは違って羽のようなものがあることに気付き，疑問を抱いた。さらに，微風の日にマツの種を飛ばした。くるくる回りながら風で運ばれる様子を見て子供たちは，「遠くまで飛ぶために付いているのでは。」と羽のようなものが付いている理由を見通した（資料1）。



【資料1　実験による見通し】

考察1

風で運ばれる種の工夫に気付かせるために，既知の種の概念とは違うマツの種を採取・観察・実験したことは，有効であった。その根拠は，観察によって生じた疑問を実験によっておよそ確かな見通しとさらなる解決意欲に変えることができたからである。

展開段階のねらい：3～7/10時

滞空時間の長い種型飛行機作りに挑戦し，滞空時間を長くするための条件を見出すことができる。

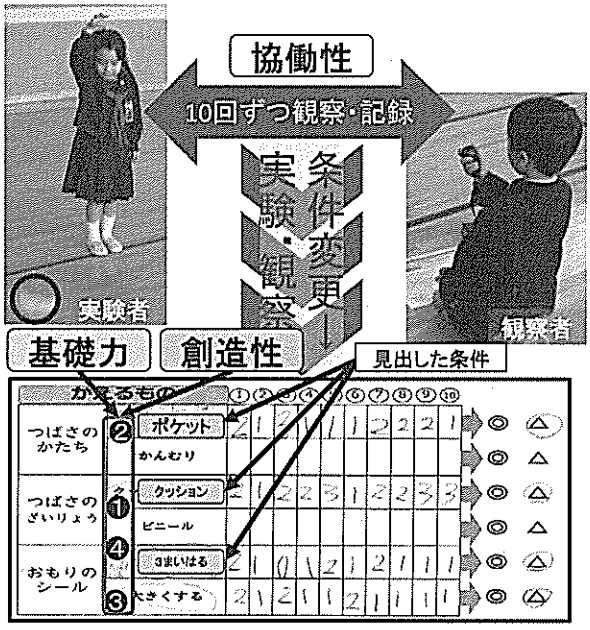
(1) アルソミトラの種について話し合う。

(2) 種型飛行機を作り，飛ばす。

展開段階では，まず風散布の中で最も滞空時間が長いアルソミトラの種を観察し，実際に飛ばした。子供たちは，鳥のような羽があり，それはとても薄く，風がなくてもスーッと飛ぶことに驚いた（資料2）。

【資料２　アルソミトラの種の観察と飛ばす実験】

そして，自分たちも模型を作って飛ばしてみたいという願いをもった。そこで，種型飛行機（羽は画用紙，種はシールで作成）を提示し，実際に飛ばした。しかし，全然飛ばないために，長い時間飛ぶための条件を話し合った。その結果，「羽の形」「羽の材料」「おもりのシール」の３つを条件として予想した。Ａ児ペアは，「条件を１つ変更」→「実験」を繰り返して，一番長く飛ぶ条件を「ポケットの形・クッション・おもりのシール３枚」と見出した（資料３）。



【資料３　条件を見つけるまでの活動とノート】

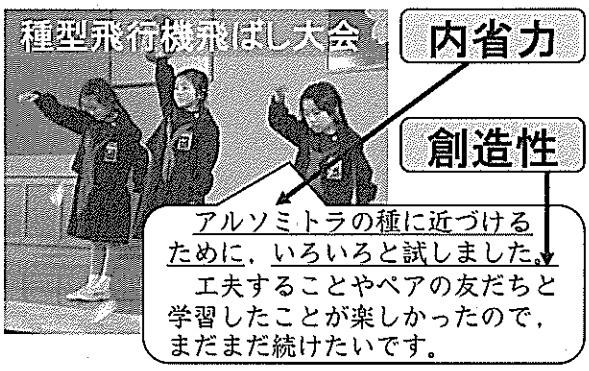
考察２

風散布の中で最も滞空時間が長いアルソミトラの種をモデルとして，理想とする種型飛行機を作ったことは，風で運ばれる種の工夫に気付く上で有効であった。その根拠は，種の工夫を見つけるために，自分たちの種型飛行機をアルソミトラの種に近づけようと，子供たち自ら観察と実験を何度も繰り返したこと，実験を繰り返すうちに３つの条件のうち１つを変える条件制御の方法を身に付けて（基礎力），最適な条件を見出そうとしたことである（創造性）。

発展段階のねらい：８～10/10時

種型飛行機飛ばし大会を行い，風で運ばれる種のすばらしさを感じることができる。

発展段階では，展開段階の実験・観察によって見出した滞空時間の長い種型飛行機の条件をもとに作った種型飛行機を使って，種型飛行機飛ばし大会を行った。どのペアも，予想通り飛んだことに喜び，Ａ児は「まだまだ，この学習を続けたい。」という意欲的な感想をもった（資料４）。

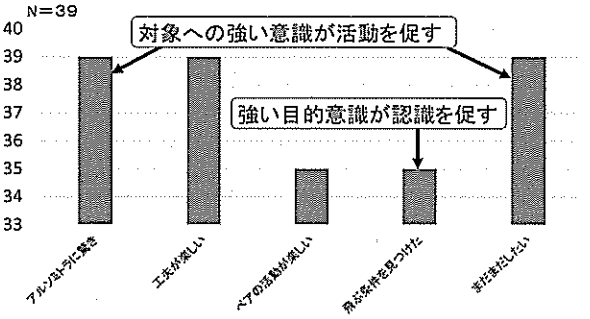


【資料４　種型飛行機飛ばし大会の様子と感想】

考察３

十分に実験・観察を行った後に大会を行ったことは，有効であった。その根拠は，資料４のＡ児の感想から，アルソミトラの種に近づけようという目的を強くもっていたことがわかるからである（内省力）。

全体考察



【資料５　学習後の意識調査】

考察１・２からは，実物の観察やそれを用いた実験を取り入れた活動構成は，科学的な見方・考え方である「条件変更」に気付く上で有効であったと判断できる。また，条件変更は数学的な考えである「基準をつくる」という分類・整理の考えとも関連があると判断できる。さらに，考察３からは，強い目的意識があると，子供自らが次の活動の見通しを立て，創造性が発揮されることもわかった。資料５からは，対象への強い感動と主体的な活動との関係，強い目的意識と認識の関係を見て取ることができる。

指導事例2　第2学年　題材　かげあそびを　たのしもう

指導者　　伯川　康洋

1　資質・能力

○　時刻の違いによって影の大きさが変わるという関係を，新しい長さの単位をつくりだしながら考察することができる。　　（創造性：論理的表現）

○　影の大きさを協力して測ったりその共通点や差異点を話し合ったりすることができる。

（協働性：他者理解）

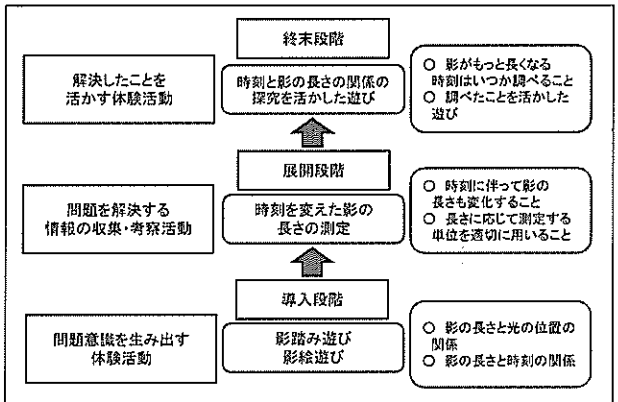
○　自分の影の大きさを予想し，観察を用いて確かめることができる。　　（内省力：自己調整）

○　自分の影の大きさの変化を，長さの観点からとらえ，それを測定することができる。

（基礎力：数学的な知識・技能）

2　題材の考え方

本題材では，時刻が変わると影の大きさが変わるという関係を，新しい長さの単位をつくりながら考察できることをねらいとしている。具体的には，①影は光の反対側にできることを理解すること，②影の大きさは時刻によって変わることを理解すること，③影の大きさを新しい長さの単位mを用いて測定することができることなどである。まず，導入段階では，影が光と反対側にできることや影の大きさが変わることに気付かせるために，影踏み遊びや影絵遊びを体験させる。そこでは，外でも影の大きさは変わるかという追究意欲をもたせる。次に，展開段階では，自分の身長と影の長さを比べたり，時刻の違う影の長さを測定して比べたりする活動を行う。このことによって，長さによって測定器を選択したり，新しい長さの単位mの便利さについて実感したりすることができる。そして，終末段階では，影が１番長くなる時刻や短くなる時刻についても予想し，調べ，遊びを工夫する活動を行う。ここでは，影の長さと時刻との関係からつくり出した知を活用させることができる。



【単元の構造図】

3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～2/6時

影踏み遊びと影絵遊びを行い，影ができる理由やその大きさ（長さ）についての不思議さに気付き，学習問題を話し合う。

【資料1　影遊びからの気付き】

かげの長さは　かわることがあるか
しらべたいです。（かげえは　大きくなったり
小さくなったりしたから。）

【資料2　A児の感想】

導入段階では，影踏み遊びと影絵遊びの２つの遊び活動を行った（資料１）。影踏み遊びでは，遊びながら影が太陽と反対側にできることや自分の身長と影の長さの違いに気付いた。影絵遊びでは，光の当て方によって，影の大きさを変えることができることに気付いた。これらの２つの遊び体験から，Ａ児は，「影の長さが変わることを調べたい。」と考えた（資料２）。学級全体で気付いたことを交流すると，子供たちからは「自分と影ではどちらが大きいかわからない。調べてみたい。」や「時刻が違うと影の長さも変わりそうだ。」という発言があり，影の長さの予想を立てて，調べる計画を話し合った。また，「もっと遊んでみたい。」と発言する姿も見られた。

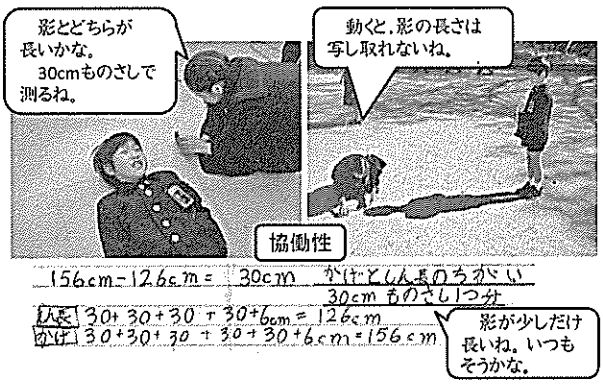
考察1

影踏み遊びと影絵遊びを行う２つの体験活動を位置付けたことは，影の長さに着目させ，その大きさを変えることができることに気付かせるとともに，「もっと遊びたい。」という意欲をもたせる上で有効であった。その根拠は，影踏み遊びによって影の長さに着目できたことと影絵遊びによって影の大きさに着目できたことで，その変化や不思議さに気付くことができたからである。

展開段階のねらい：3～4/6時

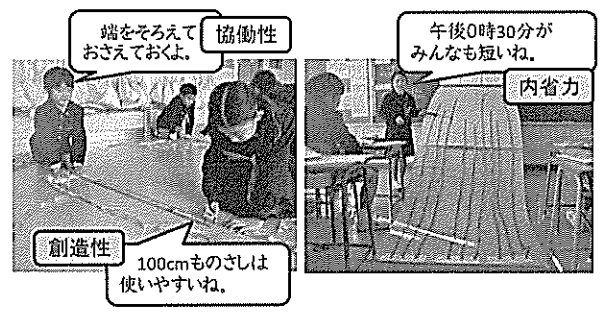
100cmを超える長さを測定する場合には，30cmものさしをつないだり１ｍものさしを適切に用いることができるとともに，普遍単位１ｍのよさに気付くことができる。

(1) 午前11時30分に紙テープに写し取った自分の影の長さと自分の身長を比べるために，既習の普遍単位cmを用いて測定し，調べる。



【資料3　身長と影の長さをペアで調べる子供】

(2) 午前10時30分，午後０時30分，午後２時30分のように時刻を変えて紙テープに写し取った影の長さを普遍単位ｍを用いて表し，その違いを調べる。



【資料4　新しい長さの単位のよさに気付く子供】

展開段階では，まず，「自分の身長より影の長さが長いと思う。」という子供の予想から，自分の身長と午前11時30分の影の長さを紙テープで写し取り，その長さを測定する活動を行った。子供たちは，100cm を超える長さを30cm ものさしをつないで測定した。次に，「時刻によって影の長さは変わると思う。」という発言から，午前10時30分と午後２時30分の影の長さを調べた。120cm ものさしと100cm（１ｍ）ものさしから選んで測定し，100cm ものさしの便利さに気付いた。

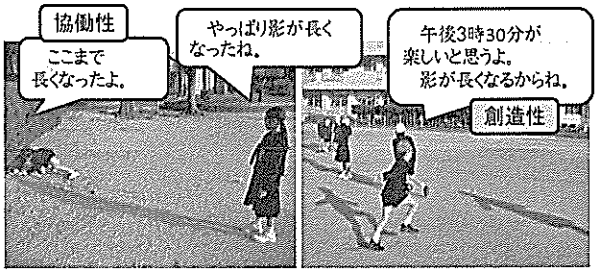
考察2

100cm を超える長さを測定する場面を繰り返し仕組んだことは，新しい普遍単位１ｍをつくりだし，そのよさを実感する上で，有効であった。その根拠は，計測器を複数試して実測することで，便利さに気付くことができたからである。

終末段階のねらい：5～6/6時

影の長さを測定したことを活かして工夫した遊びを話し合い，楽しむことができる。

(1) 影が長い時刻に影踏み遊びを楽しむために，これまで調べた時刻よりも影が長くなる時刻を予想し，実際に測定する。



【資料5　長い影を予想して測定・遊ぶ活動】

(2) 影踏み遊びで工夫することを話し合い，影踏み遊びを行う。

3時30分ぐらいがいいと思いました。
あそんでみると かげが長くて おにになったら、つかまえやすいし 子になったらにげるのが むずかしくて楽しかったです。

【資料6　長い影の影踏み遊びをしたA児の感想】

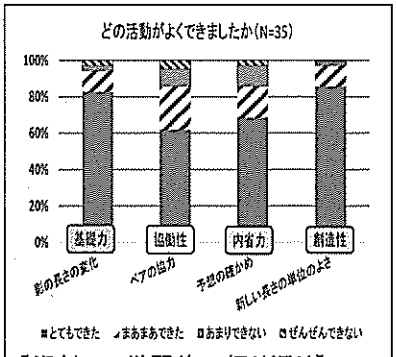
終末段階では，もっと調べたいことを話し合い，調べるようにした。「もっと影遊びを楽しくするには影が長い方がよい。午後３時30分はもっと影が長いはずだ。」と考えた。実際に測定して確かめ，「影は長くなって短くなって長くなる」と結論付けた。さらに「影が長い時刻に遊びたい。」と話し合い，影踏み遊びを楽しんだ。

考察3

もっと調べたいことを探究する活動を行ったことは，追究意欲を高め，学んだ数学的・科学的な知を活かすことに有効であった。その根拠は子供たちが学んだことを活かした遊びを自ら考え，楽しんでいたからである。

全体考察

時刻による影の長さの変化を調べて測定する活動は，100cm を超える長さを測定する単位をつくりだす上で，有効であったと判断できる。資料７からわかるように，新しい長さの単位のよさの実感が高まっていることがわかる。



【資料7　学習後の振り返り】

指導事例3　第4学年　題材　身近なもののあたたまり方の仕組みをさぐろう

指導者　　古賀　　誠

1　資質・能力

◎　生活の中で使われている給湯器や，ドライヤー，風呂，鍋などの仕組みは，金属や水，空気のあたたまり方の性質をうまく利用していることを思考することができる。　（創造性：論理的思考）

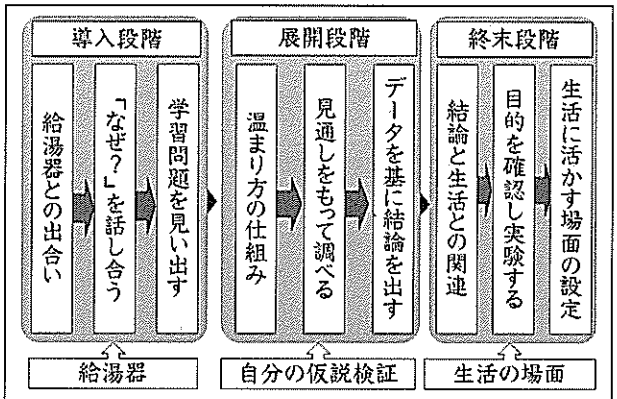
○　金属や水，空気の温まり方について，表やグラフを根拠にして判断し，そこから検討したことを，グループ内やクラス全体で説明したり，友達の考えを聞いたりすることができる。　（協働性：他者理解）

○　金属棒や金属板，水，空気の温まる様子を調べる中で，自分たちの予想や仮説が有効だったことや，追究方法がうまくいったことに対する自信をもつことができる。　（内省力：自己調整）

○　金属を熱すると，熱した所から広がって温まっていくが，水や空気は熱せられた部分が移動して全体が温まるといった，温まり方が違うことを理解することができる。　（基礎力：科学的な知識・技能）

2　題材の考え方

本題材は，身近にある物で温める仕組みを課題として，金属や水，空気の温まり方を調べ，身近で使われている物の温まり方の仕組みを解明できるようにすることをねらいとしている。そのために，金属や水，空気の温まり方を基本として，身近で使われているフライパンなどの調理器具，給湯器などの温める仕組みを調べさせる題材構成を考案した。主張点は，物の温まり方に着目し，数学的，科学的な知識を使って，繰り返し実験を行い，温度変化などのデータを根拠に考察させることを重視したことである。具体的には，自分の目的に合った実験データが取れるまで，実験の内容や方法を見直し，データをどのように表現したら根拠となるのか交流していった。そして，統計的な処理のよさに気付き，その根拠から結論を導き出し，生活に活かすことを考えるようにしていった。



【題材の構成図】

3　学習の流れと考察

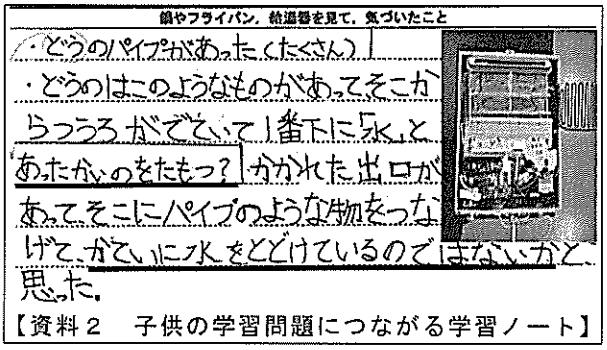
導入段階のねらい：１～３/11時

身近にある給湯器やフライパン，鍋で熱した場面を提示し，ものの温まり方の仕組みについての疑問をもち，ものを温めるためには，どのような仕組みになっているのかという課題をもつことができる。

(1) 身近にあるものの温まり方について，体験したことを話し合う。

【資料１　生活体験から物の温まり方を話し合う】

(2) 鍋や給湯器の様子を見て，題材の学習問題を話し合う。



【資料２　子供の学習問題につながる学習ノート】

導入の段階では，給湯器の実物や中身の構造を見て，給湯器の温まり方の仕組みに着目させて，そこには金属などが使われていることに気付くような活動を設定した。そのときにＡ児は，「銅のパイプが使われているのには訳があるのではないか」と考えた（資料２）。

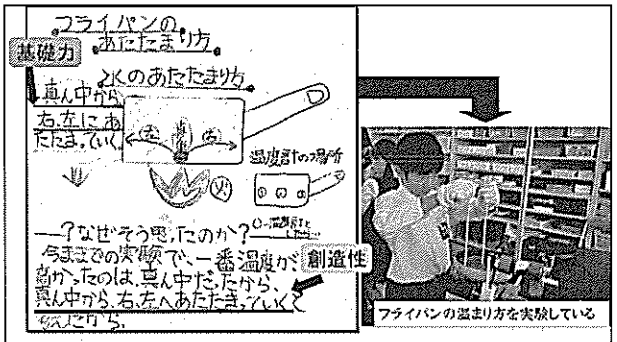
考察１

給湯器の実物を見せたり，分解した中身を扱わせたりしたことは，子供に題材を通した学習課題と「調べてみたい」という意欲をもたせる上で有効であった。その根拠はものの温まり方について，子供の調べる学習意欲が高まり，自分なりの実験計画の見通しをもつことができたからである。さらに，実験計画を何度も見直し，調べたい身近なものの温まり方の仕組みを意欲的に追究していこうとする姿が見られたからである。

展開段階のねらい：４～９/11時

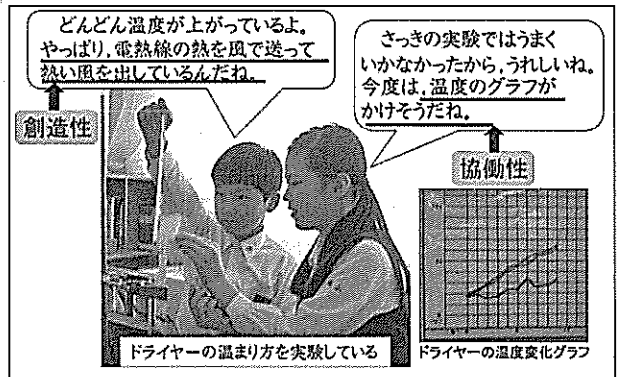
自分が調べたい身近なものの温まり方について，実験方法を検討し，根拠となる実験のデータを集め，科学的，数学的な見方や考え方をもつことができる。

(1) 自分が調べたいものの仕組みを考え，実験方法を話し合い，学習ノートにまとめる。



【資料３　実験計画をもとに検証している】

(2) 調べたい物の仕組みについて，根拠となる実験のデータを集め，物の仕組みについて交流する。



【資料４　温度変化をグラフ化し，結果を話し合う】

展開の段階では，フライパン，ドライヤー，鍋など，様々なものの温まり方を調べた。何度も実験に失敗したり，思ったような結果が出なかったりした。そして，温度変化をグラフに表し，統計的に結果を見て自分なりの結論を導き出していった。そのときにＡ児は，「ドライヤーの温まる仕組みは，グラフから金属である電熱線を温めて，風をモーターで出して，熱風を送っていることがわかった。」と考えた（資料４）。

考察2

自分が調べたい温める物を選択させ，実験方法を目的に沿って考えさせたことは，子供の主体的な問題解決を生み出し，継続的に学習問題をもち，追究し続けることができる上で有効であった。その根拠は子供が主体的に実験を行い，調べる目的に合ったかどうかをデータを基に分析することができたからである。また，そのデータである温度変化のグラフを根拠に，自分の課題に沿って，結論を導き出すことができていたからである。

終末段階のねらい：10～11/11時

子供が調べたい身近なものの仕組みについてまとめ，再実験を通して，生活に活かすことができる場面を根拠を基に発表し，身近な生活とのつながりを実感することができる。

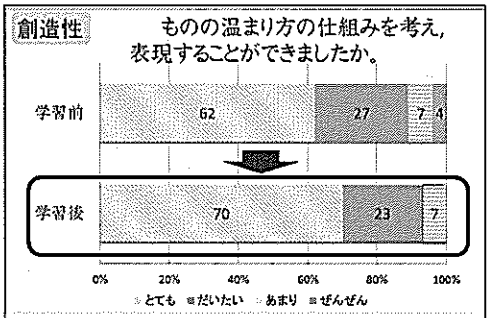
【資料５　生活に活かせる場面を表で説明している】

終末の段階では，これまで実験してきた内容や結果を生活にどのように活かせるか話し合った。そのときに，結果をより正確にするために，表の活用を行った。そのときにＡ児は「ドライヤーも金属が使われ，他のフライパンも焼き方を工夫すれば，うまく使えるのではないか」と考えた（資料５）。

考察3

これまでの結論を生活に活かす視点で振り返らせたことは，結論と生活をつなぐ上で有効であった。その根拠は，子供自身が解決目的を振り返り，生活場面に活かす内容を考えることができたからである。

全体考察



【資料６　学習後の意識調査（N=35）】

子供の主体的な問題解決を大切にした本題材は，論理的に思考したり，表現したりする創造性を高める上でも意識調査の結果から有効であったと判断できる（資料６）。それは，考察１，２からわかるように，自ら見通しをもち，実験方法を考え，結論を導き出す姿が表れていたからである。また，考察３からは，生活に活かせるという実感をもたせることができた。今後は，題材構成の工夫や実験内容の精選，内容の具体化が必要であると考える。

指導事例4　第5学年　題材　科学ビー玉コースターをつくろう

指導者　永田　裕二

1　資質・能力

○　試行錯誤の内容を取り入れたコースターの仕組みを，説明することができる。（創造性：論理的思考）

○　研究グループで，始点の高さやレールの角度を変えながらデータをとり，ホールインワンするきまりや一番遠くまで飛ぶきまりを発見することができる。（協働性：他者理解）

○　コースターの仕組みの仮説を，検証を繰り返しながら修正することができる。　（内省力：自己調整）

◎　角度や高さと飛ぶ距離の関係を条件制御し，見いだすことができる。（基礎力：科学的な知識・技能）

2　題材の考え方

本題材では，論理的に考え，表現する力と他者と共に知をつくりだす力を育てるために，力学で大切な角度や高さと速さの関係をものづくりに活かし，個の仮説を協働的な学びで解決していくことをねらいとしている。題材設定としては，既習が数理のみの題材であり，第３学年「角とその大きさ」（Ａ数理）第４学年「調べ方と整理の仕方」（Ａ数理）と，第５学年「平均とその利用」（Ａ数理）の学びを関連させる。既習の学びを活かして角度や高さと飛ぶ距離の関係について仮説検証型の学習を仕組み，創造性を発揮する姿につなぐようにする。題材に取り組むにあたっては，課題意識をもつことが大切だと考え，身の回りの玩具や遊具に組み込まれている仕組みに目を向けさせ，課題を解決しながら，最終的に仕組みを組み込んだものづくりを題材のゴールに，題材を構成した。主張点は，仮説検証と統計処理を継続的に行う研究分析ノートを活用したこと，「Ｃ数理科学」の基本的学習過程として①仮説，②検証（データ収集，データ整理，データ分析），③再仮説，④再検証，⑤考察を仕組み，題材を通した課題意識をもたせ，統計的な考え方を用いながら科学的な追究を重視したことである。

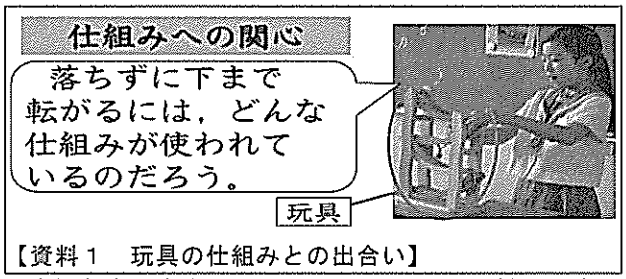
【本題材の１単位時間の活動構成】

3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：１～２/14時

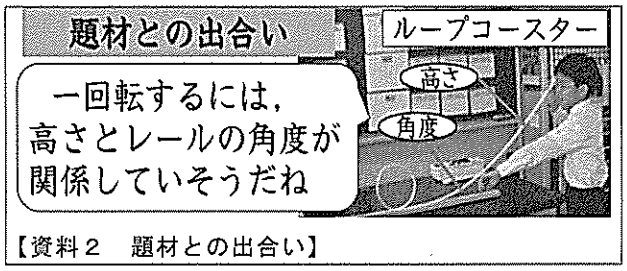
遊具や玩具を楽しむために施された仕組みや，計算されて作られた精密さを共有し，コースターづくりへの意欲を高めることができる。

(1) 遊具や玩具の楽しむために施されている仕組みを調べることで，今までの生活経験で何気なく遊んできた遊具や玩具には，人が楽しむために施こされた工夫や，計算されて作られた精密さがあることを共有する。



【資料１　玩具の仕組みとの出合い】

(2) 角度と高さの仕組みを取り入れた題材に出合い学習問題を話し合う。



【資料２　題材との出合い】

導入段階では，身の回りの玩具や遊具の仕組みを観察した。子供は何気なく扱っていたものに仕組み（工夫や規則性）があることに気付き，疑問を解決していきたいという意欲をもつことができた。その後，仕組みに気付くことのできる教具と出合ったことで，「『なぜ』を説明できる，科学ビー玉コースターをつくろう」という学習課題をもち，仕組みを組み合わせてつくり上げたいという意欲を高めた（資料１，２）。

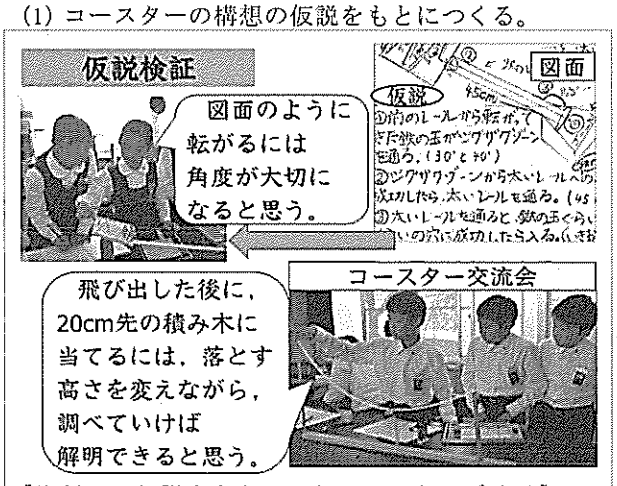
考察１

実際に生活場面で使われている玩具や遊具と出合わせ，力学の仕組みを扱ったものを体感させることは追究意欲を高めさせる上で有効であった。その根拠は，本題材は，子供にとって「仕組みを解決したい」という気持ちが生まれ，解決が少し困難である教材であるために，主体的な探究活動につなぐことができたからである。

展開段階のねらい：３～11/14時

コースターの構想と，レールを利用したホールインワンに挑戦し，角度や高さと，距離や速さの関係性を見出すことができる。

(1) コースターの構想の仮説をもとにつくる。



【資料３　仮説をもとにしたコースターづくり】

(2) 科学ビー玉コースターの仕組みを明らかにするために，角度や高さの条件を変えながら検証する。

【資料４　ホールインワンのきまりを検証する姿】

展開段階では，まず自分が考えたコースター構想をもとにコースターを作成させた。その後，よりコースターが科学的なものになるように，コースターから鉄球が飛び出す距離の規則性についてグループで検証することにした（資料４）。

考察2

役割を明確にしながら同じ目的をもって課題解決にのぞむことができ，基礎力や協働性，創造性を高める上でも効果的であった。その根拠は，規則性を見つけるために条件を制御する必然が生まれ（基礎力），正確な数値を見つけるためにはデータを何度も取りながら複数で分析（協働性）して，「高さが高いほど速さが速くなって遠くまで飛び，角度は20°前後が一番遠くまで飛ぶ」という高さや角度と距離の関係を見いだそうとしたこと（創造性）である。

終末段階のねらい：12～14/14時

互いのコースターを交流し，コースターの科学的に数学的に優れている点を共有することができる。

【資料５　コースターづくりの様子と感想】

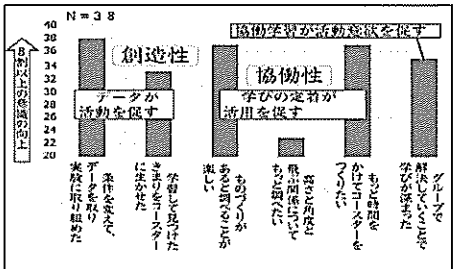
終末段階では，展開段階で見つけたコースターの飛び出す距離のきまりや，新たに発見したきまりを使ってのコースターづくりを行った。どのグループも，学びを活かしものづくりに意欲的に取り組むことができていた。「きまりを活かしたものづくり」に対して「仕組みを使ってつくりたい。」という，意欲的な感想をもっている子供も多くいた（資料５）。

考察3

学びを活かしたものづくりは有効であった。その根拠は，後述の全体考察にも載せている子供のアンケート調査において，見つけたきまりを活かしての，子供のものづくりに対する関心の高さがうかがえる点からである（内省力）。

全体考察

考察１・２からは，科学的な見方・考え方である「条件制御」を使いながら仮説をもとに検証していく活動構成により，角度と高さと距離の関係に気付く上で有効であったと判断できる。さらに，考察３からは，強い目的意識があると，子供主体の探究活動になり，学びを活かす際に創造性を発揮することがわかった。資料６からは，協働的な学びを位置付けることで，学習意欲の向上につながること，検証の際にデータをとりながら追究することで，高さや角度と距離の関係を科学的・数学的に発見しようとする姿が表れることが見て取れる。



【資料６　学習後の意識調査】

社会共創部
持続可能な未来への実践的な態度を育てる領域「社会共創」

1　「社会共創」の必要性

現在，世界には，環境・貧困・人権・平和・開発といった様々な地球規模の問題がある。また，我が国においては，大量生産，大量消費，大量廃棄型の経済成長により，地球環境問題やエネルギー問題，食糧問題などの人類の存在基盤を脅かす諸問題が一層深刻化するとともに，国際化・情報化の波もさらに加速すると言われている。その内，国際化（グローバル化）の進展に関しては，人・もの・金・情報等が一層流動化すること，知識基盤社会が本格的に到来すること，国際競争のさらなる激化や生産拠点が海外に移転することにより産業の空洞化が進行することが懸念され，我が国の国際的な存在は低下していく危機的状況が指摘されている。つまり，我が国の将来像としては，新興国が台頭することによる国際競争が激化するグローバルな状況や生産年齢人口の減少に伴い，経済規模が縮小し，社会全体の活力が低下していくという状況にあると言える。こうした危機的状況を認識し，地球社会の未来を持続可能で，希望あるものにできる人間を育成していくことは，重要な課題である。

そこで，未来社会を創造する主体を育成するためにも，平和で民主的な国家・社会の実現を目指す日本人としてのアイデンティティ（地域や我が国の国土や歴史・文化，日本人の知恵に対する誇りや愛情）をもち続けるとともに，それを土台にし，持続可能な社会を創造する形成者であり，生活者であるという自覚をもたせていくことが必要であると考える。また，生活舞台である地域や国土における社会問題，世界が抱える諸問題を自分の問題としてとらえ，問題の解決につながる価値観や行動を生み出していく資質・能力を育むことが，領域「社会共創」に求められると考える。

2　「社会共創」で担うもの

(1) 資質・能力から見える内容の背景

本校の考える領域「社会共創」の特色は，持続可能な社会づくりのための担い手として，社会（政治的，経済的な営み）・文化（伝統，歴史），自然（環境，地理）とのかかわりやつながりの認識にとどまらず，それらとよりよい関係をつくっていこうとする実践的な態度を育てることにある。教育再生会議「これからの時代に求められる資質・能力と，それを培う教育，教師の在り方について（第七次提言）」によると，これからの時代を見据えた教育内容の視点の一つとして，「持続可能な社会の実現が課題となっていることを踏まえ，体験型・問題解決型の学習を通じて，環境，貧困，経済，人権などの世界規模の課題を自らのこととしてとらえ，地域活動など身近なところから取り組み，その解決に向けて考え，他者とも力を合わせて行動できる人材を育成するための教育を推進する。」ことを挙げている。この視点は，人間や多様性の尊重，非排他性などの価値観，他者，社会，自然環境との関係性を認識し，かかわりやつながりを尊重できる個の育成をねらうものであり，領域「社会共創」の考え方との共通性がある。

以上のことを踏まえると，「社会共創」は，社会・文化・自然とのつながりやかかわり（関係の理解）の認識をもとに，他者と協働（調和的な精神）して解決を目指すことで，持続可能な社会の形成へのかかわり方を学ぶの役割を担っている。

社会にかかわる実践的な態度は，次の３つのかかわりづくりの内容を通して育成されると考える。

○　かかわりづくり１（間接的な体験）

自分を取り巻く，社会・文化・自然との調和的なつながりやかかわりの実現を図る人々の営みや社会の仕組みそのものの理解ではなく，それらの営みや仕組みが自分とどのような関係にあるのかを認識することである。このような認識は，知的な理解から社会づくりにかかわる担い手としての自覚（主体的な行動力）を促すと考える。

○　かかわりづくり２（直接的な体験）

自分を取り巻く，社会・文化・自然とのつながりやかかわりの実現を図る仕組みのすばらしさ，自分の生活にとっての価値を醸成し，自分も何か役に立ちたい，関心をもち続けたいという思いや願いをもつことである。この思いや願いが実践する内容や関心の方向を決定していくと考える。

○　かかわりづくり３（共感的な体験）

社会・文化・自然との関係をどのように高めていくか，その高めて行く方向である。社会への創造（自分が役に立つこと，関心をもち続けること）を行うことで，自分と社会との相互的な関係の理解や調和的な精神の大切さを一層学んでいくと考える。

以上のことから，本領域では，身近な社会や世界の諸問題（社会・自然・文化とのかかわり）を学習対象とし，上記の３つのかかわりづくりの内容と探究や実践を重視する参加型アプローチにより，持続可能な社会づくりの主体としての実践的な態度の育成を目指す。

(2) 資質・能力について

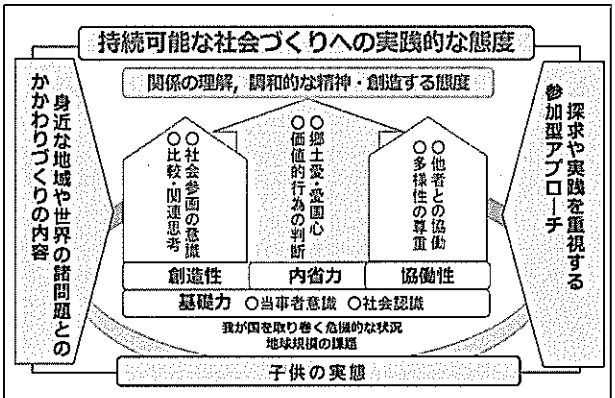
【表１　領域「社会共創」の資質・能力表】

上位概念	下位概念	中学年	第５学年	第６学年
創造性	問題把握	具体的な観察・調査をもとに生活舞台である地域社会での問題を見つける。	複数の資料や具体的な観察・調査をもとに，我が国の国土や産業の今日的な問題を見つける。	複数の資料や観察・調査をもとに，我が国の歴史や政治，国際理解に関する問題を見つける。
	比較・関連的思考	具体的な事実を比べたり，つなげたりして考えることができる。	複数の資料の結び付きや根拠を明らかにして考えることができる。	複数の資料や条件を結び付けて考えることができる。
	時間的・空間的思考	分布や今昔の違いを関係付けて考えることができる。	地理的位置や歴史的因果関係，産業と国民生活との関連がわかる。	地理的関係や時代構造，政治の働きや世界における我が国の役割がわかる。
	参画意識	だれもが住みよいまちづくりの実現に向けて，まちづくりにかかわる必要性に気付く。	間接的な因果関係に目を向けて，持続可能な社会の在り方を提案することができる。	原因・結果の分析をもとに，地球市民として自己の在り方を提案することができる。
協働性	価値受容	自他の思いや願いに気付く。	立場の異質な考えを受容する。	立場や異文化など多様な価値観を受容する。
	生産的追究	問題解決に向かって知恵を出し合う。	問題解決や価値の創造を目指して協働する。	価値の創造に向かって異質な他者とも協働する。
	共生的態度	当事者の意見を受け入れ，考えを取捨選択して納得知を見出す。	持続可能な社会の実現に向かう解決策を他者と折合いをつけ見出す。	多様な立場や価値観を受容しつつ，合理的に解決策を見出す。
内省力	郷土愛，愛国心	地域の人々の働きに恩恵を感じ，市民の一員としての自覚と地域に対する誇りと愛情をもつ。	国土で生きる人々の働きに恩恵を感じ，国土を保護・創造する一員としての自覚と国土への愛情をもつ。	国際社会で活躍する日本人を尊敬し，国際社会に生きる日本人の一員としての自覚と国を愛する心情をもつ。
	公徳心	地域社会のきまりや社会生活上のルールを守り，生活する。	環境保全の重要性に関心を深め，環境に配慮した生活を心がける。	平和を願う日本人として立場や文化が異なる他者との共存に関心をもつ。
	価値判断	生活の維持と向上の関連から判断する。	国土の環境保全と生活との関連から判断する。	国際社会における我が国の役割から判断する。
基礎力	当事者意識	地域社会や人とのかかわりに関心をもつ。	国土・産業の仕組みと人の営みに関心をもつ。	歴史・政治・外国への関心をもつ。
	社会認識	地域の特色や相互の関連，働く人々の工夫や努力をとらえる。	我が国の社会的事象の意味をとらえる。	我が国や世界の社会的事象の意味を広い視野からとらえる。

3　目標と内容

(1) 目標について

持続可能な社会づくりにかかわる実践的な態度を育てるために，探究や実践を重視する体験的な活動を通して，自分と社会との関係を理解する能力と調和的な精神や他者と共に社会を創造する態度を養う。



【図１　「社会共創」における資質・能力と目標構造図】

領域「社会共創」で目指す基礎力，協働性や創造性，内省力は，市民社会の一員としての市民，国家の成員としての国民，国際社会に生きる日本人という性格を併せもつ公民としての自覚もって国際社会で主体的に生きるとともに，持続可能な社会の実現を目指す実践的な態度を育成することに資するものとなる（図１）。

(2) 内容について

①　内容設定について

領域「社会共創」では，目標に迫るために，自分を取り巻く社会の中で営まれている様々な生活の在り方を具体的な内容として取り上げる必要がある。すなわち，自分と社会，自然，文化とのかかわりを起点として，子供たちが生きていく（未来社会を創造する）上で必要な，社会問題の解決の仕方，対象への働きかけ方を身に付けさせることができる内容を設定する必要がある。そこで，現在，将来において問題となっている自他の生命や生産・消費，環境保全，国際理解などを視点で，「Ａ自分と社会」，「Ｂ自分と自然」，「Ｃ自分と文化」とのかかわりづくりの内容を構成する。以上の３つの視点からの内容構成により，これからの自分の立場やかかわり方をつくり，社会とのよりよい関係をつくり出していくことができると考える。

中学年では，「まちづくり」を，高学年では「国づくり」を内容づくりの基本視点とする。

第３学年では「地域への愛着」を，第４学年では「地域社会の改善に向けた人々の営みへの共感」を，第５学年では「地域や我が国の課題への参加意識」を，第６学年では「改善案の提案能力の育成」を重視した内容で構成する。

②　内容構成について

第３学年は，「地域のいろいろな人と暮らそう」を学年の大主題とし，人と人，人と自然，人と文化とのかかわりによって創られている“まち”を強く意識した内容構成にする。

内容	A自分と社会	B自分と自然	C自分と文化
対象	・福岡市の施設や交通 ・地域の外国人や障がい者との共生 ・販売者と消費者をつなぐ	・地域の自然を生かした特色ある産業（農業や工業） ・新エネルギーで変わる人々の暮らし	・地域の受け継がれる祭と新しい祭 ・日本の中の福岡市

第４学年は，「地域社会をよりよくする人に協力しよう」を大主題とし，追究対象を県内の地域に広げ，人と人，人と自然，人と文化との共生よって創られている“地域の安全や環境”を強く意識した内容構成にする。

内容	A自分と社会	B自分と自然	C自分と文化
対象	・持続可能な水資源の確保 ・人々の安全を守る仕事（警察と消防署の働き）	・自然の恩恵を利用した人々の営み（地場産業） ・環境保全の廃棄物処理	・わたしたちが誇る資源と地域の発展 ・世界とつながる福岡市

第５学年は，「地域や我が国の課題への挑戦，参加意識を高めよう」を大主題とし，「協同」，「創造」，「我が国の強み」をキーワードに，人と人，人と自然，人と文化との共生よって創られている“国土への愛情”を強く意識した内容構成にする。

内容	A自分と社会	B自分と自然	C自分と文化
対象	・我が国の新しい農業への挑戦 ・世界に誇る工業技術	・我が国の自然災害と国土の気候や地形 ・我が国の自然文化遺産	・世界や日本のエネルギー確保と生活 ・これからの情報化社会

第６学年は，「我が国や国際社会に働きかけ，提案しよう」を大主題とし，人と人，人と環境，人と文化との共生よって創られている社会を強く意識した内容構成にする。

内容	A自分と社会	B自分と自然	C自分と文化
対象	・政治の働きと国民参加（主権者意識の醸成） ・２つの東京オリンピック	・世界で活躍する日本人（世界の人々の生活や環境問題に挑む日本人）	・時代の課題を解決した人と郷土，日本の歴史 ・我が国とかかわりが深い諸外国の人々

4　年間指導計画作成の考え方

(1) 教材化の視点

教材化においては，子供が社会に潜む問題の解決の過程において，「基礎力」「協働性」「創造性」「内省力」の４つの資質・能力を身に付け，発揮できるように開発することが大切である。さらに，教材は，現代社会の問題であると同時に，未来社会においても懸念される問題（ESD が対象としている課題『人口』『外国人』『障がい者』『高齢者』『環境』『世界遺産など』を含むもの）である。ここでは，将来，子供が地域や我が国，国際社会を生活舞台とし，持続可能な社会の実現に向けて，問題解決の仕方や働きかけ方を「かかわりづくり」を通して，身に付けていくことを重視する。子供が対象を自分にたぐり寄せ，当事者意識をもって働きかけることができるものや対象とのかかわりづくりによって恩恵感や貢献感を味わうことができるものを教材開発の視点にすることで，未来社会を創造する主体を育むことができると考える。そこで，教材化の視点と条件を以下のように設定する（表１）。

【表１　教材化の視点と条件】

視点	内容条件
協働性とのかかわりから	地域や我が国，国際社会の中の対象（ひと・もの・こと）との「かかわりづくり」が可能であるもの
関係性とのかかわりから	対象と自分の生活との関係（仕組みや働き）を認識することができ，恩恵感を味わうことができるもの
基礎力創造性とのかかわりから	対象から子供への依頼や協働の求めがあり，社会実践によって貢献感を味わうことができるもの

(2) 題材配列

各学年の題材は，身近な地域や国土，国際社会の中の主体的な生活者である自覚が段階的に高まるように内容を設定し，配列することが大切であると考える。そこで，社会に働きかける活動が，地域や国土の「適応・克服」－「対応」－「保護・創造」へと向かうように配列していく。

【第3学年】

「地域のいろいろな人と暮らそう」を大主題とし，“まちづくり”を強く意識した配列とする。

学　期	１学期	２学期	３学期
視　点	適応・克服	対応	保護・創造
題　材	・市の様子 ・唐人町商店街で働く人々の仕事	・地域の人とともに（商店街の活性化） ・地域に住む外国の人々	・障がいのある人とともに ・伝統を受け継ぐ人々（博多山笠）

【第4学年】

第４学年は，「地域の人々の営みへの共感」を強める内容を重視するとともに，人と人，人と自然，人と文化との共生よって創られる“地域の環境”を強く意識した内容配列とする。

学　期	１学期	２学期	３学期
視　点	適応・克服	対応	保護・創造
題　材	・外国からの観光客が多い福岡県 ・森と水のネットワーク	・下水活用！新プロジェクト ・だれが守る市民の安全（放火対策提案）	・福岡の発展と交通 ・伝統を守りつくる小石原の人々

【第5学年】

第５学年は，「協同」，「創造」，「我が国の強み」をキーワードに，人と人，人と自然，人と文化との共生よって創られている“国土への愛情”を強く意識した内容配列にする。

学　期	１学期	２学期	３学期
視　点	適応・克服	対応	保護・創造
題　材	・国土に生きる人々 ・日本と外国の地形や気候 新しい農業	・世界に誇る工業 ・日本と世界のエネルギー ・情報ネットワーク	・自然災害を防ぐ ・守れ！我が国の世界遺産

【第6学年】

第６学年においては，我が国や国際社会における，人と人，人と文化との共生よって創られている社会への提案を強く意識した内容配列にする。

学　期	１学期	２学期	３学期
視　点	適応・克服	対応	保護・創造
題　材	・発見！日本文化・歴史（地域の文化財をもとに現代から遡る）	・発見！日本文化・歴史」 ・日本と世界の人々の生活	・世界に羽ばたく日本人 ・共に生きる社会をつくる（主権者意識）

(3) 内容の取り扱い

各学年においては，「A 自分と社会」「B 自分と自然」「C 自分と文化」の内容を網羅できるように，各学年の年間計画に配列する。各内容の取り扱いにおいては，地域や我が国の社会の仕組みや人々の営みなどの理解をもとに，社会における具体的な実践を盛り込み，参画態度の形成を図るようにする。

【参考文献等】

1)唐木清志 他『シティズンシップ教育でつくる学校の未来』東洋館出版社，2015年
2)山脇直司『社会とどうかかわるか－公共哲学からのヒント－』岩波書店，2008年

指導事例　第3学年　題材　題材　地いきの人とともに！唐人町商店街

指導者　藤岡　太郎

1　資質・能力

○　唐人町商店街を活性化するために自分にできることを考え，よりよい地域社会の実現にかかわる必要性に気付くことができる。　（創造性：参画意識）

○　唐人町商店街で働く人々や振興組合の人々の願いや願いを実現する営みに共感するとともに，唐人町商店街が抱える問題やその解決策を他者と協働して実践することができる。　（協働性：生産的追究）

○　地域の活性化に尽くす人々の営みに誇りをもち，自分も市民の一員として，地域の活性化にかかわる意思をもつことができる。　（内省力：郷土愛）

○　唐人町商店街が70年も前から続くひみつに関心をもち，唐人町阿商店街の働きと人々の協働的な営みをとらえることができる。　（基礎力：社会認識）

2　題材の考え方

本題材では，３つのかかわりづくりを通して，持続可能な地域社会の実現に貢献する意識を育む（図１）。

○　商店街で働く人々の営みの追究【かかわりづくり1】

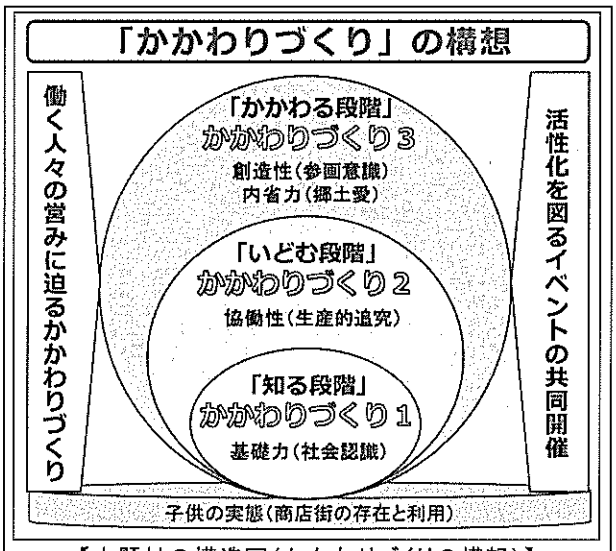
唐人町商店街が活気づいている理由に迫るために，商店街を利用する人々に商店街のよさを調査する活動を設定する。

○　商店街の人との協働追究【かかわりづくり2】

当事者から唐人町商店街の課題や課題解決に向けた協働の求めを聞く場や実践の可能性を練り上げる活動を設定する。

○　商店街の人々と共に創る実践【かかわりづくり3】

唐人町商店街の活性化を図る「もちつきイベント」を共同開催し，これまでの追究の振り返り活動の場を設定する。



【本題材の構造図（かかわりづくりの構想）】

3　学習の流れと考察

知る段階のねらい：1～3/11時＋課外

自分や地域の人々と唐人町商店街とのかかわりや，歴史の長さから，唐人町商店街が長く愛されていることに関する問いをもつことができる。

(1) 唐人町商店街を利用する消費者の立場から，唐人町商店街のよさを調べる。

【写真1　唐人町商店街のよいところは何ですか？】

(2) 地域の人々からの聞き取りや全国の商店街の数の減少をもとに，学習問題について話し合う。

学びのあしあと

とう人町商店がいによく来るお客さんにきいたら、よいところがたくさんあって、ほかにも長く続いている理ゆうがあるのかなって思った。たぶん、お店の人たちがたくさんのお客さんをあつめるサービスとかがあると思うからしらべたい。

【資料1　A児の感想】

知る段階では，唐人町商店街が地域の人々に愛され続けている理由に迫る問いをもたせるために，消費者の立場から唐人町商店街のよさを追究する活動を設定した後に，唐人町商店街の歴史と全国の商店街数の現状の資料を提示して，驚きや疑問を話し合わせた。そのときにA児は，視点を販売者に移して唐人町商店街を活性化させるための問いをもった（資料１）。

考察1

唐人町商店街が長く続くことに関する問いをもたせるために，消費者の立場から唐人町商店街とのかかわりを調べる活動と全国の商店街の減少を知る活動は有効であった。その根拠は，唐人町商店街を活性化させる当事者の立場に視点を移し，当事者の営みを知りたいという追究意欲をもったからである。

いどむ段階のねらい：4～9/11時＋課外

唐人町商店街で働く人々の連携を中心とした営みの理解をもとに，唐人町商店街の活性化を図る協働の意識を高めることができる。

(1) 唐人町商店街で働く人々を取材して調べ，唐人町商店街が長く愛され続けている理由を話し合う。

【写真2　唐人町商店街で働く人に聞いてみよう】

学びのあしあと

とう人町商店がいが長く続いているのは、お店の人たちがお客さんを家ぞくみたいに名前でよんだり、コミュニケーションをとったりしていることと、たくさんのお店がみんなできょうかして、すいとうポイントやプレミアムけんをどくじにつくったり、イベントをきかくしてもりあげたりしているから。

【資料2　A児の追究結果】

(2) 唐人町商店街振興組合の髙田さんから，イベント参加への求めを聞き，自分たちの企画案を髙田さんと一緒につくる。

【資料3　唐人町商店街の髙田さんとの協働追究】

いどむ段階では，働く人々への取材活動と振興組合の髙田さんとの協働追究の場を設定した。そのときにA児は，地域の人を大切にする働く人の真心と協働的な独自の取組をとらえるとともに，新たな自分たちのかかわりをもつことができた（資料2，3）。

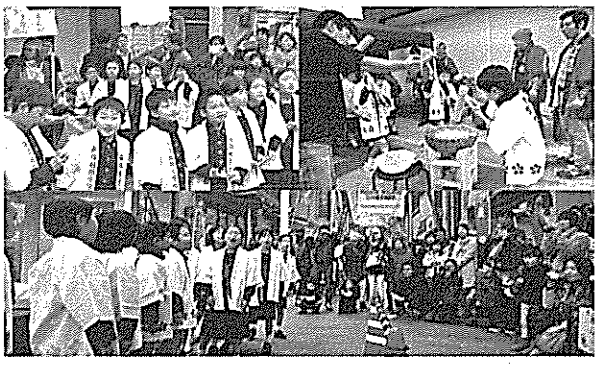
考察2

直接取材と交流の場を設定したことは有効であった。その根拠は，働く人々の協働と真心に気付いた子供の姿と振興組合の髙田さんの求めにより，唐人町商店街に対する自分たちの新たなかかわりをもとうとする子供の姿が読み取れるからである。

かかわる段階のねらい：10～11/11時＋課外

唐人町商店街の地域の人との共同イベントを開催し，自分も地域の一員であるという自覚とまちづくりへの参画意識を高めることができる。

(1) 唐人町商店街の人と共同イベントを開催する。



【写真3　もちつきイベントを成功させよう】

(2) 実践を振り返って，これからの自分と地域社会とのかかわり方について話し合う。

・・・たくさんお客さんに喜んでもらえてとても嬉しかったし，役に立てたのかなと思いました。

髙田さんも「ずっと地域の人に愛される場所にしたい」と言っていたので，ぼくも，ずっと唐人町商店街を応援したいです。

【資料4　A児の感想（一部抜粋）】

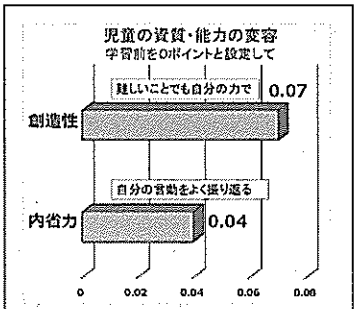
かかわる段階では，イベントの共同開催の場と振り返りの場を設定した。A児は，お客さんの反応から共同開催の喜びを味わうとともに，これからの商店街とのかかわりに対する関心を高めた（資料4）。

考察3

唐人町商店街での共同実践と振り返りの場の設定は有効であった。その根拠は，唐人町商店街へのかかわりが，利用者という立場だけではなく，運営する当事者という立場に意識が向き，地域の一員としての自覚が，資料4から読み取れるからである。

全体考察

本題材では，創造性と内省力が伸長したことがわかる（資料5）。それは，「かかわりづくり」を題材に配列したことが，他者との調和的な精神，地域貢献の土台を育む上で有効に働いたためであると考える。今後の課題としては，かかわりづくりの方向を子供の意識の流れとともに，子供の求めから設定していくことが必要であると考える。



【資料5　児童の変容】

表現部

豊かな感性と創造性の基礎を培う領域「表現」

1 「表現」の必要性

これからの未来は，予測不可能な変化の激しい時代となると予想されている。そのような未来を子供が自らの力で切り拓いていくためには，柔軟な考えや発想，すばやい決断，そして勇気ある行動力が必要となってくる。また，一人では解決困難な問題にも直面するため，多様な人たちと協働して解決していこうとする態度も必要となってくる。そこで，領域「表現」では，美的なものを追求していくことを柱として，未来創造型の資質・能力を育んでいく。美的なものを追求するためには，生活や自然，文化の中から美を見出す自己の感性と他者の感性を存分に働かせる必要がある。それは，ともに納得・共有できる表現でなければならない。互いに納得・共有できるためには，意欲的にイメージしたものを表出させ，表出したものが目指す表現としてふさわしいか論理的に検討することが重要である。そのような表現をめざす過程の中で，創造性の要素である追求意欲，創出的思考，自己開放の資質・能力が育まれていく。美的なもの（よりよい表現の追求過程の中で感じられる）を見出そうとする追究意欲，自己のイメージと表現をつなぐ創出的思考，新たな価値を生み出し表現に没頭する自己開放，以上の３つが領域「表現」においては特に発揮されていく。また，新たな価値を生み出す上では他者の評価が重要であり，協働性も育むことができる。さらに，領域「表現」では，表現を様々な形態で関連付けることができるため，それぞれの個が自分のよさを活かしてかかわることができ，互いに尊重し合うことができる。また，内的なものを表出させることによってイメージを目に見える形に表す上で必要な資質・能力を育むことができる可能性がある。つまり，未来社会を創造する主体を育てるために，領域「表現」は，重要な役割を担っている。

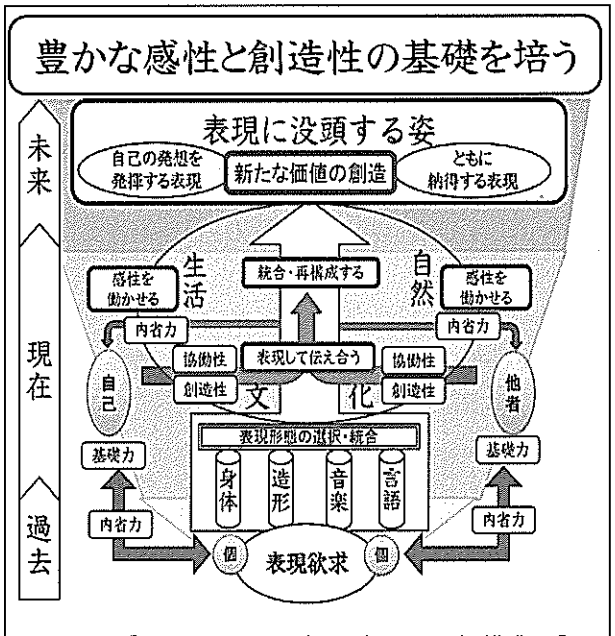
領域「表現」で目指す人間とは

- ○ 自然や生活，文化にある美しいものを美しいと感じることができる豊かな感性をもった人間 〈創造性を発揮した姿〉
- ○ 自己の内面に生じた感動や共感にもとづいた思いを表現しようとする態度 （追究意欲）
- ○ 多様な表現にかかわり，そのよさを生かした表し方を創り出そうとする姿 （創出的思考）
- ○ 五感を働かせて，自分の発想を発揮し，ともに納得して表現に没頭する姿 （自己開放）

2 「表現」で担うもの

(1) 資質・能力から見える内容の背景

領域「表現」は，子供たちが様々な表現方法を駆使して，統合し，再構成しながら友達とともに新たな価値を生み出す喜びを学ぶものである（図１）。そのために，一人一人がもつ経験や環境，新たに学び取った文化的価値をもとに，個の音楽表現や造形表現を協調した表現を創り出すことが重要である。このことは，イノベーションを起こすための条件を含み，21世紀に必要とされる力を育てる可能性をもっていると言える。また，過去の自分や相手の考えと比べたり，関係付けたりしながら自己の表現を振り返り，現在の自分の表現へと活用していくことができる。この時に起きる相互作用は，相手のよさを理解するだけでなく自分自身についてもよく知ることができるようになる。これは，互いにとって必要感が高まり，集団の有用性を感じることができ，協働性が育まれていくことにつながる。これから求められるものは，「自分の内なる心と対話できること」「人と協働し，新たな価値を創造すること」「理想を描き，形にしていくこと」である。表現の形態は，子供の主体性によって選択される。単一で取り扱う場合もあり得るし，題材の途中からいくつか融合していく場合もあり得る。大切にすることは，子供の表現欲求の膨らみが連続・発展する過程で自己の表現媒体を主体的に選べるということである。このことが感性を働かせることと創造性の基礎を培うことにもつながっていくと考える。



【図1 「表現」における資質・能力と目標構造図】

(2) 資質・能力について

【表1　領域「表現」の資質・能力表】

上位概念	下位概念	低学年	中学年	高学年
創造性	追求意欲	自分の内面に生じた感動や共感に基づいた思いを伝える表現をつくろうとする。	自分の内面に生じた感動や共感，必要感に基づいた思いを伝える表現をつくろうとする。	自分の内面に生じた感動や共感，テーマや必要感に基づいた思いを伝える表現をつくろうとする。
	創出的思考	自分が使ってみたい材料や場で表現素材にかかわり，自分の表し方を見出すことを楽しむ。	自分の思いや考えを伝えるための材料や場を試しながら，表現素材のよさを生かした表し方を見出す。	自分が感じた美しさなどの感じや用途，テーマに基づき，表現素材のよさを生かした表し方を見出す。
	自己開放	五感を働かせ，身体全体を通して材料や場所にかかわりながら，自分の表現をつくりだす。	材料や場，自然などに積極的にかかわりながら，それらの特徴を活用して自分の表現をつくりだす。	自然や文化，他者に働きかけながら，それらのよさを活かして自分の表現をつくりだす。
協働性	相互受容	相手の表し方の面白さや楽しさを受け入れる。	相手の表し方のよさや面白さを受け入れる。	相手の表し方のよさや美しさを受け入れる。
	内面伝達	相手の表し方から感じた面白さや楽しさについて伝える。	相手の表し方から感じたよさや面白さについて伝える。	相手の表し方から感じたよさや美しさについて伝える。
	美的共感	相手の表し方の面白さや楽しさを，追体験や伝え合いを通して楽しみながら，表現素材の特徴を通して肯定的に見る。	相手の表し方のよさや面白さを，自分の表したい思いに合うかどうか試しながら，表現素材の特徴を通して肯定的に感じ取る。	相手の表し方のよさや美しさを，自分の思いや考えと統合・再構成しながら，表現素材の特徴を通して肯定的に感じ取る。
内省力	自己内対話	自分の表し方の面白さや楽しさを見出す。	自分の表し方のよさや面白さを見出す。	自分の表し方のよさや美しさを見出す。
	自己認識	自分の思いに基づいて表現の活動をしながら，自分の表し方を心から楽しんでいる。	見出した自分の表し方のよさや面白さが，表したい思いや考えに合っているかどうか確かめている。	見出した自分の表し方のよさや美しさを表したい思いや考えと関連付けながら，具体的に価値付けている。
	自己決定	自分の感覚に基づいて材料や場所，他者などにかかわりながら表し方を楽しみ，好きな表し方を選ぶことができる。	自分の思いや考えに基づいて材料や場所，他者などにかかわり，目的に合わせて構成要素の特徴を捉えて選択することができる。	自分の思いや考えに基づいて，目的に合わせて構成要素の組み合わせを考えながら，表現に適した方法を選択することができる。
基礎力	表現欲求	表現素材へのかかわりから生じる気付きをもとにした自分の思いを表出しようとする。	表現素材へのかかわりから生じる感動や気付きをもとにした自分の思いを表出しようとする。	表現素材へのかかわりから生じる感動や共感をもとにした自分の思いを表出しようとする。
	美的感受	感性を働かせながら，身の回りの自然や文化，自他の活動から，面白さや楽しさを感じ取る。	感性を働かせながら，身の回りの自然や文化，自他の活動から，よさや面白さを感じ取る。	感性を働かせながら，身の回りの自然や文化，自他の活動から，よさや美しさを感じ取る。
	創造的技能	表現素材に実際にかかわりながら，自分が好きな表し方を見出して表すことができる。	思いや考えと表現素材の関連について試行錯誤しながら，自分の表し方で工夫して表すことができる。	思いや考えと表現素材，社会や環境との関連について考え，自分の表し方で工夫して表すことができる。

3　目標と内容

(1) 目標について

豊かな感性と創造性の基礎を培うために体全体で感じ取り，多様な表現に興味・関心を深め，自己を表現する喜びや生活に活かす態度を育てる。

(2) 内容について

①　内容設定について

領域「表現」で取り扱う内容は，A「かんじること」，B「つたえること」C「ともにつくること」の３つである。この３つの内容を取り上げた理由は，芸術領域がもつ学習の可能性として挙げられること，そして未来創造型の資質・能力の中にある創造性や協働性を大きく担うことが考えられるからである。また，子供の表現の４つの過程の発達段階からも，３つの内容の発展が見られる。A「かんじること」では，表現への欲求を高めるために感覚的に把握する内容を取り扱う。その中には，社会・歴史・文化的な意味をもつ芸術表現にふれることも含まれている。このことは，多様な価値観をもつ世界の文化・性別・家族構成などの違いを認識するために理解しておくべき大切な内容となる。ここでは，子供の五感を刺激し，構成要素を知覚・感受する能力や表すための技法を体験的に取り扱い技能および表現にかかわる学力の獲得を図る。そこで，B「つたえること」では，表現活動にかかわる自己認識とイメージの伝達と表現の内容を取り上げる。ここでは，表現活動における模倣などの応答や自分が表したいことを共有することを取り扱い，イメージを構成要素や構成原理を利用して，これまでの技能を活用して表現する能力を育成する。C「ともにつくること」は，多様な表現方法を取り入れて，集団で新たな価値を創造する内容を取り扱う。ここでは，一人一人が集団とともに表現の創造を行う能力やその過程の中で新たな自分を発見し，表現する喜びを味わう態度を育んでいく。以上３つの内容を取り入れることによって，未来社会を創造する主体となるために大切な資質・能力を養うことができる。なぜなら，A「かんじること」において，人間と自然の影響を受けて受け継がれてきた社会・歴史・文化の中には，人間が五感を通して感じ，内面で思いや考えと照らし合わせながら思考して表された価値あるものが大いに存在しており，そこから学び取るものは「表現」の基礎力を支える大切なものとなるからである。また，B「つたえること」とC「ともにつくること」においては，新たな価値を創造する過程において，個の自由な発想だけでなく，多くの他者からの発想や別の視点から見たアイデアを必要とし，つなぎ合わせていくからである。また，つなぎ合わせていくことが創造的な活動であるからである。

②　内容構成について

A「かんじること」では，表現への欲求を高めるために感覚的に把握することを内容とするので，そのプロセスを細分化すると①感覚的・身体的反応を通して表現素材（表現物）とかかわること②表現素材の面白さを感じること③表現素材の面白さを楽しもうとすることの３つである。

B「つたえること」では，表現活動にかかわる自己認識とイメージの伝達と表現を内容とするので，①表現素材を通して，自分がやってみたい表現をすること②友達の表現を模倣したり自分の表現を伝えたりすること③自分がもっと表現素材に対するイメージや感じ取ったことを構成要素の特徴を使って伝えようとすることの３つである。

C「ともにつくること」では，多様な表現方法を取り入れて，集団で新たな価値を創造する内容とするので，①個の思いを自分に適した表現で表し，相手とコミュニケーションをとりながら発展させること②様々な表現を再点検・再構築し，つなぎ合わせること③つくり上げた表現が，物語性をもち感情に訴えるものか確かめることの３つである。整理すると以下のようになる（表２）。

【表２　領域「表現」の内容構成】

	低学年	中学年	高学年
A かんじること	表現素材のよさを五感を通して感じ取り，自分の好きな表し方を見つけて楽しむこと	表現素材のよさに意欲的にかかわり，自分や友達の表し方を比較しながらその効果を楽しむこと	表現素材の可能性を自ら探り，自分や友達の表し方を比較しながら，より自分にとって意義のある表し方を見出すこと
B つたえること	表現素材を使って，友達の表し方を模倣したり，自分の思いのままに表したよさを伝えたりすること	表現素材を活かして，自己の発想や友達の表し方からよさを見出し，自分の思いを工夫して表したもののよさを伝えること	表現素材を効果的に活かして，文化的な価値を基に自己の発想を広げ，友達に表し方のよさや美しさを伝えること
C ともにつくること	自分や友達の感じ方を基にして，ともに表すことの楽しさを味わうこと	互いの表し方のよさを受容し，試行錯誤しながらともに表すことの楽しさを味わうこと	互いの表し方のよさを受容したり，批判的に考えたりした新たな発想を基に，試行錯誤しながら，ともに表すことに価値を感じること

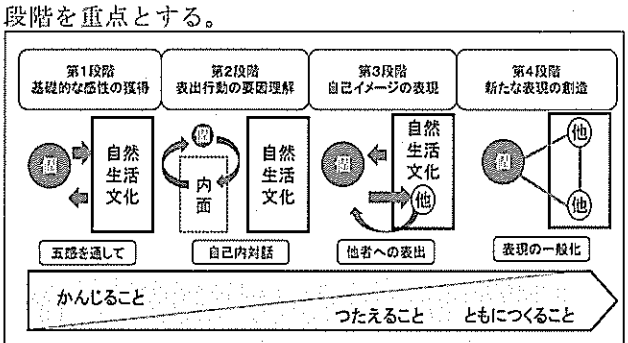
4　年間指導計画作成の考え方

(1) 教材化の工夫

領域「表現」で取り扱う教材は以下の３つの視点を取り入れる。

① もの（環境や文化）の美しさを感じ取ることができる内容を含むもの
② 子供の感性を刺激し，表現欲求を段階的に高めることができるもの
③ 自然や文化，生活の中からイメージを豊かにし様々な表現を楽しめるもの

この３つは，幼稚園教育要領にある領域「表現」のねらいをもとにしている。自分が考えたことを表現しようとする意欲と創造性を養うことに関するねらいとして「美的感性の育成」「表現意欲の形成」「表現を楽しむ態度」の３つを挙げている。また，子供の表現は４つの過程をたどる（図２）。まず，子供は五感や筋肉感覚による感覚的･身体的反応を通して人やもの（環境や文化）とかかわり，自己イメージを表現するための基礎的な感性を獲得する。次に，知覚を通して認識し，表出行動を起こした要因を理解する。そして，理解した要因（表現素材）を用いて自己イメージを表現しようとする。さらに，個の表現を集団の中で一般化させ，集団としての新たな表現の創造が営まれる。小学校課程で大切にしていくのは第４の段階である。低学年段階までは，第３までの段階をスパイラル的に育むことを重点とし，中学年，高学年段階では，第４の段階を重点とする。



【図２　表現の４つの過程と内容のかかわり】

以上の表現の段階を大切にして，内容の軽重に応じた教材を分析，設定する。低学年段階では，特に五感を通して，自分の表現欲求と対話するような活動となるように工夫する。中・高学年段階へと移行するにつれて友達とかかわりながら自分のイメージを伝えていく活動になるようにし，互いに表現を認め，共有できるように工夫する。

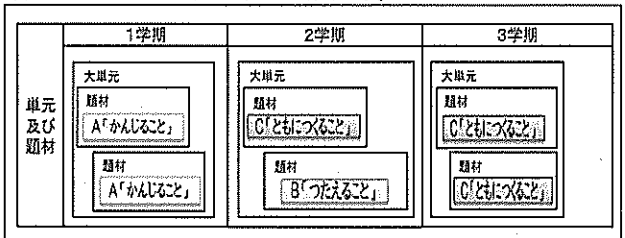
(2) 題材配列

ものの美しさを感じ取れる内容を子供の表現の過程とリンクさせて，題材を配列していく。Ａ「かんじること」においては表現素材にかかわる中で，存分に自己の表現欲求を自分の思いと対話しながら開放する態度を育み，Ｂ・Ｃの内容を支えるベースとなる（表３）。

【表３　内容と重点的に育まれる資質・能力の関係】

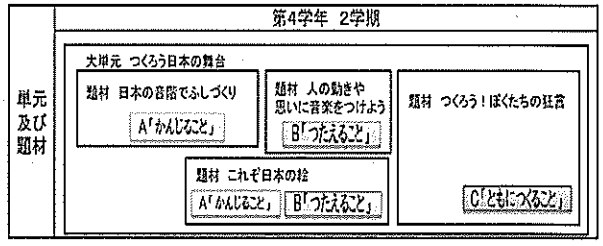
内容	重点的に育まれる資質・能力	
A	・創造性（自己開放） ・基礎力（表現欲求） ・内省力（自己内対話）	基礎力
B	・創造性（創出的思考） ・協働性（内面伝達） ・内省力（自己認識）	
C	・創造性（創出的思考） ・協働性（内面伝達・美的共感） ・内省力（自己決定）	

そのため，年間計画を作成する上で，各学期の前半にＡ「かんじること」にかかわる内容を重点的に配置し，学期の後半にＢ「つたえること」・Ｃ「ともにつくること」の内容を重点的に配置することが望ましい。また，Ｃ「ともにつくること」については，４つの表現である音楽表現・造形表現・身体表現・言語表現の中から関連して取り扱うことができる題材を計画する必要がある。独創性や意外性のある，人と共感できる表現が生み出されるためにも，１つの単元に多様な題材がかかわるようにする（図３）。



【図３　内容を年間を通してバランス良く配置する】

例えば，第４学年単元「つくろう日本の舞台」においては，まず，Ａ「かんじること」の内容で狂言や能などの日本の文化にも触れ，表現への欲求を五感を通して高めることができるようにする。次に，Ｂ「つたえること」の内容をＣの内容につなげられる構成をとる。そこでは，舞台をつくる上での必要な表現要素である動きと音のかかわり，また，日本の文化が感じ取られる浮世絵等から自分なりの日本的な表現を探っていく。さらに，友達とともに発想を豊かにして舞台を創り上げていくことで自分たちにとっての意義ある達成を目指していく（図４）。



【図４　題材構成例】

【参考文献等】

1) ハーバード・リード『芸術による教育』フィルムアート社，2001年
2) 浅見均『子どもと表現』日本文教出版，2015年

指導事例1　第1学年　題材　いろと　かたちから　みつけた　おはなし

指導者　岡﨑　教昭

1　資質・能力

◎　偶然できた色と形から発想を広げ，様々なものに見立てたり，おはなしを想像したりしている。
（創造性：自己開放）

○　友達が思い付いた表現に浸り，面白さや楽しさを見つけ，相手に伝えることができる。
（協働性：内面伝達）

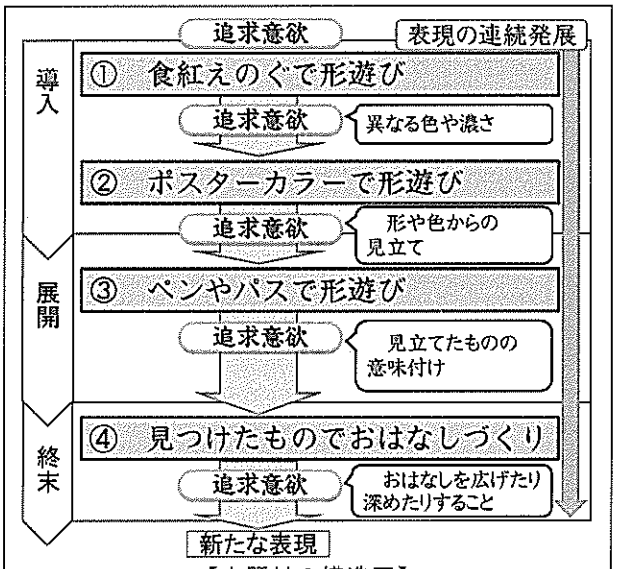
○　想像したことについて，自信をもって話したり，おはなしをつくったりしている。
（内省力：自己内対話）

○　偶然できた色と形の面白さや楽しさを感じ取ることができる。　（基礎力：美的感受）

2　題材の考え方

本題材では，食紅えのぐとポスターカラーを使って，奉書紙に様々な方法で形を描き，できた形と色から発想を広げて様々なものに見立て，おはなしを創造することをねらいとしている。

そのために，まず，食紅えのぐとポスターカラーを使って偶然の形が生まれる表し方で画面にかかわる活動を設定し，様々な形ができることの楽しさを味わわせる。次に，偶然できた形に線を描き加えながら何かに見立てることの面白さや楽しさを感じ取る活動を設定する。そして，形や色などをもとにして見立て，意味付けをしたものからさらに想像を膨らませて，おはなしをつくる活動を行わせることにより，自分が広げた発想をより具体的に表すことができる。これにより，深い意味付けをすることができるようにする。これら一連の活動を子供自身が連続発展させていく。



【本題材の構造図】

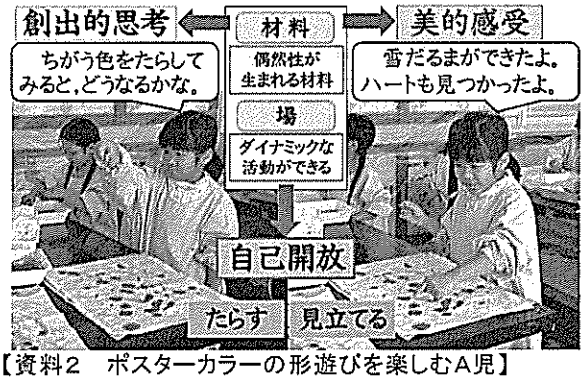
3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～4/10時
形遊びを通して，表し方の相違による形の違いや，類似形の色の違いによる受ける感じの違いに気付き，面白さや楽しさを感じる。

(1) 食紅えのぐを使って，好きな色を選んだり，偶然の形が生まれる材料を選んだりしながら，奉書紙に色や形をつけて形遊びをする。

【資料1　食紅えのぐの形遊びを楽しむA児】

(2) 食紅えのぐでできた色や形の上に，ポスターカラーと偶然の形が生まれる様々な材料で色や形をつけて形遊びをする。



【資料2　ポスターカラーの形遊びを楽しむA児】

導入段階では，２種類の絵の具で偶然の形が生まれることを楽しみながら，様々なものを見立てる形遊びを行わせた。A児は，色の組み合わせや材料によって生まれる形の面白さを感じ取りながら発想を広げ，形遊びを楽しんでいた（資料１・２）。

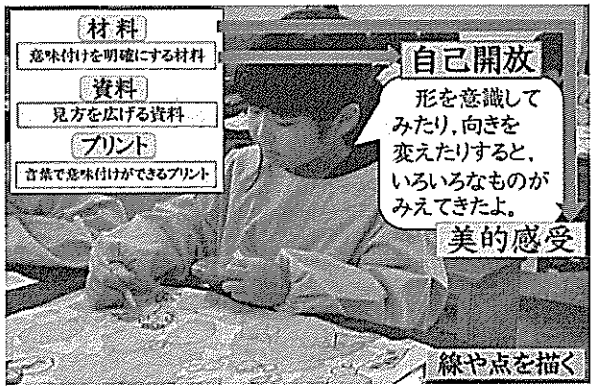
考察1

偶然性が生まれる材料の提示とダイナミックな活動ができる場の設定は有効であった。資料１・２のA児のように，形遊びを楽しみながら追求意欲を高め，自分で次々に活動を発展させたからである。

展開段階のねらい：5～8/10時

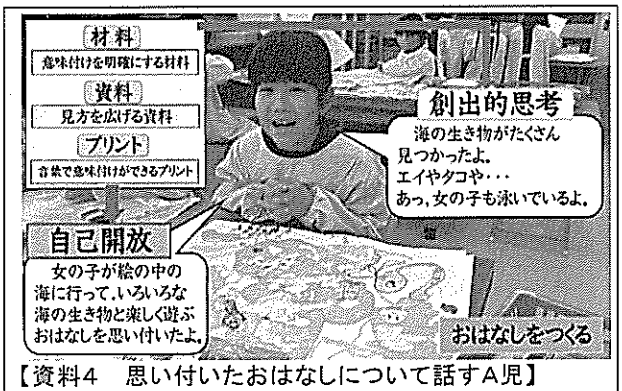
偶然できる形と色から発想を広げて見立て遊びをする面白さや楽しさを感じ取るとともに，見る範囲や向きを変えることによって，同じ色と形でも異なるものに見えるという面白さを味わう。

(1) できた偶然の形を，単体で見たり，複数の形を合わせた状態で見たり，画面を回転させるなどして向きを変えて見たりして，様々なものに見立て，線や点，形を描く。



【資料3　見立てたものに意味付けをするA児】

(2) 見立てたものについて想像したことを短い言葉で書き表したり，おはなしをつくったりする。



【資料4　思い付いたおはなしについて話すA児】

展開段階では，形遊びを楽しみながら発想を広げて見つけた様々なものに自分自身で意味付けを行うことができるように，パスやカラーペンで線や点を描く活動を設定した。そして，見立てたものについて短い言葉で表現メモに書いたり，おはなしづくりをしたりするなど，活動を発展させられるようにした。A児は，人や生き物など様々なものを見立て，複数のおはなしをつくることを楽しんだ（資料3・4）。

考察2

提示した材料や資料，プリントは，子供の創出的思考を働かせるとともに，美的感受を高めることに対して有効であった。資料3・4のように，様々な見方で見立てをしたり，おはなしを思い付いたりする子供の姿が見られたからである。

終末段階のねらい：9～10/10時

形遊びを通して見つけたものやつくったおはなしについて伝え合い，感じた面白さや楽しさを共有し合うことで，自分の表現に対する自信をもつ。

描き加えをした作品を見ながら，見つけたものや想像したおはなしについて伝え合う。

【資料5　活動を自ら発展させるA児】

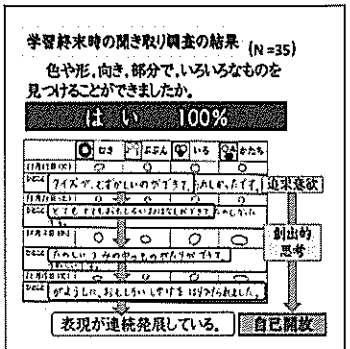
終末段階では，互いの表現について伝え合い，感じた面白さや楽しさを共有する活動を設定した。A児はさらに発想を広げ，つくった複数のおはなしに出てきたものを切り取り，組み合わせながら新たな表し方を見出し，おはなしづくりを楽しんだ（資料5）。

考察3

互いの表現の面白さや楽しさについて共有し合うことは，自分の表現に自信をもち，さらなる活動の発展を促すために有効であった。資料5のA児のように，新たな表現をつくりだす姿が生まれたからである。

全体考察

本題材は，特に創造性の伸長に有効であったと判断できる（資料6）。考察1・2・3からも追求意欲を高め，創出的思考を働かせ，自己開放をすることで，自分の表現を連続発展させているといえる。また，それぞれの段階で色や形から面白さや楽しさを感じていることがわかる発言や姿が見られたことから，基礎力（美的感受）も高まったといえる。今後は，他の表現への発展の可能性や他学年における表現の傾向について研究を深める。



【資料6　創造主体の表れ】

指導事例2　第6学年　題材　和太鼓から広がるわたしたちの表現

指導者　　山口　由一郎

1　資質・能力

◎　様々な表現要素の組み合わせの効果について論理的・批判的に考え，自分達にとって意義ある達成を得ることができる。　　（創造性：創出的思考）

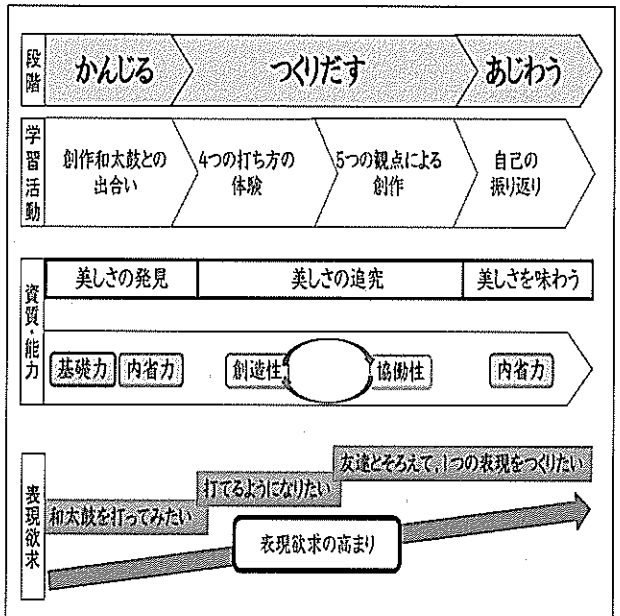
◎　互いの特質や考えを活かし，和太鼓で伝えるテーマが表れるようによりよい表現を創り上げようとすることができる。　　（協働性：美的共感）

○　友達とかかわりながら，和太鼓を演奏することやテーマをつなぐ音楽表現を通して，自己の表現を追求することができる。　　（内省力：自己決定）

○　表現の方法を効果的に選び，多様な表現要素をかかわらせ，自己の感情や思いを伝えることができる。
（基礎力：創造的技能）

2　題材の考え方

本題材は，和太鼓がもつ音の力を感じ取り，身体全体を使って表現するよさを味わい，友達とともに協力しながらストーリー性のある総合的な表現を目指すことをねらいとした。教材化の工夫は４つある。具体的には，①和太鼓のリズムパターンを反復・繰り返しすることによって音楽をつくること，②ストーリーがある和太鼓表現を創り上げること，③ストーリーが相手に伝わるように「打法」「身体の動き」「組合せ」「目線」「表情」の５観点から工夫すること，④表現活動を通して自己の感覚を磨くことなどである。また，以下のように表現欲求が段階的に高まるように題材構成の工夫を行った。

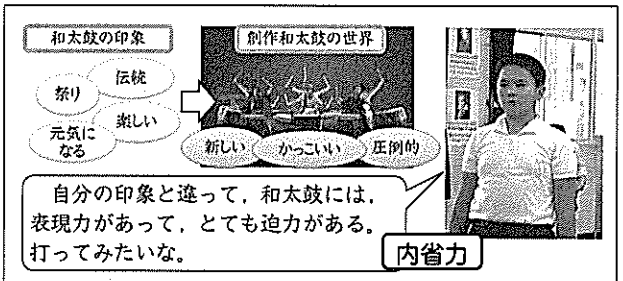


【題材の構造図】

3　学習の流れと考察

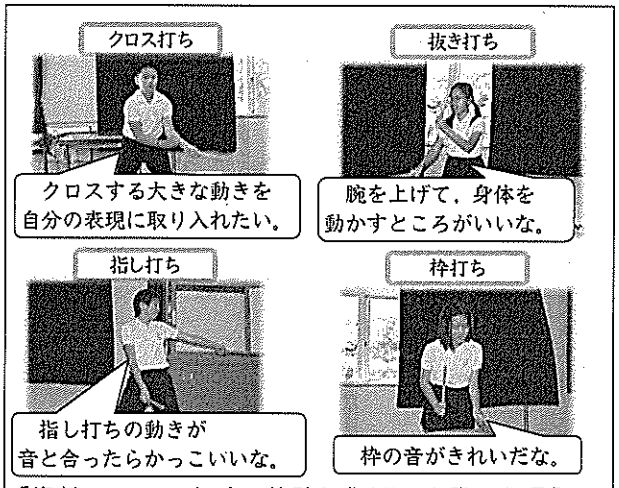
導入段階のねらい：1～4/20時
創作和太鼓の表現への魅力を感じ，表現への欲求を高める。

(1) 和太鼓のイメージと創作和太鼓の表現を比較して感じたことを話し合う。



【資料1　和太鼓のイメージと創作和太鼓の比較】

(2) ４つの打法を体験する。



【資料2　4つの打法の体験と感じ取った際の発言】

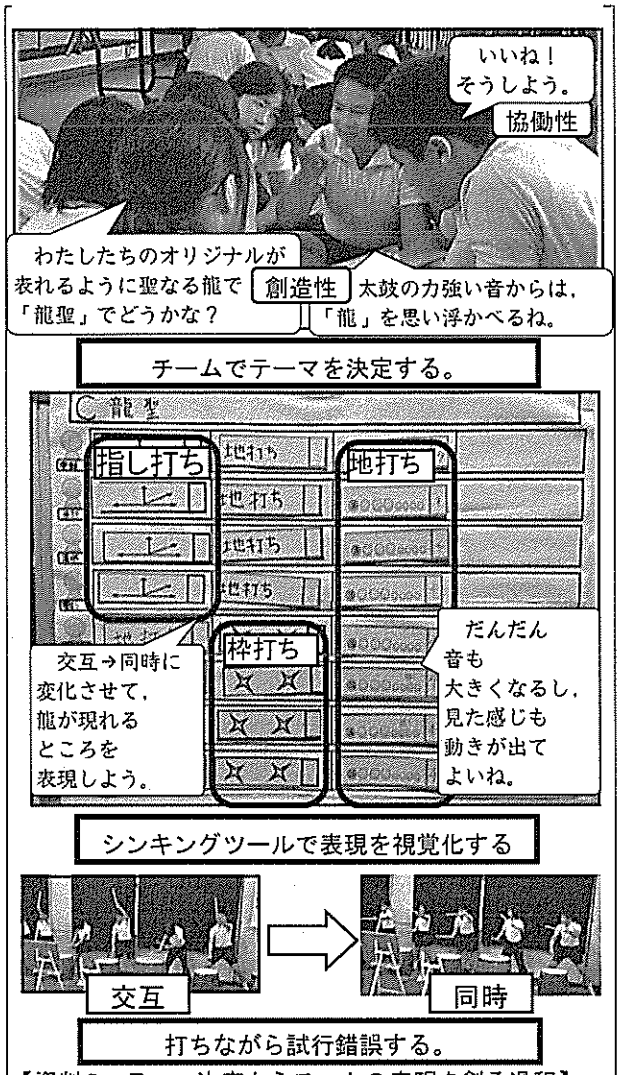
導入段階では，まず創作和太鼓の表現の幅について映像で感じ取らせた。次に，４つの打法を体験させ，表現の特徴をとらえ，組合せて創ってみたいという欲求を高めさせた（資料１・２）。

考察1

資料１・２から創作和太鼓の表現の幅広さと，圧倒的な迫力を感じ「自分も打ちたい。」という思いをもち，さらに，４つの打法の体験を通して，「自分の表現にクロスする動きを取り入れていきたい。」と感じていた。このことから，映像を見せたことと４つの打法を体験させたことは有効であり，表現欲求（基礎力）を高め，次時への期待感をもっていることがわかる。

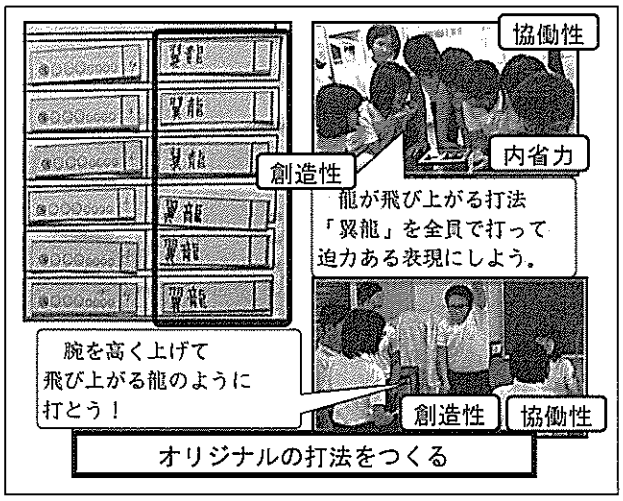
展開段階のねらい：5～18/20時
自分たちが目指す表現をつくっていく。

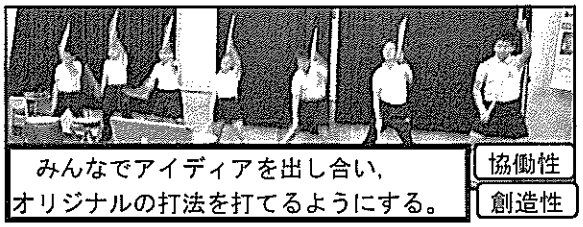
(1) チームのテーマについて話し合い，４つの打法の構成や組合せを試行錯誤する。



【資料3　テーマ決定からチームの表現を創る過程】

(2) オリジナルの打ち方やリズムを組み合わせて，自分たちの創作和太鼓の世界を創る。





【資料4　チームのオリジナルの打法の創出】

展開段階では，シンキングツールやタブレットを活用し，テーマに向かって試行錯誤しながらつくった。そのときにＡ児は龍が飛び上がる打法に共感し，みんなで取り組んだ（資料３・４）。

考察2

シンキングツールで４つの打法を組み合わせて考えることは有効であった。その根拠は，友達の考えに共感し，オリジナルの表現をつくっていったからである。

終末段階のねらい：19～20/20時
表現活動の過程で感じたことを交流する。

終末段階では，表現ノートとタブレットを使って，表現のよかったところを振り返り，伝え合った。

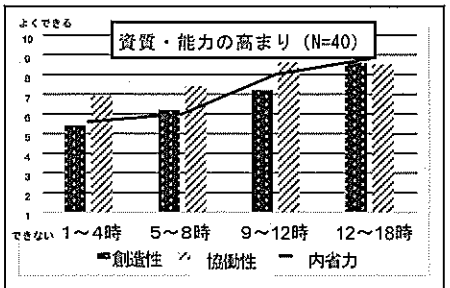
「自分たちの表現で好きなところは？」
オリジナルの表現をしてテーマを表そうと，
動きを大きくしたりして体を使った表現。
【資料5　交流後の子供のアンケート】

考察3

自己分析の表現ノートやタブレットの振り返りは有効であった。その根拠は，自己の成長を実感したり，チームの表現に満足した記述が見られたからである。

全体考察

考察２からわかるように自分たちの表現を追究していく過程で，創造性や協働性が発揮されたことが言える。また，考察１・３から内省力を働かせていることがわかる。このことは資料６からも，創造性や協働性（棒グラフ）と内省力（折れ線）が関連して伸びていることがわかる。以上のことから，題材構成の工夫や教材化が有効に働いたと判断でき，感性を豊かにし，創造性の基礎を養うことができたと考える。



【資料６　全体の結果】

健康部

健やかな心と体を育てる領域「健康」

1 「健康」の必要性

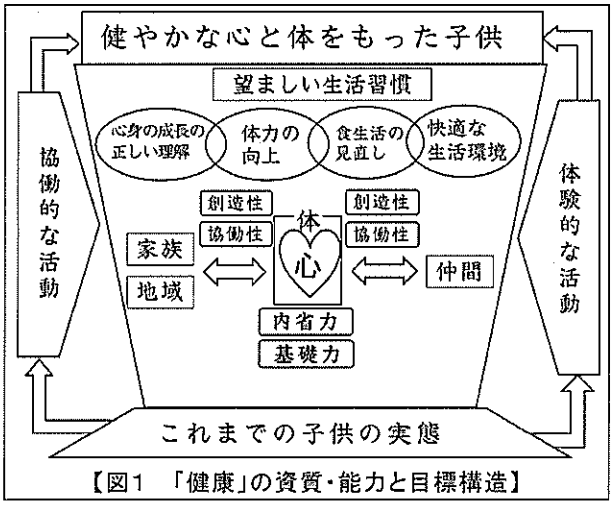
子供が心身ともに健やかに育つことは，時代を越えて全ての人々の願いである。しかし，現代社会は，親の就労環境や生活時間の多様化が子供の食生活をはじめとする生活習慣に大きな影響を与えている。また，子供が安心して遊べる身近な空間が狭まり，自由に遊べる空間や外遊びの減少は子供たちの体力低下やけがの発生という状況を招いている。さらに，社会の変化は，成人社会に生活習慣病という新たな病気をもたらし，それは子供たちにも広がりつつある。このような子供たちを取り巻く問題を解決するためには，健康を支える環境を整備することはもちろんであるが，子供自身が自分の健康をマネージメントできるようになることも必要である。現行の教育課程において子供の健康に大きくかかわっている教科は家庭科と体育科である。家庭科の内容には，子供たちの生活とはかかわりが薄いものもある。子供たちのライフスタイルが変化している今，より実現可能な内容を学習の中で取り扱うことが子供たちの課題意識や学習意欲へとつながっていくと考える。体育科では，学習を通して動きの高まりを求められているが，体を動かすことの楽しさを子供たちに十分に味わわせることができていない。また，現在学習している内容がこれからの自分の健康にどのようにつながっていくのかを考える時間を十分に確保することができず，子供たちの望ましい生活習慣としての運動習慣を身に付けさせることが難しい。

以上のことから，社会の変化によって子供たちの生活も大きく変化している現在，子供たちの課題を解決していくためには，これまでの家庭科や体育科の目標ではなく，子供たちがこれから将来的に健康な生活を過ごすことができるようにするために，子供自身が自分の健康をマネージメントしていくことができる力が必要である。つまり，現在の自分の状況を判断し，どのようにすれば，より元気に，快適に，安全に生活できるのかを子供自身がたくさんの情報の中から自分に合ったものを取捨選択し，決定していくことができるようにしなければならない。また，健康な生活を送るためには，技能が必要な場面も多々ある。そのような力を育んでいくために，子供たちが，自分の健康に関する課題を様々な方法で解決していくとともに，解決するための基本的な技能を習得していく学習が必要である。これからの自分の健康な生活のために，自分自身をマネージメントすることができる子供を育てていくためには，領域「健康」が必要である。

2 「健康」で担うもの

(1) 資質・能力から見える内容の背景

世界保健機構（WHO）の健康の定義では，健康を「病気とか，弱っていないということではなく，肉体的にも，精神的にも，そして社会的にもすべてが満たされた状態である」としている。肉体的に満たされた状態とは，身体の体力値が高く，ケガや病気をしない健やかな状態で，ごく当たり前といえる生活を送ることができることである。精神的に満たされた状態とは，自分の感情や行動がうまくコントロールできる状態で，環境に順応し，その中で向上心のある生活を送ることができることである。社会的に満たされた状態とは，豊かな人間関係があり，生活環境が整備されていることである。また，第三次国民健康づくり対策として厚生労働省が行っている「21世紀における国民健康づくり運動」（健康日本21）では，生活習慣病を予防するための行動を国民に促すことにより，介護なしで生活できる健康寿命を伸ばすことをめざしている。目標は，「栄養・食生活」，「身体運動・運動」「休養・こころの健康づくり」「たばこ」「アルコール」「歯の健康」「糖尿病」「循環器病」「がん」の９分野で設定されている。その中でも特に，「栄養・食生活」，「身体活動・運動」，「休養・こころの健康づくり」は，基本的な生活習慣とのかかわりが大きく，子供の健全な成長にも必要なものである。そこで，領域「健康」では，子供たちの体力の向上を図るとともに，健康な生活の実現のために生活環境を整備し，食生活への認識を高める。さらに，他者との協働的，体験的な活動を通して心の健康を維持することができるようにする。そうすることで，望ましい生活習慣を身に付け，健やかな心と体をもった子供を育成することができると考える（図１）。



【図１ 「健康」の資質・能力と目標構造】

(2) 資質・能力について

領域「健康」において育てたい資質・能力は次の通りである。

基礎力とは，子供が健康な生活を実践する際に必要となる知識や技能のことである。具体的には，運動に親しむための体力，調理に関する技能なども含む。

内省力とは，自分や自分を取り巻く環境の変容から課題を見つけ，それを基に現状を把握し，今後の行動への見通しをもつことである。よりよい健康行動を実践する際に発揮される特に重要な力である。

協働性とは，自分以外の他者と目的や課題を共有しかかわり合いながらよりよい健康行動を実践することである。他者と協働することで情報を共有したり，継続して活動を続けたりすることができるようになる。

創造性とは，自分の現状をふまえてよりよい健康行動を実践するための意欲や健康行動を実践していこうとする態度である。自分の生活を改善していく際に発揮される重要なものである。

これらの力を相互に関連させることが，将来的に自分自身の生活をマネージメントすることにつながる。

【表1　領域「健康」の資質・能力表】

上位概念	下位概念	低学年	中学年	高学年
創造性	適応への判断	健康課題に対して，自分が最もよいと思う方法で解決しようとする	健康課題に対して，今の自分の状態に合った方法で解決しようとする	健康課題に対して，自分自身や周りの状況を考えて，最もよい方法で解決しようとする
	健康を志向する態度	いくつかの方法を試しながら，解決方法を選んだり，生活の中で続けようとしたりする	自分の生活や体力を考えて，よりよい解決方法を選んだり，生活の中で続けようとしたりする	自分や周囲の人や環境のことを考えて，よりよい解決方法を選んだり，生活の中で続けようとしたりする
協働性	双方向的働きかけ	ペアの友達と，健康課題を解決するための自分の考えを伝え合うことができる	グループで，健康課題を解決するための自分の考えを伝え合うことができる	自分の考えの根拠を明らかにして，グループで健康課題を解決する方法を伝え合うことができる
	合意形成	ペアの友達と健康課題を解決するためによい方法を決めることができる	グループで健康課題を解決するための考えを出し合い，よりよい方法を決めることができる	グループで健康課題を解決するためのよりよい方法を，いくつかの考えを組み合わせて決めることができる
内省力	変容の発見	自分の身近なところから生活や運動の関連に気付く	自分と自分の身の回りから生活や運動に関する変容を見つける	自分と自分の身近な地域・社会から生活や運動に関する変容を見つける
	改善への意志決定	これからの自分が健康に過ごすための方法を選ぶことができる	これからの自分や身近な人々が健康に過ごすための方法を考えることができる	これからの自分と身近な地域・社会がよりよくなるための方法を考えることができる
	健康課題解決の見通し	自分にできそうな解決方法を考えることができる	自分や自分の生活に合った解決方法を考えることができる	自分や自分の身近な地域・社会に適した解決方法を考えることができる
基礎力	健康に関する知識・技能	・自分自身に関する健康 ・運動や生活に関する知識や技能を身に付けることができる ・楽しく遊ぶことができる体力	・自分自身と自分の身の回りに関する健康 ・運動や生活に関する知識や技能を身に付けることができる ・易しい運動に取り組むことができる体力	・自分自身と自分の身近な地域・社会に関する健康 ・運動や生活に関する知識や技能を身に付けることができる ・簡易化された運動に取り組むことができる体力

3　目標と内容

(1) 目標について

生涯にわたって生活を明るく豊かにする健やかな心と体を育成するため，健康に関する体験的な活動を通して，自ら必要な知識・技能を獲得するとともに他者とのかかわりを深め，よりよい健康行動を実践していこうとする態度を育てる。

(2) 内容について

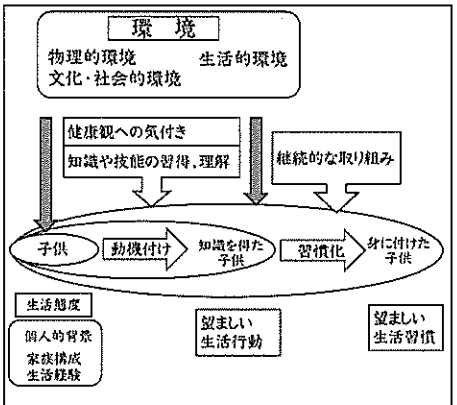
①　内容設定について

前出した健康日本21『休養・こころの健康』において，「こころの健康には，個人の資質や能力の他に，身体状況，社会経済状況，住居や職場の環境，対人関係など，多くの要因が影響し，なかでも，身体の状態とこころは相互に強く関係している」，「こころの健康を保つには多くの要素があり，適度な運動や，バランスのとれた栄養・食生活は身体だけでなくこころの健康においても重要な基礎となるものである」と，心と体には密接な関係があることが述べられている。これは，健康に過ごすためには，「健やかな体」と「健やかな心」の両方が必要であるということである。「健やかな体」は，病気やケガなく，日常生活における様様な行為を不便なく送ることができる状態であり，子供が自分自身で身体的に健康かどうかを判断することはわりと容易なことである。しかし，心は目に見えず，「健やかな心」かどうかを判断することは難しい。そこで，心が健康な状態を次の４つの状態とする。

①自分の感情に気付いて表現できる「情緒的健康」
②状況に応じて適切に考え，現実的な問題解決ができる「知的健康」
③他人や社会と建設的でよい関係を築くことができる「社会的健康」
④自分の人生の目的や意義を見出し，自ら人生に積極的にかかわろうとする「人間的健康」

医学博士和田雅史は，「健康を維持し増進していくためには，生まれながらに規定されている要因を明確に意識して，後天的に獲得していく要因をいかに整備し，改善していくことができるのかが重要である。現在の健康は，現在のみならず生涯につながっていることを認識して，健康に影響する要因について充分理解し，実践していかなくてはならない。」とし，さらに，「健康の維持・増進を考える上で，身体が年齢の変化に応じてどれだけ適切に発育・発達しているのかを知ることは重要」であり，「健康な生活を実現していくためには，生活環境を整備し，食生活や嗜好品への認識を高め，適切な身体活動を実践し，心の健康の維持」が必要であると述べている。そこで，領域「健康」は，「Ａ心身の成長」，「Ｂ運動」，「Ｃ食生活」，「Ｄ生活環境」の４つの内容で構成する。これら４つの内容を学習することによって，自分の心身の状態がわかり，健康の保持・増進のためにどんなことをすればよいのかがわかるセルフケア，セルフコントロールできる状態をめざす。

子供たちの生活は，周囲の環境や個人的背景と深いかかわりをもち，多種多様な形で営まれている。そのような子供たちに望ましい生活行動への動機付けを図るための学習を領域「健康」では行う。そして，発達の段階に応じて低学年では気付きを基に生活習慣の大切さに気付かせるなど継続的な取組を行い，望ましい生活習慣を身に付けさせていくことをめざす（図２）。



【図２　健康な生活の実現過程】

②　内容構成について

４つの内容については，２学年を１つのまとまりとしてとらえ，以下の内容を２年間で指導する。

【表２　学年ごとの内容構成】

Ａ　心身の成長

第１・２学年	第３・４学年	第５・６学年
・運動，食事，睡眠への気付き	・生活習慣のリズム	・自分に合った望ましい生活習慣
・体の部分の名称やはたらき	・体の発育やけがの手当	・体と心の発達 ・疾病の予防や薬物の害

Ｂ　運動

第１・２学年	第３・４学年	第５・６学年
・運動遊び	・易しい運動	・簡易化された運動

Ｃ　食生活

第１・２学年	第３・４学年	第５・６学年
・食品の分類とそれぞれの役割	・バランスのよい食事 ・成長と食物の関係	・調理に関する基礎的な技能 ・バランスがとれた食事計画

Ｄ　生活環境

第１・２学年	第３・４学年	第５・６学年
・自分自身の体の衛生と周囲へ及ぼす影響	・自分や家族を取り巻く環境の衛生や健康	・身近な環境の整備，衛生 ・身近な環境を整える技能

4　年間指導計画作成の考え方

(1) 教材化の工夫

領域「健康」では，現在の自分の生活の中から課題を見つけ，課題を解決することを通して学習したことを自分の生活の中で生かし，よりよい生活習慣を継続的に実践していくことが大切である。また，WHOの「健康」の定義の一つである「社会的に満たされた状態」には，他者とのかかわりが必要であるとされており，健康の学習においても他者とのかかわりを大切にしていく。そこで，以下のような視点で教材化を図る。

- 自分自身の健康の状態を可視化することができ，そこから課題を見出すことができるもの
- 子供たちにとって身近で，実生活で実践することができるもの
- 他者との学び合いによって，多様な解決方法を見出したり，新たな解決方法をつくり出したりすることができるもの
- 学習することによって，子供が自分のこれからの生活について考えることができるもの

(2) 各学年で取り扱う内容

「健康」における内容の目標は次の通りである。

内容	目　標
A 心身の成長	自分の心や体の発育・発達について理解し，自身の健全な発育・発達のために，生活習慣を整えようとする態度を養う。
B 運動	生涯にわたって運動に親しむための資質・能力を養うとともに，適切な運動経験を基に体力の向上を図る。
C 食生活	食物の体内での働きについて理解し，基礎的な調理に関する技能を身に付け，食習慣を整えようとする態度を養う。
D 生活環境	身の回りの安全や衛生，社会との関係について理解し，自ら周囲の人やもの・ことに働きかけようとする態度を養う。

それぞれの内容については全学年で取り扱うが，発達段階に応じて中心となる内容を変える。「A心身の成長」では，身体の機能に関することは低学年で学習するものとし，心身の発達に関することは第二次性徴を迎える高学年を中心に取り扱う。「B運動」では，幼稚園や中学校との系統性を大切にし，低学年では遊びを通して運動に親しむこと，中学年以降で易しい運動から簡易化された運動へと発展させるとともに，体力の向上をめざした動きを扱う。「C食生活」では，栄養に関することは全学年で段階的に扱うが，食に関する技能は，高学年から扱う。「D生活環境」では，身体の衛生や快適な生活について，自分自身にかかわりの深いものから家族，社会とのつながりなど，外部とのかかわりが深くなるものへと段階的に扱う（表３）。

【表３　各学年の内容】

	低学年　　中学年　　高学年
A 心身の成長	身体の機能に関すること／心身の発達に関すること
B運動	運動に親しむこと／体力の向上に関すること
C食生活	栄養に関すること／食に関する技能
D生活環境	身体の衛生と快適な生活に関すること

(3) 題材構成の工夫

子供の体力低下が指摘され，体力の向上が求められている現代社会においてB「運動」が担う役割は大きい。そこで，B「運動」に関しては，できるだけ多くの内容（A，C，D）との関連を図りつつ運動量を確保しながら，それぞれの学年の発達段階に応じて，系統的にその能力が高まっていくように題材を配置する。

「A心身の成長」，「C食生活」，「D生活環境」に関しては，低・中学年ではそれぞれの内容を関連付けた題材構成を基本とし，各学期に１題材ずつ配置する（そのうちの１つは，「B運動」とも関連付けたものにする）。そして，４年間で段階的に学習することができるようにする。高学年も内容を関連させて題材を構成することを基本とするが，「C食生活」に関しては，食に関する基礎的・基本的な技能を「ゆでる調理」「炒める調理」ができるようになるためのものとする。そして，その習得のために必要な調理器具の使い方や調理手順を２年間で段階的に習得することができるように，単独で構成した題材を年間を通して配列する。A，C，Dを関連させた題材に関しては，低・中学年と同様に，１学期に１題材を設定し，運動や食生活の技能とも関連させながら学習できるようにする（表４）。

【表４　題材構成と配列】

	1学期	2学期	3学期
低・中学年	「B運動」の題材		
	A，(B)，C，Dを関連させた題材	A，(B)，C，Dを関連させた題材	A，(B)，C，Dを関連させた題材

	1学期	2学期	3学期
高学年	「B運動」の題材		
	「C食生活」の技能に関する題材		
	A，(B)，C，Dを関連させた題材	A，(B)，C，Dを関連させた題材	A，(B)，C，Dを関連させた題材

【参考文献等】

1) 宮坂忠夫・川田智恵子『最新　保健学講座　健康教育論』メヂカルフレンド社，2014年

2) 和田雅史『健康科学　ヘルスプロモーションの理念』犀書社，2007年

3) 厚生労働省『健康日本21　休養・こころの健康』

指導事例1　第3学年　題材　毎日元気な　わたしのために

指導者　　鞭馬　あゆみ

1　資質・能力

◎　自分の食生活から課題を見つけ，家族と一緒に解決する方法を見出すことができる。

（創造性：健康を志向する態度）

○　共通の課題を解決するためにグループで協力して実験したり，解決方法を話し合ったりすることができる。　（協働性：双方向的働きかけ）

◎　自分の食事の実際から，よりよい食事にするための課題をとらえることができる。

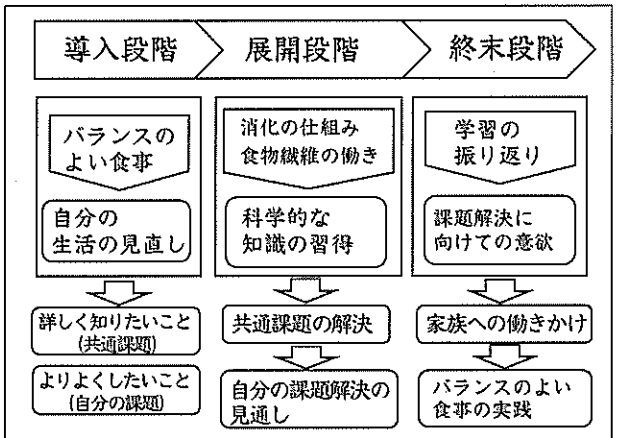
（内省力：改善への意志決定）

○　食べたものの消化・吸収の過程や緑の食品に含まれる食物繊維の働きがわかる。

（基礎力：健康に関する知識・技能）

2　題材の考え方

本題材では，バランスのよい食事がなぜ大切なのかを理解し，望ましい食生活を実践できるように自分なりに改善したり，家族に働きかけたりすることができるようになることをねらいとしている。具体的には，①バランスのよい食事とは主食，主菜，副菜がそろった食事であること，②食べた物は胃，小腸，大腸を通り，小腸で体内に栄養が吸収され，大腸では食べ物のかすが残ること，③緑の食品に含まれる食物繊維は体内で消化・吸収されないが，排便と関係があることなどである。バランスのよい食事を実践させるためには，なぜ，それが自分の健康に必要なのかを科学的に明らかにさせ，実感を伴って理解させる必要がある。そのために，「食事バランスガイド」を用いて，バランスがよい食事とはどのようなものなのかを明らかにし，自分の食事内容を調べていくことで，自分の課題に気付くことができるようにする。さらに，体験的な活動を通して，食物繊維と排便との関係などを明らかにすることで，実感を伴った理解ができると考える。



【題材の構造図】

3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～2/5時

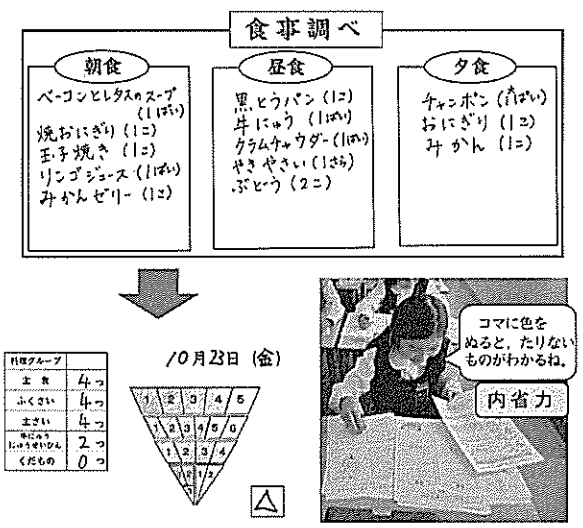
バランスのよい食事には，緑の食品が必要なことがわかり，自分の課題に気付くことができる。

(1) 健康について話し合う。

・ストレスがたまっていないとき　・なやみがないとき
・何かを夢中でできるとき　・けがをしていないとき

【資料1　A児が考えた「健康」】

(2) 自分の食事のバランスを調べる。



【資料2　自分の食事をチェックしよう】

導入段階では，まず健康とはどういうことなのかを話し合い，学級全体で共通理解を図った（資料1）。そして，健康に生活するために必要なものを挙げ，その中でも元気に生活するためのエネルギー源であるバランスのよい食事とはどのようなものかを農林水産省の「食事バランスガイド」で調べた。A児は，1日に食べたものと量を記録し，コマに色を塗ることで，バランスがよいと思っていた食事でも，主食や副菜が不足していることに気付くことができた（資料2）。

考察1

「食事バランスガイド」を用いてバランスのよい食事はどのようなものかを調べたことは，自分の食生活を振り返り，自分の課題を見つけるために有効であった。その根拠は1日に食べたものを調べて，コマに色を塗ることにより，自分の食事のバランスが視覚化でき，不足している物や過剰に摂取しているものを実感を通して理解することができたからである。

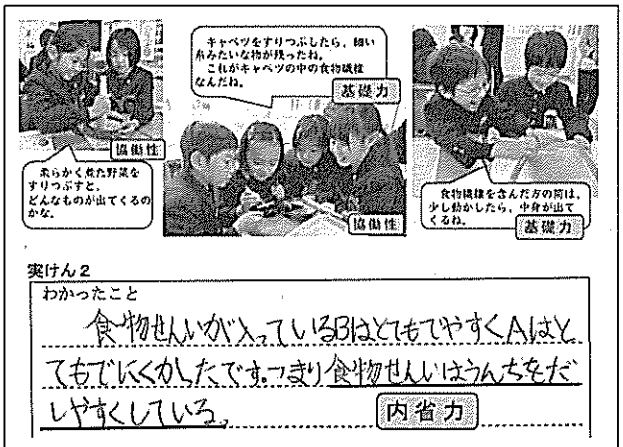
展開段階のねらい：3～4/5時

体内での消化・吸収の仕組みを理解し，緑の食品の体内での働きがわかる。

(1) 小さく刻んだりんご，すりつぶしたりんご，汁を絞ったりんごの様子から，口，胃，小腸，大腸のそれぞれの働きを調べる。

【資料3　胃，小腸，大腸はどんな働きをするのかな】

(2) 野菜をすりつぶして緑の食品に含まれる食物繊維を見つけ，水分を含んでいない寒天（A）と水分を含んだ寒天（B）を筒から出して，食物繊維の体内での働きを調べる。



【資料4　食物繊維はどんなものかな】

展開段階では，まず自分が食べたものがどのような順番で体内を通り，その栄養がどのように体内に吸収されていくのかを調べた。そのときにA児は，栄養が吸収される小腸が7ｍもある理由について，たくさんの栄養を体内に取り入れるためだと考えた（資料3）。次に，緑の食品に含まれている食物繊維を調べる活動を行った。初めに，野菜をすりつぶして中に含まれる繊維質を探し，食物繊維の存在を確かめた。そして，水分量の違う寒天を管から出す実験を通して，食物繊維の働きを調べた。A児は，2つの実験の結果を比較して，食物繊維は排便と関係があると考えた（資料4）。

考察2

体内の消化器官のそれぞれの働きや，食物繊維について調べたことは，緑の食品が使われている副菜を多く食べることが健康な生活を送るために大切であることを理解する上で有効であった。その根拠は食べ物がどのように吸収されるのかを科学的に理解した上で，実験の結果から食物繊維のはたらきを具体的に理解することができたからである。

終末段階のねらい：5/5時

これからどのような食事をしていきたいのかを考えることができる。

これからバランスのよい食事ができるようにするために，できることを話し合う。

毎日の食事をつくってくれているお母さんに，「これを食べたら元気になるよ」と教えて，作ってくれたものを残さず食べる。そして，自分がきらいなもの（かぼちゃ）も朝や夜の食事で気にせずに出してもらうようにお願いをする。

【資料5　A児のこれから取り組んでいきたいこと】

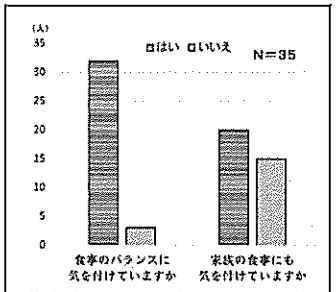
終末段階では，これからの自分の食生活をどのようにしていきたいのかを考えた。そのときにA児はバランスのよい食事になるように，家族にも協力してもらおうと考えた（資料5）。

考察3

これからの自分の食生活について考えたことは，自分の生活を見直すために有効であった。その根拠は，自分にできることと家族に協力してもらいたいことを具体的に考えることができたからである。

全体考察

バランスのよい食事について調べることは，自分の食生活を見直す上で有効であったと判断できる。考察1，2からわかるように，緑の食品の働きについて理解し，その必要性を実感することができた。また，考察3から，それまでの学習をもとに自分の食生活について見直すことができたこともわかる。しかし全体を見ると，資料6からわかるように，家族の食事に関心をもたせることは十分とはいえない。このことから，より食生活の充実を図るためには，段階的に家族の健康にも関心を広げていくことが必要である。



【資料6　食事への関心】

指導事例2　第4学年　題材　オリジナルゲームで健康づくり「ダブルボードゴールハンドボール」

指導者　　平井　源樹

1　資質・能力

◎　チームの課題に合うオリジナルゲームとそれを実現させる生活習慣をつくることができる。（創造性）

◎　仲間のことを考えて教え合ったり励まし合ったりしながら，運動することができる。　（協働性）

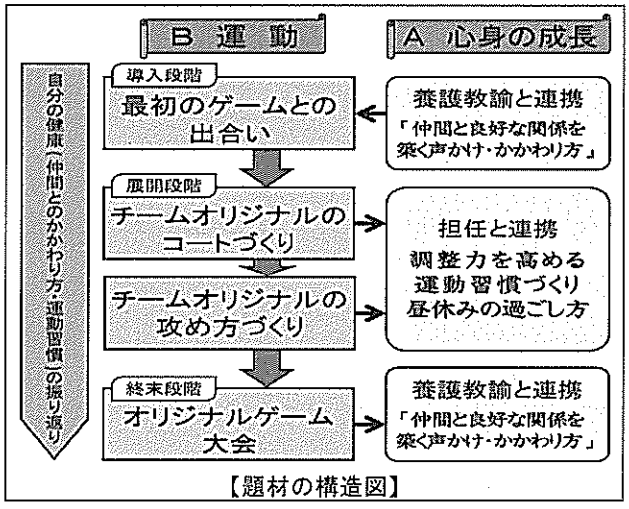
○　課題をもとに，自分やチームに合った運動習慣やゲームを判断することができる。　（内省力）

○　基本的なボール操作とボールを受ける動きで，仲間と連係して攻めることができる。　（基礎力）

2　題材の考え方

本題材は，易しいゴール型ゲームでチームに合ったオリジナルのコートや作戦づくりを行いながら，仲間と連係した巧みな動き（B運動）と仲間との信頼関係，運動習慣（A心身の成長）をつくっていくことをねらいとしている。そのために，オリジナルゲーム（オリジナルのコートと作戦）をつくっていく運動の学習を軸に，養護教諭と連携した「仲間との良好な関係を築く言葉かけ・かかわり方」の学習，運動の学習を支える学校生活の中での「調整力を高める運動習慣」づくりを行いながら，仲間と連係した動きを高めていくことができるように題材を構成した。

具体的には，まず，題材の導入段階で，最初のゲームと出合い，仲間との助け合いの必要性に気付かせるとともに，養護教諭と連携してどのような助け合いが必要か考えを深めさせる。そして，展開段階で，担任と連携して運動習慣づくりを行い必要な動きを高めながら，仲間と協働してオリジナルゲームづくりを行う。最後に，終末段階で，大会を行って，自他の心身の健康の高まりを自覚し，学習で得た健康づくりの行い方を自分の生活に生かしていきたいという意欲をもつことができるようにする。



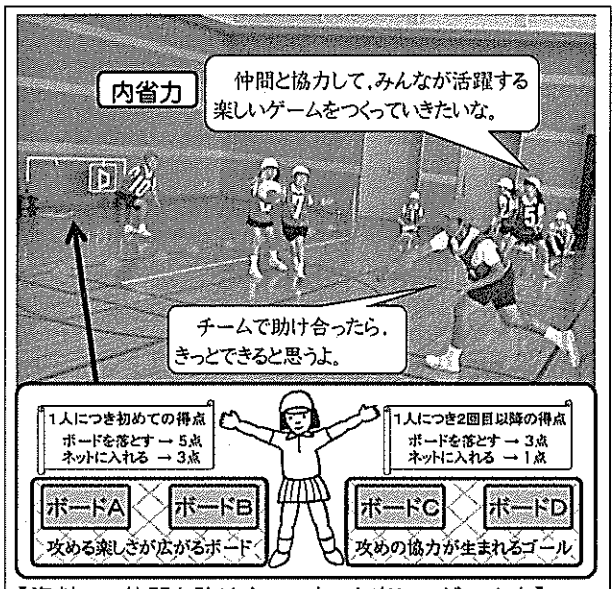
【題材の構造図】

3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：１～２/10時

仲間と助け合うことの必要性と大切さをとらえ，ゲームづくりに活かしていこうとする意欲をもつ。

(1) 最初のダブルボードゴールハンドボールで試しのゲームを行い，願いを話し合う。



【資料1　仲間と助け合ってもっと楽しいゲームを】

(2) 仲間とどのような助け合いが必要か，養護教諭の話を聞き，大切なことを話し合う。

【資料2　仲間とよい助け合いができるように】

導入段階で，最初の試しのゲームを行ったり，仲間との良好な関係づくりについて養護教諭と話し合ったりした。その中で，楽しいゲームづくりを行っていくためには，助け合いが必要であることに気付くとともに，相手を思いやって行動することを活かしていこうという意欲をもつことができた（資料１，２）。

考察１

ゲームとの出合いから生まれた思いや気付きとつないで，養護教諭とともに助け合いの内容と方法について話し合ったことは，資料２の発言から，これからの楽しいゲームづくりに向かって仲間との協働意識を高める上で有効であった。

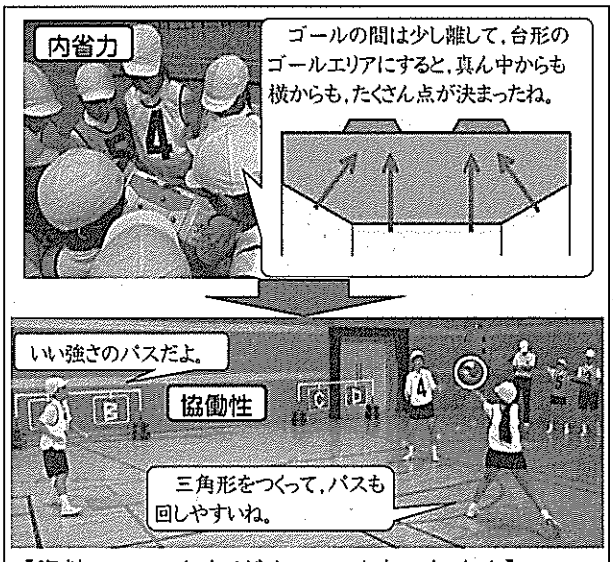
展開段階のねらい：３～８/10時

自分に合った運動習慣をつくったり，チームオリジナルゲームをつくったりして，楽しみ方を広げる。

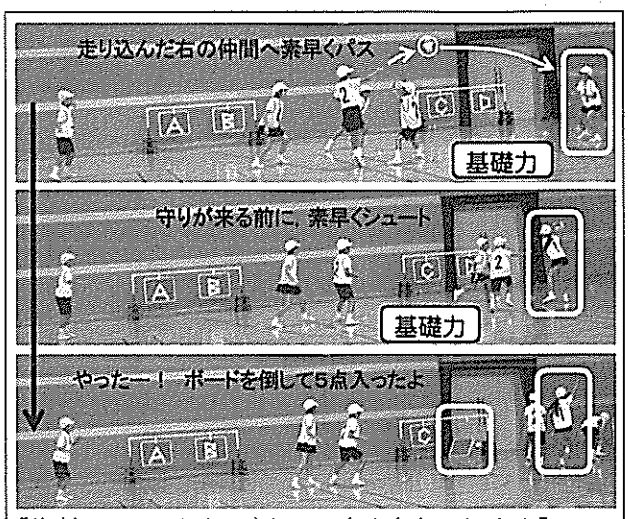
(1) 身近な運動を生活の中に取り入れながら，仲間とゲームに必要な動きづくりをする。

【資料３　昼休みを使って仲間と必要な動きづくり】

(2) 仲間と教え合い励まし合いながら，チームオリジナルゲームをつくる。



【資料４　チームオリジナルコートをつくったよ】



【資料５　チームオリジナルの攻め方をつくったよ】

展開段階で，自分に合った生活習慣をつくったり，チームオリジナルゲームをつくったりした。その中で，仲間と協働して必要な動きづくり，連係した動きづくりを行うことができた（資料３，５）。

考察２

運動習慣づくりとオリジナルゲームづくりを行ったことは，資料３，５の姿から，仲間と協働して動きづくりを行う上で有効であった。

終末段階のねらい：９～10/10時

学習を通して，さらに健康になった自分を自覚する。

(1) 大会を行って，自他の健康の高まりを話し合う。

めあてをもって，昼休みに仲間と運動するようになった。そして，困ったときはいつもなるほどと思うアドバイスを仲間がしてくれるようになって，いつも楽しくゲームができるようになった。だから，これからも，仲間と助け合うこと，自分に合った運動を続けていきたい。

【資料６　話し合った後の子供の感想】　創造性

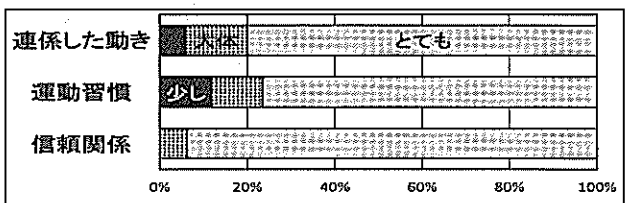
大会を行った後，健康の高まりを話し合った。信頼関係や動きの高まりを自覚することができた（資料６）。

考察３

大会をして学習を振り返ったことは，資料６の記述から，健康の高まりを自覚する上で有効であった。

全体考察

連係した動きづくりだけでなく，運動習慣づくり，仲間との信頼関係づくりにも効果を自覚した子供が多かった（資料７）。オリジナルゲームづくりを軸に，他の教諭と連携しながら，仲間づくりと運動習慣づくりを位置付けた題材構成が有効に働いたためと考える。



【資料７　効果を自覚した健康の観点】

指導事例3　第6学年　題材　ぼく　わたしの体力アッププランをつくろう

指導者　中村　剛

1　資質・能力

○　課題を解決することができるように，運動の組み合せ方や取り組むスピードなどをつくっていくことができる。（創造性：適応への判断）

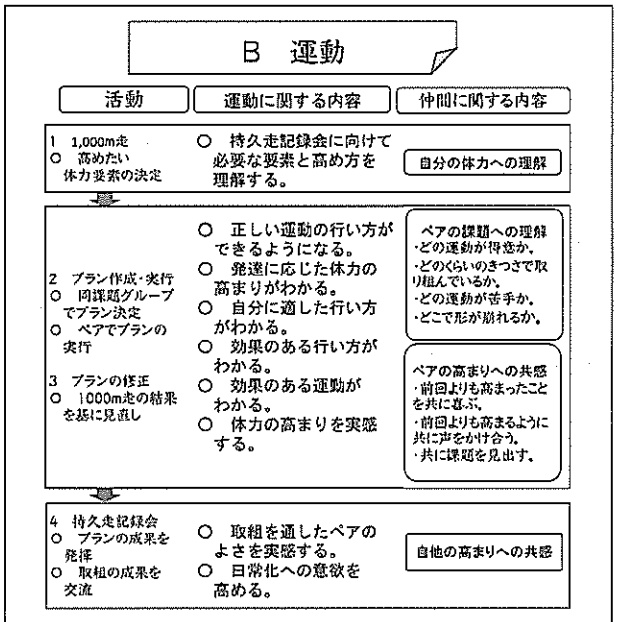
◎　同課題グループで運動の組み合せを考えたり，同課題ペアの友達と運動の仕方を教え合ったり，励まし合ったりして体力アッププランに取り組むことができる。（協働性：双方向的働きかけ）

◎　課題やデータを基に，自分自身の運動の取り組み方，体力アッププランの課題やよさを見つけることができる。（内省力：健康課題解決の見通し）

○　体力を高めるための運動やそのためのトレーニングの仕方がわかり，体力を高めることができる。（基礎力：健康に関する知識・技能）

2　題材の考え方

本題材は，自分で高めたい力を選び，ペアの友達と各種の運動に取り組みながら，体力（B運動）とともに仲間との信頼関係を築き，日常的に運動に取り組もうとする態度を養うことをねらいとしている。そのために，持久走記録会で満足のいく走りを行うために自分自身の体力を高める体力アッププランをつくっていく運動の学習を軸に題材を構成した。ペアで互いの動きを見合ったり，励まし合ったりすることで自他の体力の高まりをとらえること，家庭でも取り組むことができる運動を取り入れるなど日常的な取組につながるような運動を取り扱った。



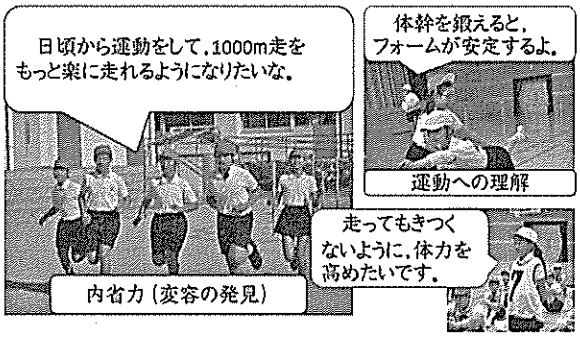
【題材の計画】

3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～2/11時

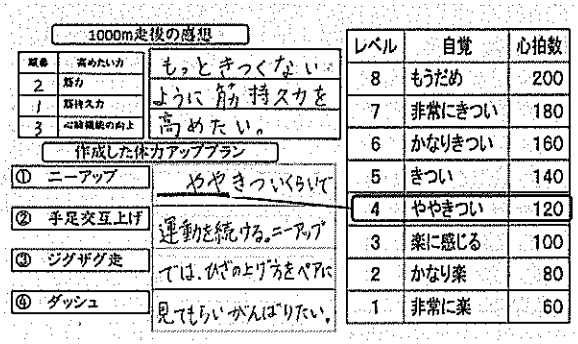
自分の体力の現状をとらえ，体力を高める必要性を感じ，体力を高める意欲をもつ。

(1) 1000m走を行い，自分の体力や持久走記録会へ向けた願いについて話し合う。



【資料1　自分の課題を見つける姿】

(2) 筋持久力などの中から自分が高めていきたい力を選択し，体力アッププランを作成する。



【資料2　A児の感想とプラン】

導入段階では，1000m走を行い，持久走記録会へ向けての目標設定と運動の取り組み方，必要な体力要素への理解を図った（資料1）。そして，持久走記録会へ向けての目標設定と自分が高めたい体力に応じた体力アッププランを高めたい体力要素が共通する友達と作成した（資料2）。

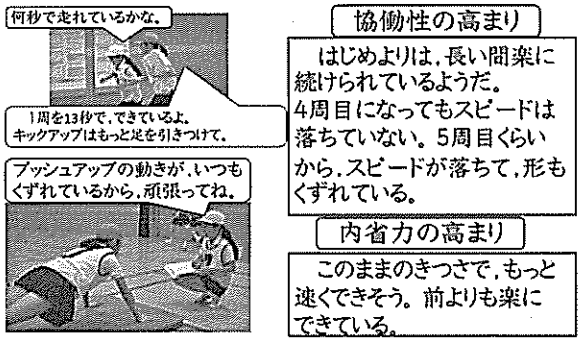
考察1

自分に合ったプランを作成させるために，1000m走を行ったことは有効であった。資料1で運動の行い方を理解し，資料2からA児が筋持久力を高めるためにややきついレベルの行い方を選択していることがわかるからである。

展開段階のねらい：3～10/11時

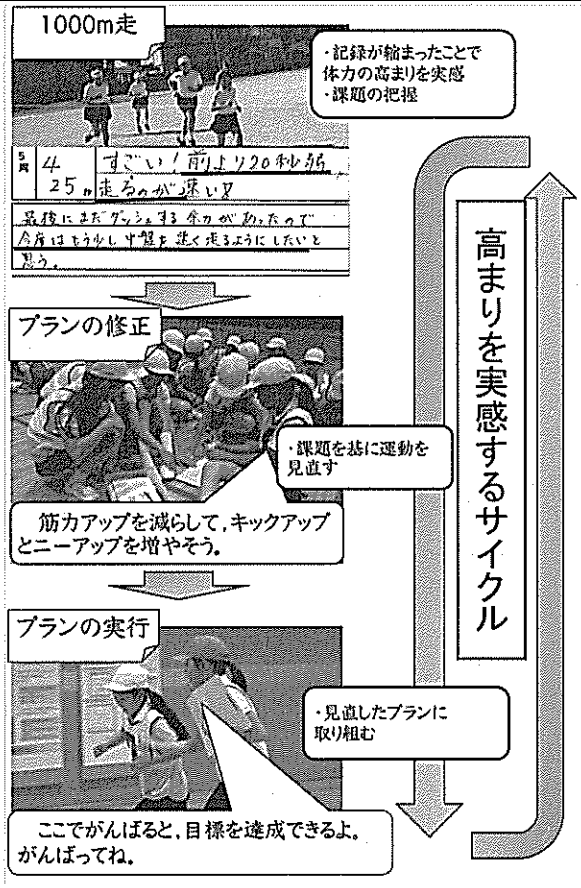
体力アッププランを修正したり，付加したりしながら取り組む。

(1) 体力アッププランにペアで取り組む。



【資料3　プランの取り組み】

(2) 1000m走で体力アッププランの成果を図り，プランを見直して実行する。



【資料4　1000m走での変更】

展開段階では，体力アッププランに繰り返し取り組んだ。その際，ペアでの学習を行うことで，動きの正確さや高まりをとらえさせた（資料３）。また，1000m走をもとにプランの修正，実行を行うことで体力の高まりを実感させることができた（資料４）。

考察2

体力アッププランに取り組ませたことは，協働性を高める上で有効であった。その根拠は資料３である。ペアの動きを前回までの運動と比較して励ましている言葉がみられた。また，心拍数を基に主観的運動強度を用いたことで，前回よりも楽にできたなど自分自身で高まりをとらえることもできた。

終末段階のねらい：11/11時

持久走記録会での走りを振り返り，体力アッププランに取り組んだ成果を確かめ，今後の生活に生かす意欲を高める。

(1) 体力アッププランに取り組んだ効果を話し合う。

ペアと協力して少し内容を変えたりして持久走のタイムが本番は1分くらいちぢまったのでこれからも続けていきたいと思う。他にも家でのすいみんなどに気をつけて規則正しい生活を送っていきたいと思う。

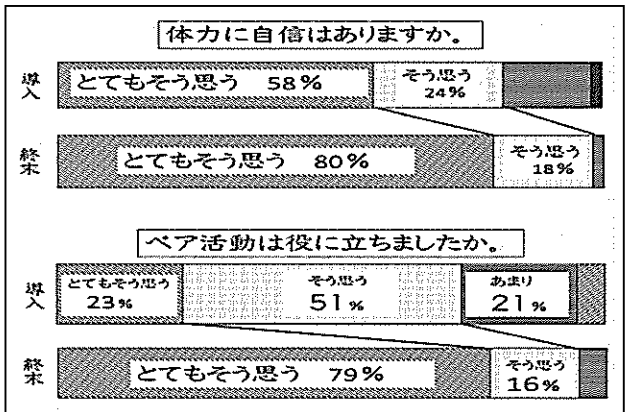
【資料5　A児の振り返り】

終末段階では，持久走大会や題材を通した自他の取組を振り返り，感想を交流した。A児は自分自身の体力が高まったことをとらえるとともに，生活習慣を整えていくことを考えることができた（資料５）。

考察3

題材を通した振り返りや感想を交流したことは，自他の体力の高まりをとらえさせる上で有効であった。資料５の「協力して取り組んだこと」「１分くらい縮まった」という記述で高まりを自覚したことがわかる。

全体考察



【資料6　プランに取り組んだ成果】

体力に自信をもったり，ペアで体力を高めることのよさをとらえたりすることができた（資料６）。ペアで運動の回数や表情を確認しながらプランに取り組ませたことが有効に働いたためと考える。今後は，導入時に様々な運動の回数などを記録し，それを基に課題を選択できるようにする必要がある。

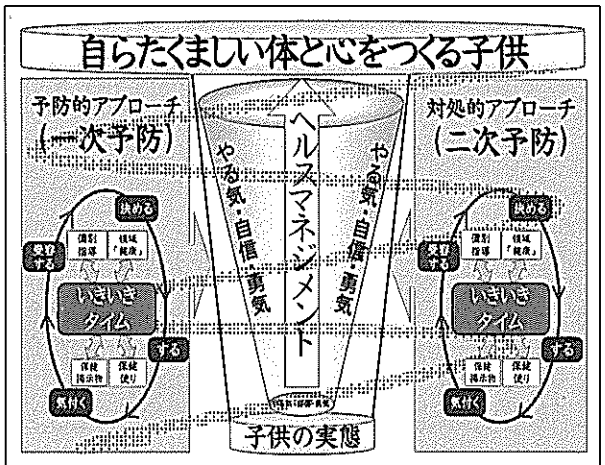
指導事例4　「いきいきタイム」からの発信！たくましい体と心をつくる保健室経営

養護教諭　　佐藤　美和子

1　子供たちへの願い

保健室には毎日いろいろな子供が来室する。擦り傷や発熱など明らかなけがや病気による来室の一方で，一見元気そうだが実は心に悩みや不安を抱えている子，何となく体調がすぐれない子，ほっとするために来る子どもいる。来室理由は様々であるが，その背景には不規則な生活習慣や人間関係，家庭環境などが関係していると感じることが多い。

このような実態がある中，子供たちに「健康」をどのように伝え，自分で健康をつくる力をどのように身に付けさせたらよいのか模索し，やはり子供が自分の健康を自分でつくりあげたりコントロールしたりする力「ヘルスマネジメント」を育てていくことが大切であると考えた。そのためには，子供目線と子供の「やる気」を大切にしながら，けがや病気の予防法（一次予防）とけがや病気に遭った時の対処法（二次予防）の２つの視点による，集団・個別の保健指導や保護者への啓発を継続的に行う保健室経営が必要になってくる（図１）。これらのことを通して，これからの社会をたくましく生きていくために必要な健康をつくる子供を育てていきたいと考えた。



【図１　たくましい体と心をつくるために】

2　アプローチのポイント

(1) 子供たちの実態から

５月の実態調査で明らかになった実態や課題をもとに（下表），指導内容や方法を考え，計画した。

【表　子供の生活の実態】

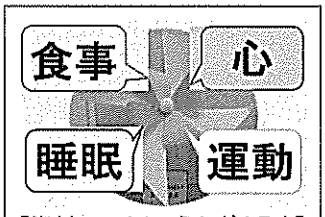
	食事	睡眠	運動	心
実態	○朝ご飯は9割の子供が毎日食べている ○約65%の子供が単品の朝ご飯である（ごはん・パンだけ）	○受検に向けて塾通いが増える4年生ごろから22時を過ぎて就寝する子供が多くなる（52%） ○学年が上がるにつれ就寝時刻の遅さや継続的な睡眠不足が目立つ（6年生の73%が22時以降に就寝）	○学年が上がるにつれ運動量が減る傾向 ○5年生から運動の習い事をやめたり休み時間に外で遊ばなくなったりする子供が増える	○高学年だけでなく，低学年でもイライラすることを頻繁に感じている ○疲れやすさをよく感じる子供は睡眠と比例して高学年に多い傾向
課題	●朝食の不十分さ ・時間がない ・睡眠不足による食欲不振	●慢性の睡眠不足 ・週に数回の塾通い ・通学時間の長さ	●運動習慣の減少 ・運動の習い事から塾通いへ	●低学年からの心身の疲れや心のイライラ ・休日も塾や習い事 ・時間に追われている

(2)「自分から」を引き出すために

主体的な姿を育てるために次の２つを意識した。

①　意識をつなぐ「けんこうかざぐるま」

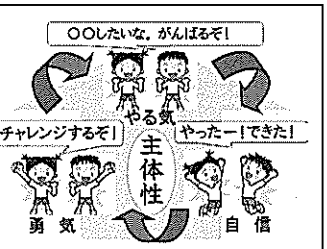
保健室で子供たちに「健康って何？」と聞くと「けがや病気をしないこと」と答える子供が多い。一般的にもそうとらえられる傾向にある。しかし，程度に差はあるが生涯一度もけがや病気をしない人はいない。本校でも疾病をもちながらも上手につき合い，いきいきと過ごしている子供がいるが，その姿からは不健康さを感じない。逆に，疾病はなくても睡眠不足や朝食抜きなどで顔色がすぐれなかったり体調不良が続いたりする子供をみると不健康さを感じる。またそのような子供は，マイナス思考や攻撃性，無気力など心の不健康さもみられることが多い。前日の過ごし方がよくないと翌日の体や心に影響し，継続すると成長の妨げや生活習慣病につながる。そこで「食事・睡眠・運動」の一つ一つの生活習慣が「心」ともつながり，健康がつくられていることを諸感覚で感じさせ実践への意欲へつなぐために「けんこうかざぐるま」を考えた（資料１）。実際の指導では，かざぐるまの４つの羽を「食事・睡眠・運動・心」に例え，回して見せた。羽の大きさがそろっていると元気に回るかざぐるまから自分の健康と同じであることを視覚的に体感させ，４つの内容について学ぶ意欲を高めることをねらった。



【資料1　けんこうかざぐるま】

②　「やる気」を引き出す子供目線

主体性を育むためには，子供目線の「やる気・自信・勇気」が必要である。子供は本来やる気のかたまりで，その「やる気」を大切にしてかかわると「自信」がもてるようになり，ひとつ自信がもてると他のことにもチャレンジしてみよう，という「勇気」が育まれる（図２）。時には失敗を経験しながらも，「やる気→自信→勇気」を繰り返すことで「ヘルスマネジメント」を高めていきたいと考えた。



【図2　やる気を育む子供目線】

○4回→健康診断の機会に
○3回→領域「健康」で担任とともに

○「けんこうかざぐるま」の4つの羽の内容を段階的に

○子供の実態や発達段階に応じた4つの羽の内容設定

回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
機会	4月発育測定	領域「健康」	9月発育測定	10月視力検査	領域「健康」	1月発育測定	領域「健康」
形態	全体指導	学年および学級指導	全体指導	全体指導	学年および学級指導	全体指導	学年および学級指導
テーマ	オリエンテーション「けんこうかざぐるま」	すいみん	食事	運動	心①	心②	まとめ
時間	20分	45分	20分	20分	45分	20分	45分
指導者	養護教諭	担任 養護教諭	養護教諭	養護教諭	担任 養護教諭	養護教諭	担任 養護教諭
内容	【全学年】「けんこうかざぐるま」の4つの羽	しっかり寝て元気アップ！ 【低】たくさん寝て元気アップ！ 【中】すいみんのひみつ 【高】ぼく・わたしのすいみん列車	元気いっぱい朝ごはん！ 【低】朝ご飯パワー 【中】野菜モリモリ朝ご飯 【高】バランスアップ朝ご飯	疲れ目を防ごう 【低】目いきいき体操 【中】目の健康と筋肉 【高】疲れ目予防のストレッチ	アンガーマネジメント 【低】どうしてイライラするの？ 【中】いかりの正体 【高】いかりと上手につき合うために	心いきいき本～テーマ～ 【低】いのち 【中】人権 【高】思春期	【全学年】ぼくわたしの「けんこうかざぐるま」をつくろう
事後指導	いきいきファイル作り	チャレンジカード	資料配付 ・おすすめの朝ごはん	資料配付 ・目のいきいきたいそう ・首肩ほぐしストレッチ	チャレンジカード		チャレンジカード

○「養護教諭のみ」「担任とともに」を明記して
○担任による保健指導への積極的な参加を促すために

○内容に応じたチャレンジカードの導入
○家庭との連携を深めるためのアイテムとして活用

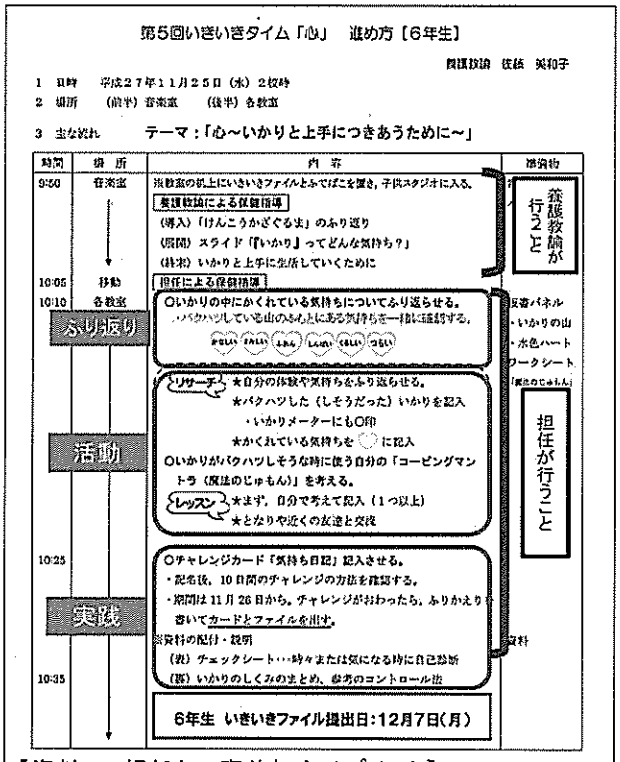
【資料2　いきいきタイム年間計画】

3　取組の実際

(1) 保健指導「いきいきタイム」

①　つながる保健指導をめざして

「いきいきタイム」は年間７回を計画し，「けんこうかざぐるま」の４つの羽がバランスよく大きくなるようにはたらきかけた。内容や時期に応じて担任とともに進めたり養護教諭単独で行ったりした（資料２）。担任はいつも子供たちの身近にいて，継続的に観察したりかかわったりしやすいというよさを生かしたいと考えた。事前の打合せは養護教諭が作成したプリント（資料３）をもとに行い，効果的に進める指導内容を確認した。


第5回いきいきタイム「心」　進め方【6年生】

養護教諭　佐藤　英和子

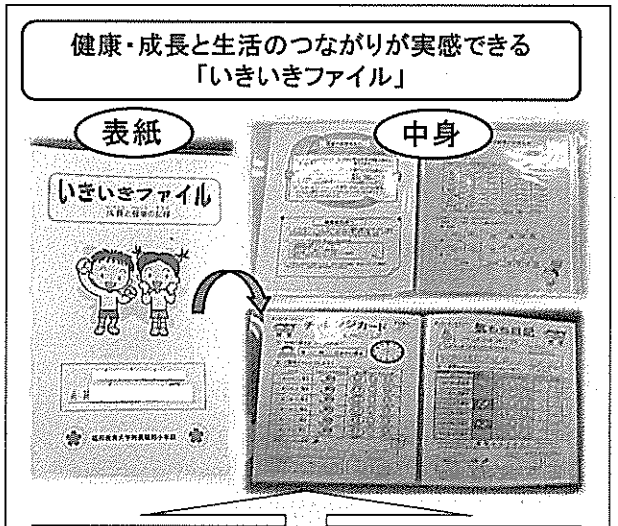
1　日時　平成27年11月25日（水）2校時
2　場所　（前半）音楽室　（後半）各教室
3　主な流れ　テーマ：「心～いかりと上手につきあうために～」

時間	場所	内容	準備物
9:50	音楽室	当教室の机上にいきいきファイルとふでばこを置き，子供スタジオに入る。 養護教諭による保健指導 （導入）「けんこうかざぐるま」のふり返り （展開）スライド『いかり』ってどんな気持ち？ （結末）いかりと上手に生活していくために	養護教諭が行うこと
10:05	移動	担任による保健指導	
10:10	各教室	ふり返り ○いかりの中にかくれている気持ちについてふり返らせる。 ・バクハツしている山のふもとにある気持ちを一緒に確認する。 （悲しい）（さびしい）（くるしい）（はずかしい）（うらめしい）	反省パネル ・いかりの山 ・水色ハート ワークシート 『魔法のじゅもん』
		活動 リサーチ ★自分の体験や気持ちをふり返らせる。 ★バクハツした（しそうだった）いかりを記入 ・いかりメーターにも○印 ★かくれている気持ちを ◯ に記入 ○いかりがバクハツしそうな時に使う自分の「コーピングマントラ（魔法のじゅもん）」を考える。 レッスン ★まず，自分で考えて記入（1つ以上） ★となりや近くの友達と交換	担任が行うこと
10:25		実践 ○チャレンジカード「気持ち日記」記入させる。 ・記名後，10日間のチャレンジの方法を確認する。 ・期間は11月26日から。チャレンジがおわったら，ふりかえり書いてカードとファイルを出す。 ※資料の配付・説明 （表）チェックシート…時々または気になる時に自己診断 （裏）いかりのしくみのまとめ，参考のコントロール法	資料
10:35		6年生　いきいきファイル提出日：12月7日(月)	

【資料3　担任との事前打合せプリント】

②　体と心の健康の財産「いきいきファイル」

子供たちの健康への意識を高めてつなぐために，一人一冊ずつ「いきいきファイル」を作った（資料４）。家庭にも呼びかけながら，ファイルには「いきいきタイム」の資料やワークシート，年間の保健便りや発育測定の結果などを入れ，体と心の健康の学びを積み上げたり，健康の情報を視覚的にふり返ったりできるようにした。このように学びの足跡を形として残すことで，生涯における健康づくりの財産になると考えた。



○発育測定の結果
　体の成長とのつながりがわかるように
○保健便り
　いきいきタイムの様子やふり返りがわかるように
○夏休み・冬休み「いきいきカレンダー」
　“自分でつくる健康“を高めるために
○チャレンジカード
　学んだことの実践をふり返るために
○いきいきタイムの資料
　生涯の体と心づくりの健康アイテムとなるように

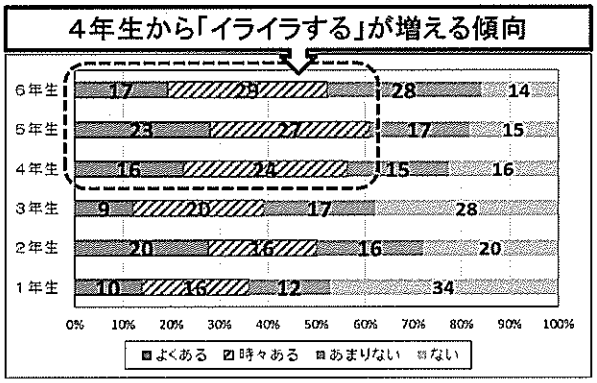
【資料4　いきいきファイル】

③　第5回いきいきタイム（心）の実践より
～5・6年生「いかりとのつき合い方」～

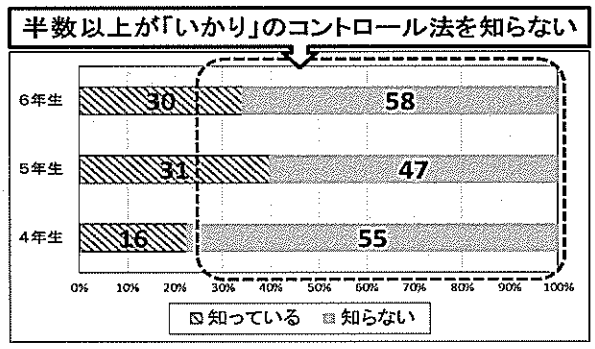
○　高学年の心の実態

5月の実態調査では，イライラすることがあると答えた子供が高学年に多い傾向がわかった（図3）。そこで，4～6年生を対象に心のアンケートを行い，「いかり」のバクハツを防ぐ方法を知らないと答えた子供がどの学年も半数以上いることがわかった（図4）。防ぐ方法を知っている子供でも，「物をける，投げつける」など，あまり好ましくない内容もみられた。

○　「いきいきタイム」の指導の実際



【図3　イライラすること】



【図4　「いかり」のコントロール法】

養護教諭による全体指導（20分）

(1)　「いかり」の正体について知る（資料5）。

○　アンガーマネジメントチェックをして，「いかり」のいろいろな気持ちに気付くこと

(2)　「いかり」のコントロール法を考える。

○　バクハツしそうな時はみんなにもあることに気付き，対処法を知りたいと思うこと

【資料5　アンガーマネジメントチェック】

担任による学級指導（25分）

(3)　養護教諭の話をふり返り，自分の「いかり」の正体を考える。

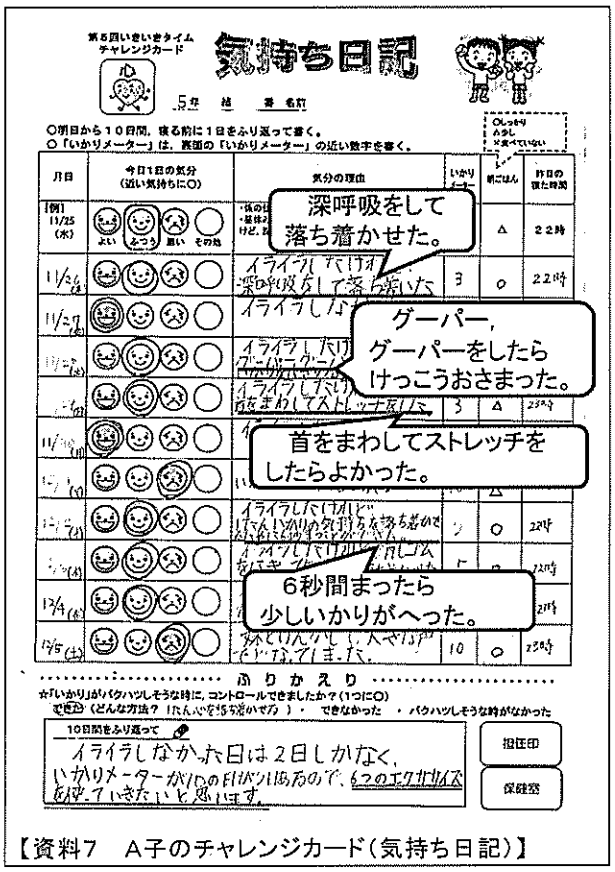
○　自分の「いかり」をふり返ること

(4)　自分の「魔法の呪文」を考える（資料6）。

○　実際に使えそうな自分の呪文を見つけること

【資料6　ぼく・わたしの魔法の呪文】

指導後の10日間，子供たちは「気持ち日記」をつけた。よくイライラすると言うA子の日記には，いろいろなコントロール法を試した様子やその時の気持ちが書かれていた（資料7）。気持ちを可視化したことでいかりとのつき合い方への自信につながっていたり，これからも続けようという意欲がみられたりした。また，「よくイライラしていると思っていたけど，書いてみるとそんなにしていないことがわかった。」と自分の気持ちに気付いた子供もいた。

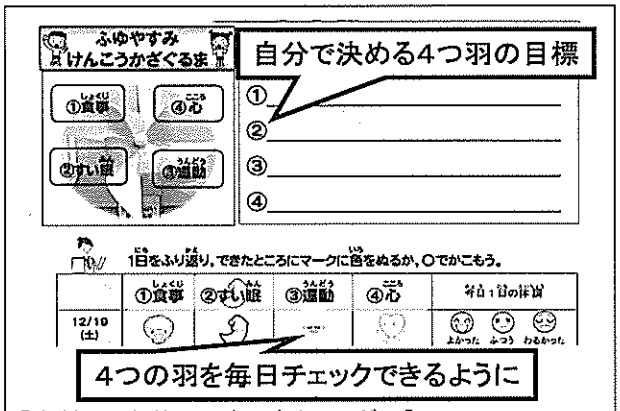


【資料7　A子のチャレンジカード（気持ち日記）】

(2) 夏休み・冬休み「いきいきカレンダー」

長期休暇は生活リズムが乱れがちな時期ではあるが，一方で，子供が自分で生活習慣をつくりあげる支援を家庭と共にできる機会と考えている。そこで，アプローチのポイント②を特に意識して主体的に目標を決めることができるカレンダーを配付した。夏休みはメニュー表から選択する方法を，「けんこうかざぐるま」の４つの羽の内容を学んだ後の冬休みは，元気に過ごすために自分に必要な目標をそれぞれの羽で決めた（資料８）。配付時に教室にカレンダーを持っていくと，子供たちからは「やったあ，いきいきカレンダーだ！」という声も聞かれ，意欲的に取り組む子供の姿も多くみられた。

(3) 保健便り・掲示物による発信



【資料８　冬休みいきいきカレンダー】

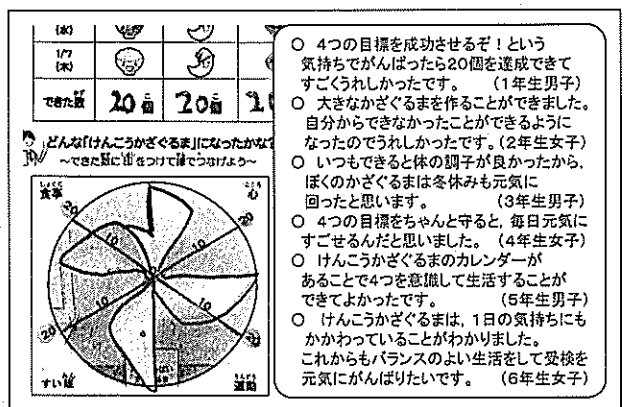
毎月発行の保健便りの一部に，自分の体の様子をふり返るコーナーや保健指導「いきいきタイム」の様子を掲載して，継続的に子供の意識にはたらきかけた。また，今のありのままの自分を見つめ受け入れること，心を見つめながら生活することなどの内容を連載して，「心」の羽が育つようにはたらきかけた。保護者への啓発は保護者向け保健便り「すこやか」で取組の様子や情報を継続して発信し，協力と連携を深めた。

毎月の保健掲示物は，「いきいきタイム」で学んだ内容と関連させた。５月は「けんこうかざぐるま」について掲示し子供たちが実際にどのかざぐるまが元気に回るかを体感できるようにした（資料９）。

【資料９　自分の健康を体感できる「けんこうかざぐるま」】

4　これまでをふり返って

12月に行った実態調査では，朝ご飯の内容が単品から２～３品に変わった子供が増えていたり，低学年を中心に就寝時刻が早くなった子供が増えていたりする姿がみられた。また，冬休みの「いきいきカレンダー」では，どの学年でも多くの子供が「けんこうかざぐるま」の４つの羽の目標を意識して取り組むことができていた（資料10）。保護者からも子供の主体的な姿に驚きや成長を感じている声が届いた（資料11）。



【資料10　冬休みの「けんこうかざぐるま」と感想】

○ 時々目標を忘れかけても「いきいきカレンダーは？」と聞くと「あっそうだった！」と思い出し気を付けていました。（1年生保護者）
○ 出かけることが多くリズムが乱れそうになりましたが，自分で決めたのでしっかり朝起きることができていました。バランスのよいかざぐるまができて，すごいなあと思います。（3年生保護者）
○4つの観点からバランよく体調を整えることができたと思います。（4年生保護者）
○ いきいきカレンダーのおかげで規則正しい生活がおくれたと思います。自分から努力する姿が見られ，これからも続けてくれると嬉しいです。（5年生保護者）

【資料11　保護者からのコメント】

今，保健室には「けんこうかざぐるま」といつでも自分の体調を４つの羽からチェックできるシートを置いている。必要な時にチェックして自分にあてはまる「けんこうかさぐるま」を回し，体や心と向き合っている子供の姿を見ながら，この取組の成果を少しずつ感じているところである。

【写真　今日も元気に回るよ】

これから子供たちは，受検や就職など様々なライフステージを歩んでいくことになる。その時に，いつも自分の体と心と向き合う気持ちを大切にして，たくましく歩み成長していくことを願う。これから先も時々いきいきファイルを開いてみたり，「けんこうかざぐるま」を思い出し４つの羽を意識したりしながら過ごす，そんな姿を見守っていきたい。

【参考文献等】
1) 小澤治夫「風車理論」早寝早起き朝ご飯全国協議会資料
2) 児童心理６月号「生活習慣・生活リズム」金子書房，2015年
3) 篠原希・長縄史子「子どものアンガーマネジメント」合同出版，2015年

生き方部

人の生き方に学び，自分の生き方をつくる領域「生き方」

1　「生き方」の必要性

経済界や市民社会からは，今後訪れるであろう厳しい挑戦の時代を生き抜くための人材を育てることが要求されている。それは，子供たちを取り巻く社会変化は著しく，子供たちが将来どのような社会の中で生きていくのかは定かではないことを示していると言える。また，昨今では，学校教育の中で教科等の学習を十分学んできたはずの若者が，社会の中で挫折し，自分の存在意義を見出せなくなっているということや人間関係をうまく構築できないことで，社会に適応できないという社会問題も起こりつつある。

これらの問題は，自分の「生き方」がわからくなってしまうような社会の中で，いかにして自分の可能性や果たすべき役割を見出させるのかという教育に対する重要な課題を与えているものであると言える。このような時代を生きる子供たちに求められているのは，将来の社会に適応し生き抜くだけでなく，積極的に自らの手で新たな社会を創造していける資質・能力の育成をもとにした人格形成であると考える。そのためには，どのような学習が必要とされるのだろうか。

京都大学の石井英真氏は，「今求められる学力と学びとは」の中で「学習の枠づけ自体を学習者たちが決定・再構成する学習」「学習の主導権を子供自身に委ね，活動的で共同的な学びのプロセスを組織する」ことが必要であると述べている。すなわち，現実的あるいは切実な目標や課題を子供自らが見出し，それらを実現または解決する過程を通して個人の自己形成を目指すことが重要なのである。

そこで，領域「生き方」は「わたしはどう生きたいか」という自己の生き方に対する「問い」と「他者とともにどう生きたいか」という人や社会とのかかわりの中で生きる生き方への「問い」を重視し，学習者たちの強い求めに応じて展開される学習を進める。そこでは，通常の教科等の中では経験し得ない，人の「生き方」との出合いによって，自分の可能性や存在意義を十分に見出すことができるような学びが展開されていく。その中で，自分はどのような人間か，どのように生きていきたいか求め続けながら，自己形成を行っていく。そうすることで，「生き方」の学習は，子供自身が学習の舵取りを行う自律的学習であり，その中で自己を向上させ成長させる学習へと発展していく。

つまり，領域「生き方」は，６領域の中で，自己形成を通した人格形成につながる学びを実現する上で，必要とされるものである。

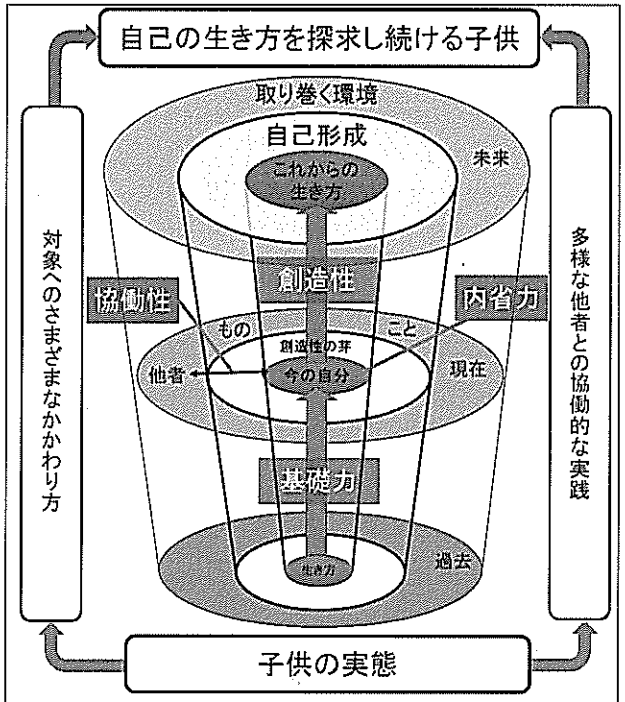
2　「生き方」で担うもの

(1) 資質・能力から見える内容の背景

領域「生き方」は，他者の生き方（対象へのかかわり方）と出合い，他者の自分とは異なる見方や考え方，行い方を学ぶことで「自分」を意識し，「自分自身をどのようにとらえているか」「自分はどのように生きたいか」を探求する学びである。そこには，自然，社会，文化とのかかわり合いや多様な他者がもつ価値と自分の価値とのかかわり合いがある。

そのため，「生き方」は，他の５つの領域「表現」「言語文化」「自然探究」「社会共創」「健康」と，「マイタイム」のすべてとかかわりがある領域であると考えている。それは，人間の「生き方」とは，総合的な学びの中で生み出されるからである。すなわち，各領域で養われた資質・能力を発揮させながら「生き方」の学習は総合的且つ横断的に展開されていくのである。

未来社会を創造する主体としての４つの資質・能力の関係については，次の通りである。①価値あるものについて認識してきたことや，今までの生活や学習の中で身に付けた「基礎力」を学びの基盤とすること，②過去から現在の自分を見つめる「内省力」を培うこと，③他者とのかかわりにおいて必要な「協働性」を発揮すること，④「内省力」による自己への眼差しと「協働性」による他者とのかかわりの中で「創造性の芽」が育まれることである（図１）。



【図１　「生き方」における資質・能力と目標構造図】

(2) 資質・能力について

領域「生き方」において育てたい４つの資質・能力は次の通りである。

基礎力とは，他者の生き方に対して関心や追求意欲をもったり，対象のよさに気付きそれを認めたりできることである。具体的には，他者が『ひと・もの・こと』にどのようにかかわりをもっているかに関心をもち，そのかかわり方のよさや周りへの影響，新たな価値に気付いていくことである。

内省力とは，自分の能力や行為について真偽・善悪を見極め自分の考えを振り返り，今後に向けて自分の意志をもつことである。具体的には，「自分が自分であって大丈夫だと感じる」「自分自身を適切に評価できる」「自分で自分のことを決められる」「自分が『望ましい』,『よい』と信じた見方・考え方を選択できる」ということである。

協働性とは，他者の行為や思いの背後にある見方・考え方を理解して合意形成を図り，できることを決めていくことである。具体的には，表面上の賛否や互いの利害を主張するのではなく，他者の行為や思いに対して，自分の見方・考え方との類似点や相違点を考え，ともに納得できる部分を見つけていくことである。

創造性とは，他者と共に誰かの役に立つことを実践しようとする態度や，なりたい自分の姿をイメージすることである。これは，他者の言う通りに従うということや他者からの評価を気にして自分を変えようとすることではない。自分が何をしたいかという自分の考えや価値に従って行動したり選んだりすることができるようになることを意味する。つまり，「自分に自信をもって自分のもつ無限の可能性に向かって行動しよう」と生き方を探求することへつながるものである。

【表1　領域「生き方」の資質・能力表】

上位概念	下位概念	低学年	中学年	高学年
創造性	実践的態度	他者とともに自分や身近な人の役に立つことをしようとする。	他者とともに身近な人，または地域社会のためにできることは何か考え，行動しようとする。	他者とともに自分を取り巻く人々や未来社会のためにできることを具体的に考え，行動しようとする。
	自己形成	これから伸ばしていきたい自分のよさや可能性を見つけようとする。	理想とする自分をイメージし，それに近づくための努力をしようとする。	理想を思い描き，自己実現するために大切な生き方を構築しようとする。
協働性	他者を尊重する態度	友達の気持ちや考えを聴いて理解するとともに，自分の意見や気持ちを伝える。	他者の気持ちや考えを理解し，自分と異なる考えにも耳を傾け，共感するとともに，自分の考えや気持ちも伝える。	他者の思いや考えを十分に理解し，自分と異なる考えも尊重するとともに，自分の考えや望みを相手にわかるように伝える。
	相互理解	他者のよさを見つける。	他者が気付いていないよさを見つけ合う。	自他の成長やよさを見つけ互いの可能性を広げる。
内省力	自己への見方・考え方	自分のよさを受け入れ，なりたい自分への思いと行動を比べる。	他者とのかかわりの中で，自分では気付いていないよさを知り，自分の長所，短所を受け入れ，自分の特徴であるととらえる。	自分のよい面や悪い面もすべてを受け入れ，自分の短所も認めたうえで，自分に対して正直に変えていく努力をしようとする。
	意志決定	自分や仲間のことを考え，自分が「より強くしたい」と感じた方法を選択する。	自分や仲間，地域社会への自分の思いを大切にして「よりよい」と感じた見方・考え方を選択する。	今後の自分や他者，社会のことを考え，「より望ましい」と信じた見方・考え方を選択する。
基礎力	生き方への関心・意欲	他者の生き方へのかかわりに関心をもつ。	他者の生き方のかかわりについて追求意欲をもつ。	他者の生き方を通して，自分の生き方を広げる。
	探究力	対象への気付きから，思いや願いをもち，諸感覚を使って情報を集める。	対象への疑問やズレから問題意識をもち，具体的な活動を通して情報を集め取捨選択する。	自ら対象に働きかけ，解決したい問題を見つけ，具体的な活動を通して情報を集め分類・整理する。
	価値認識	対象の存在や周囲に与える影響やよさに気付く。	対象の自分にとっての意味を理解するとともに，人人に与える影響をとらえる。	対象の普遍的な真理，善さ，美しさをとらえ，時代に合った新たな基準を生み出そうとする。

3　目標と内容

(1) 目標について

自己の生き方を探求し続ける力を養うために，対象へのかかわり方を考え，多様な他者と協働的に実践する活動を通して，未来社会を創造していく自己の在り方を考えることができるようにする。

(2) 内容について

①　内容設定について

【表2　平成25，26年度に実践した題材一覧】

学年	題　材　名	対象
一年	よみきかせで　つながろう	くらし
	たのしかったよ　これからも　よろしくね	くらし
二年	いのち　きらきらⅠ　～かぞく　大すき～	いのち
	いのち　きらきらⅡ　～友だち　大すき　自分　大すき～	いのち
	みんな　おいでよ　にしこうえん	くらし
	この　はしの　むこうに	いのち
	ピクトグラムたんていだん	くらし
三年	せんとうのよさについて調べよう	くらし
	わたしのけんこうメニューをつくろう	くらし
	ミュージカルをつくろう　～げき団あらつ～	なかま
	あたたかい生活をつくろう　～サザエさんと昭和～	くらし
四年	みんなでおどれば心は一つ！	なかま
	ねことわたしの幸せなくらし	いのち
	日本っていいな	みらい
五年	わたしたちの附属福岡小プロジェクト	みらい
	附属オリジナル弁当プロジェクト	くらし
	いのちを守る大切さ	いのち
六年	伝えよう，広げよう！黒田官兵衛の魅力	みらい
	つながる　いのち①（臓器提供意思表示カードから）	いのち
	つながる　いのち②（わたしたちと献血）	いのち

以上の実践から，次のことが明らかになった。

○　基本的な対象は，時間軸の視点から「いのち」「みらい」，空間軸の視点から「くらし」「なかま」という整理ができる４点が適当である。

○　低学年では，自分自身のことを知ることを大切にするため，身近な「くらし」を内容として扱うことが大切である。

○　中学年では，探求していく過程で，体験的活動を通じ他者と協働して問題解決を図ることができるため，「なかま」が重要になる。

○　高学年では，「みらい」を対象にして，キャリア教育の視点を内容に取り入れる。

○　高学年では，「いのち」を対象として取り扱う内容の中に，生命倫理に関係する現代的課題も大切になる。

●　内容構成や指導原理などの系統性を図った年間指導計画を作成することができなかった。

②　内容構成について

領域「生き方」では，これまで，人間が生きることを「人とともに生きる，自然とともに生きる，集団や社会の中で生きる，集団や社会によってつくられる文化を継承して生きる」と考えた。さらに，未来社会を生きるという視点から，「人，自然，集団や社会」とどのようにかかわるか，「文化」をどのように継承するかが大切になると考えた。

そのことを踏まえ，人間が生きることを「人や自然の『生命』の尊さを実感し，自分のこれからの『生涯』を見つめ，人や自然，社会とともに調和的に『生活』していく生き方を『人々とともに』探求し続けていくこと」と考える。そこで，これまでの実践の成果も踏まえ，学習対象を「いのち」「みらい」「くらし」「なかま」とし，それらとどのようにかかわりながら生きていくかということを学習内容とする。そこで，「Ａ自分といのち」「Ｂ自分とみらい」「Ｃ自分とくらし」「Ｄ自分となかま」から内容を構成する（表３）。

【表3　領域「生き方」の内容の観点】

内　容	内　容　の　観　点
A 自分といのち	**生命尊重・自然愛護を大切にして** ・　生命の始まりに対する神秘性や偶然性 ・　時間的，空間的，精神的な生命観 （連続性，関係性，精神性） ・　必ず死がくるという有限性，不可逆性 ・　平等性，尊厳性のある生命 （生命はすべての生き物に一つだけ与えられたかけがえのないもの）
B 自分とみらい	**生涯発達を大切にして** ・　心や身体の構造や機能がかかわり合って変化していく人間としての成長 ・　社会の中での自分の役割を自覚したり果たしたりする人間としての成長・成熟 ・　自分が自分として自分らしく生きる自己実現の道
C 自分とくらし	**生活者，市民意識を大切にして** ・　生活を充実させる遊びや余暇 ・　学校または家や地域での生活 ・　自分が属する集団や社会の目的 ・　社会への貢献に対する認識 ・　地域や社会のかかわりと責任の自覚 ・　地域や社会のための実践 ・　集団や社会を持続させる取組
D 自分となかま	**人間関係を大切にして** ・　自分の特徴や他者の特徴 ・　自分も他者も自立した人間という認識 ・　人間は社会的存在者であるということ ・　助け合い ・　思いやり，親切 ・　感謝，礼儀

4　年間指導計画作成の考え方

(1) 教材化の工夫

教材化については，子供が生き方への問題解決に取り組み，その過程において自己の生き方を探求していけるようにしていくことが大切である。そのためには，学習で取り上げようとする教材が，創造主体としての資質・能力と教材との関係が明らかでなければならない。特に「生き方」で重視する「内省力」「協働性」「創造性」の３つの資質・能力と最も関係の深い３つの教材化の視点をもって題材設定を行っていく必要があると考える。以下の３つの視点を大切にした教材化を行うことで，子供の思いや願いから，子供たちが自ら課題を見出し，他者と協働したり，多様な見方・考え方にふれたりしながら問題解決に取り組むことができると考える。

○　子供が対象と出合うことで，自分自身を見つめる機会を与えるものか。　（内省力とかかわって）

○　子供が対象に触れることで，仲間や他者とのかかわりが生まれるか。　（協働性とかかわって）

○　子供にとって対象が，これからの生き方につながる価値あるものか。　（創造性とかかわって）

(2) 題材配列

題材配列については，題材に１つまたは複数の内容を取り扱い，全学年において「Ａ自分といのち」「Ｂ自分とみらい」「Ｃ自分とくらし」「Ｄ自分となかま」をすべて扱う。ただし，子供の発達段階に応じて，年間を通した取り扱いに軽重をつける。

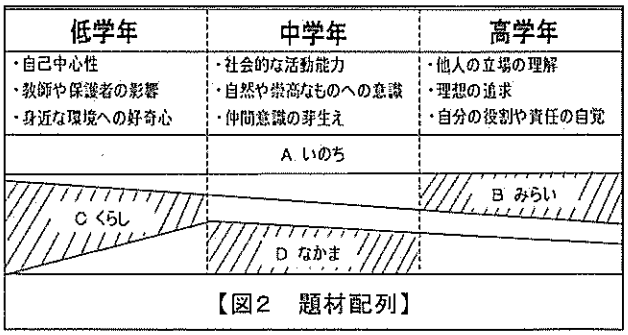
「Ａ自分といのち」は，全学年において同程度扱う。動植物を含め生命をもつものを尊重する資質・能力は全学年で大切にしたい。ただし高学年では，学習問題として生命倫理にかかわる現代的な課題を取り扱うこともある。

低学年は自己中心性が残る時期ではあるものの，身近な環境に興味・関心をもったり友達と一緒に楽しく活動したりして自他のよさに気付くようになる。そこで，「Ｃ自分とくらし」を重視する。低学年の発達段階から，自分とのかかわりが強い教師や保護者との関係をもとに友達と一緒に活動することの楽しさやよさを実感させていきたい。

中学年は自他の理解が一層進み，ギャングエイジとも言われ，仲間意識が強固になっていく時期である。そのことから，「Ｄ自分となかま」を特に重視していく必要がある。

高学年は，一人一人のめざめが起こり，自分の存在価値への問いをもつ時期である。そこで，「Ｂ自分とみらい」を重視する。

ただし，題材の中核となる内容が４つの内容のいずれであっても，題材の終末段階には学習を通して「自分がどう生きるか」を考えるようにしていく（図２）。



【図２　題材配列】

(3) 対象となる他者の生き方

領域「生き方」では，多様な他者と深くかかわりながら学習を進めていく。その中でも，それぞれの学習内容について，多様な他者が次のようなかかわり方をしていることを重視していく。

【表５　内容構成と取り上げる他者の生き方】

Ａ　自分といのち	Ｂ　自分とみらい
他者の「いのち」に対するかかわり 他者 ○守る ○慈む ○育てる ○慈しむ ○つなぐ ○寄り添う いのち 人や動植物，自然にかかわる人の生き方	他者の「みらい」に対するかかわり 他者 ○守る ○届く ○拓く ○創る みらい 目標や課題に向けて努力する人の生き方
Ｃ　自分とくらし	**Ｄ　自分となかま**
他者の「くらし」に対するかかわり 他者 ○楽しむ ○結ぶ ○伝える ○暮らす くらし よりよい生活を営みを実現する人の生き方	他者の「なかま」に対するかかわり 他者 ○遊ぶ ○助ける ○支える ○守る なかま 友達や仲間との関係を大切にする人の生き方

(4) 指導上の留意点

６つの領域の中で，中心的な役割を担う学習として，「生き方」においては次の４つのことに留意する。

①　内容は，必ずしも１題材に１つの内容と限定せず，設定することができるようにする。子供の実態や意識の変容，問題解決の方向性などを鑑みて，複数の学習内容を弾力的に取り扱えるようにする。

②　本校の特質に基づき，帰国子女学級の生き方学習については，子供たちの生活経験を重視した独自の学習を行う。その際は海外での生活経験が今後の生き方への自信になるようにする。

③　積極的に特別支援学級の生活単元学習との関連を図り，交流学習を進めることで，自己の見方や考え方を双方が広げられるように工夫して行う。

④　他領域の学びが十分に生かされるように，子供の状況に照らして，他領域の学習内容を検討しながら総合的且つ横断的に進められるようにする。

【参考文献等】

1) 石井英真『今求められる学力と学びとは
－コンピテンシー/ベースのカリキュラムの光と影－』日本標準社，2015年

2) 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会
『カリキュラム・イノベーション－新しい学びの創造に向けて－』東京大学出版会，2015年

指導事例1　第1学年　題材　あらつパークで　たのしく　あそぼう

指導者　　齋藤　　淳

1　資質・能力

◎　よりよい遊びにするために，試行錯誤して主体的に遊びをつくることができる。（創造性：実践的態度）

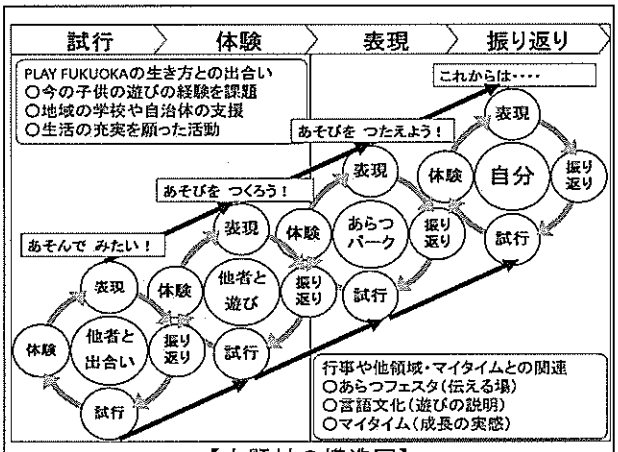
◎　友達との楽しいかかわりをするために大切なことを考え行動しようとしている。　（協働性：相互理解）

○　楽しい豊かな生活づくりのために大切なことを考え行動することができる。　（内省力：意志決定）

○　様々な遊びに目を向けて，驚きや感動をもつことができる。　（基礎力：探究力）

2　題材の考え方

本題材では，新しい遊びを発見し，友達と楽しむ中で，自分も友達も楽しい気持ちになるために，大切なことについて考え，友達とともに主体的に実践することをねらいとしている（C自分とくらし）。具体的には，①様々な遊びに目を向け，みずみずしい心で，驚きや感動をもつこと，②遊びを通した「ほんものの楽しさ」への気付きから，楽しく明るい生活の仕方について考えること，③主体的に遊びをつくりかえていく中で，創造的に活動することなどである。そこで，本題材では，遊ぶことが難しくなっている子供たちの現状を課題とし，遊びを通して，子供たちの生活の充実を願うPLAY FUKUOKA（写真はGTと表記）の方々の生き方を取り上げる。PLAY FUKUOKAは2004年に誕生し，子供が本来もっている「遊び心」を発揮して，豊かに遊べる環境づくりを支援している。主な活動は，遊び場づくりに取り組む人や乳幼児親子を対象とした外遊び講座やワークショップの開催，放課後の小学校の校庭や体育館を活用した「放課後等の遊び場づくり事業（通称わいわい広場）」の開催，子供の遊び心を引き出す「プレイワーカー」の育成や派遣などでプレイパークだけにとどまらない活動は広がり続けている。このような生き方から，自分のよさや可能性に気付き，主体的に学んでいく姿が生み出されると考える。



【本題材の構造図】

3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～5/18時

たくさんの友達とたくさんの方法で遊びたいという自分たちの意欲に気付くことができる。

(1) 普段の「遊び」について話し合う。

(2) PLAY FUKUOKAの方々と出会い，遊びへの「ねがい」について話し合う。

【資料1　A児の感想】

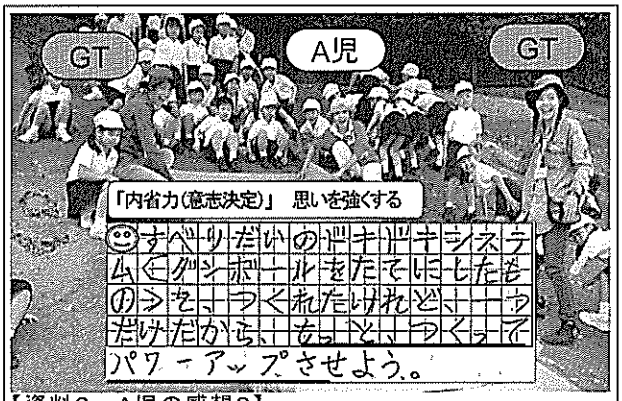
導入段階（試行）では，友達と遊びたいという自分たちの願いをもとに，これからの学習の見通しをもった。そのときのA児の考えが資料1である。

考察1

3つの価値ある生き方をもつPLAY FUKUOKAの方々との出会いは，子供たちの「基礎力（生き方への関心）」をもたせる上で有効であった。その根拠は資料1にあるように，A児が次時への期待をもっている記述からである。

展開前半段階のねらい：6～12/18時

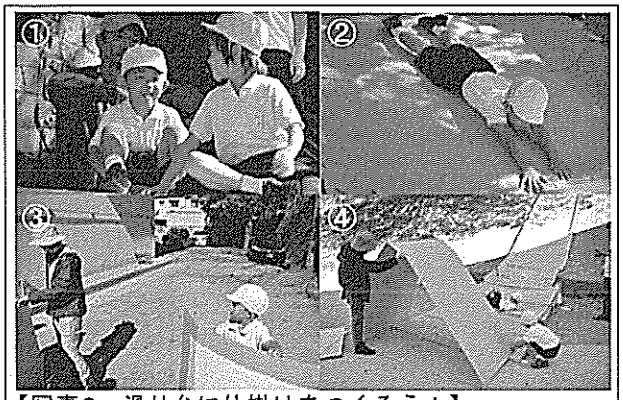
いろいろな遊びを体験することを通して，自分たちの遊びのよさを自覚することができる。



【資料2　A児の感想2】

(1) 自分のしてみたい「遊び」を試す。

(2)「遊び」をつくりかえる。



【写真2　滑り台に仕掛けをつくろう！】

展開前半段階（体験）では，自分のしてみたい遊びへの「願い」をもとにプレイパークをつくりかえるようにした。そのときにA児はたくさんの「遊び」の中から滑り台の遊びに浸っていたが，その中で，様々な仕掛けをつくることを通して「工夫することが楽しい」と考えている（資料２）。

考察2

４段階のサイクル活動が「協働性（他者を尊重する態度）」をもたせる上で有効に働いたと言える。それは試行錯誤の中で，願いをもった子供たちが意欲的にかかわる姿が見られたからである。その根拠は資料２にあるように，一人遊びが好きだったA児が友達やPLAY FUKUOKAの方方とのかかわりの中で，遊びを工夫している自分の気付きに目を向けることができているからである。

展開後半段階のねらい：13～16/18時

自分たちの遊びを一緒に友達と行ったり，自分たちの遊びを他者に表現したりすることができる。

(1) 自分たちの「遊び」のよさについて話し合う。

【資料３　A児の感想３】

(2) 自分たちの「遊び」を伝える。

【写真3　「おばけやしきめいろ」は楽しいよ！】

展開後半段階（表現）では，あらつフェスタ（オープンキャンパス）に向けて，自分たちの遊びを表現する姿が見られた。特にA児は，自分の遊びが小さい子供たちにも適しているのか見つめ直し，今までの学習の中での遊びを生かして「おばけやしきめいろ」をつくって自分たちの遊びを説明していた（資料３）。

考察3

季節や学校行事，他領域と関連した題材設定は，子供たちの生き生きとした「創造性（実践力）」を発揮する上において有効であったと考える。それは，A児たちが「おばけやしきめいろ」を開発したように，自分たちで遊びをつくりだし，意欲的に表現する姿が見られたからである。

終末段階のねらい：17～18/18時

友達と一緒に遊びを行ったり，自分たちの遊びを他者に表現したりしたことを振り返ることができる。

ぼくはあらつパークをして人にやさしくすることをがんばりました。やさしくできるとみんなたのしくなるからです。それとプレイフクオカの人たちとあそんだら，ともだちとあそぶことが大すきになりました。これからもおしえてもらったことを大せつにしていきたいです。

【資料４　A児の感想４】

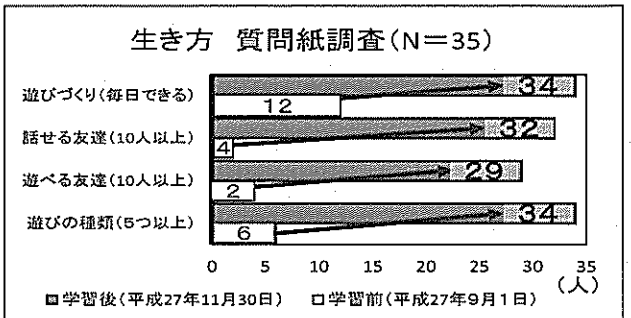
終末段階（振り返り）では，友達のつくった様々な遊びのよさを実感し，楽しかったことを話し合うようにした。そのときに，A児は友達と遊ぶことが好きになった自分や優しくできるようになった自分を見つけることができた（資料４）。

考察4

「C自分とくらし」に重点をおいた題材構成は，子供たちの「協働性（相互理解）」を高める上において有効であった。その根拠は子供たちの遊びの中から人とのかかわりの広がりが見られたからである。特にA児の記述の変容から見取ることができる。

全体考察

本題材は子供たちの豊かな生活づくりを行う上で，有効であったと判断できる。それは，以下の質問紙調査（項目は本題材におけるルーブリック）の４つの項目における子供たちの変容が見られるからである。（項目は下から「基礎力」「内省力」「協働性」「創造性」に対応）また，４つの資質・能力に関係する項目の変容が見られるからである（資料５）。



【資料５　全体の結果】

指導事例2　第6学年　題材　一人ひとりの生

指導者　鐘江　貴子

1　資質・能力

◎　自分を取り巻く人の思いや，一人一人がただ１つの生命をもち生きていることを尊重して，自分の見方・考え方を広げ深めることができる。

（創造性：自己形成）

○　最期の時をどう生きるかについて根拠をもとに話し合ったり「生きるとは何か」について多様な他者からの回答をもとに他者の考えを尊重したりしながら，自分の考えを伝えることができる。

（協働性：他者を尊重する態度）

◎　自分の存在や未来をどう生きるかについて，自分がよいと信じた見方・考え方を選択する。

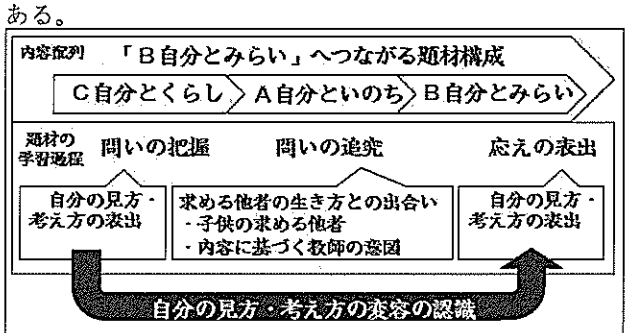
（内省力：意志決定）

○　「生きるとは何か」について自分の見方・考え方を広げ深めようとすることができる。

（基礎力：生き方への関心・意欲）

2　題材の考え方

本題材では，「生きるとは何か」について自分の応えを見つけるために，生命の誕生や生命の最期にかかわる人の話を聞いたり，終末医療に対する友達の考えや「生きる」に対する多様な他者の考えを尋ねたりすることで，自分の見方・考え方を広げることをねらいとしている。そのためには，考えを聞きたい他者の話を聞き，多様な他者の考えに触れながら自分の見方・考え方の変容を知ることが大切だと考える。そこで，次のことを大切にして題材を構成した。①内容配列の工夫である。自分を意識し存在価値を考えたり中学進学に対して期待や不安を抱いたりする高学年期であることから，「Ｃ自分とくらし」や「Ａ自分といのち」についての追求から「Ｂ自分とみらい」へつながるように内容を配列する。②他者の生き方との出合わせ方の工夫である。子供が求める他者との出会いや情報収集の場を設定する。また，内容に基づく教師の意図による他者との出会いや情報収集の場を設定することである。

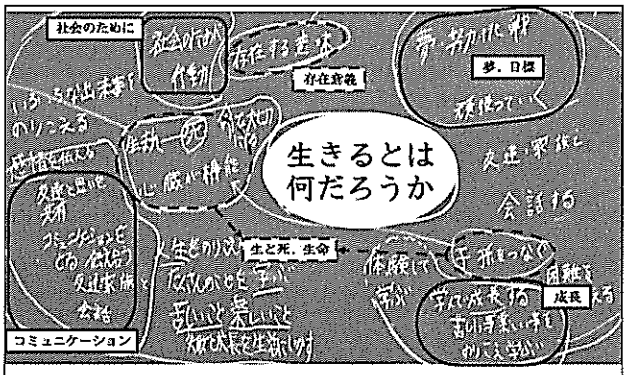


【本題材の構造図】

3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～3/13時

学習で考えたいテーマを決め，決めたテーマに対する自分の見方・考え方を表出することができる。



【資料1　考えの表出と分類整理】

導入段階では，日頃深く考えてはいないけれど，考えてみるとすぐには明確な解答が見つからないテーマについて考えを伝え合う「哲学カフェ」について知り，「生きるとは何か」というテーマで話し合うことを決めた。各自の考えを記述し，全体の場で出し合って５つの項目に分類・整理した（資料１）。しかし，「応えだと決めるには早い」という意見から，「『生きるとは何か』について応えを見つけよう」という問いを設定した。各自で相手を探し取材をすることで，全項目について様々な方の考えを聞く，という追究方法を話し合った。さらに，問いに対する１つの答えと言える「生まれてから死ぬまで」に関して，「生命の誕生と死」に深く携わる方の意見を聞くという方針が決定した。

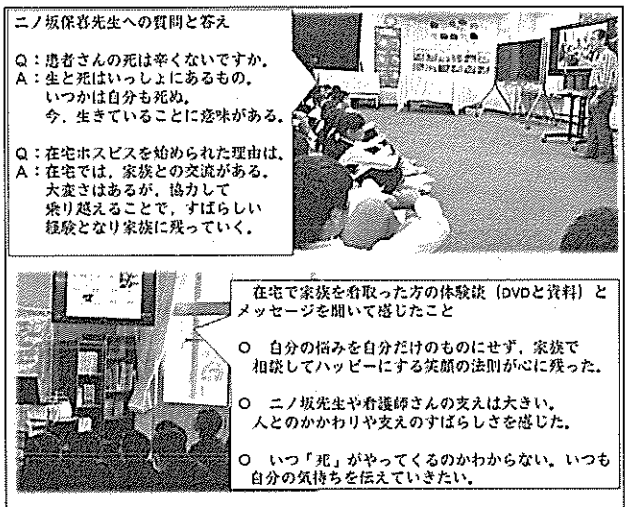
考察1

問題意識をもたせるために，テーマを決めさせたり考えを分類させたりしたことは有効であった。その根拠は，追究意欲が高まり，一度出した応えに満足することなく，自分の見方・考え方を広げようと（基礎力）追究方法についての話し合いが行われたからである。

展開段階のねらい：4～10/13時

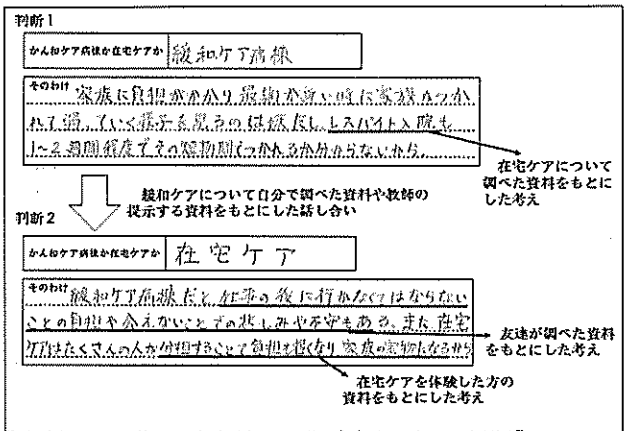
生命の誕生や最期に携わる人の思いを追求し，最期に対する見方・考え方を表出することができる。

(1)　生命の誕生や生命の最期にかかわる（かかわった）方の取り組みや思いについて，取材ＶＴＲを見たり話を聞いたりしてその生き方を調べる。



【資料2　人生の最期にかかわる方との出会いと子供の感想】

(2) 出会った方の資料や自分で調べた資料をもとに，最期の時をどこで過ごすか，最期の時に何を優先して生きていくか話し合う。



【資料3　最期の時をどこで過ごすかA児の判断】

展開段階では，「生命」に携わる方と出会った。まず，助産師の方への取材ＤＶＤの視聴では，「産んでもらった命を大切に生きたい」という感想が出た。また，誕生することなく亡くなる場合もあるという話に驚き，「生命の誕生の場面なのに死もある。死はいつやってくるかわからない」という感想が出た。次に，在宅ホスピスに取り組んでいる医師，二ノ坂保喜先生の話を聞いた。「患者さんの死は辛くないのだろうか」という思いから質問が出た（資料２）。さらに，在宅で家族を看取った方の体験談を聴いた。子供たちは，家族といられることや自分の時間があることなど，日常の大切さを感じていた。また，家族の絆の深さを感じ，自分が家族のためにできることを考えていた（資料２）。ここで，もっと緩和ケアについて知りたいという思いが出され調べを続けた。そして，自分が最期の時にどこで過ごすか判断をした（資料３）。判断の際，何を大切にしたかを話し合うと，ほとんどの子供が「家族」であり，最期の時に限らないという意見が出た。そこで，「家族を大切にする」ということは「生きる」上で前提にしようと全体で共通理解した。

考察2

子供の求める他者や教師が意図する他者の生き方と出合わせたことは，最期について考えたり判断したりすることに有効であった。その根拠は，他者の生き方や調べたことを根拠に意見を述べたり（創造性），友達の考えや資料を取り入れながら新たな自分の考えをつくったり（協働性）していたからである。

終末段階のねらい：11～13/13時

多様な他者から情報収集をして，問いに対する自分なりの応えを出すことができる。

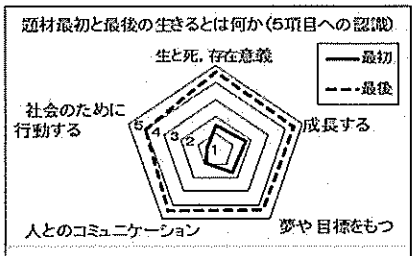
【資料4　収集した多様な応えを知る】

終末段階では，各自が取材した多様な他者の応えを掲示して見合った。Ａ児は，資料４にある感想を述べたあと「生きるとは，最期の時まで人と助け合いながら自分の決めた目標を達成することだと考える」と，自分の応えを発表した。

考察3

子供が自ら取材をしたい相手を探し，多様な他者の考えをもとに自分なりの応えを導き出すことは有効であった。その根拠は，多様な応えを認めた上で自分の応えを出していた（内省力）からである。

全体考察



【資料５　全体の結果】

考察２や考察３から，最期の時を考えた上で，問いの応えを聞きたい相手に取材し自分の応えを出させたことは，今後どう生きるかについて見方・考え方を広げ深める上で有効であったと判断できる。これは，資料５にあるように見方・考え方の広がりからも言える。しかし，見方・考え方の広がりが小さい子供もいた。自分の見方・考え方を広げる意義を考える場を設定していく必要がある。

指導事例3　帰国子女学級　題材　エンジョイ！トラディショナルアート

指導者　菊竹　一平　岡﨑　教昭　杉本　克如

1　資質・能力

◎　互いの滞在国の伝統文化のよさに気付き，それらを大切にしながら生活をしていこうとする。

（創造性：自己形成）

○　互いが調べたり体験したりして感じた伝統文化に対する思いを大切にしながら，あらつフェスタでの発表内容を協力してつくっている。

（協働性：他者を尊重する態度）

○　様々な国の伝統文化を知ることで，今生活している日本や自分の滞在国のよさを感じることができる。

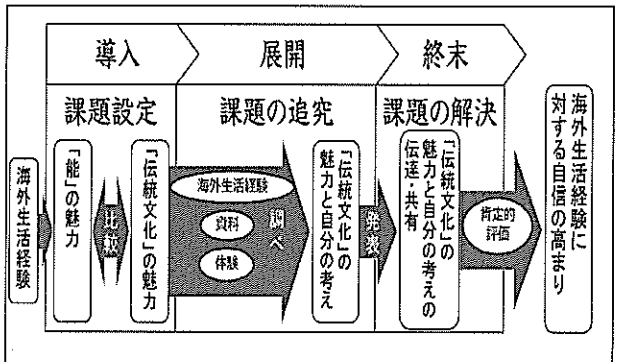
（内省力：自己への見方・考え方）

○　滞在国の伝統芸能のよさを伝えるために，魅力について調べ，集めた情報の中から必要なものを選んで発表の構成に生かしている。　（基礎力：探究力）

2　題材の考え方

本題材では，自分の滞在国の伝統文化のよさについて調べ，日本や友達の滞在国と比較しながら，共通点や差異点を見つけることを通して，今生活している日本や自分が滞在していた国のよさを感じることができることをねらいとしている。

そのために，まず，大濠公園能楽堂に行き，日本の伝統文化の一つである能の魅力を知ることを通して，自分の滞在国にも魅力ある伝統文化があるかどうか調べたいという意欲をもたせる。次に，滞在国の伝統文化に詳しいＧＴから世界の伝統文化について直接話を聴いたり，滞在国の伝統文化について調べたりして，自分の滞在国の伝統文化の魅力について情報を集め，自分の考えも交えながらまとめる活動を設定する。そして，調べてまとめたことをもとにして，滞在国ごとにグループをつくって，参会者の立場を意識した発表内容について考え，あらつフェスタにおいて世界の伝統文化の魅力を伝える場を設定することにより，他者からの評価を受け，自分の海外生活経験に自信をもつことができるようにする。



【本題材の構造図】

3　学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～4/20時

能の魅力を感じ取り，自分の滞在国の伝統文化について調べる見通しをもつことができる。

(1) 大濠公園能楽堂を見学し，能の魅力を見つける。

【資料１　体験を通して能のよさにふれる姿】

(2) 能が今も親しまれている訳について考えをまとめるとともに，自分の滞在国にある伝統文化についての思いや経験について話し合う。

☆みなさんの滞在国にも「能」のような伝統芸能はあるのでしょうか。

私達の国アメリカでは、オペラやミュージカルがあります。ミュージカルは特に大都市のほうで行われています。オペラは夜の時間によく行われています。ミュージカルやオペラは能と同じく、音楽とおどりでおこなわれます。

【資料２　Ａ児の考えをまとめたプリント】

導入段階では，大濠公園能楽堂を見学し，能の魅力について調べ，滞在国の伝統文化について話し合った（資料１）。そのときにＡ児は，能とミュージカルの共通する魅力は，音楽と踊りで構成されていることだととらえた（資料２）。

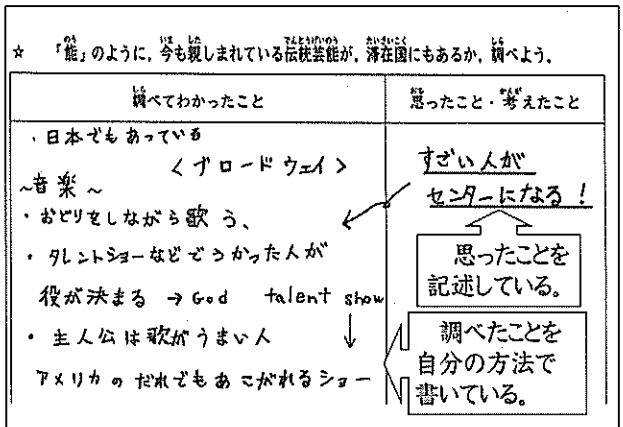
考察１

能の魅力について調べる活動は，滞在国の伝統文化について追究することへの興味・関心を高める上で有効であった。その根拠は能の魅力と自分の滞在国の伝統文化の魅力を比較することで，共通点や差異点を見出し，自分の滞在国の伝統文化について詳しく調べて魅力を伝えたいという学習の見通しをもった子供の姿が見られたからである（基礎力）。

展開段階のねらい：5～10/20時

滞在国の伝統文化の魅力について詳しく調べ，伝える方法について考えることができる。

(1) 自分の滞在国の伝統文化の魅力について調べたり，体験を通してよさを感じ取ったりする。



【資料３　調べたことを書いているＡ児のプリント】

(2) 自分たちの滞在国の伝統文化の魅力について調べてまとめたことを伝え合い，あらつフェスタで伝える方法や内容について話し合う。

【資料４　発表についてのアドバイスを受ける】

展開段階では，滞在国の文化に詳しいＧＴを招いて話を聴いたり，インターネットなどの資料をもとにして滞在国の伝統文化について調べたりした（資料３）。そして，調べたことを伝え合った。そのときにＡ児を含めたアメリカチームは，ミュージカルの魅力を伝えるためには，プレゼンだけではなく，実際に踊りを見せることも必要だと考えた（資料４）。

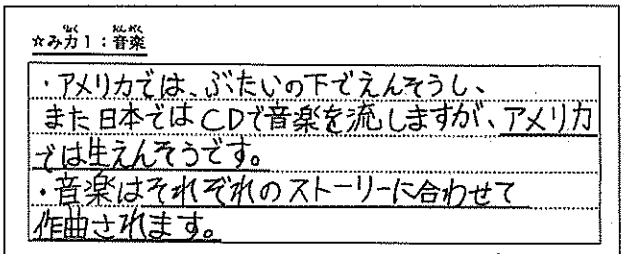
考察2

滞在国の伝統文化について調べたことを伝え合い，発表内容や方法について話し合う活動を設定したことは，滞在国の伝統文化の魅力を伝えるためのよりよい方法を見出す上で有効であった。その根拠は，魅力を具体的な体験を通して伝える方がよいことに気付いた姿が見られたからである（内省力）。

終末段階のねらい：11～20/20時

世界の伝統文化の魅力について多くの人に伝え，自分の海外生活経験に自信をもつことができる。

(1) あらつフェスタの準備をする。



【資料５　視点に沿って魅力を整理するプリント】

(2) あらつフェスタで伝統文化の魅力を伝える。

【資料６　ミュージカルのよさをダンスで発表】

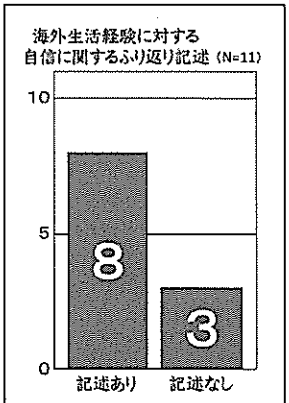
終末段階では，あらつフェスタで調べたことの発表をした。そのときにＡ児は，実際にダンスを見せ，参会者にも呼びかけて楽しさを共有することで，ミュージカルの魅力を伝えることができた（資料６）。

考察3

あらつフェスタで伝統文化の魅力を伝えたことは，海外生活経験への自信をもたせる上で有効であった。その根拠は，ダンスを通して多くの人と魅力を共有することができ，伝えたいことを伝えられたと感じることができたからである（協働性・創造性）。

全体考察

滞在国の伝統文化について調べ，その魅力を伝える本題材は，海外生活経験への自信を高める上で，有効であったと判断できる。これは，考察１，２から伝統文化の魅力を工夫して伝えようとしていること，考察３から伝統文化の魅力を共有し，達成感を味わっていることから，４つの資質能力が効果的に働いたといえる。しかし，資料７からわかるように，自信を表現していない子供もいた。今後，海外生活経験に対する自信をより表出させる手だてを講じる必要がある。



【資料７　海外生活経験への自信】

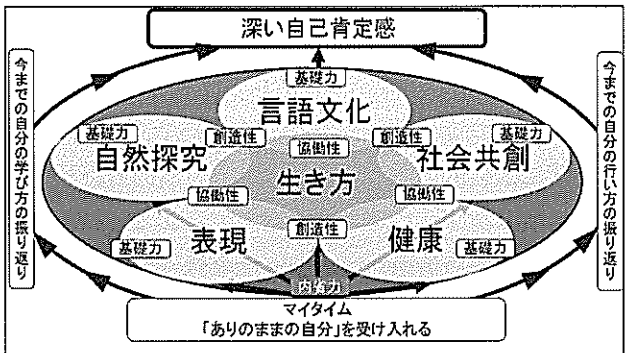
マイタイム部
自分を見つめ，未来に生きる新たな自分を発見する「マイタイム」

1　「マイタイム」の必要性

「マイタイム」は，自分の変化を自ら見取り，自分自身を見つめる時間である。すなわち「自己知」を深め，よさや課題をもとに，自らを律する「意志」を育む時間とも言える。そのため，「マイタイム」は「内省力」に特化する。「内省力」を育むことは，「能力形成」と「人格形成」の調和を図る本校の学びにおいて，特に「人格形成」に寄与するものである。本校の教育課程の中で各領域の学習や生活から自己の置かれた状況を把握する上において「マイタイム」は必要である。

2　「マイタイム」で担うもの

「マイタイム」には，子供たちの「自己肯定感」を深める役割がある。「自己肯定感」とは，「ありのままの自分」を受け入れ，自分の存在の価値を認識することである。この深まりによって，自分のよい面とともに，伸び悩んでいる面にも目を向け，自分を成長させたいという欲求が生まれる。つまり「マイタイム」が，各領域の学びの原動力としての役割を担うのである。



【図1　「マイタイム」における資質・能力と目標構造図】

3　目標と活動

(1) 目標について

> 深い自己肯定感を育成するために，これまでの自分の学び方や行い方を振り返る活動を通して，「ありのままの自分」を受け入れ，未来社会を生きる自分らしさを発見する力を養う。

(2) 活動について

週１時間行われる「マイタイム」では，各領域での学習や日々の生活における成長を蓄積していく。そのためには，領域での学びや生活の中での振り返りが重要になる。そこで，準備時間や朝や帰りの会などを積極的に運用し，子供たちが「マイタイム」の時間に自分の心に向かいやすくする工夫が必要である。

(3)「マイタイム」の活動構成

①　低学年期

低学年の段階の子供たちは「自分はこんなところがある」「自分にはよさがある」ということがはっきりしていない。そこで，子供たちが日々感じている自分自身への気付きを書きため，それを絵日記や短作文などに表現していくようにしていきたい。その中で，教師や保護者が口頭や記述の中で，よさを認めることによって「自己認識」が育まれる。

②　中学年期

中学年の段階の子供たちは，自分と他者を比べたり，関係付けたりすることから，「自己概念」が芽生えると言われている。「自分にはこんなよさがあるが，こういうところは苦手だ」「自分はできないことがあるけど，これは得意だ」などのように，場面限定的に自分のよさと課題を見つめることができる。そこで，できたことやできないことも含めて分類・整理したり，表現したりして，自分のよさだけでなく課題にも目を向けさせ，自分らしさをとらえさせることを大切にする。そのために，友達のよさを紹介するとともに，悩みを一緒に解決する時間をもつことも大切になる。

③　高学年期

この段階の子供たちは，自分の心の中に自分の目を向けたくない汚いところや醜いところも感じるようになる。そこで，子供たちに，そのような感情に蓋をするのではなく，感情を表現させ，「それでも自分にはよさに変えられる力がある」「自分は存在してよい」という深い自己肯定感を身に付けさせたい。その際には，担任との信頼関係と担任と保護者とのつながりも大切になる。また，悩みを共有できる学級風土も必要である。そこからも，担任は，慎重に子供たちの思いを汲み取り，深い自己肯定感につなげる取組をすることが重要である。

4　活動を設定する上での考え方

(1) 教具の工夫

- 連絡ノート（B５型），絵日記，短作文
- リングノート（A４型），付箋紙
- スケッチブック（８つ切りサイズ），付箋紙

(2) 振り返りの視点

- 自分自身
- 友達，仲間，家族
- 他者（地域社会から国際社会へ）
- 歴史あるものや自然などの大いなるもの

実践事例1　低学年

指導者　　齋藤　　淳

1　「マイタイム」の時間の考え方

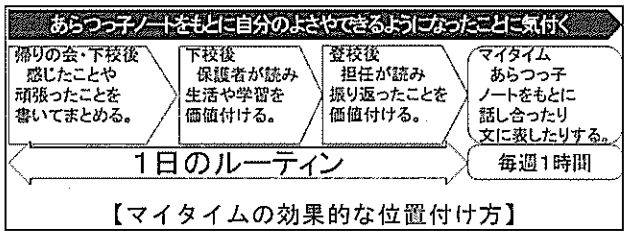
(1)「マイタイム」の時間で培う内省力

本学級は，「ぐんぐんのびる１ねん２くみ」の合い言葉をもとに，自分や友達のよさを伸ばし合うことを目指している。そこで育成したいのは，自分の学び方や行い方を振り返る活動を通して，次のような内省力を発揮した子供たちである

○　自分のよさに気付くことができる。
○　自分ができるようになったことに喜びをもてる。
○　友達のよさや伸びを感じることができる。

(2)「マイタイム」の時間の工夫

上記に述べたねらいを達成するために，学校や家庭での日常生活や他領域の学習との関連を図りながら，マイタイムの時間を次のように設定することとした。



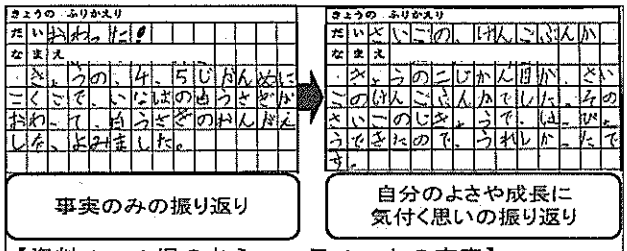
【マイタイムの効果的な位置付け方】

以上のように，メタ認知が難しい子供たちに他者からの称賛や価値付けが行われるように，マイタイムの時間を設定する。このように，保護者との連携を取りながら，マイタイムの学習の中で，子供たちが自分自身のよさや成長に気付くことができると考える。

2　子供たちの姿

(1)「マイタイム」の時間での子供たちの様子

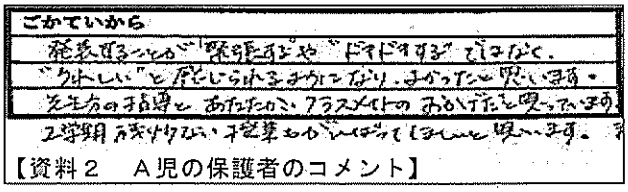
上記に述べたマイタイムの時間の結果，次のような子供たちの姿が現れた。Ａ児は継続的に自分の学校生活であった出来事を振り返る中で，以下のような変容を見せた（資料１）。



【資料１　Ａ児のあらつつ子ノートの変容】

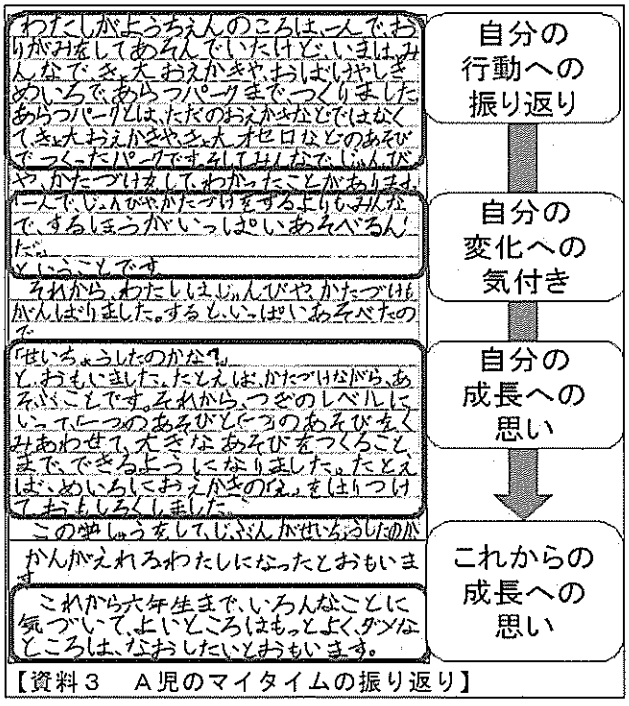
(2) １年間の実践を振り返って

１年間の取り組みの中で，子供たちのよさや伸びに目を向けようとする保護者の意識の変容も見られた。Ａ児の保護者は，あらつつ子ノートを通じて，子供の成長について次のように感じている（資料２）。



【資料２　Ａ児の保護者のコメント】

Ａ児の保護者のように，あらつつ子ノートでのやりとりの中で，子供の変化に気付き，この時間のよさを認識している保護者も増えている。Ａ児は日々の生活を綴り，それをもとに保護者や教師からの価値付けを受けることで少しずつ自分のよさや成長に気付くことができた。また，マイタイムの時間では，今までの学習や生活を通して心に残ったことをあらつつ子ノートを読み返しながら，話し合ったり，作文にしたりするように弾力的に行った。12月末になって，最も心に残ったことをＡ児は，次のように示している（資料３）。



【資料３　Ａ児のマイタイムの振り返り】

3　実践の効果と課題

○　子供たちが他者（友達，保護者，教師）からの価値付けをもとに，自分の短所も含めた特徴を未来に向かって伸ばしたいという展望も見られる。

●　言語での振り返りは，２学期後半まで計画的に進めていく必要があること（言語文化との関連）

●　言語以外の自己の内面の表現を検討すること

１学期中は，絵を描かせたが，自己の内面の変容は見とれないという課題があった。今後の方向性として，言語によらない思いの表出を見取る方法を考えていく必要がある。

実践事例2　中学年

指導者　　藤岡　太郎

1　「マイタイム」の時間の考え方

(1)「マイタイム」の時間で培う内省力

本学級のマイタイムの時間は，「自己更新」を主眼において展開している。「自己更新」とは，学習面や生活面における自分自身の行い方や在り方を自己評価と他者評価により見つめ，自分のよさや可能性を生活に生かそうとする意欲をもち続けることである。

そこで育成したいのは，次のような内省力を発揮した子供たちである。

○　自己評価や他者評価により，学習面，生活面における自身の行い方や在り方を見つめ，自己を高める意欲をもつ。

○　他者の感情の推し量りや理解を含めて，自他のよさを共有する。

(2)「マイタイム」の時間の工夫

上記に述べたねらいを達成するために，以下のような手順でマイタイムの時間を設定することとした。

1　設定した目標を自己評価する。(◎，○，△)
2　付箋紙に学習面と生活面の成果（桃色）と課題（水色）を各３枚程度書く（振り返り）。
3　付箋紙を分類し，見出しを付ける。
4　黄色の付箋紙に，学習面と生活面における友達のよさを書き，手渡す（他者評価）。
5　自己評価，他者評価をもとに，次週の目標設定をする。

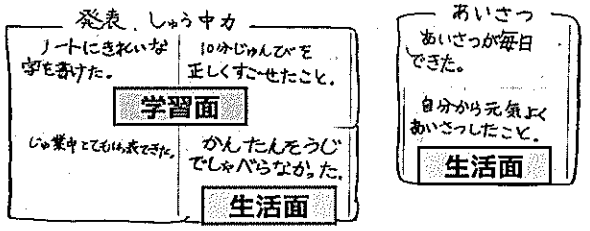
【マイタイムの進め方】

以上，他者評価も取り入れて，自己更新の意欲づけを図っている。そこで，全員が他者からの評価をもらう（黄色の付箋紙をもらう）ことができるように，評価をもらった相手に，「お返しカード（評価をもらった相手のよさを書いたカード）」を手渡すようにした。

2　子供たちの姿

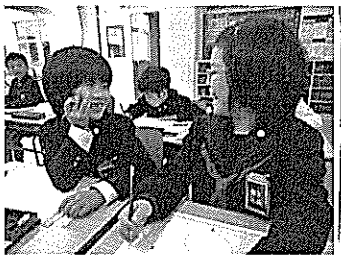
(1)「マイタイム」の時間での子供たちの様子

まず，子供たちは，自分の目標を振り返り，自己評価を付箋に書き，分類して，見出しをつけた（資料１）。

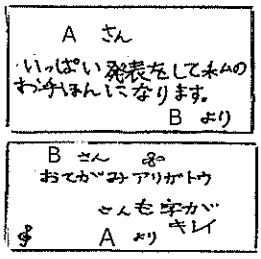


【資料1　自己評価と付箋紙の分類】

次に，自己評価の後，黄色の付箋紙に，学習面と生活面における友達のよさを書き，手渡す活動を行った。この活動により，子供の自尊感情も高まり，自己理解とともに，友達のよさへも目を向け，他者理解に向かうことができた（写真１，資料２）。

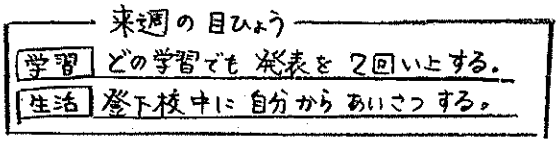


【写真1　Aさんのよいところは】



【資料2　他者評価カード】

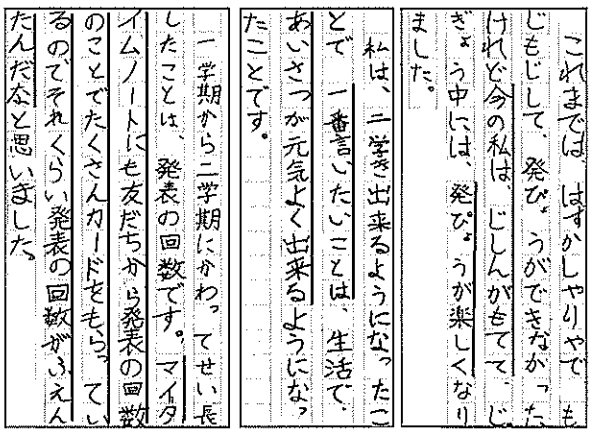
そして，自己評価と他者評価をもとに，新たな目標を設定した（資料３）。



【資料3　自己更新を目指す目標設定】

(2) 1年間の実践を振り返って

マイタイムの実践を通して，子供たちは自分の成長を主観的，客観的に自覚することができた（資料４）。



これまでは、はずかしやりやでもじもじして、発ぴょうができなかったけれど今の私は、じしんがもてて、じぎょう中には、発ぴょうが楽しくなりました。

私は、二学き出来るようになったことで一番言いたいことは、生活で、あいさつが元気よく出来るようになったことです。

一学期から二学期にかわってせい長したことは、発表の回数です。マイタイムノートにも友だちから発表の回数のことでたくさんカードをもらってるのでそれくらい発表の回数がふえんだなと思いました。

【資料4　子供たちの成長作文】

3　実践の効果と今後の課題

○　自分の成果と課題を言語化し，分類することで，自己更新の中身が明確になったこと

○　他者評価の場が自己更新の原動力になったこと

●　目標意識の持続化のための評価の時間を捻出すること

●　他者評価の際の他者の範囲を工夫すること

※　保護者からの定期的な評価も視野に入れる。

実践事例3　高学年

指導者　　山田　深雪

1　「マイタイム」の時間の考え方

(1)「マイタイム」の時間で培う内省力

本学級は「互いの思いがひびき合う５年２組」の目標のもと，誰もが自分らしくいきいきと表現できることを目指している。そこで育成したいのは，次のような内省力を発揮した子供たちである。

○　自分の課題を見出し，目標をもつことができる。
○　自分の取り組みをふり返ることができる。
○　自分や友達のよさや変容に気付き，互いのがんばりを認め合うことができる。

(2)「マイタイム」の時間の工夫

上記に述べたねらいを達成するために，学習と生活，自分と仲間との調和を図りながら，マイタイムの時間を次のように設定することとした。

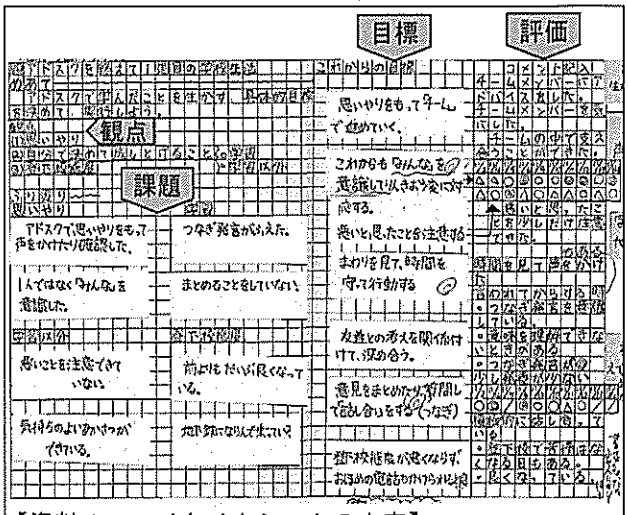
【マイタイムの効果的な位置付け方】

以上のように，目標を確実に実行に移すために，マイタイムの時間で互いの目標を理解し合い，学習前に前の学習での取り組みを自己評価し，帰りの会で友達と称賛し合うようにする。

2　子供たちの姿

(1)「マイタイム」の時間での子供たちの様子

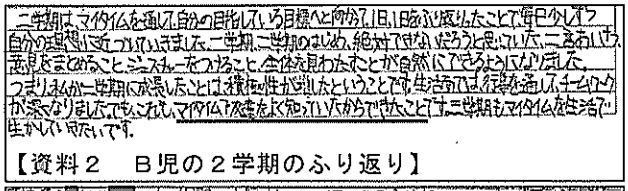
子供たちは，１単位時間で作成するマイタイムシートに，みんなで決めた観点をもとに課題を見出し，目標を設定し，自分がふり返りやすい評価欄を作成して日々の取り組みを行った（資料１）。



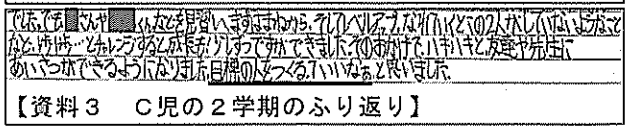
【資料１　マイタイムシートの内容】

(2) １年間の実践を振り返って

資料２・３は，２学期のマイタイムのふり返りの記述（一部抜粋）である。Ｂ児は，「積極性が増した」成長の理由を「マイタイムで友達をよく知っていたからできた」と述べている（資料２）。Ｃ児は「自分が見習いたい人」を決めて取り組むとあいさつができるようになったことから，目標の人をつくるよさについて述べている（資料３）。これらのことから，友達のことをよく知り，そのよさを享受し合うマイタイムの活動が，集団の中で自己実現に向かって努力し，自己の成長を実感するうえでの一方策になると考える。



【資料２　Ｂ児の２学期のふり返り】



【資料３　Ｃ児の２学期のふり返り】

3　実践の効果と今後の課題

○　目標，評価基準，評価形式を自己決定させたことにより，主体的に取り組みを継続する姿が見られた。
○　マイタイムの時間において，互いのよさや目標を理解し合う場を設けることにより，生活の中で友達のがんばりを認め合う姿が見られた。さらにそれが励みとなり，自分自身の目標達成に効果的に働いた。
●　子供が運営するマイタイムの時間にすること
子供たちの力で本時のファシリテーターを選出し，主体的に活動を進められるように，教具や活動の進め方を例示したテキストを準備する必要がある。

特別支援教育部

共生社会に生きる力を身に付けた子供の育成

～課題単元に重点を置いた生活単元学習の指導を通して～

（平成27年度 文部科学省「インクルーシブ教育システム構築モデル事業」指定）

はじめに

本校では，一昨年から，インクルーシブ教育システムの構築に向け，教科等の学習指導における合理的配慮を中心に，その検討及び提供に取り組むと共に，随時その評価を行うことでより質の高い合理的配慮の提供をめざしてきた。本研究のこれまでの成果を以下のように考えている。

【１年次】子供たちがかかわる人や場所の広がりを教科等ごとに定義し，その中での実態に応じた合理的配慮を明確にして取り組んできた。そこから，例えば算数科では，「子供が使用する教具や具体物等に配慮が集中する」というように合理的配慮を提供する際の教科の特色が見えてきたこと，また交流場面では「交流相手との時間調整や学習内容の変更・調整」などの配慮に重点を置くなど，いくつかの視点から整理し，その必要性を見出すことができた。

【２年次】基礎的環境整備と合理的配慮の関係について考え，合理的配慮の在り方を明確にして取り組んできた。「特別支援学級児童一人に一台タブレット端末が配備してあること」「合理的配慮協力員が配置してあること」など，本校の基礎的環境の特色を活かしつつ提供する合理的配慮という関係性から，その効果的な連動の在り方の一端を見出すことができた。例えば，国語科の話す学習において，子供の困難さを合理的配慮協力員と共に見取り，タブレット端末の音声支援システムを活用した合理的配慮の提供につなげたなどの事例が挙げられる。

これまでの２年間の研究から，共生社会に生きる力を身につけた子供像を少しずつ明確にしながら取り組むことができた。一方で，インクルーシブ教育システムを構築していくためには，まだまだ整備していく課題があることも明確になった。具体的には，各教科の指導や，各教科等を合わせた指導を行う際に，その学習の域を抜けだして子供の生活にまで広げることができなかったことが挙げられる。また，子供の発達段階と合理的配慮の関係についても，まだ整理していく必要があることも明確になった。そこで，今年度は，子供の将来的な自立と社会参加をめざし，そのために必要な合理的配慮を明らかにすると共に，その際，生活年齢や発達段階によって提供する合理的配慮にはどのような違いがあるのか整理していくことを目標に研究に取り組んでいくこととする。

1　主題について

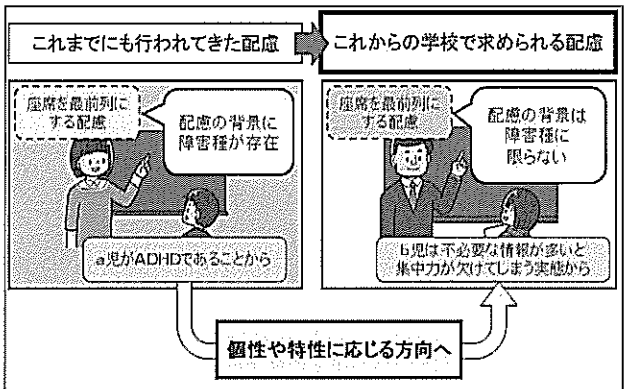
(1) 共生の考え方

そもそも共生とは，異なる立場や考え方，種類などのものが，共に生活している状態を表す。それは，動植物をはじめとする地球環境と人間との共生，私たち日本人と異文化もしくは諸外国の人々との共生など広義に用いられるもので，障害のある人と障害のない人との共生という意味でも用いられてきた。しかし，障害のある人のまわりで用いられる共生は，時代と共にその意味合いを少しずつ変えてきている。2001年にWHO（世界保健機関）が提唱したICF（国際生活機能分類）では，「障害の軽重の程度は個人を取り巻く環境によって大きく変わる」とする，新しい障害観を打ち出している。このことは極論，ある環境下では障害があるとされる人が，全く違う環境下では障害のない人とされる可能性を示唆していると考えられる。この概念を背景に，上野（2006）は，「障害は理解と支援を必要とする個性である」と述べている。さらに，本田（2015）は，著書において「自閉症スペクトラム障害」ではないけれども，「自閉症スペクトラム」の人は広く存在すると述べている。社会の中で自立した生活を送っている自閉症スペクトラムの人達は，生活に支障を感じておらず，そのような人達は自閉症スペクトラム障害にはならないという考え方である。これらのことから，障害の有無は，本人が生活する環境で支障を感じているかどうかによって決まるものであり，身のまわりの物的・人的な理解や支援があれば，それはもはや個性として尊重されるべきものとの考え方に変わってきているといえる。したがって，共生とは，誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い，多様な在り方を相互に認め合いつつ，障害のある人々が，積極的に参加・貢献していくことであると考える。そこでは障害の有無や軽重，障害種は前提とならず，全ての人を包み込む視点が重要になると考える。

(2) 共生社会に生きる力を身に付けた子供の育成

内閣府は，共生社会の形成に向けて「相互の理解と交流」「社会参加へ向けた自立の基盤づくり」「日々の暮らしの基盤づくり」「住みよい環境の基盤づくり」の４つの視点から取り組んだ平成26年度の施策について，平成27年度報告の障害者白書にまとめてる。このことから，現状では，障害を感じずには生きてはいけない人々（以後，障害のある人々，障害のある子供等）

が，安心して暮らしていくことができる基盤づくりに取り組んでいる社会の動向がうかがえる。そのため，身のまわりの環境を物的・人的・法的といった複数の視点から整備していくことが，今後より一層求められていくことになる。一方，共生社会実現に向けてインクルーシブ教育システムの構築に取り組む特別支援教育には，「障害のある児童の自立と社会参加に向けた一層の取り組み」が期待されている。学校教育においても，基礎的環境整備を基に合理的配慮を提供することの重要性が，近年さらに増してきている。子供の生活環境の中で，自立した生活をおくることができるように，学校教育においては一人一人の学びにくさ，生活のしづらさに的確に応えていく必要がある。そのために，私たちは，障害の軽重や障害種などを前提とすることなく，あくまでも子供一人の苦手なことや得意なことを基に学習計画を立て，支援していく必要があると考える。そうすることで，これまでも障害種に応じて行われてきた特別支援教育ではあるものの，今後はより個性を大切にした教育が実現し，子供の可能性を最大限引き出すことにつながっていくと考える。したがって，共生社会に生きる力を身に付けた子供の育成とは，子供一人一人の特性や発達段階，生活年齢等に基づいた合理的配慮事項を明確にしつつ，学びの在り方を確立し，将来的な自立や社会参加に必要な力を身に付けさせていくことである。



【図1　今後の学校教育に求められる視点の転換】

【本研究における共生社会に生きる力】

むかう力
自らの生活上の課題をとらえるとともに，それを解決しようという意志をもち，進んで身の回りに働きかけようとする力
かかわる力
自分にできることを活かして身の回りの対象に働きかけ，自分の課題を解決することで，さらに自分にできることを増やしていく力
かんじる力
できるようになったことを自覚し，課題を解決した達成感を味わったり新たな目標に向かおうとしたりする力

2　副主題について

(1) 生活単元学習の必要性

現行の特別支援学校高等部学習指導要領から，キャリア教育の文言が明記されるようになった。この改訂の方向性は，小学部の改訂の基本方針として「自立と社会参加に向けた教育の充実」が重ねて重点化されたことにもつながっている。障害のある子供たちに対して，幼児期から成人期までの一貫した教育システムを構築する必要性が求められている今，この方向性は，小学部においても大切にする必要がある。このような動きの背景には，障害のある子供たちの社会への接続に見られる課題，激しく変化する社会生活に対応していくための課題などがあると考える。つまり，社会の激しい変化に流されることなく，子供が現在及び将来の生活において直面するであろう課題に対応できるようにしていくことが，特別支援教育には求められているのではないだろうか。このように考えると，現行のカリキュラムの中で中核を担うべきものが，「生活単元学習」であることが見えてくる。子供たちが，各教科等での学びを確実に生活へと転移させ，それも一人一人に合った方法で成し遂げてくために，生活単元学習の場を有効に活用していかなければならない。なぜなら，生活単元学習は，子供が生活上の目的を達成したり，生活上の課題を解決したりするためにカリキュラム上に位置付けるべきものであるからである。したがって，現在の社会情勢の中において，共生社会に生きる力をはぐくんでいくための生活単元学習の指導の在り方が，今後より一層問われていくものと考える。

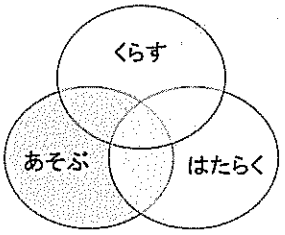
(2) 課題単元に重点を置いた生活単元学習の指導とは

本校の教育課程には，「行事単元」「季節単元」などが網羅的に取り入れてある。学校生活の中にすでに位置付けてある様々な行事を通して，その成功に向けてアプローチの仕方を子供の実態に照らし合わせていく行事単元では，大きな達成感を味わわせ，行事の役割等に必要な知識や技能の獲得をめざしてきた。また，身近な自然にアプローチしたり，校内の畑で野菜や植物などを栽培したりすることなどを通して，季節感をはぐくみ，四季を楽しみながら生活するために必要な知識や技能の獲得をめざしてきた。しかし，今後ますます広がるであろう子供の生活を考えると，学校外にある子供の課題へ積極的に目を向け，解決させていく必要がある。つまり，子供が将来，自立し社会参加していくためには，学校内だけでなく学校外の資源等を積極的に活用する課題単元に取り組んでいかなければならない。したがって，課題単元に重点を置いた生活単元学習の指導とは，学校内外の資源を積極的に活用し，学校及び日常生活上にある課題の達成をめざし，子供が生活の中で自分でできるようになることを増やしていくために取り組んでいくことである。

3　具体的方途

(1) 課題設定の工夫

生活上の課題，学習で子供たちに課す課題などは，いくつかの層からなっている。子供の自立と社会参加を目標とする場合，はじめの課題を設定する観点は，「くらすこと」「あそぶこと」「はたらくこと」（第１層）の３つになる（図２）。



【図２　第1層の課題】

「くらすこと」「あそぶこと」「はたらくこと」は，それぞれ子供たちが自立し社会参加していくためには，解決しなければならない大きな課題だからである。しかし，これら３つの課題は，このままでは子供の課題としてはなりえず，それぞれの中に存在する更に細かい課題を見出していかなければならない。例えば，「くらすこと」という大きな課題を達成するためには，「朝食をつくること」「洗濯をすること」「部屋を片付けること」など，解決しなければならないいくつかの課題が存在する（第２層）。さらに，「朝食をつくること」という課題の中には，「米を炊くこと」「パンを焼くこと」など，さらに細かい課題がいくつも存在する（第３層）。子供の生活上の課題を組織して生活単元学習の単元を構成していくためには，この第３層レベルにまで課題を細分化していく必要がある（表１）。

【表１　生活上の課題の例】

自立と社会参加のために達成する必要がある課題			
第1層	第2層	第3層	第4層
くらす	朝食をつくる	米を炊く	米を洗う
			炊飯器を使う
		おかずをつくる	包丁を使う
			調味料を使う
あそぶ	映画館に行く	公共交通機関を利用する	時刻表を読む
			利用時のルールやマナーを知る
		映画館を利用する	代金の支払い
			利用時のルールやマナーを知る
はたらく	野菜を販売する	野菜を作る	野菜の作り方を知る
			世話をする方法を知る
		代金を受け取る	販売時のやりとりについて知る
			代金，お釣りの受渡

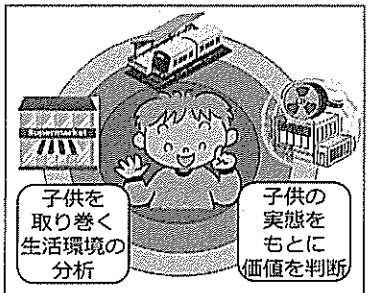
最後に，第３層の課題を分析すると，最終的には１単位時間で解決するべき，最も細かい課題が見えてくる（第４層）。以上のように，課題は４つの層から成っていると仮定し，課題設定に取り組んでいくこととする。なお，課題を設定する手順は次のように考えている。

①子供の実態から，「くらす」「あそぶ」「はたらく」の取扱を決定する。
②課題を第２層レベルに細分化する。
③第２層の課題を分析し，適切な課題設定（第３層）を行う。（教材分析）
④最も細かい課題（第４層）に細分化し，課題配列を行い，単元を構成する。

以上の手順で分析を行うと，「③第２層の課題を分析し，適切な課題設定を行う」段階が最も授業づくりを左右する段階になる。では，第３層の課題はどのように分析して設定する必要があるのだろうか。大きくは次の２点を踏まえることであると考えている。

ア　子供の生活環境（身のまわりの資源）を分析
イ　実態（特性，興味・関心）を基に価値を判断

アについて，例えば，表１の「映画館に行くこと」では，第３層の課題を分析する場合，映画館と子供の距離が重要になる。徒歩圏内に映画館があれば，「公共交通機関の利用」よりも，「交通ルールを守って歩道を歩くこと」のほうが重要度の高い課題となるためである。また，「買い物に行くこと」については，「最寄りのスーパーはどこになるのか」を明らかすると，「道路の歩き方」「行動での自転車の乗り方」「踏切の渡り方」等の中から，どの課題を設定するべきなのかが見えてくる。このように，生活単元学習の課題分析は，子供の生活環境を知り，子供に寄り添いつつ進めていくことが重要だと考える。しかし，それだけでは，まだ十分であるとは言えない。その上で，子供の実態に密着して，子供にとって意味ある課題になっているかその価値を判断する（イ）ことが重要になる。例えば，「映画館」の場合，その子が大きなスクリーンや音が好きか，人混みが平気か，また，映画という娯楽をその子供にとって「あそび」とできるかなどについて，分析する必要があるためである。買い物についても，最寄りのスーパーより，店内の構造上少し離れたスーパーの方が買い物がしやすいのであれば，最寄りのスーパーはその子にとって，現段階ではかけ離れた課題となる。そういった意味で，生活環境の分析と合わせて，子供の実態から価値を判断していくことが必要になると考える（図３）。

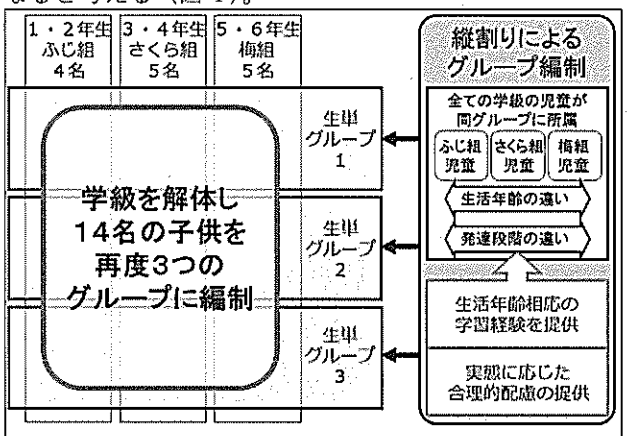


【図３　課題分析の手続き】

(2) 生活年齢を重視したグループ編制の工夫

本校では，生活年齢ごとに，低学年ふじ組，中学年さくら組，高学年梅組の３学級を設けている。各学級５名前後の子供たちの実態は様々で，個性も一人一人異なる。教育課程に位置付けている合同の学習では，通常，発達段階の近い子供たちでグループを組み，実態に応じた学習ができるようにしてきた。そうすることで国語科や算数科では特に，個々の実態に応じやすくなり，個々の知識や技能を高めやすいよさがあるためである。しかし生活単元学習に限っては，生活上の課題の解決をめざしているため，その生活課題を含む様々な活動は，生活年齢に応じて設定するべきものも

あると考える。例えば，働くことに焦点を当てた場合，複数の人で構成される集団の中において年齢的な立場上，人に教えることが求められる場合が生じる。このような必然性が生まれることは，算数科や国語科などの教科学習と大きく異なる点である。したがって，生活単元学習のグループ編制は，発達段階ばかりではなく生活年齢も重視する必要があると考える。そこで，今年度は，ふじ・さくら・梅組の子供を３グループ程度の小集団に編制する際，生活年齢に応じた学習活動や体験が保障できるように取り組んでいくこととする。小集団にすることで子供たちは，個別の対応を受ける機会が増え，年齢の異なるメンバーが含まれる集団で活動することにより，生活年齢相応の経験がしやすくなると考える（図４）。



【図4　生活年齢を重視したグループ編制】

(3) 活動構成の工夫

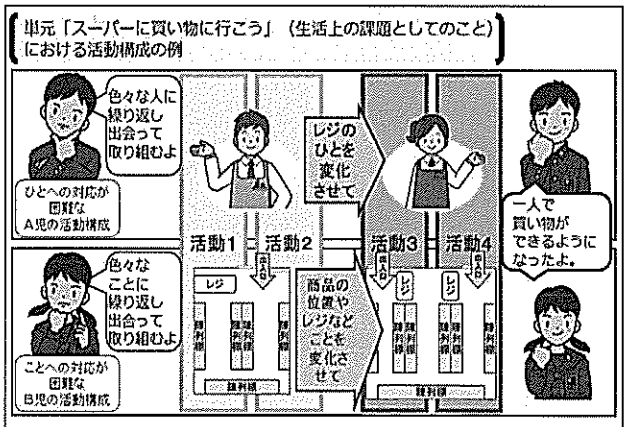
「対象（もの・ひと・こと）」との出合いを意図的に位置付けて構成する。生活上の課題と出合う生活単元学習では，「買い物をすること」「調理をすること」などのように，通常「こと」との出合いが前提となる。これは，前述した課題分析の方法を基に考えると，第２層レベルの「こと」にあたるものであるため，このレベルの「こと」について学習し解決していくためには，さらに細かい視点での「こと」への対応や，「もの」の扱い方，「ひと」とのかかわり方などが課題として存在する。これは，第３層の課題分析にもつながり，授業づくりにつながる重要な視点である。

生活上の課題としての「こと」		
買い物や外出，調理など，子供の生活を広げていくために必要となる課題（第２層レベルの課題）		
もの	ひと	こと
学習に作用する教具や学習具等の物的環境	学習に作用する友達や教師などの人的環境	学習に作用する出来事やきまり，条件設定等

生活単元学習では，子供が出合うべき対象をきめ細かに分析すると，子供が出合うべき対象は，一人一人異なると考える。例えば，「秋野菜を育てよう」の単元において，収穫した野菜を用いて調理をする場面で，ある子供は，自分に合った調理器具（もの）の使い方に重点を置いた学習内容とすることが好ましい一方，ある子供は，調理の行程をより実際場面に近づけていくというように，調理方法（こと）に重点を置いた学習内容とすることが好ましいということがあるためである。そこで，まず，本研究においては，子供が課題に取り組む際，どのような側面に最も解決するべき課題があるのかについて，「もの・ひと・こと」の３つの観点から分析を行う。そして，展開段階前段において，その子供が出合うべき対象（基本的には，もの・ひと・ことのいずれか）と出合わせ，課題を解決させるようにする。さらに，展開段階後段においては，その対象の質を変化させて，出合わせつつ課題を解決させていくようにする（図５）。

【図5　対象との出合いを位置付けた活動構成の工夫】

例えば，前段でＡさん（ひと）と出会った子供は，後段ではＢさん（異なる人）や，同じＡさんであっても前段とは異なる反応を示すＡさん（質の異なるひと）などと出会わせるというように，出合わせる対象に変化を与えて，活動に取り組ませるようにする。このように，もの・ひと・ことの観点から細分化して対象を絞り，意図的に子供に出合わせて活動を構成することで，子供が最も課題としている点に重点を置いた解決が可能になると考える（図６）。



【図6　もの・ひと・ことの変化の例】

【参考文献等】

1) 本田秀夫『自閉症スペクトラム』ＳＢ社，2015年

2) 小出進『実践　生活単元学習』学研，1988年

指導事例　第5・6学年　単元　ふじ・さくら・梅組しょうてんを　せいこう　させよう

指導者　大櫃　玲子

1　単元の目標

○　自分たちの店を出し，販売することを目指して，意欲的に活動に取り組むことができる。（むかう力）

○　場や方法を選びながら，人や状況に変化があった場合においても，自分にできることを増やすことができる。（かかわる力）

○　できたことに達成感を感じながら，実生活に活かそうとすることができる。（かんじる力）

2　課題設定の工夫

本単元では，子供の自立と社会参加を目標に，はたらくことを観点に，商品を販売することを課題として設定している。その中で，人とのかかわりの範囲を広げ，校外の人とのかかわりをもたせることで，より自分の役割に責任をもつこと，友達と支え合いながら実践することの高まりをねらいとしている。また，はたらくことに触れ，職業や地域における役割についても目を向けることができるのではないかと考える。さらに，金銭を扱うことで，価格に応じて硬貨を適切に組み合わせることや，種類ごとに分類して数えたりすることなどに慣れることができ，その価値や意味に触れることもできると考える。そのために，商品を販売するという課題を分析し，①商品の作成，②値札の作成，③販売の仕方，④金銭の扱い方に課題を設定して単元を構成している。主張点は，はたらくことを出発点に課題を下の表のように分析して単元を構成し，課題を解決する上で，生活年齢を重視したグループ編制の工夫と活動構成の工夫をしたことである。具体的には，グループ編制により異年齢の子供たちがかかわり合いながら課題を解決する中で生活年齢相応の経験ができるようにし，課題に向かわせるときに子供の実態に応じて，もの・ひと・こととの出合いを設定した活動を構成したことである。

【表　本単元の課題分析】

自立と社会参加のために達成する必要がある課題			
第1層	第2層	第3層	第4層
はたらく	商品を販売すること	商品を作る	手順が分かる
			材料を選ぶ
			⋮
		値札を作る	数字を書く
			数字を見て書く
			⋮
		販売の仕方を知る	声をかける
			商品を受け取る
			⋮
		金銭を扱う	硬貨を分類する
			硬貨を数える
			⋮

3　学習の流れと考察

動機段階のねらい：1～2/14時

唐人町商店街で店の様子や接客の様子を見学することで，自分たちで商品を作って出店し，販売したいという意欲をもつことができる。

(1) 唐人町商店街を見学する。

(2) 出店することを知り，看板を作る。

動機段階では，唐人町商店街を見学した。子供の「レシートを渡してみたいな。」「看板を見たら何のお店かがわかるね。」という感想から，実際に出店することを提案し，看板を作った。すると，出店し販売することに対する意欲を高める子供の姿が見られた。

【写真1　看板を見たら何のお店かがわかる。】

考察1

唐人町商店街の見学が，出店の見通しをもたせ，意欲を高めることに有効であった。A児の「自分もしてみたい。」という発言から，商店街の見学により，出店の場所，接客の手順が明確になり，ゴール像をイメージできたと考える。

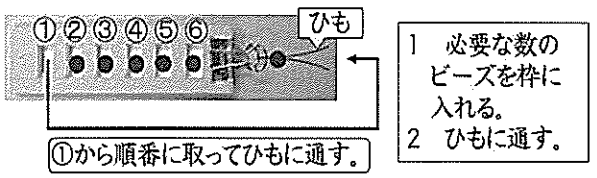
熱中段階のねらい：3～12/14時

出店に向けて必要な課題を細分化して設定し，それを解決することができる。

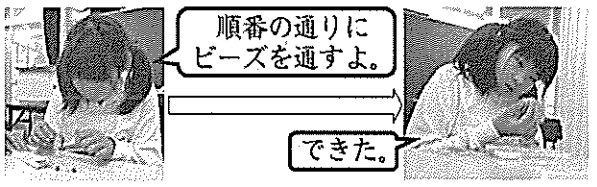
【設定課題】①商品を作る。②値札を付ける。③販売の練習をする。④金銭のやりとりの練習をする。

(1) 商品を作る。

A児は，活動の内容を理解し，手順が明確になっていれば，自信をもって取り組むことができる。販売に向けて商品（ストラップ）を作ることを提案し，作るところを見せた。すると，意欲をもって説明を聞くことはできていたが，ビーズの色や形が変わると，同じように作ることができるのか不安になっている様子であった。そこで，課題の解決のために，「もの」との出合いを設定した。



【資料１　ストラップを作る順番がわかる教具】

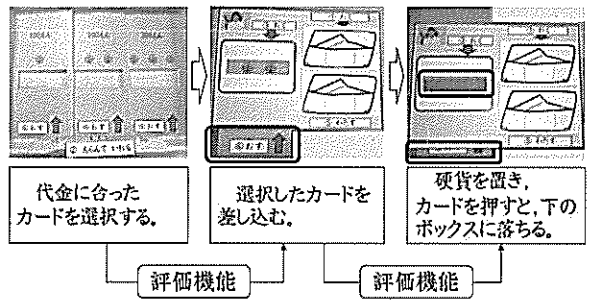


【資料２　商品作成の課題を解決する様子】

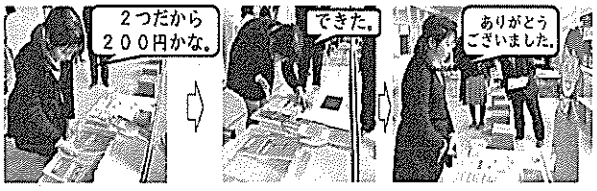
資料１の教具を活用したことにより，ビーズの色や形が変わっても，同じように手順を守って商品を作る姿が見られた（資料２）。

(2) 販売の練習をする。

Ａ児は，手順カードの活用により，販売の流れをつかむことができた。しかし，商品と代金を同時に出す客や，最初に商品のみを出す客など，相手の働きかけが変わると，戸惑って活動できなくなる姿が見られたため「こと」との出合いを設定した。



【資料３　受け取った硬貨を自己評価できる教具】



【資料４　販売の課題を解決する様子】

資料３の教具を活用したことにより，相手の働きかけが変わっても，同じように金銭のやりとりをする姿が見られた。Ａ児は，出店への意欲のみならず，自信も高めることができた。

考察2

細分化した課題の設定が，イメージを形成していく上で有効であった。Ａ児が下級生に商品の作り方や数え方を教える姿から，各課題に意欲的に取り組み，自分でできることを増やしていくことができたためである。さらに，この姿から，販売の仕方についての役割をもたせることで生活年齢に応じた経験もできたと考える。

発展段階のねらい：13～14/14時

人とかかわることや，商品と金銭のやりとりができたという達成感，満足感を味わうことができる。

発展段階では，唐人町商店街で実際に出店し，自分たちで作った商品の販売を行った。

【資料５　販売の様子と感想】

Ａ児は，これまでの学習を活かし，客に商品を紹介し，値段を伝えてやりとりしたり，おつりを渡したりすることができた。唐人町商店街の利用客とかかわりながら自分たちが作った商品を販売することができた達成感，満足感を味わうことができた（資料５）。

考察3

動機段階で共有していたゴール像を達成するために，実際に唐人町商店街で販売したことが，達成感や満足感を味わい，喜びを共有する上で有効であった。「お店を出したらお金の勉強にもなったよ。50円と50円を合わせたら100円になるんだよ。」というＡ児の発言から，これまでの生活単元学習や算数の学習を実生活に活かすこともできたと考える。

全体考察

【課題設定の工夫について】

出店することに対するイメージを形成させる上で，はたらくことに関する課題を分析し，単元に配列したことは有効であったと判断できる。

【生活年齢を重視したグループ編制の工夫について】

生活年齢相応の経験をさせる上で，商品の作成や販売に役割をもたせたことは有効であったと判断できる。しかし，お世話をすること，されることのかかわりをもたせることのみになっていたため，友達とかかわる必然性が生まれるように編制していく必要がある。

【活動構成の工夫について】

自分でできることを増やしていく上で，もの・ひと・ことの対象に出合わせる課題を設定することは有効であったと判断できる。しかし，個別の活動が中心になったため，生活年齢を重視したグループ編制の工夫とともに友達とかかわりながら課題を解決していく活動を取り入れる必要があると考える。

アンケート（低学年）　年　組　番　名前

１ねんせい（または　２ねんせい）に　なってからの　じぶんの　ことを　おもいだしましょう。
じぶんの　きもちや　していることに　あてはまる　すうじに　○を　つけましょう。
５：あてはまる　４：すこしあてはまる　３：どちらでもない　２：あまりあてはまらない　１：あてはまらない

①じぶんではない　ほかの　ひとの　きもちを　よく　かんがえたいと　おもう。	5	4	3	2	1
②じぶんが　ただしいと　おもう　ことは　ともだちや　ほかの　ひとと　はんたいの　かんがえでも　いいたいと　おもう。	5	4	3	2	1
③ともだちや　ほかの　ひとたちの　ために　やくに　たつ　ひとに　なりたいと　おもう。	5	4	3	2	1
④いつも　じぶんの　かんがえを　もつように　している。	5	4	3	2	1
⑤ともだちや　ほかの　ひとから　すかれる　ことは　じぶんに　とって　たいせつである。	5	4	3	2	1
⑥ともだちと　はんたいの　かんがえを　もって　いいあいを　したくない　ほうだ。	5	4	3	2	1
⑦ともだちと　はんたいの　かんがえに　なった　とき　あいての　かんがえを　きいて　そちらの　かんがえに　したいと　おもう。	5	4	3	2	1
⑧このごろ　じぶんが　いった　ことや　した　ことについて　じぶんで　おもいだして　いると　おもう。	5	4	3	2	1
⑨じぶんの　よいところや　なおしたい　ところや　これから　こう　なりたいなと　おもう　ことなど　じぶんの　ことに　ついて　よく　かんがえる。	5	4	3	2	1
⑩「なぜ？」「どうして？」と　おもった　ことを　じぶんで　よく　しらべる。	5	4	3	2	1
⑪むずかしい　ことでも　ひとに　きかずに　まずは　じぶんで　がんばろうと　する。	5	4	3	2	1
⑫しっぱいしても　あきらめないで　「どうして　しっぱいしたのかな」と　かんがえる。	5	4	3	2	1
⑬わからない　ことは　わかるまで　やる　ほうだ。	5	4	3	2	1

アンケート（中学年）　　年　　組　　番　名前

３年生（または４年生）になってからの自分をふりかえって，あてはまる数字に○をつけましょう。
５：あてはまる　４：少しあてはまる　３：どちらともいえない　２：あまりあてはまらない　１：あてはまらない

①自分以外のほかの人の気もちをよく考えたいと思う。	5	4	3	2	1
②できるだけ友だちにあわせるようにしている。	5	4	3	2	1
③自分が正しいと思うことは，まわりの人と反対の考えでも言いたいと思う。	5	4	3	2	1
④まわりの人のために，やく立つ人になりたいと思う。	5	4	3	2	1
⑤いつも自分の意見をもつようにしている。	5	4	3	2	1
⑥人から好かれることは自分にとって大切である。	5	4	3	2	1
⑦友だちと考えが対立することをさけるほうだ。	5	4	3	2	1
⑧人と意見が対立したとき，相手の意見を受け入れたいと思う。	5	4	3	2	1
⑨自分が言ったことやしたことについて，頭の中でいつも思い返していると思う。	5	4	3	2	1
⑩自分の成功や失敗を思い出すのは得意である。	5	4	3	2	1
⑪自分がなぜそのように行動するのかをよく考える。	5	4	3	2	1
⑫自分のことについてよく考える。	5	4	3	2	1
⑬「なぜ？」「どうして？」と思ったことをよく調べる。	5	4	3	2	1
⑭むずかしいことでも，人にたよらず，自分の力でやろうとする。	5	4	3	2	1
⑮失敗してもあきらめないで，なぜ，失敗したのか，その理由を考える。	5	4	3	2	1
⑯人が考えつかないことをよく思いつくほうだ。	5	4	3	2	1
⑰わからないことはわかるまでやるほうだ。	5	4	3	2	1

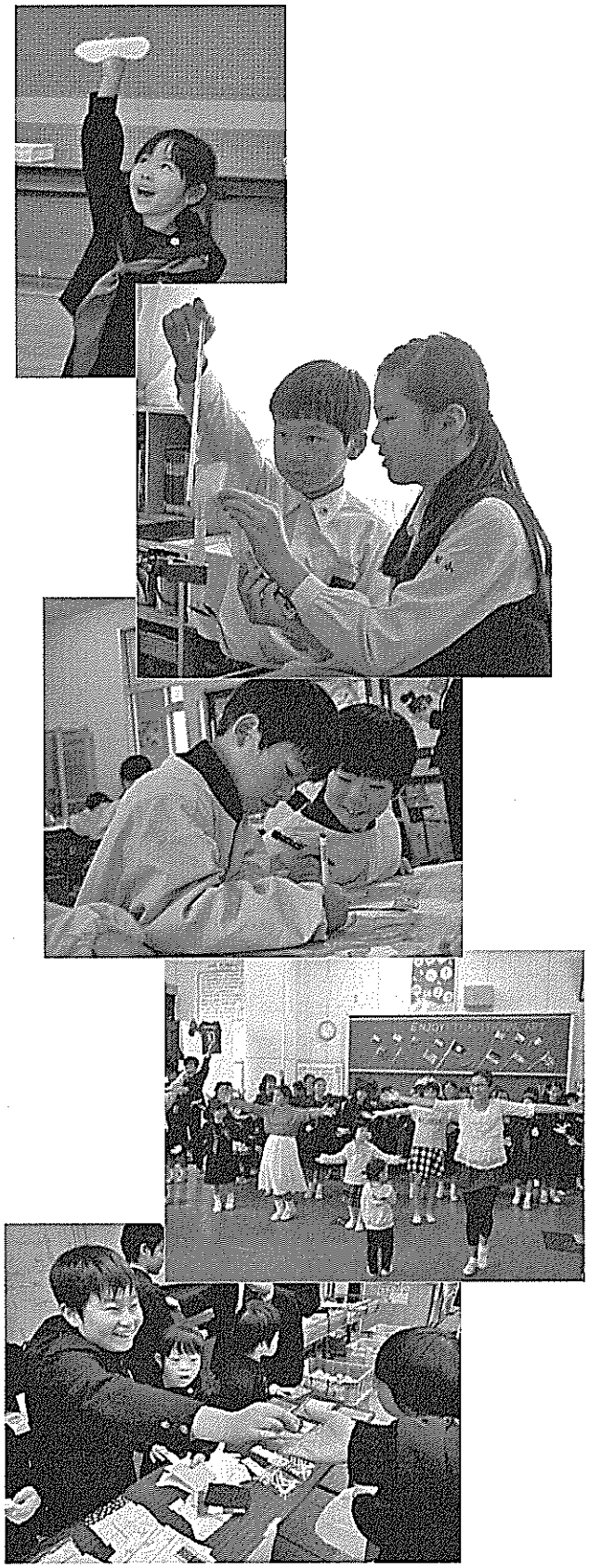
アンケート（高学年）　　年　　組　　番　名前

５年生（または６年生）になってからの自分をふりかえって，あてはまる数字に〇をつけましょう。
５：あてはまる　４：少しあてはまる　３：どちらともいえない　２：あまりあてはまらない　１：あてはまらない

①自分以外のほかの人の気持ちをよく考えたいと思う。	5	4	3	2	1
②できるだけ友達とあわせるようにしている。	5	4	3	2	1
③自分が正しいと思うことは，周りと反対でも主張したいと思う。	5	4	3	2	1
④周（まわ）りの人のために役立つ人になりたいと思う。	5	4	3	2	1
⑤いつも自分の意見をもつようにしている。	5	4	3	2	1
⑥人から好（す）かれることは自分にとって大切である。	5	4	3	2	1
⑦友達と考えが対立することをさけるほうだ。	5	4	3	2	1
⑧人と意見が対立したとき，相手の意見を受け入れたいと思う。	5	4	3	2	1
⑨最近自分が言ったことやしたことについて頭の中でいつも思い返していると思う。	5	4	3	2	1
⑩自分の成功（せいこう）や失敗を思い出すのは得意である。	5	4	3	2	1
⑪自分がなぜそのように行動するのかをよく考える。	5	4	3	2	1
⑫自分のことについてよく考える。	5	4	3	2	1
⑬「なぜ？」「どうして？」と思ったことをよく調べる。	5	4	3	2	1
⑭むずかしいことでも，人にたよらず，自分の力でやろうとする。	5	4	3	2	1
⑮失敗してもあきらめないで，なぜ，失敗したのか，その原因を考える。	5	4	3	2	1
⑯人が考えつかないことをよく思いつくほうだ。	5	4	3	2	1
⑰わからないことはわかるまでやるほうだ。	5	4	3	2	1

平成27年度　児童意識調査尺度系統表（福岡教育大学附属福岡小学校作成）

資質・能力	観点等	低学年	中学年	高学年
協働性	【個人志向性－社会志向性PNR尺度より】	①じぶんではない　ほかの　ひとの　きもちを　よく　かんがえたいと　おもう。	①自分以外のほかの人の気もちをよく考えたいと思う。	①自分以外のほかの人の気持ちをよく考えたいと思う。
			②できるだけ友だちにあわせるようにしている。	②できるだけ友達とあわせるようにしている。
		②じぶんが　ただしいと　おもう　ことは　ともだちや　ほかの　ひとと　はんたいの　かんがえでも　いいたいとおもう。	③自分が正しいと思うことは，まわりの人と反対の考えでも言いたいと思う。	③自分が正しいと思うことは，周りと反対でも主張したいと思う。
		③ともだちや　ほかの　ひとたちの　ために　やくに　たつ　ひとに　なりたいと　おもう。	④まわりの人のために，やく立つ人になりたいと思う。	④周りの人のために役立つ人になりたいと思う。
	【相互独立的－相互協調的自己感尺度より】	④いつも　じぶんの　かんがえを　もつように　している。	⑤いつも自分の意見をもつようにしている。	⑤いつも自分の意見をもつようにしている。
		⑤ともだちや　ほかの　ひとから　すかれることは　じぶんにとって　たいせつである。	⑥人から好かれることは自分にとって大切である。	⑥人から好かれることは自分にとって大切である。
		⑥ともだちと　はんたいの　かんがえを　もって　いいあいを　したくないほうだ。	⑦友だちと考えが対立することをさけるほうだ。	⑦友達と考えが対立することをさけるほうだ。
		⑦ともだちと　はんたいの　かんがえに　なったとき　あいての　かんがえを　きいて　そちらの　かんがえに　したいと　おもう。	⑧人と意見が対立したとき，相手の意見を受け入れたいと思う。	⑧人と意見が対立したとき，相手の意見を受け入れたいと思う。
内省力	【Rumination-reflection Questionnaire日本語版より】	⑧このごろ　じぶんが　いったことや　したことについて　じぶんで　おもいだしていると　おもう。	⑨自分が言ったことやしたことについて，頭の中でいつも思い返していると思う。	⑨最近自分が言ったことやしたことについて頭の中でいつも思い返していると思う。
			⑩自分の成功や失敗を思い出すのは得意である。	⑩自分の成功や失敗を思い出すのは得意である。
		⑨じぶんの　よいところや　なおしたいところや　これから　こうなりたいなと　おもうことなど　じぶんの　ことについて　よく　かんがえる。	⑪自分がなぜそのように行動するのかをよく考える。	⑪自分がなぜそのように行動するのかをよく考える。
			⑫自分のことについてよく考える。	⑫自分のことについてよく考える。
創造性	【兵庫教育大学大学院　修士論文より】	⑩「なぜ？」「どうして？」と　おもったことを　じぶんで　よく　しらべる。	⑬「なぜ？」「どうして？」と思ったことをよく調べる。	⑬「なぜ？」「どうして？」と思ったことをよく調べる。
		⑪むずかしい　ことでも　ひとに　きかずに　まずは　じぶんで　がんばろうと　する。	⑭むずかしいことでも，人にたよらず，自分の力でやろうとする。	⑭むずかしいことでも，人にたよらず，自分の力でやろうとする。
		⑫しっぱいしても　あきらめないで　「どうして　しっぱいしたのかな」と　かんがえる。	⑮失敗してもあきらめないで，なぜ，失敗したのか，そのりゆうを考える。	⑮失敗してもあきらめないで，なぜ，失敗したのか，その原因を考える。
			⑯人が考えつかないことをよく思いつくほうだ。	⑯人が考えつかないことをよく思いつくほうだ。
		⑬わからない　ことは　わかるまで　やる　ほうだ。	⑰わからないことはわかるまでやるほうだ。	⑰わからないことはわかるまでやるほうだ。



おわりに

副校長　樺島　穣

自分の可能性を最大限に発揮し，よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出すことができたら何とすばらしいことでしょう。

未来社会に求められる資質・能力を自分の力で一本の太い糸に紡いでいく。そして，人間としての力に結びつけていくこと。

本年度から文部科学省研究開発学校の指定を受け，未来創造型の資質・能力に基づく新領域構想を全国に向けて提案します。

昨年夏にスタートさせた約半年間の研究成果ですが，ご参会の皆様方と一緒に調和的な教育課程のあり方や新領域の可能性について語り合えたら幸いです。

これまで本校研究をご指導いただきました文部科学省初等中等教育局視学官　田村学先生，千葉大学教育学部教授　天笠茂先生，京都大学大学院教育学研究科准教授　石井英真先生，運営指導委員の皆様，福岡教育大学の共同研究者並びに本校の研究協力者の皆様に心よりお礼を申し上げます。

今年創立１４０周年を迎える本校の歴史と伝統を受け継ぎ，子供たちがより一層輝く創造主体の姿を求めて，未来を創造する研究開発に挑み続けます。

今後とも皆様方のご指導，ご支援をよろしくお願いいたします。

□運営指導委員

千葉大学　教育学部	教授	天笠　茂　様
福岡県教育庁教育振興部　義務教育課	主幹指導主事	金子尚文　様
福岡県教育庁　福岡教育事務所	主幹指導主事	秋永晃生　様
福岡県教育センター	教育経営部長	芋生修一　様
福岡市教育委員会　指導部	学校指導課長	吉田正樹　様
久留米市教育委員会　学校教育課	指導主幹	松本良一　様
糸島市教育委員会	教育長	家宇治正幸　様
福岡教育大学	副学長	大坪靖直　様
福岡教育大学　学校教育講座	准教授	樋口裕介　様

□ご指導いただいた先生方

文部科学省　初等中等教育局	視学官	田村　学　様
文部科学省　初等中等教育局　教育課程課	教科調査官	安部恭子　様
国立教育政策研究所　生涯学習政策研究部	総括研究官	福本　徹　様
京都大学大学院　教育学研究科	准教授	石井英真　様

□共同研究者・研究協力者

領域等	共同研究者	研究協力者
言語文化	国語教育講座 教授　河野智文　先生	大野城市立大野小学校 校長　伊藤啓二　先生
	英語教育講座 教授　中島　亨　先生	福岡県教育庁　福岡教育事務所 指導主事　元村美保　先生
自然探究	数学教育講座 教授　清水紀宏　先生	福岡教育大学キャリア支援センター 山下英俊　先生
	理科教育講座 教授　坂本憲明　先生	福岡市立和白東小学校 校長　野口信介　先生
社会共創	社会科教育講座 教授　石丸哲史　先生	糸島市立南風小学校 校長　髙野誠一　先生
	社会科教育講座 教授　小田泰司　先生	糸島市教育委員会 指導主事　髙瀬雄大　先生
表現	美術教育講座 准教授　笹原浩仁　先生	福岡市立舞松原小学校 主幹教諭　北田尚雄　先生
	音楽教育講座 准教授　山中和佳子　先生	久山町教育委員会 指導主事　髙武龍彦　先生
健康	家政教育講座 教授　貴志倫子　先生	福岡市立青葉小学校 校長　木村真美　先生
	保健体育講座 准教授　樋口善之　先生	須恵町立須恵第一小学校 校長　稲津一徳　先生
生き方	学校教育講座 准教授　小林万里子　先生	久留米市立北野小学校 校長　中原　浩　先生
	教育心理学講座 准教授　生田淳一　先生	朝倉市立大福小学校 校長　山下浩徳　先生
特別支援教育	特別支援教育センター 教授　中山　健　先生	福岡県教育庁教育振興部　義務教育課 指導主事　園田洋一　先生
	教職大学院 教授　納富恵子　先生	福岡県教育庁　福岡教育事務所 指導主事　弘松英樹　先生

□本校教員

校長　清水知恵
教務主任　平井源樹○
田中菜穂子
中村　剛
竹本　学
山田深雪○
杉本克如
中島卓哉
藤井裕希
石松朋子
西島大祐
阿久津奈美恵

副校長　椎島　穣
研究部長　三浦研一○
齋藤　淳○
鞭馬あゆみ
古賀　誠
鐘江貴子○
岡崎教昭
小林大介
佐藤美和子
松木大輔
釘抜文菜

教頭　森　将和
総括主任　二串英一○
伯川康洋
藤岡太郎○
永田裕二
山口由一郎
菊竹一平
大櫃玲子
相浦愛子
西村俊彦
清水知子

（○印は本年度研究部員）

カメラ及びビデオ等による撮影に関するお願い

個人情報の保護法の趣旨に基づき，本校の教育研究発表会における授業等において撮影した本校児童・職員の映像，写真，音声及び個人情報等については，研究・研修を目的とした個人的使用以外に利用することをご遠慮いただいています。また，本校職員・児童・保護者の承諾を得ずに，公表・発表等を行わないようにお願いいたします。ご理解とご協力のほど，よろしくお願いします。

平成28年２月　印刷・発行
福岡教育大学附属福岡小学校
研　究　紀　要　No.46

発行者　福岡教育大学附属福岡小学校
〒810－0061
福岡市中央区西公園12－１
TEL092－741－4731（代）

表紙デザイン　株式会社ディスコ
〒812－0016
福岡市博多区博多駅南１－10－４
TEL092－473－3392

印刷所　城島印刷株式会社
〒810－0012
福岡市中央区白金２－９－６
TEL092－531－7102（代）

Fukuoka Primary School

attached to

University of Teacher Education Fukuoka